
異世界混沌救世記

Rain

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界混沌救世記

【Nコード】

N1256L

【作者名】

Rain

【あらすじ】

輪廻転生15000年目。主人公が力と義務を押し付けられて（半強制的に）飛ばされたそこは、剣アリ魔法アリのファンタジック異世界。生きる意味と求める未来の形を探し続け、最終的に世界を救う（予定の）異世界物語。酷い出来になるかも知れませんが読んでいただけるとうれしいです。投稿は不定期、ヘタすりゃ予告無しに打ち切りの小説です。

ブローグ（前書き）

カオス度高め、中二表現多しになると思いますんで嫌な方はさっさとお帰りなされた方がよろしいと思うのですよ。

プロローグ

——西暦32××年——

地球は死の星となった。

大地は荒れ、森は枯死し、陸上の水源は枯渇し、空は淀み、生命という生命は死滅する一方だった。世界は第三次世界大戦によって破滅の時を迎えたのだ。

何故そんな事になったのか、それは人類が愚かだからだろう。

第二次世界大戦以来、人類は平和の道を歩き始め、実に1300年近く世界は平和に包まれていた。戦争などという野蛮な行為は誰もが起こさず、平和の名の下に作り上げられた「世界平和維持法」という適当な名の法によって平和は維持されていた。

しかし、世界は今も500年以上前から存在する深刻なエネルギー不足に悩まされていた。それを解決しようと世界中の技術者が新エネルギーの開発に尽力するも、その尽力の産物は出力の低い物、異常なコストを必要とする物、理論のみで起動すらない物など、エネルギー不足の解決には到底届かず、エネルギー不足によって文明を維持する事すら困難な国家が続出した。

エネルギーの不足した国は他国からエネルギーを分けて貰おうとしたが、エネルギー不足は世界規模。他国にエネルギーを分け与える余裕など、どこの国にも無かった。困り果てた人々は「世界平和維持法」を破り「略奪」という最も原始的かつ野蛮な方法選択し、第三次世界大戦の開幕の原因となった。

まずは隣国に攻め入り、戦闘を開始。隣国は戦闘によって余計にエネルギーを消費する。どちらが勝とうがエネルギー不足に拍車をかける結果になり、攻め込んだ方が勝てば、戦闘にエネルギーを消費して絞りカス程度になった隣国の力を取り込み、さらにその隣国へ攻め入る。攻め込まれた方が勝てば、消費したエネルギーを補うために隣国へ攻め入る。

このアホみたいな連鎖によって世界規模の戦争に発展し、大国の保有していた大量殺戮兵器さえも動員する事になり、第三次世界大戦となった。

結果として、90%以上の人類の死亡、文明の消滅、破壊された自然環境という事実だけが残った。

大地も荒れ果てた今、農耕も出来ない。生き残った10%もあと数年もすれば滅亡し、地球上の生命体はほぼ死滅するだろう。そうなった後、地球は生命誕生の過程をもう一度繰り返すのだろうか。

プロローグ（後書き）

この先酷い出来になると思いますが生温かい目で見てください。
お願いします。

自称“神”の提案（前書き）

感想書いてくれると嬉しいZ E
後、質問も受け付けるからな！

（批判でも構いません）

自称“神”の提案

「……という訳だ」

目の前に居る見た感じ25〜29ぐらいで、金髪ロン毛の女、白い衣を身に付けている自称“神”に報告を終える。

ここは死後の世界。月並みに言うならあの世。何も無い空間。全面真っ白で、見えない床がある。

俺は死んだ。第三次世界大戦で偶然生き残りの10%に入った。が、護身用に木刀を持って（追いはぎの類が出たので）食物を求めて歩いていたら崖から足を滑らせて死んだ。人生何が起こるか分からないものだ。

「お疲れさん、18歳日本人身長172体重65の転生者黒瀬優斗君。今回は早かったねえ」

「まあ18年だったしな。後その名で呼ぶな」

この間延びした話し方をする神の言う通り、死んだのは黒瀬優斗18歳、身長172、体重65の日本人かつ転生者。そして、それこそが俺だ。

「そういえば輪廻転生を始めてから何年目だっけ？」

「15000年ぴったりだ」

「よく覚えてるね」

「記録しておけ」

神だろう、と付け加える。

……神とは思えない話し方だが。

前から思っていたが、こいつはたぶん、いや、絶対にアホだ。

「しかし、昔ふざけて作った魔法のアイテムがこんな事になるとはね」

「自己責任だろう」

こんな事、というのは15000年も面倒な輪廻転生に付き合う羽目になるという事だろう。神が約束した手前、反故にする訳にもいかんだろうしな。

ちなみに15000年前に俺が拾った形容しがたい人形が、魔法のアイテムだったらしく、願いが一つ叶う効果があった。俺が輪廻転生を願ったら、凄く嫌そうな顔をしていた。

ちなみにその後、即刻処分したらしい。俺みたいなのはもうゴミなのだろう。

「てゆくかさ、願いが一つ叶うって言われて何で輪廻転生なのさ？
もつと他にもあったでしょうに」

「例えば？」

「お金とか」

「使えば終わりだろう」

「地位・名誉とか」

「一時的なものだな」

「力なんてのは？」

こいつ……素で言っているのか？ 神なのに、人間を金・権力・物理的な力とかで釣ってていいのか？

「振るう対象が無い」

「だからって何で輪廻転生なのさ〜！」

「自身の知識欲を満たす方法を考えた結果だ。永遠の命にしようか悩んだがお先真っ暗だからな。何度でもリセットできる方がいい」

ちなみにこの時にこいつから記憶力・記憶容量の強化というオプションも付けてもらってる。（こいつの意思で）

「知らないだろうけど、魂を別の肉体にそのまま突っ込むのって結構大変なんだよ〜？ 手続きとか」

「自己責任だと言っただろう」

あんな物を作るからだアホが。と言うか、手続きとかあるのか。

「と言うか、同じようなやり取りを転生2回目からずっとしてるぞ」

「そうだったけ〜？」

「そうだ」

アホ面でアホな事を言っている。やっぱりアホだ。

「でさ〜」

「なんだ」

「1つ提案があるんだけど〜」

嫌な予感がビンビンにする。いつだってその予感は当たりやすく、今回も的中した。

「異世界に行ってみない？」

……は？ 異世界？

頭が真っ白になる。理解が追いつかないのだ。

「何故に異世界？」

「私がいくつか世界を作ってるのは知ってるでしょ？」

「知ってる訳無いが、そこに浮いてる球体か？」

周囲にはいくつかの球体が浮いており、球体の中にはいろいろな景色が浮かび上がっては消えてゆく。

山、川、森、街、人など……

あれが異世界への入り口なのだろうか。

「それで、君のいた世界を途中から分岐させた世界があるんだけど」

「ちよつと待て」

「なに？」

「理由を聞き忘れたが“その問題を解決しに行つて欲しい”とでも言うのか？」

「よくわかったね」

「お前のことだしな」

やつぱりこいつ……俺に面倒事押し付けるつもりだ。

前から何度か面倒事に巻き込まれた事があつたが、今回もか。ある時は悪魔退治、ある時は神器回収、またある時は歴史改変などなど。今度は何だ。

「で、内容なんだけどね。この世界には魔法が存在して、そのせいで魔法絡みの問題で色々大変なの」

「適当な説明だな」

説明が面倒だから適当なのだろうが。色々って何だ。

「それで、世界を破滅させる勢力が出来るっばいから、それを潰してほしいの」

「お前がやればいいだろう」

何故俺がそんな事の為に、わざわざ得体の知れない異世界とやらに行かなければならない。

「それがねー、こっちの決まりでダイレクトな世界への干渉は、出来るだけしない決まりなの」

「そんな話もあったな」

神による干渉、天使の派遣は出来ないらしい。どんな理由かは知らないが、そのせいで良い様に使われて、何度か……もとい、何度も面倒事に巻き込まれた。

「その点君は人間なんだし、ちょうどいいかなあーって」

悪魔退治も神器回収も歴史改変も自分の住む世界の為だから仕方なくやったが、異世界となれば話は別だ。丁度いいとかで利用されるのはやはりム力つく。よって、

「断る」

「何でさ？」

「なんかム力つくから」

他に理由なんかいるか。アホ面引っさげてアホ抜かすな。

「とか言ってもさ、破滅した地球に戻ってどーすんの？」

と、言われれば、実際どうしようもない。

「君の知識欲を満たすモノはもう無いみたいだし」

文明ごと人類死滅したからな。

「人類もほとんど消滅したから次の転生対象はプランクトンかなあ
？」

ナマコだ！　きつとまだナマコは生き残って……いや、海も死んでたか。

「その点、向こうには“魔法”っていう知識の塊みたいなモノもあるし」

心霊現象と同等に信じがたいが、けっこう、いやかなり、いやいやとても、いやいやいや物凄く興味がある。

「つまらない破滅した世界よりは、活気ある異世界の方がいいと思うけどねぇ？」

……確かにこいつの言っている事は間違っていない。言い方が多少以上にムカつくが。少なくとも行って退屈はしないだろう。

「……わかった」

「ありがと、君ならそう言ってくれと信じていたよ」

なにが“信じていた”だ。誘導尋問だろうが、これは。

「で、何をすればいいんだ？ 簡潔にまとめろ」

「世界の安定を乱す存在を排除してくれればいいよ」

「これまたボンヤリとした説明だな」

「あまりに詳しい情報を持つてるんなら、天使の派遣と何ら変わらないしね」

そういうもんか……そういうもんか？

「言葉は通じるのか？」

「ボディーランゲージ（身振り手振り等の身体言語）で頑張ってる」

「……殺す」

「まってまって！ 冗談だから！」

以前からこういう所はあったが、何故か慣れない。ムカつかずにはいられない。これも神の力か？

チツ、と舌打ちをして話を続ける。

「で？」

「それは君の記憶領域に書き込んでおくから」

「魔法は使えるのか？」

「向こうで勉強してね」

……やっぱり駄目だ。このアホ面拝んどると殺したくなる。

「その他、何か特別な事は？」

「とりあえず君の体に改造を施しとくから、ちょっとやさそつとじゃ死なないはずだよ」

「そいつぁどーも」

死ぬような事は前提条件なんだな。今回も *very hard* な内容か、面倒臭い。」

「他に質問は？」

「無いな」

「じゃ、逝ってらっしゃい」

神は俺の肩に触れ、異世界へ送る準備をしている。俺という“存在”に干渉して移動させる。いつもの事で、行き先が変わっただけの話だ。

「あ、そういえば」

向こうでも転生って出来んのか？

そう言おうとした時、俺の意識はブラックアウトした。

自称“神”の提案（後書き）

一部改変を何度も繰り返したりするので、変になってたらご指摘お願いします。

誤字、脱字もお願いします。

目を開けたそこは……（前書き）

異世界入り♪

目を開けたそこは……

「う……ああ……」

気が付けば仰向けで倒れていた。異世界に来たのだろうか。

とりあえず体を起こすと、右手に何か握っていた。持ち上げると、木刀であることが分かった。死んだ時に持っていたものだろう。

とりあえず周りを見回してみる。

ああ、星がきれいだ……ちょっと待て。

突っ込みを入れたのは、敵意を感じるものに囲まれていたからでなく、何かおかしい“もの”を見たからでもない。

夜だったというだけで。

普通に考えて、時間の配慮くらいあってもいいだろう。夜だと周囲の確認もままならないとは思わないのか？ あアホの神は。

月光のおかげで、ある程度の視界は確保できているのが救いか。

新月だったら救いようが無かったが。見た感じここは草原のようだ。森だったら危険この上極まりない。

つか、やっぱり月はあるんだな。

いやいや、感心している場合ではない。こういう場合は状況の確認が先決だな。

まとめると、神に異世界に飛ばされた^{アイツ}「異世界なので、常識は通用しないと思われる。今は夜で視界はある程度。ここは草原。夜なので人はいない。武器は木刀のみ。」といった所か。

さて、ぼんやりしている訳にもいかないので、行く当ても無く歩くか。

異世界だから何が起こるか見当もつかないが。

——三時間後（体感時間）——

……人がいない。

かわりに魔物と思われる奇妙な雑魚生命体には五体ほど出会ったが（異世界なので気にしない事にして、適当にのしておいた。木刀持ってた良かった）。いきなりドラゴンとか出てこないよな、流石に。出られても困るぞ。

この周辺は田舎か？ 道も舗装されていないし、見渡す限り草原だ。夜のせいかも知れないが。むしろ文明の存在が心配になって来た。サルが集落作っていて魔法うんたら言われたら自殺する。嫌だそんな世界。

しかし、夜中に木刀持ってうろつくのはいかなものかと思ったが、魔物みたいなもんが出るなら木刀はぬるい方が、護身具として真剣とか銃とか持ち歩いていても罰せられるなんて事は無いのだからうな。

……人がいれば情報という名の武器が入手できるんだがな——な
どと歩きながら考えていたら、どこからか物音と声が聞こえる。

どうやら人間らしい声。道ぐらいは聞けば教えてくれるだろうと
思い、近付いてみる。

「大人しくしろ！」

「嫌よ！ 放して！」

……女の声？ 何かモメているのか？ しかも内容ヤバそうな予
感がするし。でも気になるので直接聞いてみる事にする。

「聞きたい事があるんだが、少し良いか？」

近寄ってみるとまさに「オッサン四人に少女一人が襲われている
の図」だった。少女は14〜16歳くらいだ。オッサンら変態だっ
たのか。オッサンら兵隊さんみたいだけど。最近の兵隊さんは欲求
不満なんだな。

「な、何だお前は！」

小太りでトロそうなオッサンが、俺の声にビビったように反応す
る。コイツはその1と呼ぶ事にする。

「何をしているんだ？」

とりあえず、激しく気になっているので質問。どう見ても「変態
のオッサンらが少女に襲いかかっているの図」（あれ？ 何か前と
違う気が……）にしか見えない状況は気になる。

「見つかったか！」

ちいっとガタイのイイ感じのオッサンがその1の声で俺に気付く。
コイツはその2と呼ぶ事に。

どうやら他人には知られたくない事をしているらしい。

「チッ……この忙しい時に」

細くて長髪なオッサンが面倒臭そうに呟く。コイツはその3と呼ぶ。

どうやら忙しいらしい。

「し、始末するぞ！」

禿げたモロビビりなオッサンがビビり全開で叫ぶ。こいつはその4（以下略）
生かして帰さないつもりらしい。

……は？ 始末？ なにそれ田楽の方がうまいよ？ 後、言葉が通じて本当に良かった。自然に喋っているけど、これはあの神がいつの間にか言葉を記憶させてくれていたお陰なんだね。ありがとうアホ神。

「お願い、助けて！」

少女が何か言ってる。

……何言ってるのか全然理解できないんだが。（状況が飲み込めない）

「見られたんなら仕方ねえ……小僧、運が悪かったと思って諦めな

！
」

何を諦めると？　と言うか、俺の質問に答える。見た奴は生かして帰さないような事に忙しかった事は理解したが。

その1がどこから取り出したのか分からない斧を俺に向かって振り下ろすが、とっさに横へ避け、頭に木刀で一撃いれる。

あ、顎^{あご}に入った。これは脳震盪^{のうしんとう}決定だな。
その1終了、後三人。

何こいつ弱い。

「落ちつけオッサンども」

いきなり襲って来んな、迷惑だ。初の対人戦がオッサンどもかと思つと気が滅入る。いや、可憐な少女だったら良いとかそういう問題ではないが。

「このガキイ！」

むさくるしい叫びと共に、その2が斧での力強い横薙ぎ繰り出した。それをしゃがんで避け、立つと同時に顎にアッパーカット。コイツも脳震盪決定。

二人目撃破、後二人。

何こいつ、本当に兵士か？

「ずいぶん弱いな、どこの兵士だ？」

もうホント何この状況。まさか、始末＋諦めな〃死ね、な状況になるとは思ってもみなかった。

「あまり調子に乗るなよ？」

その3からありがたい忠告をいただくが、意味不明。

何の調子に乗れと？ 意味不明＋いきなり刃物×躊躇無し、な状態で結構焦ってんですけど。 〃殺らねば殺られる、って事はよくわかった。

…… オッサンらの眼がマジだからな。

その3は剣を抜き、ゆつくりと向かってくる。 まだ射程範囲外だ。

こっちは木刀。 打ち合えば木刀が斬られるかも知れないし、斧とかの大振りな武器の時のように避けて一撃、とはいかないだろう。 分が悪いが、だからと言って逃がしてくれる訳もない。

どうすればいい…… 考えるが、焦りは無い。 生に対する執着心が無いからな。 輪廻転生のし過ぎで命の重みを忘れたようだ。

「死ねえええ！」

剣を横に構え、突っ込んでくる。

こっとなったら…… アレをやるか。

「くらえっ！」

俺は地面をかすめるように木刀を振った。 もちろん相手には届かない、が。

「ぐあっ！」

痛がっている、眼をおさえて。

地面の小石を弾いて相手に向かって飛ばしただけだが、運悪く眼に当たったようだ（可哀そうに）。道が舗装されてなくて良かった。素早く踏み込み、首に木刀の一撃をお見舞いしてやる。何か良く分からない声を出して倒れる。三人目撃破、後一人。

「さてと、後は「来るな！」

……は？

オッサンその4の声に気付き眼をやる。

「大人しくしろ！ 一步も動くな！ さもなくば……コイツの命はないぜ」

その4は少女を後ろから掴み、のど元に小刀ナイフを突き付けていた。

はいはい、人質ってやつか。人質さんは……気絶してやがる。人質は昔からのお約束なのか？

「で、」

交渉（？）に入る。

「俺にどうしろと？」

身代金は出ないぞ？ 一文無しだし。

「本来なら死んで欲しいところだが、俺を逃がすって事でいいぜ」

「そいつを連れていくのか？」

「当たり前だ」

すごい褒美がもらえるしな、と続ける。

「へえ」

よく喋るやつだ。（そしてたぶんアホだ）

人質をとった時点で相手は逆らえないと思ってるはずだが、逆に無視したらどうなるのだろうか？

……激しく気になる、知りたい。本来すべきでは無いのだろうがどうなるのか……。

いや、ここで相手の要求を飲むのが正義ヒーローの味方の正しい在り方で、“クツ……仕方ない”とか“人の命には代えられない”とか言うちゃう訳で。

世の為人の為なら仕方ない……それが正義ヒーローの味方、よってここは大人しくするべきなんだろうなあ。

だが断る。

だって俺正義ヒーローの味方になった覚えなんか無いし、他人より自分優先だし（当然だろ？）、見ず知らずの奴なんか助ける義理は無い訳だし。

という訳で、試しに一步近づいてみる。

「く、来るな！ こいつがどうなってもいいのか！」

焦ってる……こいつ面白いな。
という訳でもう一步。

「そ、それ以上近づいたらこいつののど掻っ切るぞ！」

面白い上に……やっぱりアホだコイツ、完全に勘違いしてる。

その少女の事なんか知らないし、^{ガキ}事実どうなっても構わないし。
戦ってる理由は防衛本能に従ったまでの話で、後はなんかム力つくからだしな。

……そろそろ片付けるか。

「オッサン、いいこと教えてやるよ」

と言いつつもう一步。

「来るなって言ってるんだろ！」

だがやっぱり断る。

「人質つてのはなあ……」

さらにもう一步。あと一步で俺の射程内だ。

「殺したら意味無いんだよ！」

言つと同時に踏み込んで木刀を振り上げ、顔面めがけて振り下ろす。

「ひ、ヒイイイ！」

「ハアッ！」

振り下ろした木刀は脳天に命中。何かエグい音がした気がするが、気にしない。その4撃破、人質意味無し……っと。

実験結果、ビビりすぎて反撃できずに敗れる……かつこ悪、終了。

「ああ（いろんな意味で）つかれた」

助けて宣言してた少女は……まだ気を失っている。良く見ると、手錠か手枷が良くわからないものを付けられていて、ついでに力ギ穴もある。

オッサンの内の誰かが力ギ持つてるだろうと思い、身体検査開始——あ、足元に力ギ落ちてた。身体検査終了。

さっさと手枷っぱい物はずして安否の確認をする。

ここで死んでたら報われないな。（ガキの事なんか知らねえし、事実どうなっても構わないし、とか言ってた気がするが、気にしない）

脈は……ある、見た感じ特に外傷もなく無事だったようだ。後は意識だが……、

どうしようか？

？呼びかける

？揺さぶる

？放置

？殴ってみる

4番ですね、分かります。

冗談はいいとして、もう面倒だ早く起きろ。とか思いつつ顔を覗き込むように眺めていると、いきなり開いた眼と眼が合った。

「……………」

しばしの沈黙の後、

「キヤアアアア！」
「うおっ」

何故か悲鳴と共に、いきなり突き飛ばされる。ふざけんな、変な声出たじゃねえか。

もちろん俺は後ろに倒れ、腰を打った。
痛え、何なんだよコイツ。

「……………落ち着け」

このアホが。

「わ、私をさらってどうするつもりですか！」
「食べるつもりだ」
「なっ！」
「冗談だ」
「え？」

間の抜けた声だ。
つか、助けてって言うといて、いきなり悲鳴上げるって……。

「落ち着いたか？」

落ち着いて無かったら、縛り付けてから尋問するって手もあるな。

「え、ええ」

どうやら落ち着いたらしい……縛り付けられなくて残念だ。（冗談だからな）

「で、あなたは誰？」

「お前が助けを求めた相手」

「え？」

「……は？」

二人そろって間抜けな返事、そして沈黙。

こいつ……まさか！

「覚えて無い、のか？」

だとしたらすっげえうぜえ。

「はい、実は」

はい、うぜえ子決定。ぶち殺すぞ。（助けた意味無くな？）

とりあえず状況を説明してやるか。

……イヤミも入れつつな。

「——と、いう訳だ」

説明終了、人質を無視した事は伏せておいたが。（話が円滑に進みそうに無いので）

「え……っと、すみませんでした」

これはいきなり絶叫したり、突き飛ばしたり、忘却したりした事への謝罪だろうな。

「死ぬかと思っただからな」

……生に対する執着心は無いが。（本日二回目）

そんな話をしていると、遠くから20〜40人くらいの団体さんが何やら叫びながらこっちに向かっていているのが見えた。

何か、嫌な予感がするなあ。

「……何だあれは？」

「あれは……」

「さっきのやつらの仲間か？」

だとしたらさっさと退散したいところだ。

「あれは、敵では無いようです」

「じゃあ何だ？」

「私が目的だと思います」

「おまえが？」

「はい」

なおさらさっきの仲間だろ……と思ったが、妙に落ち着いてる。
違うという確信があるのだろう。

……かつさらう以外の目的とえば……殺すとか？（冗談だから）
そんな事を考えているうちに団体さんが近づいてくる。団体さん
が近づくにつれて叫び声の内容も聞こえて来る。

「……さ……！ ……めさ……！」

「メサ？」

メサイア？

ああ、演奏会風劇音楽もしくは救世主の事か。あれ？ でも救世
主はメシアだったような……発音の違いか。

「ああ…… やっぱり」

…… やっぱり？ ある程度の認識があるのか。知らんけど。

「姫様……！」

団体がすぐ近くまで迫ってきている。

……ん？ “姫様”？ なぜかさらに嫌な予感がするが、とりあ
えず聞いてみる。

「おい、“姫様”って何の事だ？」

「え……ええと、それは……」

「姫様！ 無事でしたか！」

質問の回答を遮り、見知らぬ青年登場。だから姫様って何なんだよ。

いつの間にか団体さんが目の前にいるし、よく見たら兵士だし、訳わかんねえ事言ってるし。

「え、ええ。ありがとう小隊長」

少女の手を握って半分興奮状態で話す小隊長（仮）。

やっぱり兵隊さんか。

感動の再会か？ つーかアイツ、姫さんだったんだな。

とか思いながらぼんやり眺めていると、こちらに気付いたようだ。

が、まさか第一声が、

「貴様！何者だ！」

だとは思ってもみなかった訳だが。

助けてやったのにその態度は無いだろう。ムカつくからおちよくってやる事にする。

「俺か？」

「お前以外にいないだろう！」

「俺は俺だが」

「まさか貴様、敵国の者か！」

……は？ 誰がそんなこと言ったんだ？ 何をどうしたらそんな曲解できるんだ？

「貴様が姫様をさらおうとしたんだな！」

さらう？ コイツを？ ついさっき出会ったばかりの名も知らんコイツを？

「何の話だ」

「とぼけるな！」

悪いが、全くとぼけて無い。

「違うのよ！ 彼は――」

姫様（仮）登場、

「丁度いい、このアホなんとかしてくれ」

「貴様！ 姫様に何という無礼な口の聞き方を！ 許さんぞ！」

どこの姫だか知らんし、誰でもいいし、別にいいじゃねえかよ。

「だから彼は「危険です！ 下がっていて下さい！」

姫様の話遮りやがった、ありえねえ、何こいつ。

「人の話聞け」

「問答無用オ！」

いきなり槍を構えて突進してくる小隊長（仮）。俺は後ろに飛んでそれを避けた。が、

「あゝ」

突如、体が浮遊感に包まれる。つまり、谷底かなんかに転落したのだろう。

後ろが崖だったなんて、夜のせいで見えなかった。

小隊長（仮）のいかにも“やったぜ！”という顔が見えた。

……知ってやがったな、あの小隊長（仮）。

俺の体は夜と谷の闇の中へと落ちていった。少々お遊びが過ぎたか。

しっかしまあ、異世界入り早々にトラブル全開か。夜だし、魔物出るし、オッサンに襲われるし、助けた結果がこれだし、ついてないな。

俺は色々と考えていたが、

「チョコレートが食べたい」

そう思った瞬間、俺の意識は（本日二回目の）ブラックアウトを迎えた。

目を開けたそこは……（後書き）

あ、どーも筆者のRainです。

意味不明なところのご指摘もお待ちしております。

更新速度は最低1週間1話程度で行きたいと思います。（1日1話更新とか無理ですよ）

稚拙な文章かもしれませんが、読者の皆さんの期待に応えるべく頑張りたいと思いますよ！（実はキャラクターの名前まだ決まってる無かったです）

異世界二日目〜連行〜（前書き）

異世界二日目

異世界二日目〜連行〜

「う……うああ……」

我ながら間抜けなうめき声と共に目を覚ます。

目に映ったのは知らない天井……

「だったら良かったんだがな」

青空だった。

普通は誰かに助けてもらうパターンだろう、こういう場合は。そうだったら情報も集められたんだが。

気が付けば川岸で優雅にお寝んねしてた。体はズブ濡れだが、なに気にする事は無い。全身ズブ濡れで川岸に寝ていた事を考えると、おそらくある程度流された後、打ち上げられたのだろう。

運よく無傷だ、運がいいな。川でよかった、岩に落ちたら早々に死亡確定だろうからな。

木刀は……無い、上流を探してみる事にする。

軽くあたりを見回す、左右には断崖絶壁（高さおよそ10m）、川幅13mほど、転がっている石からはここが下流である事が分かる（角がとれて丸い）。ちなみに今は……午前十時ほど（予想）だろうか？

……ついでに言うが、誰もいないからな？ 俺は運が悪い。

上流に行くことにしたのはいいが、川岸が狭い。一部泳いで上る事になりそうだが、もう濡れてるから気にしない。

川下りならぬ川上り開始。

——二時間後（体感時間）——

木刀発見。

かれこれ二時間かけて川上りし、木刀が運よく砂地（なぜか砂）に刺さっていたのを見つけた。

……折れてなくてよかった、丸腰はきつい。精神的に。

木刀があったという事は、ここが落下地点なのだろう。

そういえば深く考えなかったが10m上から石、岩の類に激突したら普通折れるよな。いくらこれがリグナムバイタで出来てるからいつても、タダで済む訳がない。俺は運がいいな。

……ん？ リグナムバイタがどうした？ これはわざわざ俺が材料から調達した特別製だとは言わなかったか？ 言わなかったか。

リグナムバイタはハマビシ科の広葉樹で、別名グアヤック、癒瘡^{ユウソウ}木等と呼ばれており、産地は中米から南米北部。辺材は灰白色で、心材は茶褐色。経年変化により濃緑褐色となる。製材した面に触れてみると蠟の様な感触がある。

木質は極めて重硬で、材面は緻密で均質。加工は困難で金属加工機が使われる。耐久性に優れる。気乾比重：1.28 世界で一番重い木材として知られている。

追記、水に沈む。

これでいいだろう。

……は？ 簡単にまとめると？

簡単にまとめると、かたい、水に沈む程重い、濃緑褐色（緑っぽい色）の木である、って所か。

さて、木刀を探してはや二時間ほど（体感時間）だ。

頑張ったな、俺。などと思いながら、腰を下ろして休もうとしたところで異常に気付いた。

「あゝ疲れ……て無いな」

どういう訳か、あまりどころかほとんど疲れを感じない。2時間ほども無休で活動したのに。三十分ほど流れに逆らって泳ぎ、一時間ほど歩き、残りは……ピラニアみたいな怪魚（大群でいきなり水から飛び出て噛みついて来る）と素手で戦ったにも関わらず。

そういえば肉体に改造を施しておく^{アイツ}と神が言っていたな。効果は体力の強化だろうか？ もしくは身体能力の向上か？

……だとしたら。

木刀を片手に、10mの断崖絶壁の前に立つ。大きく深呼吸をひとつ、そして、

「ハッ！」

掛け声と共に全力で跳躍。

すると、5mも飛べれば上出来だと思っていたのだが、11mほど飛んだ。そして美しく（？）着地。

……自分でしておいて驚いたな、バッタの仲間にもなった気分だ。高跳び世界新記録だな。

これは別の所もいじられているだろう、後で試しておくか。

「ふう……」

呼吸を整え視線を前方に移すと、そこには俺の探していたモノが。それは……人。情報の源とも呼べる人が眼前にいたのだ。

「……」

本来なら喜ぶ所だろうが、そうはならない。いや、俺は人を探していたし、見つかって嬉しいはずだ。

兵隊さんじゃなければ。

そう、目の前にいたのは一般人などではなく、兵隊さんたち（四十〜五十人）だった。

……兵隊さんかあ。あんまりいい思い出ないんだよね。この世界ではいきなり襲いかかってくるのが礼儀みたいだし、お礼は槍でするのが常識みたいだし？ どうなっているんだよ。

まあ行動しない事には始まらないって事で、声をかける事にする。

「その兵士、ちょっといいか？」

「んあ〜？」

面倒臭そうな声と共に振りかえり、こちらを見る。

が、俺の顔を見るなり、

「あー！」

とか言っし。

「たいちよー！ 見つけましたよー！」

とも言っし。隊長って誰？ “見つけた”って何を？

兵士の叫びに反応して、兵隊さん全員集合。全員の視線が俺に集中する。なんか不愉快だな。

「おー本物だ」「すげー」

兵隊さん共のつぶやきが耳に入る。

本物？ 偽物なんかいる訳ないだろ。すげえ？ なにか？

……何故だか今回も嫌な予感がする。

とか思っていると、兵士をかき分けて、いかついオッサンがでてきた。（たぶん隊長さん）見た感じ40前後か……渋くていい顔だ。大人の男って感じだな！

「その君」

「誰かいるのか？」

そう言って後ろ（崖）を振り返る。

……誰もいないじゃないか。（いたら怖い）
オッサン渋くて良い声だな、顔にぴったりだ。

「いや、黒髪の君だ」

黒……髪？

周辺を見回すが、黒髪の人間は見当たらない。という事は……

「俺か」

俺の事だろうな。しかし、落ち着いてんなオッサン。

どうやら今の体は死んだ時のものらしい。

以前も言ったが日本人。ストレートの黒髪、黒目、白に近い薄いだいたい色の肌。つまり黒髪Ⅱ俺。

こいつらは、俺を探していたⅡ搜索隊or討伐隊か。殺される覚えはないが。

か、勘違いするなよ！ どっかの兵士をボコボコにしたのは正当防衛であって、八つ当たりなんかじゃないんだからな！（キャラ崩壊、なかった事にして下さい）

そんなことは置いといて。目的は何だろうか？

「何か用か？」

「王宮まで来てもらおう」

王宮に？ 街を探していた俺にとっては、おあつらえ向きな用件だ。で、内容は、

「指名手配か？」

軽く冗談を一発。大当たり、とか無いだろうな。

「事情聴取だ」

やっぱオッサン落ち着いてんな。

事情聴取？ どうしよっかなあ？

「……断ると言ったら？」

これも冗談だ。わざわざ喧嘩売って楽しむ趣味は……無いとは言い切れないな。

「不本意だが実力行使になる」

……何でオッサンそんなに落ち着いてんだよ。

まあつまり、力ずくでもって事か。負ける気はしないが。

たぶんこいつは貴族うへor王族の命令で来ているはずだ。

カギは事情聴取という所か。俺はこの世界に来てから現在二日目、貴族うへor王族の人間に目を付けられる事なんか……あった。

問題はどっち側の人間なのかだが。（国家間の問題なんか知らんが）

……よし、聞いてみよう。

「誰の命令だ？」

「誰というのははっきりしていない」

チッ……仕方ないな、もっと他に……。

そう思った時、あるものが俺の目に映った。それはオッサンの胸に付いている紋章。

昨日の鬱陶しい小隊長（仮）にも同じものがあつた気が……。もし同じであれば、昨日の少女のもとへ行くという事になる。

「ちなみに聞くが、俺はどういう扱いだ？」

「護送という形になる」

護送か、おそらくいきなり悪い立場に立たされることは無いだろう。この渋いオッサンは常識人みたいだし。

……よし決めた。ここはオッサンに賭けよう。

「分かった、行こう」

“感謝しろよ？”とは言わなかった。思ったが。

「よし、全員早急に帰還準備だ！」

号令と共に全員が準備を始める。いい仕事っぷりだな。

「そつえばどれくらいかかるんだ？」

「時間か？」

「旅費だ」

「こちら持ちだ」

気にするな、と続ける。

意外と真剣に答えやがった。

「冗談だ。で、時間は？」

「事故でも無ければ日が暮れるまでには着くぞ」

「そんなに遠いのか」

「いや、日が少々傾く程度だ」

……一分以上六時間以下ってことか？ 小学生がテストの点数を答える時みたいだ。1点以上99点以下、みたいな。

ユーモアを感じるオッサンだ。悪い奴じゃなさそうだな。

そんなこんなでオッサンと共に王宮とやらに向かって歩きだした。

面倒事にならないことを切に願いながら。

—— 一時間後（体感時間） ——

「ここが王都だ」

「へえ」

俺はてきとーに返事する。

オッサンに聞いた話だと、ここは王都エルレインと言っらしい。草原の中心に位置し、近くに川があると云う（俺の落ちたアレ）。水源の近くには文明が発達するもんだな。

道中問題は特になかった。あつたとすれば魔物（と思われる奇妙な生命体）が数匹出た程度だ。全部オッサンらが片付けたが。

今、俺の眼前には変な文字の書かれた石造りの城壁がそびえ立っ

ている。見た所、高さ十数mほど。この城壁が、ずーっと向こうまで続いている。都市を囲っているようだ。ついでに掘付き。城郭都市、城壁都市の類か。もしそうならそれほど大きい都市ではなさそうだな。

しかしこの城壁……この程度の高さで弓が防げるのか？ 防げるとしたら、どんな仕組みなのだろうか？ 気になるな。いや、戦闘を想定して作られていないのかも知れない。

「開門！」

おお開いた、無駄に大きくて立派な門が。高さ5m以上もいらんだろうに。

「行くぞ」

「ああ」

再びてきとーに返事をし、歩き始める。

……しかし、最小限な会話だ。

ここに来る途中もほとんど話しかけられなかったし、真剣な顔してたし。聞かれたのは何故黒髪か程度（A、こたえ知るかなもん）だったし。根っからの軍人さんか、緊張しているのか、現在進行形の悩み事でも抱えているのか。

そっぴやオッサン赤髪だな。（興味ないからしつかり観察してないが）

こうして俺は王都に足を踏み入れた。

……この時はあんな面倒事になるとは思いもしなかったが。

異世界二日目ゝ連行ゝ（後書き）

次話でキャラクターの名前が明らかになるですよ！
・・・期待はしないでほしいですよ。

異世界二日目〜決闘？〜

現在俺は護送……いや、連行中と言った方が適切か、木刀取られ
たし。

ここは王都エルレイン。中世ヨーロッパを想像するにはちょっと
違う感じ。建物は石造りでしっかりしたものが多く、道も舗装され
ている。ある程度技術はあるようだ。

現在メインストリートを進行中、このまま王宮直行だろう。

……周りの人がこっち見てくる。珍しいのか？

とか思っているうちに、眼前に城壁。この向こうが王宮なのだろ
う。門番までいる。当たり前だが。

二重城壁か、カルカソンヌみたいだな。しかし、王宮だけを囲っ
ているようだから、この城壁は反乱の備えだろう。戦争の備えなら
街の外にある城壁で充分だろうし。

「お疲れ様です！」

「うむ」

門番顔パスの渋いオッサン。かなり名が通った人間なのか？

んな訳で城門をくぐり、王宮に入る。無駄に広い敷地、巨大な建
物、うろつく警備兵……うむ、しっかり王宮、予想通り。

少し入った所でオッサンが足を止めた。

「ここで少し待っていてくれ」

「分かった」

「逃げるなよ？」

「理由が無いな」

わざわざ反逆者になる必要がどこにあるんだ。

「待ってるからさっさと行って来い」

アホなことやってないで。

「逃がすなよ」

「は！」

部下に指示出してるし。逃げねえって。

しかし立って待つのはだるいな。そこらへんでも眺めておくか。

——（だいたい）五分後——

オッサンが帰ってきた。

「遅かったな」

とりあえず嫌味を言うておく。

「ああ、すまないな」

あつさり流した……こいつは絶対悪い奴じゃない。

「ついて来てもらおう」

「ああ」

てきとくに返事。

連行。

……で、何で茶髪の王様っぽい人が前に？ いきなり王の間かよ。
玉座＋無駄に広い空間＋赤い絨毯とか、正に王の間そのものだ。
なんて典型的なんだ。

「陛下、例の者を連れて参りました」

「うむ、御苦労。下がってよいぞ」

「はっ」

やっぱり国王陛下なんだな。オッサンお疲れさん。

とりあえずざつと見回すと王の他に、家臣、貴族みたいなんが一杯いる。あと、兵士もいる。
でも緊張はしない。

「その者、名は？」

名前聞かれた。が、冷静に返す。

「デメエから名乗れよ」

言っちゃった（どこが冷静）

「貴様！ 王に対して無礼な口を！」「何様のつもりだ！」等と周りに聞こえる。そりゃ王様をデメエ扱いしたら怒られるよなあ。

でも知ったこっちゃねえ。

「皆の者！ 静かにせんか！」

王様の一喝で静かになる。王様強いな。

「私は国王、リグレイス・ガリア・エルレイン。そちらの名も聞かせてもらおう」

自分から名乗りやがるとは、器の大きい王様だ。
名前に街の名が付いているな。いや、国名だろうか？ どーでもいいが。

周りがざわざわしてる。そりゃどこの誰とも知れんやつ言う事を王様が聞いてちゃったんだしな。

ここは答えるべきだな。

「俺は……」

答えようとして詰まる。なぜなら、名前が無いからだ。

本来なら、輪廻転生で生まれた時に何らかの人間関係があって、

基本的に親から名付けられている（前は黒瀬優斗だった。もう二度と使う気は無い）。が、今回は誰も俺を知らない世界。名付けられるとか以前の問題だ。

そう、この世界で俺は誰も知らないし、誰も俺を知らない。正に0からのスタート。何も無い。生きる知恵も、人間関係も、名前すらも。

0からのスタートかぁ。大変だな。

ん？ 0からのスタート？ ぜろからのすたーと、ゼロカラノスタート、0からの、ぜろからの、ゼロカラノ、0から、ぜろから、ゼロカラ……ゼロ？

よし決めた。今日から俺はゼロだ。（安直な考えだと後に思う）

「何を考え込んでいる？」

「何でもない」

催促か？ それは。

「して、名は？」

「ゼロ」

と名乗る事にした。

「珍しい名だな」

「主観の問題だろう」

つか、話続けろよ。

「で、何の用だ。王様直々に応接とは、何か重大な用なんじゃない

のか？」

「うむ、その事なんだが……」
と、一度話を切り、

「二人を呼んで参れ」
と、家臣に命じた。

「少々待つてもらえるかな？」

「無理だ、と言ったら？」

「どうにもならないがな」

あつそ。

……ああ、待つのだりい。

—— 1分後 ——

「呼んで参りました」
と、家臣が言う。

「うむ、御苦労」

「誰を呼んだんだ？」

「当事者だ」

当事者？ …… 何の？

そこで目の前に現れたのは、青年兵士と美しい少女。

……なんか見た事ある気がする。

「この二人に見覚えは無いかね？」

「どちらかと言えば……ある（ような気がする）」

けど誰だ？

「では話の続きだが……」

「ちょっと待て」

「どうした？」

「その二人の紹介がまだだ」

誰か分からないまま話を進められても困る。

「そうか、なら」

お、話の分かる人だ。

「こちらは王女、ユリア・ウォイセル・エルレイン」

姫さんか。

「こちらは小隊長の「ああ、思い出した」

ザックリと言葉を遮る。

「昨日の夜の話か」

他に無いだろうが。

「うむ、その事だ」

「で、何の話だ？」

改めて本題。

「昨日の者はこの者か？」

と、王女に確認をとる王様。“違う”って言いやがったら殺す。

「はい、昨日助けて頂いたのはこの方です」

だよな。

「では小隊長、崖に突き落としたのはこの者か？」

あつたなあ、そんな事。

……マジで殺すぞこいつは。

「はい、そうです。間違いありません」

覚えてたか。

後ろめたさがあるのか、表情があまりよろしくない。が、そんな事はほつという話を続ける王様。

「そうか。ならばゼロ、君は王女の命の恩人という事になる」

「そうなるな」

その結果が谷底行きなんだから納得いかねえ。

「ではこちらから礼を言わせてもらっ」

「ありがたいお言葉だな」

てきとーに流す。

「何か褒美を取らせよう……と言いたいが、1つ聞きたい事がある」
全身を嫌な予感が貫く。ちなみに、この予感が外れる確率は1%前後だ。

「……何だ？」

「兵士4人を一人で倒したというのは本当か？」
「嘘を吐く理由が無いからな、本当だ」

そうか、と言って王様は考え込み、

「ならば、剣の腕を見せてはくれまいか？」

と言った。

剣の腕って……

「勝負でもするのか？」

「相手はそこの小隊長でどうだ？」

……は？ 楽勝じゃね？

だが、

「めんどいから断る」

「何故だ？」

「めんどいからだって言っているだろうが！」

理由付けて言ってるのに理由聞くな。
理由付けたよ精神が。
疲れるんだよ精神が。

…… ったくめんどくせえ、と思っていたら横やりが。

「ふつ、4対1で勝つというからどれほど強いのかと思えば…… 嘘
つきの腰抜けか。やれやれ」

「あ？」

「小隊長、やめないか」

うわ何こいつ、挑発か？

「どういう意味だ？」

「文字どおりだ。それに、姫様も戦っている所は見えて無いらしいかな」

つまり助けたつてのも嘘扱いか。疑ってんのか？ 小隊長風情が。
どれくらい偉いのか知らんけど！

「…… どうやら死にたいらしいな」

「やってみな、腰抜けが」

「今すぐ冥府神に面会させてやるつか？」

「面白い！」

小隊長は剣に手をかけている。やる気か。
だが、

「ちょっと待て」

制止する。

「どうした？ 怖気づいたのか？」

「王の間で、それも王と王女の眼前で乱闘でもするつもりか？」

よく考えるアホが。

「ふむ、ならば」

小隊長が王へ向きなおり、

「模擬戦の許可を」

とか言うし。

「うむ、許可する」

いいのかよ。

「父上！」

止めようとする王女。

「別に良いだろう、双方の合意の下であれば」

が、気にしない王。

「ゼロ君もかまわんだろう？」

「そいつの命の保証は無いがな」

マジで殺す。

「では双方向かいあって……」

「待て」

始めようとして制止する。なぜなら……

「俺に素手で戦えというのか？」

現在武器無し。

「おいオッサン、木刀返せ」
「そうだったな」

隅にいたオッサンから木刀を受け取る。木刀装備！ おっしゃー！
攻撃力があつぷつぶ！（キャラ崩壊）
相手も木剣だ。当たり前だが。

……さて、

「いいぞ」

「初めて下さい」

「では今から模擬戦を始める！」

ルールは簡単、木刀（木剣）で戦うこと。

開始。

小隊長は木剣を正眼に構え、にじりよって来る。俺は木刀を右手に持ち、ぶら下げている。

明らかに俺の構えにはやる気が感じられない。と言うより構えてすらない。

「何だあの構えは」「やる気があるのか?」「意味不明だ」等と聞こえるが、ギャラリーはほっといて。

「お前、バカにしてるのか?」

「バカが何言ってるんだよ」

バカにしておく。

「なっ! 貴様あ!」

突っ込んで来る小隊長、やっぱりバカだ。

「喰らええ!」

木剣を俺に向かって振り下ろす。が、木刀で右に流し、空いた顔面に左の拳がストライク。

「ぐっ!」

後ろに倒れ、木剣を手放す小隊長の首筋に木刀を突き付ける。

「チェックメイト
Checkmateだ」

「ま、負けた……」

ガックリと落ち込む小隊長、超弱い。

「勝者ゼロ!」

王様の勝者宣言が響く。

「……さて、と」

俺は小隊長に突き付けていた木刀を振り上げる。宣言通りにぶち殺すのだ。

こいつには谷底に突き落とされた。こいつにはやってみると言われた。そして何より先に刃を向けて来たのはこいつだ。そんな奴を殺す事に躊躇など無い。むしろ不要だ。

「覚悟は出来たか」

目の前にへたりこんでいる人間に問う。その人間は何も言わなかった。

眼前の愚者を絶命させるべく、高く振り上げた右腕に力を込め、木刀を振り下ろした。

その時だった。

「やめて！」

突然上がった制止の声に、右腕は反射的に動きを止めた。

結果、木刀は愚者を屠^{ほふ}る事は無かった。制止があと少しでも遅かったら、この部屋に敷かれた赤い絨毯は、より紅く染まっていた事だろう。

「なぜ止める」

何を考えるより早く口から出た“疑問”は、制止をかけた者——王女に向けられた。

「言っただけだ、“こいつの命の保証は無い”とな」

「だからといって、負けを認めた相手にとどめを刺す必要は無いはずよ！」

「無いな」

「だったら何故——」

「理由が要るのか？」

「なっ！」

驚いているようだが、そんな事は気にならない。

「理由なんか無いし、要らないだろう」

「要るわよ！」

「要らねえよ！」

俺の中で、何かが切れた。

「なんなんだ？ “人の命は大切です、無闇に殺してはいけません

”てか？ 冗談じゃねえ、きれいごとやってんじゃねえよ！」

「でも！」

「でもなんだ？ ああ？ 刃をまじえた以上とどめを刺さなきゃ勝ちじゃねえんだよ。たとえそれが木刀で行った模擬戦だったとしてもな！」

ふう、と一息ついてから続ける。

「人を殺すのに理由なんか要らねえんだよ。人を助けるのに理由が要らないようにな」

全体が居心地の悪い沈黙につつまれる。

「……もういい」

ああめんどくせえ……だから嫌なんだよ。模擬戦なんぞするのは、俺はくるりと反転し、小隊長に向かって、

「消えろ、雑魚に用は無い」

と言い放った。小隊長の駆けてゆく足音は遠くへと消えていった。

少し、熱くなってしまったな……。多少の後悔が胸に溜まってモヤモヤする。不愉快だ。

「……さて、バカも片付けたし、話の続きと行こうか」
さっさと用とやらを終わらせて一人になりたい。

「皆の者、もう帰って良いぞ。疑惑も晴れたしな」

王の人払いで、俺と王女と王のみが王の間に残された。

……この先どうなるのか全く見当がつかないな。

異世界二日目〱決闘？〱（後書き）

戦闘シーン書くのムズイ。

あと今後更新速度落ちます。

異世界三日月〜異世界の話〜（前書き）

異世界三日月
♪

異世界三日目〜異世界の話〜

……ふう。

いきなり連行された上に、アホと模擬戦させられて大変だった。気分悪いし。

あの後“行く当ては無い”と言ったら、王宮に泊めてもらえる事になった。まだ色々と聞きたい事があるらしい。

そして俺は案内された部屋で眠りについた。

……はずだったんだが、

「何でデメエが居るんだよ」

「やっほ」

目の前にいるのはアホ神。よってここは全面真っ白空間。

「寝てる間に魂抜いてきちゃった」

んなことできんのかよ。

まあ自称神の言う事だから置いといて。

「何か用なんだろう。さっさとええ」

「体の話なんだけどさ」

そっちか。

「どう？ 使い心地は」

「悪くないな」

異常な身体能力の向上が見られるが。

「どれぐらい改造したんだよ」

「スーパーマンぐらい」

「分かるか」

ボンヤリしすぎだ。

「数値で言え」

「五〇十倍ぐらい？」

「何で疑問形なんだよ……」

しかしすごい強化量だな。

……ん？

「おい」

「何？」

「そついや小隊長とやらの顔面全力で殴ったんだが、脳髄ブチ撒けて粉碎しなかったぞ？」

「腕力の強化は自覚ないと危ないからまだONにしてないんだ」

じゃあ蹴り入れたら粉碎したのか。

……蹴り入れれば良かった。

「何だからここで練習する？」

「初めにして置けば良かったんじゃないか？」

「……忘れてた」

「蹴るぞ」

そして碎け散れ。

「当たんじゃないよ？」

「やっぱりか」

この幽体野郎が。（女だが）

「じゃあ練習開始する？」

「ああ」

そんな訳で（どんな訳だ？）、俺は力に慣れるために練習を開始した。

——（体感時間で）二時間後——

……やべえ。これはチート級だ。

数値で表すと、（括弧内はおおよその元の世界の^{あっち}だいたいの世界記録）

100m走なら四秒切り、（九秒）

5km走なら全力で完走し三分切り、（十二分三十秒）

走り幅跳びは50mちよつと、（9m）

走り高跳びは12mちよつと、（2.5m）

砲丸投げが100mで、（24m）

水泳なら400m個人メドレーを1分かからず終わらせ、（四分）

重量挙げで1tが片手な始末。（260kg）

息を止めれば一時間はいける。（十七分）

視力は40以上（100m先の視力表クリア）。（8・0）
ブロック塀を殴れば豆腐の如く砕け散る。
そしてこれらを全て終えて息の乱れも無い。

どうなっただよこれは。

「どう？」

「言わずもがな、やりすぎだろう」

1t片手とか中二設定すぎる。

「それは置いといて、これ持ってみて？」

そう言っただけ出されたのは……りんご。

それを俺にどうしろと？ とか思いながら掴んでみる。
すると、

ぐっしやあ。

「あゝ」

りんごは俺の手の中で哀れな音と共に崩れ去った。

「やっぱりね」

「どういう事だ」
「やっぱりって。」

「そんな強靱・無敵・最強な腕で掴んだら、当たり前前に潰れるでし

よ」

「当たり前だな」

「とゆゝわけで」

どういう訳？

「今度は調節できるようになるっね」

「……そういうことか」

誰かの手でもつかんだ瞬間に、あのりんごと同じ運命を辿って貰う訳にはいかないからな。

そんな訳で、制御練習開始。

——さらに（体感時間で）六時間後——

「ああ……疲れた……」

「お疲れ様」

まさかりんごを掴むだけの作業があんなに精神力を消耗するとはな。

「俺は何個潰した？」

「5000超えてから数えて無いよ」

だろーな。

5000回以上トライしてやっと普通に生活できるようになった。

はあ。

「そう言えば耐久力の強化は？」

「したよ」

「どれくらいだ？」

「斬られても一時間で再生するくらいかな」

「いまいちピンとこないな」

だが十分すぎる。

「あ、あと」

「何だ」

「頑張ればもっと強くなるから」

「なっでどうしろと？」

「いや、べつに？」

ふう〜とため息。

「あ、そうそう」

「今度は何だ？」

「異世界から来たって話はあまりしないように」

「頭がおかしい奴だっと思われるからか？」

「そゆこと」

当たり前だよな。だが向こうにも理解者がいないと色々不便だ。
何をするにしてもな。

しかも目的が世界範囲だからボンヤリしすぎている。

「……おい」

「なに？」

「聞いて無かったが……“世界の安定を乱すモノ”の基準は？」

「君に任せるよ」

「いいのか？」

「いいの。伊達に15000年とちよつと生きてないんでしょ？」

判断ぐらいできるでしょ。と続ける。

「……じゃあやりたいようにやるからな」

「いいよ。ただし……」

「ただし？」

「君が世界滅ぼしたりするなら、君を処分しなくちゃいけなくなるから」

仕事増やさないでね、とニヤニヤしながら続ける。

それは真顔で言った方がいいんじゃないのか？　つーかどうやって世界滅ぼすんだよ。魔法か？

……あ。

「そういえば、魔法に関する詳細を聞いてなかったな」

「何が聞きたいの？」

「世界に及ぼしている影響とか」

「つまり？」

「魔法の有り無しによって起こる世界観の違い」

「説明すんのめんどくさいから実地で体験して覚えてね」

即答かよコイツ。

死ね

当たなくてもいいから蹴り入れようと思っていたら、

「じゃあそういう訳で」

「なっ！ ちょっと待——」

そう言った瞬間、突き飛ばされて俺の意識は 飛んだ fly away。

——現実世界（異世界で言っても違和感があるが）——

目を開けると朝だった。昨日寝たのが昼過ぎだったから……かなり寝てたな。

……知らない天井だ、なんて言わない。知らないけど。異世界に知ってる天井なんか無いしな。

つか説明から逃れるために転送する神ってどうよ？
はあ、と一息。

……扉の向こうに気配を感じる。

「そこに居るのは誰だ」

扉の向こうに向かって声をかける。

ガチャ、と扉が開く。

入ってきたのは——腰までの青髪、澄んだ青い眼、整った顔、細い体、つまり美少女な王女様。なんかよく分かんがドレスと言っかなんというか、とりあえず無駄に豪華で動きづらそうな格好をしている。

「よく解りましたね」

「お前か。何か用か？」

「いえ、助けて頂いたお礼を言おうと思って来ただけです」
「昨日も言いそびれてしまったので、と続ける。」

「この前はどうも有り難うございました」

「ああ」

沈黙。

……。

……。

……情報を得るために話し安い空気を作らねば。

「昨日は悪かったな。感情的になったりして」

「いいんです。人には人の、ゼロさんにはゼロさんの考え方がある
んですから」

「俺の事はゼロでいい」

「分かりました」

「あと敬語も使うな、堅苦しい」

「……わかったわ」

堅苦しいのは嫌いだ。

にしても、ずいぶん出来た事言いやがるな。 “人には人の考え方
がある”……か。

……こいつなら理解できるかもな。

「ユリア……だったな」

「ええ」

「お前は“異世界”の存在を信じるか？」
「え？」

異世界って何？　って顔だ。説明がいるな。

「異世界ってのは“現実の世界ではないもう一つの世界”もしくは
“この世界では無い別の世界”だと思ってもらおう」
「ふうん」

「また、その世界にはその世界の決まりがあり、違う世界では常識
は通用しない事もある」

「うーん……」

「分かりやすく言えば箱だ」
「箱？」

「自分が居るのは“この世界”という箱の中で、異世界というのは
“もう一つの箱の中の世界”だ」
「それで？」

「この世界を“箱1”とし、異世界を“箱2”とした時、箱には壁
がある。この壁のせいで双方の“箱の中”から“箱の外”を認知、
または干渉することはできない」

「存在を知る事すらできないのね」

「そうだ。よって“箱1”の中から“箱2”の中へ、つまり別の箱
に移動することもできない」

「密閉状態なのね」

「ただし、箱は中からは開かないが、外からなら開けることができ
る」

「外から？　誰が？」

「“神”だと思ってもらおう」

「神……？」

宗教系に触れないといいな。昔は宗教が違っただけで殺されたり

したしな。

つか、何で俺こんなこと知って……アホ神のせいか。まあいい。

「まとめると“世界”は、“世界”を分ける壁は中からは絶対に破壊できない、今言った理由から“世界の中”から“外”は不明かつ干渉不可、“世界”と“別の世界”は自然に交わる事は決していない（関係しない）、“世界”の中の決まりは異なる場合がある、“世界”に干渉する事が出来るのは、“神”のみ、という状態だ」

一息ついてから、もう一度話し始める。

「これをもとに考えると“異世界”は空想上の物になるが……存在はする」

あるかどうかすら分からないけどな。と言って終わる。

これでわかっただろう。

「“異世界”の定義はわかったけど、どうしてあるって言い切れるの？」

「俺が異世界から来から。と言ったら？」

「……」

「……」

「………え？」

長い沈黙だったなあ。

「本気で言ってるの？」

「冗談でこんな長つたらしい説明するか」

誰が冗談でこんなクソ面倒臭いことするんだよ。

「……じゃあどうやって来たの？ 中からは出られないのよね？」

「“中から”は、な」

「じゃあいつたい……」

「“外から”だ」

「……まさか、神？」

「そうだ、“出された”んだ」

“出た”じゃ無くてな、と付け加える。

「神様ってどんな風なの？」

「宗教系に触れそうだから言えない」

「何の為に来たの？」

「それも言えない」

「なんで？」

「守秘義務だ」

んなもんねえけど。

…… 本当の事を言うと言言みたいになるから。しかも恐怖の予言。しかも最終目的が“世界を救う”みたいなもんだし。胡散臭すぎるだろう。

「にしても黒髪ね……」

「髪がどうにかしたのか？」

「いえ、あまり見ないと言っか、珍しいと言っか」

「へえ」

「色々聞きたい事があるけどいい？」

「こっちの世界の事か？」

「ええ」

「構わない」

——ユリア（かなり多量に）質問中——

「で、本当かどうかは置いて、本題は何かしら？ そんな話をするんだから何かあるんでしょ？」

「置いとくな、本当の事だ」

予想通り聡明なやつだ。こいつを選んだことは間違ってる……はず。

「“世界の中の決まりは異なる場合がある” って言ったよな？」

「……それで？」

「ヒントは“魔法”だ、当ててみな」

「まさか……魔法が無かったとか？」

「御名答、俺の元居た世界に魔法は無かった」

「信じられない……魔法の無い世界なんて」

「信じるか信じないかは勝手だが、事実だ。そこで」

「そこで？」

「魔法を使うにはどうすればいい？」

異世界三日目、異世界の話し（後書き）

更新速度かなり落ちます。
あしからず。

異世界三日目／入学試験／

……ふう。

彼の入学手続きも終わり、後は入学試験だけです。

「ユリア、ここか？」

「そうよ」

ゼロの問いに答えておきます。

現在私たちは魔法学校にいます。立っているのは試験会場である校長室前。

何故こんな所にいるのかと言うと、彼が魔法学校に入学する事になったからです。

その理由は朝のこと……。

—— 回想（前の話の続き） ——

「魔法を使うにはどうすればいい？」

と聞かれた事が始まりでした。

「魔法が使いたいの？」

「そうだ」

「どうして？」

「この世界が魔法があることを前提に成り立っているなら、使えな

いと不便な事もあるだろう。さらに文化や常識なども違ってくるはずだ。出来るだけ知っておきたい」

そうでしょうね。

魔法が無いという事は、こちらで起こる魔法絡みの事が一切予測とか認識できないでしょう。しかも魔法は文化に影響していますし。

「それに……」

「それに？」

「純粹に興味がある、というのもある」

そうですか。未知の領域でしょうからね。

まあ置いといて、

「それはいいとして、魔法を使うにはいくつか方法があるのだけだ
ど」

「たとえば？」

「誰かに直接教えてもらうとか、書物から独学で覚えるとか……」

「前者は出来ればしたくないな」

「どうして？」

「いちいち詮索せんさくされそうだ」

「いやなの？」

「当たり前だ、異世界の話をまたする羽目になりそうだからな」

なるほど。長かったですし。

ちなみにあの説明の時に聞いたのですが、この世界に来たのは二日前、黒髪黒目は向こうでは普通で（こっちからすればかなり珍し

い）、剣の腕は剣術大会で優勝するぐらいなんですって。（どこまで本当かわかりませんが）そりゃ強い訳です。

それもまあいいとして。

「それにお前のように信じてくれるとは限らないしな」
「それもそうね」

嘘を言ってるとは思えないので、とりあえず信じることにしたのです。（もし、あのながい話が嘘だったら本気で殴ります。粉砕してやります）

そんな事を考えている事なんか知らないゼロは、思い出したように言いました。

「言い忘れていたが、異世界の話は誰にもするな」

「どうして？」

「面倒な事になりそうだからだ」

出来る事なら面倒事は極力避けたい、と思うのは当然なのでしょう。

そんな事を考えていたら、ゼロが話を戻しました。

「で、後者はどうなんだ？」

「なにが？」

「習得効率、利点、問題点とか」

そこですか。

「独学の場合、まず時間がかかる事が多く――」

「却下だな」

「はやっ！」

「非効率的だという事だろう？ 俺は非効率的な事が嫌いなんだ」

「そうなの？」

「そうだ」

効率の良い方法がいいのは当たり前ですね。まあ独学するにしてもある程度の基礎知識は必要なので、全くの初心者にはお勧めできませんけど。

にしても、

「ゼロ、案つぶすの早いわよ」

一瞬で二つも潰すなんて。

「嫌な事をグダグダ考えていても仕方ないだろう」

「……じゃあ最終案だけど」

「三つしか無かったのか」

黙って聞いてほしいです。

「魔法学校に入る、というのはどうかしら？」

「……魔法学校？」

疑問形ですか。

「そう、魔法学校」

「正にファンタジーの世界って感じだな」

「なにそれ？」

ふぁんたじー？ 何かの文化でしょうか？

「いや、気にするな。それより魔法学校とはどんな所なんだ？」

疑問を気にするなで済ませた上に質問ですか…… 答えますけど。

「この世界の教育機関で、魔法、数に関する事、言語、自然現象等、色々な事を教えている所よ」

「こっちの世界の内容に魔法を足した様なもんか」

「そっちにも教育機関があるのね」

「文化の発達に教育は必要不可欠だろうからな」

なんだか世界が似てる気がします…… 魔法が無いというのは想像つきませんが。

「話を戻すけど、どうするの？」

「消去法でそれにしよう」

消去法ですか。

「じゃあ手続きはこっちですとして……」

「ちょっと待て」

「なに？」

「費用はどれくらいだ？ いるんだろう？」

今度は金の心配ですか。真顔で言われると何か大変な事のように思います。

「こっちから出しておくわ」

「いいのか？」

「助けられたお礼、でいいでしょ？」

どうせ王宮の貯蓄から出るんですし。

「持ち金0の身としてはありがたい話だ」
「やっぱり」

異世界から二日前に来た人がこっちのお金持ってる訳ないものね。

「そついえば属性の話なんだが」

話はいきなり変わります。

「（前話の質問中に）髪の色に現れるって言ってたな」
「ええ言ったわ。ちなみに私は水属性なの、この青い髪で分かると思っけど」
「じゃあ俺は……」

そつ言って考え込むゼロ。ゼロの髪の色は……黒。

「前例が無いから分からないけど、闇属性じゃないかしら？ 昔の文献に載ってるだけだけど」

「闇属性？」
「そつ、闇属性」
「……」

黙り込んでしまいましたとさ。

と、言う訳で魔法学校に入学する事になり、現在に至るわけです。

「ユリア」

「なに？　ゼロ」

いきなり話しかけられました。

「ふと思ったんだが、その格好はどうしたんだ？」

今着ている服は、王宮の中とは違い一般的な服です。とても動きやすいので、私はこの格好が気に入っていたりします。

「普段着よ。王宮の外では一般人なの」

「何故だ？」

「王族には、一般的な価値観や感覚などを身につけるために、人として完成するまでの間は平民に紛れて過ごし、学ぶっていう決まりがあるの」

「じゃあ今は“王女様”じゃ無くて“ユリア”っていう一人の生徒なんだな」

「そうよ」

これは王宮の権力財力に飲み込まれて、世間知らずなアホができるのを防ぐためだそうです。

「お前もここの生徒だったのか。ちなみに、王族である事を知っている人間は？」

「平民以外よ」

「そうか」

貴族にも私が王族である事は知らせて、黙っているように言われています（父上、つまり国王から）。魔法学校には貴族の人間もいるので、いきなりばらされても困るし、一人の人間として接して貰う為です。

前置きはこれくらいにして、入学試験を受けましょう。

「ゼロ、心の準備はいい？」

「ああ」

どう見ても緊張なんて欠片ほどもしている様には見えません。私でも少し緊張しているのに（だって校長ですよ？ 当たり前でしょう）。

ではノックから。

コンコン

「入りましたえ」

返事を確認してから扉を開き、校長室に足を踏み入れます。

「失礼します」

「入るぞ」

挨拶、そして入室。

校長室はそれほど広くなく、そこらじゅうに怪しげな置物とか用途不明の道具とかが置いてあります。

校長がこちら（主にゼロ）を見て言います。

「君がゼロ君か」

「ああ」

やっぱりその口調ですか。入る時に「入るぞ」なんて言うのはどうかと思えますよ？

校長を一言で言うなら、穏やかな感じの赤髪の中年さんです。昔は凄かったらしいですが。

「ほほう……ふうむ」

ゼロを物珍しそうな顔で見えています。まあ黒髪ですもんね。

「では入学試験だ」

そう言って校長が取り出したのは、透明で手のひらサイズの謎の球体。どう見ても怪しげな儀式の道具――に、見えるかもしれませんが、あれはれっきとした魔導器（魔力に反応する道具）です。

あれは触れた者の魔力に反応し、魔力量を光の明るさで表し（明るいほど魔力量が多い）、属性を色で表します（属性の色は、火が赤、水が青、風が緑、地が茶となります）。

現在、謎の球体（仮）は校長の手の上で鮮明な赤い光を発しています。つまり、校長はなかなかいい感じの火属性魔法使い、という事になります。

ちなみに私も入学時にこの試験を受けました。結果は眩い青い光の中に、少し茶色が混ざって見えました（髪の色はたいいてい1色な

ので、他の属性も持っていてわかりませんが、これなら他の属性も発見できます。というより、その為にします）。

つまり私は、かなり強い感じの水属性と少し弱めの地属性を持った魔法使い、という事になります。

追記、あまりに光が暗いと魔法の才能無しと判断され、入学できません。つまり不合格。

「これに触れてくれ」

「わかった」

校長がゼロに謎の球体（仮）を差し出します。

ゼロの髪は前にも言いましたが黒髪。何色に光るのでしょうか？とても気になります。

校長も気になるようで、目が変な光を帯びています。（少し怖いです）

ゼロが謎の球体（仮）に触れたその瞬間。

——— 夕刻 ———

あー酷い目にあつた。今の気分は最悪だ。

「まったく……あの謎の球体（仮）はどうなっているんだ？ 触れた瞬間爆発しやがって」

そう、触れた瞬間爆発したのだ。あの謎の球体（仮）が。

俺が触れた瞬間、失明するほどの白と黒の混ざった光を放った。その直後に大爆発して、校長室を吹き飛ばした。俺はその爆心地にいたが、無事回復した（アホ神の肉体改造のおかげ……だと思う）。……死ぬかと思ったが。

「何だったのかしらね」

奇跡的に死者は出なかった。

「でもよかったじゃない」

「……何が？」

「不合格じゃ無くて」

「そこか」

爆発に巻き込まれたにもかかわらず、ユリアはほぼ無傷だ。（俺が盾になってたらしい）

……ほぼ。

「ユリア、大丈夫か？」

「ええ、まあ」

少々擦り傷などが見られるが、それは俺のせいなのだろう。少なくともあれが爆発した責任は俺にもあると思う。なぜなら、直前まで校長の手の中でフツーに爆発せず、その役割を果たしていたからだ。

なにゆえ俺が持った瞬間に爆発したのかは分からんが。

何故だ……と思案していると、

「ふふふっ」

ユリアがいきなり笑いだす。

「何がおかしい」

「ゼロが人の心配してる」

そう言って笑い続ける。

「俺が人の心配したら変か？」

「そうじゃ無くて、意外だなんて」

「なぜだ？」

「だってこの前、ものすごい冷血発言してたじゃない」

あのザ
小隊長の事か。殺そうとしたしな。（微塵も躊躇せず）

「あいつには谷底に落とされたからな。それに……」

あのバカには個人的な恨みがあった、だが今回は違う。

「あの爆発は俺のせいだと思っしな」

何の責任も無い人間を巻き込んだのだから、少しぐらいは心が痛む（かもしれない）。

「へえ」

目を細めてこちらを見る。正直なんか鬱陶しい。

「……何だその目は
別に？」

そう言って再び笑いだす。絶対“別に？”じゃない。
けど、ユリアが無事であるなら問題は無い。

「そうか」

それにユリアの笑顔を見てみると、不思議な気分になる。

なんだ？ この変な感じ。いまいち表現し辛い。思い出せそうで
思い出せない。過去のどこかに置いてきた感情……そんな感じ。

「ゼロ」

「なんだ」

「学校、明日からだからね」

「分かっている」

「じゃ、いいけど」

そんな話をしながら、二人は黄昏の町を歩く。その足取りは幾分か軽くなっていた。

異世界三日目／入学試験／（後書き）

ここに一週間最低一話更新宣言をする！
できなかったら・・・打ち切り！（しませんよ）

異世界四日目／剣術試験／

魔法学校

「名前は？」

「ゼロだ」

「という訳で、今日からこのクラスの一員となるゼロ君だ。仲良くしろよ」

はあ。鬱陶しい。

何が鬱陶しいって、この紹介が鬱陶しい、浴びせられる視線が鬱陶しい、漂う空気が鬱陶しい。仲良くしろって言ってる時点ですでにこの教師は鬱陶しい。

俺は入学試験（大爆発）も終えて、この魔法学校に編入する事になった。もちろん学年は一番下、そこで俺はクラスに紹介されるところ。色々と鬱陶しいが。

全体を見ると年齢にバラつきがあるな。下は13、上は17ぐらいか。（俺は18、よって最年長）これは魔法学校のシステムのせいだろう。

入学試験は魔法の才能と一定の知識があればクリア。年齢制限無し。進級は成績次第。優等生なら進級、劣等生なら停滞（ユリアは優等生なので、二つ上らしい）。進級試験は年三回。（元が同じ世界だから年の概念も同じで、四季もあるらしい）平均は一年に一回の進級。最高は第四学年までである。（無論俺は第一学年、ユリアは

第三学年）最終的に一定以上の成績ならば晴れて卒業となる。

ちなみに男女共学。制服無し。一学年一クラス。一クラスは四十人前後。

俺は最低学年で最年長、つまり最高ランクの劣等生という事になる。今の所は。

話は戻り、

「席は……一番後ろの窓際が空いていたな。あそこだ」

そう言っただけ教師は教室の右奥を指さした。

ふと思う。

ここに置いてある机は、二人サイズの木製長机。誰が隣になるのだろうか……

とか思いつつ席に移動すると、誰もいなかった。二人分を一人で使えて、窓際で、他人に気を使う必要が無い。いい席だ。

満足して着席する。

ちなみに、二人掛けの机が縦七横三の四十二人分で並んでいる。

中途半端な……

「もうすぐ始まるので、授業の準備をしておくように」

そう言っただけ、俺の紹介を終えた教師は教室から出て行った。

ふと前を見て気付くが、カラフルだ（後頭部が）。赤青緑茶……属性の影響か。そういえば、この世界の魔法の概念はどうなっているのだろうか？ 属性は昨日聞いたが、概念や定義は聞き忘れたな。

ゴオオオ~~~~ン

……鐘の音？

「あ、先生来た」

思考を中断させ、誰かの言葉に耳を傾ける。教師か……興味無いな。

さっきのゴーンは授業開始の合図か。

戸を開け教室に入って来る教師。見るからに生徒に絡んできそうな鬱陶しい中年教師だ。

「授業を始める」

と、教師が言つと、

「起立、礼」

と生徒の一人が言い、皆が頭を下げる。

この世界にも起立、礼はあるんだな。

最初の授業は……数学か。

数学と言つても教科書（昨日渡された）を見る限り、内容は中二、三程度で変な法則も無く、まだ発見されてない法則や方程式もあるみたいだ。余裕だな。

ちなみに他の教科は、言語、自然、武術、魔法ぐらいか。

これらはそれぞれ、国語、理科、体育と言い換える事が出来る。

（魔法は無理）

成績は、

言語 神から貰った言語知識で何とかなる

自然 基本的な自然の法則は同じ（重力とか）らしいので、15

000年の知識でクリアできる

武術 改造による並みはずれた身体能力と長年の戦闘経験でいける

魔法 不明、未知の領域

……魔法以外は楽勝か。

魔法、早く使ってみたいなあ。

「その君」

考え事を中断させるように、例の中年教師がこちらを向いて話しかけてくる。

その君って誰だよ？

疑問に思い、周りを見渡す。

「黒髪の君だ」

黒髪？ ああ俺か。

「さっきから何をボーっとしているのかね？」

「ボーっとしていないが」

「ほう……」

考え事をしてただけだ。

「ではこれを解いてみなさい」

ボーっとしていなかったら解けるよな？ の目線だ。どうやらさ

っきの話し方が気に障ったらしい。

そう言っって黒板を指す中年教師。

おお、黒板だったんだな。自然に黒板だったから驚いた。しかし
チョーク（のようなもの）はいびつな形してんな。直線じゃなくて、
ちよつとゴツゴツしてる。

「解けないのか？」

中年教師の声で問題を解けと言われていた事を思い出す。

観察している場合じゃないな。指している問題は……どつかで見たような。

あああれだ、因数分解だ。つーか、若干高校レベル入ってんな。
嫌がらせか。

えーと問題は…… $a^2 + c^2 - ab - bc + 2ca$ か。こんなも
んどこで使っんだろうな。別の式の解法に使うんだけど。

「答えは $(c + a)(a - b + c)$ だ」

「問題の途中式は？」

「正解か？」

「途中式は？ と聞いているのだが」

「正解なら必要無いだろう」

「正解かまだ分からないのかね？」

「だから正解か？ と聞いている、答えろ」

「む……正解だ」

「なら途中式はいらないな」

むう……と、うなりながら眉間に皺を寄せている中年教師はほつ
といて、再び席につく。因数分解なんかどこで使っただろうな。

まあそんなことは置いといて。

……なぜか全体から視線を感じる。

まあいい。授業は勝手に進んでおくか。（教科書で）

——かれこれ昼過ぎ——

言語も自然も数学も簡単に終わらせて最後の授業。（なぜか全教師が俺に問題を解かせた。楽勝だったが）

ちなみに、話しかけんなオーラ全開で過ごしてたので、質問攻めにはならなかった。

さて最後は……武術か。今日の武術は長いらしい。武術と言っても、基本的な運動で終わる時もあるそう^{かし}だ。

ちなみにここは訓練所。訓練用案山子^{かし}やら決戦のバトルフィールドみたいなのがある。近くに倉庫も見える。むしろ武器庫っぽい。

「気お付け、礼」

やっぱり礼から始まるのか。

「よし、全員いるな」

目の前で話しているのは朝のあの教師。詳しく言わなかったが、結構渋い男だ。（追記、茶髪）

こいつ武術担当だったんだな。

こいつの後ろにある十本前後の木剣がなにを意味するのかは知らんが。

「今日は以前話した通り、剣術の試合だ」

聞いてねーよ。

「男女で分かれて二人組を作り、その二人で試合をする。組み合わせはこちらで決めてある」

へえ。

「なお、勝敗に関わらず個人の实力を評価する。勝敗は参考にする程度だ。全力で戦うように！」

そう言って、組み合わせを発表する。どうやらテストみたいなものらしい。魔法学校なので、武術はできなくても進級できるらしいが。

無論、発表ごとに歓喜や不満の声も上がる。

うつせえ、黙って聞け。

「では一組目、両者前へ」

発表も終わり、試合が始まる。まずは男からだ。ちなみに俺の名は無かった。

俺以外で十九組、つまり三十八人だったらしい。

決戦のバトルフィールドっぽい所で二人の男子が向かいあう。
おおよそ15歳と14歳。どちらも真剣な目つきだ。

試合のルールは簡単。

- 1、木剣を使用する
- 2、勝利条件は、相手に決定打を入れる（寸止めも可）か、降参させるのどちらか
- 3、格闘技（殴る蹴る）は反則
- 4、相手を殺さない
- 5、教師が審判をつとめる。また、制止等の命令には必ず従う以上だ。

「両者構えて……」

二人ともが木剣を構える。無論、双方勝つ気全開。

「始め！」

「うおおおお！」「はああああ！」

開始の合図と共に、両者突進。激しく打ち合い、木と木のぶつかる音が何度も響く。気を抜けばその隙にやられる、そんな試合。

……ここまでマジでやるとはな。子どもが。
しかし、見ていて退屈はしないな。

「でやあ！」

「ぐおっ！」

そんな事を考えていたら、片方の木剣が相手の腹に命中した。痛そうだ。

「そこまで！」

もちろん試合は腹に入れた方の勝ち。もう片方はどこかへ運ばれていった。勝った方もかなり消耗しているようだが。

これは……怪我人が半分は出る気がするな。

——結構あと——

「やああ！」

「てえい！」

女子の高い声も、今は殺気に近いものとなってぶつかり合う。

これで最後か、白熱する試合も多かったな。（無論、武術が苦手なやつもいた）

あの予想通り、半分近くが怪我人となって何処かへと運ばれていた。中には棄権する奴もいたが気にしない。

「たあ！」

「キャッ！」

鋭い一撃に、片方が木剣を落とす。終了だな。

「そこまで！」

教師の制止で決着。

女子の方も一部は凄かった。さっきみたいに。

「これで全組終了だな」

これで全組終了か。結構時間かったな。さて、後はか「ではゼ
ロ君」える……ん？

思いつきり帰る気だった俺に教師が声をかける。嫌な予感が千本の針となって俺の全身を貫く。

「少々時間も余っているし、君だけがしないのもあれだ」
「あれってなんだよ」
「そこでだ」

無視しやがった。つーかどこでだよ。

「私と試合をしてもらう」

……は？

「試合？」

「そうだ」

「あんたと？」

「そうだ」

「断る。面倒だ」

「何故断る！」

「面倒だと言ったが？」

最近理由付けてるのに聞いて来る奴多い。

「ダメだ！ 教師命令だ！」

「……絶対か？」

「絶対だ！」

「はぁ、（面倒だが）仕方ないな」

「分ければよろしい」

その瞬間、周りの生徒が騒ぎ出す。
なんなんだ？

「ふっふっふ、こう見えても私は結構強いぞ」

「結構の程度が分からんな」

「この魔法学校では一番強いかもな」

「余計に分からんぞ」

少なくとも生徒よりは強いだろうが。

仕方なくそこら辺にあった木剣を握り、対峙する。（リグナムバ
イタの木刀は王宮に置いてきた）教師も本気らしく、構えがかなり
実戦的だ。

「では、君の実力を見せてもらおう」

「後悔するなよ」

「……後悔するな、だと？」

「そうだ」

「ふっ……なめられたものだ、勝てる気ではな」

かなりの自信家だな、この教師。

「まあいい、準備はいいか？」

「あんたこそ、負ける覚悟はできたのか？」

「いいみたいだな、そこまで言うのなら……全力で行かせてもらう！」

視線が交差する。その瞬間に戦いは始まった。

「はあああ！」

かけ声とともに上方から迫る一撃を右に流して避け、さらに右からの薙ぎ払いを弾き、距離を取る。

かなり本気だこの教師、初っ端から二連撃かよ。

……少しおちよくりすぎたか。

「まだまだ！」

さらに追加で攻撃を仕掛けてくるが、俺はそれを紙一重でかわす。ある程度威力も速さもある。思っていたよりは出来るようだ。

「避けているだけでは勝てないぞ？」

次から次へと迫り来る木剣の斬撃。しかし、今の所は避けられない事は無い。とりあえず迫り来る木剣に一撃を入れ、相手がひるんだ隙に距離を取る。

「さっきまでの勢いはどうしたんだ？」

「はあ……」

こいつと遊ぶのは疲れるな、そろそろ終わりにするか。

「もうそろそろ終わりにするぞ？ 面倒臭くなってきた」

「減らず口を……」

相手が言い終える前に距離を縮め、軽く正面から袈裟斬り。受け止められるが、左に木剣を抑え込みそこから逆袈裟。しかし飛び退いて避けられる。

「少しは出来るようだな」

「次で終わりだ」

「ほう……やってみるがいい！ うおおお！」

挑発に乗ったらしく、雄叫びと共にこちらに向かってくる。

全神経を集中し、凝視する。その瞬間、動きがスローモーションのように見える。ゆっくりと動く教師、次の動きが手に取るように分かる。

あの体勢からは……左からの攻撃か、ならば。

木剣を左に構え、反撃準備。

「でやあ！」

迫り来る斬撃を剣身に沿わせ、体制を低くして右へと捌く。相手は振りきって胴が無防備な状態だ。

そこへ右へと持ちかえた木剣の一撃を――

「はあ！」

――叩き込む。

「ぐっ……」

命中。

これで勝ちだな。

崩れ落ちる教師に勝利宣言。

「残念だったな」

「くっ……無念」

どこの侍なんだよテメーは。

ゴオオオ~~~~ン

鐘の音。

「……はあ」

大きくため息をひとつ。

あゝ疲れた。授業終了の鐘も鳴ったし、早いこと帰ろう。

そんな事を思ってたら、

「すげー!」「うっそ? マジ?」「ありえない……」「つよい

い」

他の生徒が騒ぎ出す。

……まさか。

「ゼロ君つよい!」「なんでそんなに強いのか?」「そういえばなんで髪黒いの?」

俺のまさかが的中し、質問攻めになった。気分は最悪だ。

「俺に剣術を教えてください!」「いや俺が先だ!」「俺も!」

「私も!」「なあなあ……」

「ねえねえ……」「なんで……」

ああ、早く帰りてえ……。

俺が解放されたのは、この騒ぎをユリアが見つけた時だった。

……これは先が思いやられるな……。

異世界四日目ゝ剣術試験ゝ（後書き）

更新遅くなりました！

次回の更新は5月22日まで！（目標）

最近睡眠不足ぎみだ・・・。

異世界四日目～勧誘～（前書き）

勧誘
♪

異世界四日目／勧誘／

魔法学校

あ、ユリアです。昨日までは学校はありませんでしたが、今日から再開です。

それはいいとして、私は今心配しています。
ゼロは今日が魔法学校の初日なのだけれど大丈夫でしょうか？
と。

気になるのも少々どころではありません。何故なら――

「どうしたのユリア、憂鬱そうな顔して」
「そう見える？」

いきなり声をかけてきたのはクレスティア・ヴォルク・ディアレクト、私の友人です。

通称ティア、一つ年上の16歳、鮮やかな赤い髪が印象的です。

「とても悩み事、って感じに見えるわよ？」
「ティアにはわかってしまうのね」
「昔からの付き合いだからね」

そう、彼女とは父親同士が昔からの仲間なので、昔から付き合いがあったのです。

よく面倒を見てもらった事もあり、今では親友です。お陰様で意思の疎通が楽だし、隠し事は見抜かれるので、いい事も悪い事もあります。

「で、何を悩んでいるの？　もしかして好きな人でも出来たのかしら」

「残念だけど違うわ」

「じゃあ何なの？」

「実はゼロっていう人が――」

親友なので悩みは打ち明けます。当然です。

内容は勿論ゼロの事です。細かい話は抜きにして、彼がこの学校に編入する事を説明しました。

「――というわけで、この魔法学校に編入するの」

「ふうん、それでどんな人なの？」

「えーっと……」

若干ためらいましたが、思いきって話す事にしました。

「外見は黒髪で目も黒く、」

「ちよつと待った」

いきなり待ったがかかります。せつかく話し始めたのに。

「黒髪で目も黒いって……聞いた事も無いわ、どこから来たの？」

「え？　ええと……それは」

“異世界からです”なんて言えませんが、よってここは適当に誤魔化すしかありません。

「と、遠くから旅をしてきたんだって」

「ふうん……」

ものすごく嫌な目つきです。疑っているのが丸わかりです。どうか嘘だとばれませんかように。

「まあいいわ、続けて」

ばれなかった様で、少しだけホツとしました。ばれて無い……ハズです。

「で、上下真つ黒な服、無表情で何を考えているのか分からないし、国王に対して敬語も使わないし、人を殺すのに躊躇しないどころか理由もいらないうて宣言する。そんな人よ」

「それ……結構以上に危ない人じゃない？ 黒いし、国王に敬語使わないし、殺人肯定って」

「それでも無いと思うわ」

「どうして？」

「助けてもらったから、かしら」

「え？」

……あ、言ってしまいました。さっきの編入の説明でわざと省いておいた所を。

「助けてもらったって、どういうこと？」

じりじりと迫ってきます。逃げられません。これは白状する他無いようです。出来れば知られなくなかったのですが。

「う、それは——」

本日二度目の説明開始。後が怖いです。

「——と、いう訳なの」

「はぁ、アホね」

「うつ……」

昔からの友人だからかなり痛い言葉で攻めてきます。だから言うのは嫌だったんです。

「夜中に一人で散歩って……自分の立場を理解してないわね」

「ごめんなさい」

「そりゃ、ユリアは魔法では天才的かもしれないけど、兵士四人に捕まってたら話にならないわね」

「すみません」

「だいたいユリアは——」

始まりました。これはかなり長いので、適当に流すのが一番です。

ちなみに私は魔法が他人より遥かに得意で、天才と呼ばれるほどです。魔力量が常人の十倍ほどで、100年に一人の逸材とも言われます。まさに奇跡ですね。

そんな私が捕まったのは、魔法を封じる効果のある特製の手枷のせいです。あれが無ければ余裕で勝て——

「ユリア、ちゃんと聞いているの？」

「えっ？ も、勿論よ！」

いきなり振られてびっくりしました。驚きで心臓がドキドキしています。

「はぁ、まあいいわ」

呆れたように言いました。やっぱり聞いて無かったのね、という顔です。

いつももう少しばかりかかるのですが、今日は短いです。

「とりあえず、ユリアがアホだっというのは分かったわ」

酷い言われようです。事実なので否定できませんが。

「で、話を戻すけどその“ゼロ”って人が心配なのね」

「正確には、他人の心配もあるわ」

「殺人に躊躇も理由も無しだったわね……」

「小隊長も一瞬で負かしてしまっし」

「……それ、かなり強いじゃない」

「やっぱり？」

「全員席に着けー！」

そんな話をしていると、教師の声と共に授業開始です。私たちは席に急いで戻りました。いつもの事です。

そして、いつも通りに全授業が終わり、質問攻めに遭っているゼ口を見つけたのでした。

——そして夕刻（前話の終わりから）——

「ああ疲れた。この世界は面倒事が降りかかって来るように出来ているのか？」

「そんなことは無いと思うけど……」

ゼロの質問にユリアが自信無さげに答える。

ユリアに案内され、ゼロは今、魔法学校にある寮の自分宛の部屋（二階）にいる。なぜか優遇されている。

—というか、寮があつたんだな—とゼロは思う。

ユリアの話では、入学試験のあの球体Xが爆発した事が優遇の理由らしい。初めは意味不明だったが、どうやら魔力量が多すぎて、限界突破で爆発した。という結論に（学校側が）至ったそうだ。つまり、魔法の素質が（というより魔力量が）あり得ないにぐらいあつた。という事になる。

要するに特待生と言う事なのだそうだ。

ゼロは特待生制度の存在理由に疑問を持ったが、おいといて。

「で、そんな事より話というのは？」

いきなり切り出すゼロ。案内されたのはいいとして、ユリアが大切な話があるというのだ。

「実は……」

渋々といった顔で話し始めるユリア。あまりいい話ではない事は子供でも分かる。

「昨日父上から言われた事があつて」

「何を？」

「その前に、この魔法学校は王宮が運営しているの」

「国営だったのか、だが何のために？」

「それは、優秀な人材を集めるためのの」

話の流れがゼロには見えてきたが、黙って聞く。

「ゼロは特待生になつたでしょ？」

「ああ、なつたな」

ゼロはなんとなく話がこの先どうなるのか分かっていた。聞かずとも結論はわかるが、あえてそのまま聞く。

無論、嫌な予感しかない。

「それで父上から——」

「軍などに入れと」

「そういう事「断る」即答!？」

全身全霊かつ即答。言うまでも無いが拒否。

——誰が兵士になんぞになりたがるんだよ——ゼロはそう思った。

ユリアもあまり良い話だとは思って無かつたらしく、即答するまで暗い顔だった。

「つまり、魔法学校は国営で、目的は兵力などの増強。そこに特待生になりえる素材があれば、是非とも欲しい。で、そこに俺が来たから御呼びが掛つた。という事だろう？」

「そういう事なの」

特待生制度はその為か。成程な。そんな風に今までに多くの人材をかき集めてきたのだらう。学校を通じてとは……中々いい案だ、とゼロは思ったが、答えは決まっている。

「どうしてもダメなの？」

「どうしても断る」

「どうして？ 待遇は結構いいと思うけど」

「誰も待遇の話なんかしていない。そもそも“国の為に戦う”とか聞くと殺意が全身に満ち溢れる。徴兵令ならなおさらだ」

「そこまで嫌がらなくても……」

「……寝ボケているのか？」

ゼロは殺意を込めた視線で睨み、黙らせる。少々怯えている様だがゼロは気にしない。

「このままでは納得しないだろう、仕方ない——と思い、理由もつける。」

「元々俺は、兵士になる為に魔法学校に入った訳じゃないし、誰かに指図されるのも好きじゃない。俺は俺のやりたい事を自由にやる。軍に入って拘束されるのは御免だ」

「……国王が直接御呼びでも？」

「無論断る」

「やっぱり」

お約束の即答、といった所か。ユリアもある程度予想はしていたようだ。説得するように国王から言われていたのだ。渋々といった表情だったのはそのためだった。

しかし、これで終わるかと思いきや、ユリアが意外な事を口にした。

「望むものは出来る範囲で全て与える。と言っていたとしても？」

「……それは本気で言っているのか？」

ゼロの目つきが変わった。別に何か欲しいモノがある訳ではないが、ただ――

そして何かを思いついたように言った。

「もしそれが本気なら、無理にでも会って話をしたいところだ」

何か含みを感じる言葉のせいだろうか、ユリアに嫌な予感が突き刺さる。

ゼロの顔が、ほんの少しだけ笑っていた。

ユリアも一緒になって笑——えなかった。

身の毛もよだつ様な邪悪な笑みで無かったら別だったのだろうか。

「明日王宮に行くぞ。木刀も王宮にあるしな」

「え……ええ」

明日はどうなるのだろうか。

邪悪な笑みを浮かべる異世界人に恐怖を感じながら、ユリアは明日の心配をした。

異世界四日目ゝ勧誘ゝ（後書き）

中間考査中だというのに更新するこの俺〓史上最高のダメ人間。

まあ何はともあれ9話目、次で10話目ですね。

ある方から感想も頂きましたし。記念すべき第一通目です。

中に書いてある事を参考に、10話目を書く予定ですよ。

“仕方ねえな…書いてやるぜ”という方だけでよろしいですから、感想、批判等、何でもいいので書いて下さると励みになる・・・かも？ です。

アクセスもまさかの4桁行っちゃってるし、もしかしたら5桁行くかもです。

いやあゝこんなモン読んで下さっている皆様に感謝ですよ！

さて、次回はえゝっと・・・5月29日までの更新ですね。

できなかったら石を投げて下さい。どうせ当たりませんので。

P・S 脱字いきなり発見。

修正5月21日午後3時

異世界五日目〜会談〜

ユリアの話を聞き終えて、俺は眠りについた――のだが。

「何でテメエが居るんだよ……」

「おひさし〜」

なぜか全面真っ白空間。よって、目の前にいるアホそうな話し方の女は神、という事になる。

ほざけ、なにがおひさしだ。この万年お気楽幽体女が。

「あまり久しくない気がするが」

「そうかなあ〜？」

「そつだ。二日ぶりなだけだ」

「二日ぶりはお久しじゃないの〜？」

「……知らん」

相変わらずの人の神経を逆撫でするアホ面で話し続ける。こいつは14000年程前からアホだという事が分かっている。よって、もう突っ込まない。

まあ置いとして。

「今回は何の用だ」

「何も無いよ〜。ただ暇だったから呼んだだけ〜」

「……どうやら死にたいようだな」

「冗談だよ〜、じょ・う・だ・ん〜 そうカリカリしなさんな」

「誰のせいかわかって言っているのか？」

「え〜？ 誰のせいかなあ〜？」

「どこその金髪ロン毛で話し方に真剣さが足りない女のせいだ」

「誰それ？」

「お前」

「“お前”なんて名前の人、聞いたこと無いなあ」

「小学生が貴様は」

こいつには真剣さが何より足りない、とつくづく思う。神つてのは重職じゃないのか？ もっと真面目にしないで良いのか？ とも思う。

「おふざけはこの辺にして本題に入るけど、プレゼントがあるんだ」

「贈り物？」

「日本語訳なくていいから」

「で、何なんだ？ p r e s e n t っつて」

「今度はすげえいい発音……まあいいとして、はいコレ」

そう言つて差し出された物は……黒い輪。

「何だこれは」

「腕輪だけど？」

「……質問を変えよう。まず、何で真つ黒なんだ？」

「君のイメージに合わせたらそうなったんだよ」

「つまり、俺のイメージカラーは黒ということか」

「自分の服装見れば分かるでしょ？」

そう言われて自分の服装に目をやる。自分の服装は長上下で全身真つ黒……なんだが、よく見ると前の世界で着用していた服とは違う事に気付く。なんかファンタジーっぽい。

「おい」

「どう？ 黒いつてわかったでしょ？ こうして見ると影みたいだね」

「確かに黒いが……こんな服、俺は持って無かったはずだ」

「あれ？ 今頃気付いたの？」

「どういことだ？」

「その服、君が異世界に行った時から着てるんだよ」

「四日間も着てれば確かに今頃だな」

「デザインは向こうから見て違和感が無く、君のイメージに合わせたらそうだったんだよ」

「どうやら向こうの服装はファンタジーっぽいデザインらしい。そういうえだが、ユリアの服もファンタジーっぽかったな。向こうには絶対に和服なんか無いだろう。」

「ちなみにその服、損傷しても自動で再生し、汚れても勝手に綺麗になり、夏は黒いのに涼しく、冬は薄いのに暖かく、動きやすいっていう最強装備なんだよ？ 防具としては期待できないけどね」

「……一体、この服の素材は何なんだ？」

「残念だけど、守秘義務により言えないんだ」

「そうか」

見る限り普通の服が（ファンタジーっぽいのは置いて）自動再生・自動洗淨・温度調節完璧で、動きやすく、素材不明だとは夢にも思わなかった。何をしたらこんな服が出来るんだ？

まあそんな事はどうでもいい。

「話がそれた所で本題に戻るが、これ（黒い腕輪）は何の役に立つんだ？」

「君の力を抑える事が出来るよ」

「力？」

「魔力だよ」

魔力を抑える腕輪か。必要なのか？

……ん？

「おい」

「何？」

「魔力で思い出したんだが、以前魔法に関する質問をした時の回答をまだ貰ってないぞ」

「……あゝ」

「という訳で質問だ。向こうの世界でのまほ——」

俺は最後まで言う事が出来なかった。

え？ 理由？ アイツがいきなり転送したからだろうな。

なんか質問の度に強制転移を食らってる気がする。

——現実世界（だから異世界で言っても違和感あるって！）——

コッ

「痛い」

突然額に走る軽い痛みで目が覚める。痛みの正体は……例の黒い腕輪がぶつかったのだろう。カラララ……という音を立て、床に転がっている。

「なんで落ちて来るんだよ。つか、どこから落ちて来たんだ？」

恐らく神が^{アイツ}適当に転送したからだろう。が、どうせ神の事なので^{アイツ}気にしない。真剣さが足りない事も分かっている。ついでにアホだという事も。

床に落ちている腕輪を拾い上げ、寝台に腰掛けてじっくりと観察する。

特徴は、真っ黒、金属製、歪な環形、重さ5g程度、黒の奥に様々な色が揺らめいて見える謎の宝石が一つ付いていて、エノク文字に似た意味不明の文字で呪文のようなものが刻まれている。

つまり簡単にまとめると、

- 1、黒い
- 2、金属製（鉄板を輪にした感じ）
- 3、金属製にしては軽い（こういう表現もなんだが、1円玉が5枚分ぐらい）
- 4、歪な環形（横長と言うかなんというか）
- 5、変な宝石付き（黒色だが、その奥に様々な色が揺らめいている）
- 6、変な文字の呪文付き（エノク文字に似ているが、解読不可）
- 7、魔力を抑えるための物らしい（要するに、リミッターなのだろう）

……とまあ、こんな所か。突っ込む所に困らないな。

適当にまとめた後でも観察を続けていると、変なラインを発見。気になって弄繰り回していると、横から半分に割れた。

別に割れたと言っても破損した訳じゃない。カパツと嵌めるタイプだったただけだ。

「ここがこうで……こうか」

適当に力パカパと、割っては嵌めてを繰り返し、身に付けようとして思いとどまる。

― 必要だから渡されたのであって、身に付けておけという事なのだろう。しかし、これはリミッター的な存在で、付ければ何らかの影響（主に制約）を受けるはず。装着するべきか、それとも―などと考えていたが、結局は試しに身に付ける事にした。

「ここをこうして……よし」

手の甲側に怪しい宝石が来るように右手首に付けると、これがピツタリなのである。隙間が無く、きつ過ぎないという、元からそこにあつたかの様な適合感。重くないから力も要らず、ずれないから気にならない。腕の形を研究していたのだろうか？

「正に俺専用って事か」

専用は良いが、呪いた的な何かで外せないなんて事は……あるかもしれない。そう思っ外そうとしてみると、あっさり外れる。別に呪いなんか無かったらしい。満足。

黒くて怪しい腕輪に満足していると、扉の向こうに気配を感じる。
この気配は……

「ユリアか」

扉の向こうに声をかける。すると扉が開き、目を丸くしたユリアが入って来る。

「おはようゼロ。凄いわね、扉の向こうが分かるなんて」

扉の向こうの正体を当てたことに驚いているようだ。当然だろうが。

「なんとなくだ。それより何か用か？」

「あれ？今日は王宮に行くんじゃないかったの？」

「そうだったな」

昨日の徴兵令の話だろう。ユリアが来たのは俺だけでは王宮に入れず、王に会う事も出来ないからだだろう。別に門番ぶちのめして入ってもいいが。

「しかし、ずいぶん早起きだな」

「ゼロを迎えに来ないといけないからね」

「俺が迎えに行ってもよかったんだが」

「……女子寮に一人で来る気だったの？」

呆れたようにユリアが言う。

言い忘れていたが、寮は男子寮と女子寮に分かれている。ユリアは王族だが、平民と共に寮暮らしである。理由は以前言ったから省略する。

「普通に考えて、朝早くから一人で女子寮に突っ込んだりしたら、変態扱いは免れないと思うわよ？」

「安心しろ。それに、女がどうとかそんなモノに興味は無い」

「……興味、無いの？」

俺の発言に驚いているらしく、聞き返してくる。俺が“当たり前だろう”といった口調で

「無いな」

と言うと、

「……」

二の句が継げなかったようだ。
そんなユリアは放つといて立ち上がる。

「王宮に行くぞ」

「え？ あ、待って！」

俺はかつたるい体を動かし、王宮へと歩きだした。

——（一時間後）王宮——

王宮の中を歩く二つの人影があつた。

「ゼロ、こつちよ」

「ああ」

勿論ゼロとユリアである。ユリアが先に進み、ゼロが後を追う。
二人は今、国王に会うため指定された部屋へと向かっている。

「手続きが思いのほかあっさりしていたな」

「父上が予定を開けておいたのかしら」

二人は適当な話をしながら、無駄に広くて長い廊下を進む。

「ここよ」

そう言っでユリアが立ち止まり、指さしたのは……普通の扉。ゼロはもっと無駄に広い所を想像していた為、意外そうな顔をした。

「見た所、普通の小さい部屋だな」

「三人で話すには、十分だと思うけど」

「それもそうか」

ゼロは適当な相槌を打ち、ノックも無しに扉を開く。そして、中にいる人物に声をかけた。

「久しぶりだな“国王陛下”」

「よく来た。まあ座れ」

そう言っで着席を促すリグレイス王。普通に腰掛けるゼロ。それに倣うユリア。

ユリアは一切敬語を使わないゼロに、ある意味尊敬の念を抱いていた。が、同時にゼロの頭が心配だった。

そんな人間を普通に受け入れる父親はもっと尊敬していたが。

ゼロとリグレイス王が向かい合っで座っており、それを横から眺めるようにユリアが座っている。こうして円卓を三人で囲み、話し合いが始まった。

「さて、軍入りの件だが……ここに来たという事は入ってくれるの

か？」

「ああ、入ってもいい——が、条件がある」

「条件？」

「ああ」

ゼロがあつさり入ってもいいと言った事に、リグレイス王は少し嬉しそうだった。だがユリアは真剣な顔だ。何故なら、ユリアは昨日の夜にゼロが言っていた事を覚えているからだ。

——“国の為に戦う”と、聞いただけで全身から殺意が溢れるほど嫌がる人間が、そうそう簡単に分かったと言っはすが無い。一体どんな条件を出すのだろうか——とユリアは思っていた。

「その条件とは？」

リグレイス王はどうせ地位・名誉・財産に関する事だと思っていた。が、帰って来た答えは地位でも名誉でも財産でもなく、絶句するには十分だった。

「条件は、俺はあらゆる命令に対する拒否権を持つ事。俺の主は、王女ユリア・ウォイセル・エルレインであると定める事の二つだ」

「なっ！」

「えっ?!」

ユリアは驚きで混乱したのに対し、リグレイス王は少々考えた後、冷静に問いかける。

「……まず、条件の理由を聞かせて貰おう」

「いいだろう。まず一つ目、拒否権は面倒臭い時と命令に不満があった時に行使する。国の為に死ねと言われて死ねるほど、俺の命は安くない」

あれだけ嫌がっていたゼロが、入っても良いと言った理由が詰まっている。これなら国の為に戦えと言われても、即刻断る事が出来るからだ。

「次に二つ目だが……これに特に意味は無い」

自分に仕える事に意味は無いと言われた事じゃなく、ゼロが意味の無い条件を出した事に、ユリアは驚いていた。

「ゼロは無意味な事はしない。絶対に何か理由がある——なんとなくだが、そう思っていた。」

そんなユリアを置いて、交渉は進む。

「ふむ……」

「どうだ？」

「悪いが……」

「俺の条件が飲めないと」

「そうだ。二つ目は大目に見ても、いざという時に使えん兵力を持つていても意味が無い」

リグレイス王の言うことはもつともだ。「出陣してくれ」と言っても返事が「イヤだ」では、使えなさすぎる。それに、二つ目の条件も気になっていた。

しかし、その意見を覆すような事をさらりとゼロは言った。

「本当にそうだと思うか？」

「それはどういう意味だ？」

「俺を指名した理由を考えてみれば分かるはずだ」

―ゼロを指名した理由。それは魔法学校からの報告で、かつて無いほどに強力な魔導師になると判断したからだ。それに……―と、リグレイス王は心の中で再確認する。

そんなリグレイス王の考えはお見通しのように、ゼロが話を続ける。

「俺がこの国に味方してやる理由は特に無い。別にどこへ行こうと勝手だ。しかしそちらから見れば、仮に俺が敵国に取り込まれた時、敵戦力は大幅に増大する訳だ。そこで“優遇する”と言ってユリアを遣いに出したのdarou? 俺を軍と言う名の鎖に繋ぐ為に」

つらつらと言葉を並べるゼロに、リグレイス王は驚愕した。敵に回すと十分危険な存在になるゼロを、手元に置いて鎖に繋ぎ、飼い慣らすつもりであった事まで読まれているとは思ってもみなかったからだ。

「無論、条件を飲まない場合は、軍入りの話は無かったことにしてもらおう」

「……」

リグレイス王は完全に思惑を見破られ、返す言葉も無かった。

ゼロはそんな事も分かっているようで、返事も待たずに話を続ける。

「さっき言った二つの条件を守り、俺を不当に冷遇しない限り、俺はこの国に刃を向けないと約束する。拒否権の乱用も出来る限り控える。どうだ？ これでもまだ条件を拒むか？」

リグレイス王は少しの間、眉間に皺を寄せて考えていたが、仕方がないといった表情で答えた。

「……わかった、条件を飲もう。その代わり、今の言葉を忘れるな」
「安心しろ。約束は守る」

こうして、ゼロの軍入りが決まったが、ユリアは終始疑問が残りっぱなしであった。

そんなユリアを置いて、さらにゼロがリグレイス王に話しかける。

「ところで一つ、聞きたい事があるんだが」

「何だ？」

「今は魔法学校に通っているんだが、中退するの？」

「いや、そのまま続けてもらう。宝石も磨かなければただの石、と言っだらう？」

意味は、どれだけ素質や才能があつたとしても、修練し、実力にしなければ、ただの人と何ら変わりはない。と言ったところか。

「そうか。俺はもう無いが、まだ何か話す事はあるか？」

「詳しい待遇の話がある」

「分かった」

詳しい話の後に話し合いは終了した……ゼロの完勝で。

リグレイス王がゼロを高く評価したと同時に、恐怖を感じた事は言うまでもない。

異世界五日目〜会談〜（後書き）

今回でかれこれ十話目、これまでに何度死にそうになった事か。

しかあし！ そんな時も挫けずに立ち上がったのは、更新をする度にある程度のアクセスがある……つまり更新を心待ちにしている皆様がいたおかげですよ！ 本当にありがとうございます。

一週間一話更新もなんとか出来ていますし、まだまだネタにも困って無い。小説の総合評価も上がっている……ここまで来たら頑張らねば！

さてと、ではそろそろこの辺で締めくくりますか。

「異世界混沌救世記」まだまだ続きますよ！ 乞うご期待！（激しく不安）

P・S これが良いとか、これはダメだとか、何でもいいので感想待ってます。

感想を貰った時の一喜一憂……たまらないですよ！

後、恋愛要素が欲しい人ってどれくらいいるのかな？ かな？

異世界五日目、嫌な再会（前書き）

更新遅れてすいません。

5000文字は疲れたですよ。

異世界五日目く嫌な再会

「望み通り、来てやったぞ」

「やっと来たか、準備はもういいのか？」

「無論だ、後悔するなよ」

「貴様こそな」

ユリアです。

現在、ゼロと（何時かの）小隊長の決闘が行われようとしている。

その理由は少し前――

――時は少し戻り、王宮廊下（前話の終わりから）――

「これで失礼させてもらおう」

「では失礼します、お父様」

「すぐに帰るのも構わんが、王宮を少し見て回ると良い」

「そうさせてもらおう」

詳しい待遇の話（ほとんどの内容が、ゼロが魔法学校を出てから決める事になりました）を終えて帰ろうとした時、父上（リグレイス王）に王宮を見て回る事を勧められ、ゼロが見て回る事にしたので、私が案内する事になったのです。

「案内を頼む」

「分かったわ」

こうして私は案内を始めました。まずは、進む方向を決めます。

「どこに行きたいの？ あっちが謁見の間で、こっちが外。主に訓練所や兵舎があるわ」

「訓練所からにしよう」

「じゃあこっちな」

訓練所に行きたいと言うので移動開始。訓練所に向かって歩きだします。

歩いている間は暇なので、ゼロに質問をします。いくつか聞いた事があるのです。

「ねえゼロ」

「なんだ？」

「父上の考えをどうやって見破ったの？」

「軍の鎖に繋ぐという話か？ あれは適当に鎌をかけたただけだ。見事に凶星だという顔だったから、大当たりだったのだろう」

「すごい……」

「どこがだ？ 別に普通だろう」

「鎌をかけるのもすごいし、内容もすごいと思うわ。軍の鎖に繋ぐなんて思いつかなかったもの」

「そうか」

ゼロは、何をそんなに驚いているんだか、という顔で歩き続けます。

思惑もゼロにはお見通しなの？ という疑問は解消されました。そんな話をしているうちに、訓練所に到着しました。

「ここが訓練所よ」

訓練所では、兵士が毎日欠かさず訓練に勤^{いそ}んでいます。勿論今日もです。

そこかしこから掛け声や物を打ち付ける音が聞こえてきます。

「思っていたよりしつかりしているな」

と言つて、ゼロは興味深そうに訓練所を観察し始めます。

魔法学校にある訓練所が大きくなったような場所なので、特に違いはありません。

一体どんな所を想像していたのか分かりませんが、ゼロが満足そうではなかったです。

そんなゼロを私はじっと観察します。そういえば私は、ゼロの事をほとんど知らないのです。

くせの無い黒い髪、鋭く光る黒い目、それらを合わせて整った顔立ちは、人間じゃ無いかもしれないと思ってしまう程綺麗な顔でした。体に無駄な肉は無く、細く引き締まっています。全身を覆う真っ黒な服は、遠目から見れば、影が独りでに動いている様にも見えます。

こうして見ると、ゼロって格好良いのね。

……ってそうじゃなくて、アレを聞こうとしていたのですた。

「ゼロ、一つ聞いてもいい？」

「ダメだ、と言ったら聞かないのか？」

「それは……」

「冗談だ、真剣に考えるな。で、なにが聞きたいんだ？」

「ゼロの出した二つ目の条件の事だけど、どうしてあんな条件を出したの？ 理由があるんでしょ？」

「特に理由は無いつたはずだが、お前にまで隠す必要は無いか。理由は――」

「おい！ その貴様！」

理由を聞く直前にいきなり後方から発せられた声に、二人で仲良く振り向くと、一人の青年がいました。

「……誰だ？」

「ゼロ、小隊長よ」

「そういえばいたな、そんなヤツ」

何時かの小隊長でした。

ただ、以前とは違ってこう……憎悪をたぎらせています。激昂という感じです。

しかし私に気付いたようで、低頭します。

「で、何か用か？ 無様に敗北した小隊長」

「やかましい！ ここで会ったが百年目だ！」

「今の所、三日目だが」

「黙って聞け！ 貴様に負けてからというもの、そこらの馬の骨に負けたと言われ、上からは見限られるわ、下からも見下されるわ、同僚には呆れられるわで散々だったんだぞ！ 俺の名誉をどうしてくれる！」

どうやらこの前の模擬戦で負けたせいで、名誉が地に落ちたと怒っているらしいです。

「無様に負けるお前が悪い。お前の名誉なんぞ知った事か」

ゼロは相手の神経を逆撫でします。怒らせたいようです。

「うるさい！ そんなことは聞いていない！ 俺と決闘しろ！」
「断る」

小隊長が言っている事は繋がっていない事に気付いているのでしようか？

ゼロはお約束の即答です。

が、これに小隊長は食いつきました。

「なんだ？ 負けるのが怖いのか？ この腰抜けが！」

「負けた側が言うセリフじゃないな。それに、負けた相手に三日置いたからといって、勝てる気にいるのか？」

「生憎だが、格闘技なら負けない自信はある！ 格闘技で決闘しろ！」

「いいのか？ そんな下らん自信を理由に決闘を挑んで。別の職を探す羽目になるぞ」

「貴様こそ軍に入れなくなるぞ？」

「別に困らないが」

「ならばこの挑戦、受けるよな？」

「無論——」

小隊長の猛攻に、ゼロが流されています。

ああ、ゼロもついに決闘を——

「断る」

しないんですね。

「なぜだ！ 流れるにも、受けて立つ！ と言う所だろうが！」

「理由は面倒だから、それだけだ。それに——決闘ならば、確実に死者が出る。少なくとも俺は出す。そして、それを良しとしない奴が居るからな」

それを良しとしない奴というのは私なのでしょう。チラッと視線を向けてきます。いつかの会話を覚えていてくれたようです。

「なら、姫様が納得すればいいんだな？」

さっきの視線に小隊長も気付いたようです。

「姫様、私のわがままで申し訳ないのですが、この決闘を認めて下さい」

どうでしょうか？ と思って、ゼロに視線を向けると、

「別に俺は構わないが、そいつの命は今度こそ無いぞ」

と返ってきました。今回も殺す気満々です。

これで決闘したら、どちらかが死に至るまで終わりそうもありません。それは避けたいところです。よって返事は、

「残念ですが、認める事は——」

「そこをなんとか！」

いきなり言葉を遮り、許可を求めてきます。必死に食い下がって来るので仕方なく、

「……そこまで言うなら仕方ありません、許可しましょう」

つい許可してしまいました。

「ありがとうございます！」

と言って駆けて行く小隊長。

ああ、これではどちらかが死人になってしまいます。

「いいのか？ 冗談抜きで殺して」

いいわけねーです。……こうなったら、ゼロに頼むしかありません。

「ちょっと来て」

「なんだ？」

「（小声で）ゼロ、勝てそうなの？」

「（こっちも小声で）無論だ。で、用はそれだけじゃないんだろう？」

「（やっぱり小声で）お願いがあるんだけど……出来るだけ殺さないでほしいの」

「（何度も言うが小声で）決闘で手加減をしろと？」

「（しつこい様だが小声で）お願い、人が死ぬのは見たくないの……」

……

「（最後まで小声で）……気が向いたらな」

「貴様！ 何をコソコソと話している！ さっさとこっちに来い！」

いきなり響く小隊長の声に振り向くと、小隊長はすでにやる気満々で場所を取っていました。

ゼロは小隊長の方へ歩き、石畳の上で向かい合って立ち止まりま

した。

——（冒頭に戻って）——

——というわけで、決闘が行われることになったのです。

「姫様、立会人をしていただいてもよろしいですか？」

「え、ええ」

小隊長に求められ、立会人をする事になりました。

「姫様、お願いします」

ゼロは私の願いを聞いてくれるでしょうか？　という思いを胸に、開始の合図をかけます。

「では両者構えて——始め！」

始まりました。小隊長は両手を体の前で構えて、ゼロを睨みつけています。一方ゼロは——

「ふわぁ……」

……思いつきり欠伸をかまし、ろくに構えもせず、面倒臭そうな目で小隊長を見ているだけです。
やる気なんか微塵も感じられません。負ける気でしょうか？　そんな気はサラサラ無さそうですが。

その態度が気に入らないのか、小隊長が怒鳴り散らします。

「貴様！ やる気があるのか！」

「無い」

「何だと！」

「別に構わんだろ。俺のやる気が無いと何か困る事でもあるのか？ むしろ、その間に仕掛けて来ればいいだろう」

ゼロの言い分はもつともです。勝てばいいのだから、相手のやる気が云々より、さつさと攻撃すればよいのです。

「ならば……行くぞ！」

そう言つて小隊長は駆けだしました。ゼロの言っている事に納得したのでしょう。

で、当のゼロはあいかわらずで、いちいち宣言しなくて良いからさつさと掛かってこい、お前みたいな雑魚に負けるつもりはさらさらねーよ、勝てる気ではどこまでもおめでたいやつだ、という目線を小隊長に突き付けたまま突っ立っています。

……一体、あの目に満ち溢れている自信はどこから来るのでしょうか？

「はあっ！」

そんな事を考えている間に、小隊長がゼロに攻撃します。

小隊長がゼロの顔面めがけて拳を打ち込みますが、ゼロは体をそらして避けます。

「まだまだ！」

そう言つて二撃目三撃目……と、蹴りも交ぜながら攻撃し続けませんが、ゼロに受けられ避けられ流されて、一向に攻撃が通りません。見る限り弱くは無いはずなのですが。

「うおおお！」

流石にイライラしてきたのか、雄叫びと共に、渾身の一撃をゼロに向かって繰り出しました。

その瞬間――

「――
いち」

ゼロが何故か“一”と数を宣言したのです。

よく見ると、小隊長の渾身の一撃は受け止められ、ゼロの拳が小隊長の眼前に突き付けられていて、小隊長の顔には驚愕が張り付いています。

ゼロはいつの間に拳を打ち込んだのでしょうか？ 全く見えませんでした。

小隊長は我に返り、すぐにゼロとの距離を取りました。開始から今まで無言だったゼロは、小隊長に向かって宣告します。

「寸止めとは何の真似だ？」

「諦めて降参しろ。お前はもう死んでいる（さっきの一撃で勝負は決まっていた、という意味）」

ゼロはとどめを刺さず、相手に負けを認めさせるやり方を選んだ

ようです。私の願いを聞いてくれたのでしょうか。

「ふざけるな！ これは決闘だ！ どちらかが倒れるまでは終わらない！」

小隊長は私の願いなど露知らず、続行を宣言します。

ゼロは殺気を込めた視線を、小隊長に向けて言いました。

「やはりそう言うか。そこまで言うなら掛かって来い、何度やっても絶対に結果は変わらないだろうが」

「それはどうか。一撃で決めなかった事を後悔させてやる！」

小隊長はゼロの発言に応えるように再び駆けだし、ゼロを射程距離に捉えた瞬間――

「二」

再びゼロの数を宣言する声を聞きました。

やはりゼロの拳が小隊長の眼前に突き付けられていましたが、今度は小隊長が打ち込む前に腕を掴んで攻撃を封じていました。

ゼロは攻撃を繰り返される前に見切り、素早く小隊長の腕を掴んだのでしよう。が、やはり動きが全く見えませんでした。

速すぎます。ゼロの戦闘能力は異常ではないでしょうか？

小隊長はしばらく呆然としていましたが、再び我に返り、もう一度距離を取ります。

ゼロはさつさと掴んでいた腕を放して、小隊長をあつさりと逃がし、問いかけます。

「まだやるのか？」

「あ、当たり前だ！」

ゼロは、若干声の震えている小隊長の返答にため息をつき、ああダメだコイツ、と言わんばかりに首を振りました。

小隊長は男の意地なのか、またゼロに向かっていきます。

小隊長は果敢に攻撃しますが、ゼロに受けられ避けられ流されて、当たるところか掠りもしません。完全に遊ばれています。

「三」

「四」

ゼロは小隊長の繰り出す攻撃の合間に寸止めを入れ、宣言する数を増やしていきます。

小隊長の顔が、焦りと恐怖に侵食されていきます。

……そろそろ小隊長が可哀そうになってきました。

「……八」

「……九」

小隊長はかれこれ百回以上も攻撃をしましたが、ゼロに当たる事はおろか、一度たりとも掠る事さえありませんでした。しかも

小隊長の息は荒く乱れているのに対して、ゼロは余裕みたいです。
その間にゼロが宣告する数は、ついに九まで来ました。

「いい加減諦めろ」

「ハア……ハア……断る！！」

そろそろゼロも面倒臭くなってきた（最初からでしょうが）のか、降参を促します。が、小隊長はムキになっているのか、降参しませんし、する気配すらありません。こうなったら意地でも一発入れてやる！ という目になっています。何気に声も大きくなっている気がしますし。

ゼロの目が死んでいます。いい加減にしろ、と目が言っています。

「……もういい、次で終わりにする」

そうゼロが呟いた瞬間、小隊長がゼロに向かって拳を突き出しました。が、ゼロは懐に入り背負って投げ、仰向けに倒れた小隊長に馬乗りになり、拳を振り上げて全力で叩き付けました。

顔の横の石畳に。

その一撃で轟音と共に石畳は砕け散り、地面に大きな穴が開きました。

「十だ、勝負あったな。お前はもう十回も死んでいるぞ」

「くっ……」

「すごい……」

小隊長も流石に負けを認めたらしく、“まだだ！ まだ終わらな

い！”等とはもう言いません。

にしても、石畳を素手で碎いて地面に穴を開けるなんて、ゼロってどうなっているのかしら……。

「ユリア」

「えっ！ な、なに？」

「勝者の宣言をしろ」

ゼロに言われるまで、立会人をしていた事をすっかり忘れていました。

私は急いで勝者を宣言します。

「えっと……勝者ゼロ！」

勝者の宣言をした瞬間に、ゼロはさっさと歩きだしました。私は急いで後を追います。

「どこへ行くの？」

「帰る」

かなりイラついているようで、声に殺氣が混ざっています。ですが、言わなければならない事があります。

「ゼロ」

「……なんだ」

「ありがとう」

「何がだ？」

「私のお願いを聞いてくれたんでしょ？」

「礼はいらん。単に気が向いただけだ」

そう言って一段と速さを増して歩き続けるゼロ。

私の中でゼロの評価が少し上がっていました。次の言葉を聞くまでは。

「そうだ、帰るまでに“なぜ人を殺してはいけないか”について教えてやろう」

そう言った瞬間、ゼロが歩く速度は激減速しました。ゆっくりじっくり語るつもりなのでしょう。

この後私は、魔法学校の寮に着くまで、ゼロの殺人肯定論につきあう羽目になったのでした。

異世界五日目、嫌な再会（後書き）

更新遅れてすいませんでしたあ！ この通りです！ 平に！ 平にご容赦を！

え？ 色々ウザい？ すいませんでした。

改めて、諸事情あって更新が遅れました。更新をする度に来て下さる100人以上の読者の皆様に、心からお詫び申し上げます。

次話も危ないかもですが、頑張ります。全身全霊をかけて全力全開の全速前進で頑張ります。

……もし出来なかったら、“一段落ついたところから更新速度を上げるの刑”に処す……かも？

さて話は変わりますが、PV32000突破、ユニーク5000突破したですよ。読者の皆様のおかげですよ。ありがとうございますです。

これからも「異世界混沌救世記」をよろしく願いますですよ！

異世界六日目ゝ初めての魔法ゝ（前書き）

一ヶ月＋一日ぶり更新ゝ

異世界六日目／初めての魔法

魔法学校

青い空、白い雲、季節は夏直前……な景色が見える昼過ぎの教室の中で、俺はかなりイラついている。なぜなら、

「ゼロ君、これ（ $2x + 7$ $5x - 8$ ）を解いてくれ」

鬱陶しい数学の中年教師が、問題の解き過ぎで死ね！と言わんばかりに、俺を指名して問題を解かせるから（これで十二回目）だ。理由は単に俺が気に入らないだけだろう。目を見ればわかる。見事に鬱陶しい目をしている。

「解は $x = 5$ だ」

「む……正解だ」

以前より難度が上がっている気がするが、気にしない（何故か教科書に無い問題が出ているが）。どうせ10秒以内に解ける程度の問題だからな。

途中式はやっぱり答えない。正解なら文句無いだろう。

ちなみにイラつきの原因には、問題を解くたびに、教室全体から浴びせられる視線も含まれている。お返しに殺気を込めた視線を向けると、全員が目を逸らす。いちいちこっち見んな。

ゴオオオ~~~~ン

授業終了の鐘が鳴る。

「今回はここまでだ」

十二問目を解くと、鬱陶しい中年数学教師が授業を終了した。全問正答だったせいか、少し声から悔しさが感じ取れる。気にしないけど。

「起立、礼」

終了の宣言に伴い誰かが号令をかけ、全員が礼をする。言うまでもないが俺はしない。

「……ふう」

鬱陶しい中年数学教師の背中を見送った後、ため息をついて席に座る。

やっと終わったか。しかし、二度目の授業でこんなに分かりやすい当て付けをされるとは思わなかった。

まあそんな事はどうでもいい。今日は魔法学校に入った目的、つまり魔法の授業がある（次の授業）。つまりん中年数学教師の相手なんぞ長々としていられるか。

……授業と授業の間隔は約十分、何して時間潰そうか。

——一方ユリアは——

「うゝん……」

「どうしたのユリア。朝からずっと考え込んでるみたいだけど」

授業終了直後の騒がしい教室の中で考え事していると、だれかに声を掛けられました。

声のする方を見ると、そこには鮮やかな赤い髪をした親友がいました。

「あ、ティア。昨日ある話を聞いたんだけど、少し気になる事があるって」

「何の話？」

「殺人の可と不可の話」

「……誰から聞いたのよ、そんな話」

「ゼロから」

「ゼロって……確かこの前編入してきた黒目で黒髪で黒服の真つ黒な人ね」

どうやらティアの中では、ゼロ＝黒い人、という式が成り立っているようです。確かに黒目で黒髪で黒服の真つ黒な人ですが。

「で、どんな話なの？」

「少し長くなると思うわよ？」

「いいわよ、聞かせて」

ほんのすこしばかり長くなりますが、ティアには覚悟して聞いてもらいましょう。

「昨日王宮に行った帰りの事なんだけど――」

「そうだ、帰るまでに“なぜ人を殺してはいけないか”について教えてやるう」

王宮からの帰り道で、その言葉からゼロの殺人のお話が始まりました。

「まず、なぜ人間が社会を作るか知っているか？」

「……一人では生きていけないから、じゃないかしら」

「正解だ。少なくとも群れていた方が生存率は上がる。それに、糧を得るにしても身を守るにしても、多数の方が何かと都合だ。つまり社会形成の理由は、生存率の上昇などの利益を生むからだ」

ゼロは魔法学校への道を歩きながら話し続けます。今歩いているのは市場で、多くの人で賑わっているのですが、ゼロは全く興味がないようで進行方向だけに視線を向けています。

異世界に売っている物に興味が無いのでしょうか？ 普通ならそこくらいは気になると思うのですが。

そんな私の思考を中断させるように、ゼロは話し続けます。

「ここで一つ質問だ。この社会に殺人者がいたらどうなると思う？」

「えっと……排除されると思うわ」

「その通りだ。主に生存率の上昇を目的として社会は形成されている。その中に生存率を下げるモノが存在すれば、必然的に排除される。生存率の上昇のためにな。だから殺人が罪になり、罰を与える事で殺人を抑制する。つまり人殺しをすれば、何か罰を受ける訳だ。罰を受けたくなければ、人を殺してはいけない」

「そういう事になるわね」

「ちなみに同族殺しは不快に感じるから、やめておけという話もある」

ゼロはここまで迷いも思考も無くサラッと話しましたが、私には一つの疑問が生まれました。それは……

「ねえゼロ」

「何だ？」

「ゼロはそこまで理解しているのに、どうして小隊長を殺そうとしたの？」

ゼロがなぜ小隊長を殺そうとしたのか、です。そして、その答えはとても簡潔でした。

「人を殺していい場合に、自己防衛の場合と所属する社会の異なる相手の場合がある。前者は、自分が生きるか死ぬかの状況で他人の事を気にしている場合ではない。後者は、そうだな……他国との争い、つまり戦争だ。俺は今まで敵兵を殺して罰せられた兵士を見た事が無い、もつと殺せと言われているのは見た事あるが。別の社会の存在だからどうなるうと関係ないし、殺せば国益が出る。結論から言えば利益の問題で、有益だから殺す、不利益だから殺さないというだけの話だ」

「それで？」

「あの小隊長はお前を助けたお礼を槍でしてくれたから、お返しに死を与えてやろうかと思っっているわけだ。勝手に攻撃されたから反撃は自己防衛だ。この場合アレは敵で、殺せば有益だから殺す」

「だからって殺さなくても……」

「殺した方が手っ取り早い」

「でも、同族殺しは不快に感じるんじゃないの？」

「俺は感じないから大丈夫だ」

「どうして？」

「認識の違いだろう、俺は人間を一生命体としか認識していない。人間も虫も生命体という一括りで見ている。だから俺にとって人を殺す事は、虫を踏み潰す事と大差無い」

「……」

人と虫が同じ扱いって……。

「それに俺は……」

「え？」

「いや、何でもない」

——回想終了——

「——と、いう話だったの」

話し終えて、しっかり覚えていた自分にびっくりです。

「それで、どこが気になるの？」

気になる所は腐るほどあったと思いますが、ティアは特に気にしていないようなので、具体例を挙げる事にしましょう。

「ゼロの人生よ。さっきの話から分かるように博識だし、殺人を躊躇

しないし、生命体は一括りだし、異性に興味無いし」

「異性に興味が無いの？」

「あれ？ 言ってなかったかしら」

「聞いてないわよ」

どうやら言っただけでなかったようです。

「でもそれって……」

「それって？」

「異性より同性の方が……」

……うわあ、想像したくないです。

「そうでない事を願いたいわね……じゃなくて、彼は今までどんな人生を送って来たのかしら？」

「彼？ 男だったの？」

「これも言っただけでなかったかしら？ 男だって」

「それも聞いてないわよ……」

「そうだったかしら？」

これまた言っただけでなかったようで、少しティアの表情が怖くなりました。彼女は怒ると怖いんです。ああ怖い怖い……。

「……って、話を逸らさないでくれないかしら」

「気になるんだから仕方ないでしょう」

「全員席について下さい」

教師の声によって話は中断させられ、ティアは自分の席に戻っていくのでした。まだ纏まって無いのに。

次は……数学かしら。

ゴオオオ~~~~ン

鐘が鳴りました。授業開始です。

俺は魔法教師を待っていたが、今なら目からbeam^{ビーム}が出そうなぐらいにイラついている。理由は、

「……………遅いな」

鬱陶しい中年数学教師のせいでも、待つてる間に走り回ってた奴らがうるさかったせいでもなく、魔法教師が来るのが遅いのだ。授業が終わってから384まで数えているのにまだ来ないとはどうなっているんだ。

……………は？ 384は6分と24秒だからまだ来ない？

俺が普通に数えていると思ったのか？ これは16進法だ。10進法に直して900秒、つまり15分だ。

……………俺は誰に説明しているんだ？

誰も話し掛けて来てないのに一人で混乱していると、ガチャリという扉が開く音とともに、一人の優しそうな顔をした青髪の女性が入ってきた。

ちなみにこの教室の扉は廊下から見て、押し戸だ。元の世界と違って初めは違和感を感じたが、二日で慣れてしまった。

「皆さん、席について下さい」

どうやら魔法教師らしい。やっと来たか魔法教師。教師が遅刻しているのか？　つかなんて遅れたんだよ。

そんな事を考えていると、

「先生！　何で遅れたんですか？」

俺の代弁をするように、隣の部屋まで聞こえそうな大声で質問する奴がいた。お前は音量下げろ、すげえうるせえ。

「校長先生のお話が長引いてしまったんですよ」

校長から……何の話だ？　給料か？　雇用期間か？　クビか？
どうでもいいけど。

「では授業に入ります。以前、今日は魔法の実技だと言いましたよね？」

……魔法実技？　ちょっと待てコラ。俺は基礎の“k”の字も知らないのに実技からだ？　それは流石に無いだろう。いきなり目からbeamでも出せと言うのか？　出そうないイラついてたけどさ。

「では、部屋の中である訳にはいけないので、外に出ましようか」

どうなる事やら……。

魔法実技の為、外に移動。よってここは日本語なら運動場、英語ならgroundといった所だ。

日光が熱いのか、全員がダルそうな顔をしている。まあ夏みたいだし。

「ではこれより魔法の実技を始めます。まずは自由練習から始めましょう」

そう言って授業を開始した魔法教師。俺は何すればいいのかなあ、なんて思っていると、魔法教師がこっちに向かって来て、俺の前で止まった。何用だろうか？

「ゼロ君……ですね？」

「ああ、何か用か？」

お、何故か表情がこわくなった。おおこわいこわい。

「……用はありますがその前に、年上には敬語を使ったらどうですか？」

「断る」

自称年上の青髪魔法女教師さん25歳前後に言われたが、敬語なんて使う気は無い。理由？言うまでもないだろう。

「そうですか、それも良いでしょう。しかし、将来敬語を使わないと苦労するかもしれませんよ？」

「他人に心配して貰うほど、俺は苦労知らずじゃない。アンタの百倍以上は苦労してるからな」

「そうですか」

……思ったよりサラツと終わったな。どっかの中年数学教師みたいに鬱陶しいかと思っていたが、違ったらしい。

「では本題ですが、今までに魔法を使った事は？」

「無いが……何故そんな事を聞く？」

「校長から頼まれたんですよ。たぶん初心者だろうから、しっかり教えてやってくれ、と。どうやら当たりだったようですね」
「そうか」

それで遅れたのか。

「一応聞きますが、魔法の使い方は」

「知ってる訳ないだろう」

「でしょうね。では、魔法の基礎から覚えましょうか」

まあそうなるよな。

「まず魔法には属性があつて……」

——数十分後——

「……なんだこれは」

「すごいですね」

俺の目の前に、人一人がすっぽり入るくらいの炎がある。炎単体で。

普通なら、何か燃える物が無いと火は付かないはず………なんだが、キャンプファイヤーがかわいく見える程の大きさの炎が、炎だけで存在している。魔法ってすごいな。

「思っていたよりすごいな」

「あなたの方がすごいですよ。あれだけの説明で、ここまで出来るんですから」

“細かい説明は抜きにして、強く念じれば出来るから”と言われたから、適当に炎を想像して叫んだら炎が出た。俺は閻属性だったはずなんだが……まあいいか。

「しかも魔法は初めてなのでしょう？」

「ああ」

そんな事を魔法教師と話していると、炎は消滅していた。流石に永続じゃないか。

「これなら私は必要なかったかも知れませんか」

「どういう事だ？」

「初めて魔法を使った場合、コツを掴むまでは失敗しやすいんですよ」

初めからうまくいく奴なんてそうそういないだろうな。

「失敗した場合、魔法が暴走する可能性があるんで、初心者には誰か付いていた方がいいんですよ。特にゼロ君は魔力が強いらしいですしね」

「暴走すると、どうなるんだ？」

「暴走すると制御できなくなり、効果が発動者に向かったり、対象

だけでなく無差別に周囲を巻き込んだりしますね」
「そうか」

暴走しなくてよかった……別に死ぬのはこわくないが。

「また、魔法が暴走するのは初心者とは限らず、ある程度慣れた人でも魔法を暴走させる事があります。無理に強力な魔法を使おうとしたら暴走した、というのが多いですね」

「無理は禁物、という事か」
「そうですね」

わざわざ無理して強力な魔法を使うのは……戦争か？ だとしたら、やっぱり魔法も軍事に利用されているんだな。

そんな事を考えていると何故か多量の視線を感じたので、周囲を見回してみると、全生徒がこちらを見ていた。

「……何なんだ？」

「あなたの魔法がすごいから、みんな見ているのですよ」

「そんなに？」

「普通なら初めは手のひらぐらいの火がいい所ですよ」

そうか、なら大体数十倍か。そりゃ驚くよな。そういえば火を出してる奴らもいたが、そんなに大きくなかったな。つーか俺、魔法の才能あったんだな。いや、無かったら魔法学校に居ないか。

「にしても……」

「どうした？」

「髪は黒、つまり闇属性ですよ。なのに炎も使えるんですね」
「らしいな」

属性を複数持っているのは珍しいのか？ それとも闇属性の方が珍しいのだろうか？

「……ゼロ君は人間ですか？」

「……さあな」

何を言ってるんだ？ こいつは。何か含みを感じるが……

「そうそう、昔の文献が王立図書館にありますから、今度行ってみると良いですよ。闇属性について書いてある物も見つかるかもしれません」

「そうか、覚えておこう」

昔の文献か……そういえば、ユリアも昔の文献で闇属性に関する物があった、とか言っていたな。今度行ってみるか。

「ではそろそろ終わりにしますか」

「もう終わりか」

もう少ししかかったが、終わりだと言うなら仕方ない。

「皆さん！ 今日はこちらまでとしまーす！」

魔法教師が叫ぶと、

「はい！」

返事が返ってきた。全く元気のいい奴らだ。

魔法教師は返事を聞くと、満足そうな顔で何処かへと去って行っ

た。

ゴオオ~~~~ン

授業終了の鐘の音。

魔法教師の背中を見送って、帰ってから何しようか？　と
思っていたら、

「ゼロ君って、魔法も出来たんだね！」

と言いながら誰かが寄って来た。このパターンは……

「なんでそんなにすごいの？」　「なんで？　なんで？」

「俺に魔法を教えてくれ！」　「俺も！」　「私も！」

「俺が先だ！」　「いや、俺の方が先だ！」　「私が先よ！」

「俺も混ぜろ！」　「私も！」　「俺も！」　「俺が……」　「私が……」

質問ならまだしも、勝手に喧嘩まで始めやがった……　嗚呼こいつ
らすげえうぜえ、石畳粉碎拳で全員ミンチにしてくれ。

結局解放されたのは、二日前と同じようにユリアがこの騒ぎを見
つけた時だった。

……毎日これじゃ、精神もたん。

異世界六日目〱初めての魔法〱（後書き）

一ヶ月＋一日ぶりに更新。

二週間のつもりが、期間を勘違いしていたらしく、一ヶ月も更新が滞ってしまいました。本当に申し訳ありません。

さて、詫びを入れた後に、一つお知らせがあります。それは……

期末の結果がまだ出ていない。

……分かりますか？ 分かりますよね？

もし分からない人がいたら大変なので説明しますが、成績が悪かったらこの先追加で二ヶ月間更新ができません。理由は親にPCを禁止されるからです。

勉強の成果が出ていればいいですねえ（何故他人事）。

異世界七日目〱情報収集〱（前書き）

長期放置申し訳ないです。

さらに、文章がおかしくなっている可能性大です。

異世界七日目く情報収集く

——午前七時ごろの男子寮——

「う……ああ……」

目覚めと共に間抜けな声が出る。目覚めて最初に視界に入ってきた物は天井。見慣れないが、見た事はある天井。

とりあえず体を起こし、光の差す方……窓へと視線を移す。朝日の差し込む窓の向こうには、見慣れない景色が広がっている。

室内を見回す。天井と同じく、見慣れないが見た事はある部屋。 unnecessaryな物は一切無い簡素な部屋。

視界を埋め尽くす見慣れないモノに、“ここは異世界である”という事実を再確認させられる。

すぐに慣れる……そう思っていたが、意外と慣れないものだ。今までは転生した先がどんな環境でも一日で順応したというのに。

特に意味も無く寝台から降りて立ち上がり、もう一度室内を見回してから自分の腕を眺め、思う。

RPG開始直後の主人公みたいだ——と。

ここは異世界で、自分が知っているのは自分の事だけ。仲間もない、情報も無い。魔法があつて、“世界を救う”みたいな使命も

ある。

……よく考えてみれば、似ているところかほぼ同じだ。ここはゲームの世界か？

そんな事を考えていると、扉の方から気配を感じたので反射的に振り向くと、閉ざされている扉の向こうから確かに人の気配を感じた。

この気配は……アイツか。と言っても、この世界の人間でここに来るような奴は一人しか知らない訳だが。

「ユリアか」

気配の主であろう人物の名を宣言すると、扉が開く。姿を現したのは……

「おはよう、ゼロ」

やはりユリアだった。

「朝早くから何か用か？」

「え？」

ユリアは驚いている様子。これといって驚く事は無いはずだが。

「その意外そうな顔はなんだ」

「……もしかして、忘れてる？」

「何を？」

「昨日の話」

昨日の話といえば……生徒らのおしくらまんじゅうから解放された後の事か。

昨日の話

「友達が出来るか心配だったけど、たくさん出来たみたいね」

「あれは友達じゃない。そもそも友達なんぞ作るつもりは無い」

「どうして？」

「面倒臭い」

「友達は大切よ？」

「俺はそうは思わない。そんな事より聞きたい事がある」

「そんな事って……」

「俺にとってはそんな事だ。で、王立図書館というのはどこか知っているか？」

「知っているけど、説明するより行った方が早いわね。明日は学校も休みだし、明日連れて行きましようか？」

「……そうだな、頼む」

「じゃ、明日の朝に迎えに行くわね」

昨日の話終了

思い出した思い出した。友達に関する討論もどきもついでに思いだした。友達はいらない。必要無い。

「ああ、王立図書館に行くんだっ たな」

「やっぱり忘れていたのね……」

はぁ……、とため息をつくユリア。どうやら失望されたらしい。
いや、気苦労から来るものか？ どっちでもいいが。
面倒臭いので、適当に流しておく事にする。

「細かい事を気にしたら負けだぞ？」

「何に負けるの？」

「気にしたら負け」

「……」

黙ってしまった、どうしようか？

……よし、面倒臭いから放っておこう。そして王立図書館に行こう。

「いくぞ」

「あ、ちよつと！」

ユリアに適当に声をかけて、扉の向こうを目指す。ユリアもついてくる。

振り返らず、止まらずに歩く。寮から出る。そして止まる。

「どうしたの？」

ユリアに質問されるが、答えは一つしかない。

「……王立図書館はどこだ？」

そう言った瞬間、ユリアが固まった。

“全く、どうしようもない人ですね”とでも言いたそうな顔をしていたが、無論気にしない。

しかし、何か大切な事を忘れている気がするな……。

数分後、王立図書館前

「ここよ」

「まさか、魔法学校の隣だったとはな」

ゼロは“学生が利用しやすいようにここにあるのか”と思ったが、その考えが正解である事は知らない。

「ここは誰でも利用可能なのよ」

「……それは良いが、見張りが居るのか」

ゼロの視線の先にいたのは、王立図書館の入口付近で、鎧を着て帯剣して立っている兵士さんたち（三人）だった。

「ここには貴重な書物も保管されているから、警備が必要なの」

どちらかと言うと、図書館より保管所の方が正しいかもしれない。

「話は変わるが……こんな所にあるのなら、説明した方が早かったんじゃないのか？」

わざわざ連れて来た意味を考えていたゼロだが、

「細かい事を気にしたら負け、でしょう？」

「……そーだな」

ユリアの意外な返しにどうしても良くなり、思考を放棄した。

「入りましょう」

「ああ」

入館を促すユリア。それに従い足を進めるゼロ。

一人は面倒事が起こらない事を祈り、もう一人は今日何を読むか考え、二人は王立図書館内に足を踏み入れた。

王立図書館（ユリア視点）

「思っていたより立派だな……全部でどれくらいあるんだ？」

「約十万冊、と聞いているわ」

この王立図書館は現国王リグレイス・ガリア・エルレイン、つまり父上が十五年ほど前に作ったもので、約十万冊の書物が保管されています。

書物はしっかりと整理され、図書館内は静かで、読書にはうってつけの環境です。平民も貴族もいますが、特に問題は起きた事はありません。これも父上の努力の結果でしょう。

「……一年か」

「何が？」

「全書物の読了時間」

「私はかれこれ五年は通い詰めているけれど、まだ全部読めていないわよ？」

「知るか」

ゼロは一日に何冊読むつもりでしょう？ 私は一日に十冊が限界なのですが。

「……ユリア」

「なに？」

脳内でゼロに疑問を抱いていると、ゼロが質問のようです。ゼロは何故か真剣な顔つきです。大切な話でしょうか？

しかし、ゼロの口から出た言葉は、予想を上回るものでした。

「一年は何日だ？」

「……え？」

「一年は何日かと聞いているんだが」

「一年は365日に決まっているでしょう？」

私は至って常識的な答えをしたつもりですが、ゼロは少しだけ意外そうな顔をしていました。

「これは偶然……いや、当然か」

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

絶対に何でもない訳が無い気がします。聞いても無駄そうなのでもういいです。

「それより闇属性に関する文献はどこだ？」

「あれは重要保管物に指定されているから、司書に頼まないと駄目なの」

「頼めば読めるのか」

「誰でもという訳ではないから、私が借りてきましようか？」

「頼む」

頼まれたので私は司書を探して歩き出しました。探すと言っても、司書はいつも奥の方に居るので、迷うことなく一直線です。

予想通りに、奥の方で高級感溢れる椅子に腰掛けている司書を発見しました。

司書と私は十四年前、つまり私が1歳の時に出会い、その日からずっと今までお世話になった人であり、親友の……ティアの母親でもあります。

「お久しぶりです」

「あらあ、ユリアちゃんじゃない。久しぶりねえ、元気だった？うちの子も」

「はい。いつも良くして貰っています」

「で、今日は古代魔術書でも読みに来たのかしら？」

王立図書館司書、パトリシア・ディアレクト。乱雑に短く切られた緑色の髪と、用途不明な緑の薬品のように光る瞳が印象的で、古代魔術書なんて物騒な単語をサラッと口にする冗談の好きな人です。ちなみに古代魔術書とは、禁術と呼ばれる知ることすら危険な魔法が載っていたりする本の事です。そんな物を読もうとする訳ありませんね。

「いえ、以前見せていただいた文献をお借りしてもよろしいですか

？」

「いいわよ。でもなんでまた？」

「見たいと言う人がいるので」

「ふうん、ユリアちゃんの頼みとあらば断れないわねえ。少し待っててくれる？」

そう言っただけで彼女は書庫へと消えて行きました。

「知り合いか？」

突然後方から声がしたので振り返ってみると、ゼロがいつの間にか背後に立っていました。

「……いつからそこに？」

「ついさっきから」

全く気配を感じませんでした。怖いです。

「そんな事より、あの目も髪も緑で白衣を着た司書らしき人物と知り合いか？ と聞いているんだが」

「ええ、知り合いよ。彼女はパトリシア・ディアレクトさん、この司書で昔から良くして貰っているわ」

「そうか」

「あら、誰？ その子」

ゼロに司書の紹介をし終えた直後、書庫から司書……もといパトリシアさんが戻ってきました。

「この人はゼロ、私の命の恩人なんです」

「へえ、もしかしてこれを見たいというのは」

「彼です」

「じゃあ、はい」

パトリシアさんはゼロに分厚い文献を差し出し、ゼロは軽く礼をして文献を受け取りました。

ゼロは興味深げに文献を観察した後に、

「俺は向こうに行っているからな」

と言ってどこかへ行ってしまった。

「……結構イイ男だったじゃない、付き合っちゃえば？」

「え……つと、その……」

「冗談よ。相変わらず可愛いわねえ」

この人いい人なんですけど、ねえ。

「どこまで行っただの？ ねえねえ」

ちょっと疲れるんですね。

——昼——

ボタンと音をさせて本を閉じ、読み終えた本の上に積む。これで68冊目、読み終えた本で塔が二つ出来上がっている。一冊2〜4センチなので、二つ合わせて2m近くになっている。まさにバベル。しかし、なかなか良い所だな、ここは。清潔だし本は多いし、

何より静かだ。ゆつくりと落ち着いて本が読める。

そんな事を思いながら69冊目の本を手に取り、開いた。その時、
「……ゼロ」

誰かに呼ばれた。この声はユリアだろう。

「ユリアか、何か用か？」

呼ばれたので返事をする。視線は手元の本に固定したままで。

「なにこれ」

これと言われても分からない。仕方なく視線をユリアに向けると、
ユリアは本で出来た二つのバベルを指差していた。

「本だ」

「そうじゃなくて」

「バベルの塔」

「バベル？」

「天まで届くとされた伝説の塔の事だ。が、この場合は高く積み上げられた物を指している。ちなみにそのバベルは、読み終えた本で出来ている」

何の感情も込めずにただなんとなく答えると、ユリアの顔には驚愕の表情が浮かんでいた。

「これ、全部読んだの？」

「ああ」

「……うそ、でしょ？」

「残念だが本当だ」

「一体、一冊何秒で読んでいるの？」

「約五分」

「……」

以前から速読に自信があったのだが、今は身体強化のおかげか異常なまでに早く読めるようになっていた。目も疲れないし。

ちなみに2000年以上前から時・分・秒が使われているという。

24冊目に書いてあった。

24冊目によれば、一年は十二ヶ月、一ヶ月は三十日前後、一週間は七日、一日は二十四時間、一分は六十秒、四年に一度閏がある。ついでに一秒は一日の八万六千四百分の一だ。異世界でもやはり地球、所詮人間。考える事は同じという事か。時計のような物は見なかったが。

さらに曜日は日・月・火・水・木・金・土の七曜だが、天動説ではなく地動説が一般となっている。ジョルダーノ・ブルーノみたいに火刑にされた人もいたのだろう。

「一冊が五分で、えーっと……」

何やらブツブツと言っているユリアに気づき、頭の中の異世界から戻ってくる。見ればユリアは指を折りながら何か計算しているようだ。

そう言えば何用だろうか？ バベルを聞きに来ただけではなからうて。

「何をブツブツ言っている。もう用は無いのか？」

「あ、えっ……あれー？」

「……慌てるな、落ち着け、深呼吸しろ。そして思い出せなかった

ら帰れ」

いきなり忘れたいらしい。何をしに来たのやら。忘れるような事だから、大して重要な事では無さそうだが。

「あ、思い出したわ。お昼のお誘いに来たの」
「へえ」

お昼のお誘いねえ、興味無いなあ。腹も減って無いし。

……ん？ 腹が減って無い？ ちょっと待て、何か大切な事を忘れてるような……。

えーっと、あー……うーん……よし、思い出した。俺異世界こうちに来てから何も食ってないな。で、腹が減って無い。空腹感を感じてから食事をするようにしていたせいで、今まで気が付かなかったんだな。

……さらにちよつと待て。

今日が異世界こうちに来て七日目で、今まで一度たりとも食事をしなかった。七日間も何も食わずにいて空腹にならないはずがないんだが……現に空腹でない。おかしい、俺は今まで七日間も飲まず食わずで腹が減らなかった事は無いんだが……ああ、この身体がおいしいのか。あの神はどこまで改造したんだ？

「どうしたの？」
「いや、何でもない」

いきなりユリアに声をかけられ、我に返る。すっかり考え込んでしまっていたようだ。どうせ考えても分かりっこないのに。あのア

ホ神がやる事だしな。

「で、どうするの？」

確か昼飯の誘いを受けていたはず。断るところか食文化に興味が出てきたので、むしろ喜んで誘いを受けたい所だ。

「断る理由が無いな」

「じゃあ……」

「その前に、このバベルを片付けないとな」

流石に放置していく訳にはいかない、計73冊の本を。それに、利用態度が悪いと王立図書館から来ると言われるそうだし。黒髪は目立つらしいからな。

——数分後——

本の片付けを終え、王立図書館から出る。太陽は天高く上り、地上に焼き尽くすような熱と光を放射している。一文字で表現するなら「夏」だ。

夏か……そういえば昨日の魔法の時間、外に出るなり皆ダルそうにしていたな。暑さにやられたのか。俺はmade by godの断熱服もどきを着ていたから平気だったが。

「そういえば、今日は何月何日だ？」

隣を歩いているユリアに問う。

「七月二十五日（日）よ」
「そうか」

七月が夏……という事は、ここと日本の地球上の位置は同じという事になるのか？

「ゼロ、その服暑くないの？」

ユリアが不思議そうに尋ねてくる。全身を覆う真っ黒い服は見るからに暑そうだろう。そんな格好で涼しい顔をしながら考え事をしている姿を見たら、誰もが持つであろう疑問だ。しかし、材質不明のこの服は快適そのもの。初めに渡された時は半信半疑だったが、

「お前よりは涼しい」

と断言できる程だ。

ユリアの今の服装を簡潔に言うと、緑を基調とした涼しげで活動的な服だ（悪い、ファッションに興味無いから細かく表現できない）。どう見ても俺より涼しそうだ。

「……ゼロ、暑さでおかしくなったの？」

全身真っ黒野郎に“お前よりは涼しい”なんて言われれば、誰だってそう思うだろう。しかし、本当に涼しいのだから仕方ない。

「そう見えるか？」

「おかしく見えないからこそ怖いのよ」

「あつそ。で、どうするんだ？」

どうでも良い会話だったのでバツサリと切り、本来の目的に話を

戻す。やり過ぎると相手に不快感を与えるが、俺が気にしないからいいと思う。

「いいお店を知っているから、そこに行きましょう」

「俺は……」

「お金無いんでしょ？ 私が払うからいいわ。ゼロは命の恩人のだもの」

……なぜだかわからないが罪悪感がある。今まで私情で百人以上殺しても罪悪感など無かったのに。ユリアが人質された時に無視したせいかな？ それとも、ユリアを利用して情報収集をしているせいかな？ ユリアの眼を見ていると変な気分になる。落ち着け、俺。

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

「じゃあ、行きましょう」

「ああ」

「どうしたの？」↓「いや、何でもない」もこれで三回目だ。パターン化している気がするな。

しかし、こいつは不思議な奴だ。俺の心の奥に入り込み、何かを変えようとしているように思える。

そんな事を思いながら、ユリアの言う“いいお店”に向かって歩き出した。

「ここよ」

そう言ってユリアが立ち止まる。どうやら目的地に着いたらしい。そこは見る限り普通の食堂だった。が、俺の口からポロつとこぼれた言葉は、

「破滅食堂……」
だった。

気が狂った訳じゃない。店に喧嘩を売ってた訳でもない。どう見てもおかしい所は無く、むしろ結構いい店だった。しかし、看板が悪かった。と言っても、看板には大きく“ルイン食堂”と書いてあるだけなのだが。

「何か言った？」

「いや、何も」

ユリアが反射的に聞き返してくるが、瞬時に否定する。自分が良かれと思って連れてきた店を見るなり“破滅食堂”などと言われれば、不快になるだろう。

しかし、ルイン食堂……か。ルインは英語で破滅を意味する単語つまり“破滅食堂”となる。この事は黙っておこう。知らない方が幸せだろう。

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

またしても「どうしたの？」↓「いや、何でもない」をしてしまった。本日四回目だ。

「ところで、何故ルイン食堂なんだ？」

「ルインさんが始めたからよ」

破滅さん、か。物凄い名前だな。

「良く来るのか？」

「週に二、三度くらいかしら」

「そうか」

「入りましょう」

「ああ」

“ルイン”の意味を知らないユリアを追って、激しく不吉な名前の付いた食堂に入る。いや、この世界で“ルイン”はまた別の意味を持っているのかもしれないが。

そんな事を考えていると誰かの視線を感じた。気になったので振り返るが、その時には既に視線を感じなくなっていた。

「ゼロ、どうしたの？」

食堂に入って来ない俺に気づき、ユリアがこちらを見ている。

「いや、何でも……」

「ここで俺は「どうしたの？」↓「いや、何でもない」の五回目を言おうとしている事に気づき、

「……誰かに見られている気がしたが、気のせいだったみたいだ」と答えた。

これ以上「何でもない」で済ませるのはまずい。これで済ませ過ぎたせいで話をしてくれなくなった奴もいるし。この世界の良い情

報源のユリアが話をしてくれなくなったら困る。気をつけなければ。

そんな事を考えているとは知らないユリアは、

「そうなの」

で済ませてしまった。

ユリアの対応の軽さにため息をつき、食堂内へ歩き出す。明日は厄介事が起きそうだと、という予感を胸に。

――夕暮れ、魔法学校周辺――

「すまないな、一日中付き合わせて」

「いいえ、楽しかったわ」

食堂ではユリアと雑談をし、街を歩いては興味関心の向くままにあれこれとユリアに聞いてみたりとしているうちに、すっかり日が暮れてしまった。

食堂で適当に注文した物の中から、元の世界でよく見かける物を見つけた。それは小麦（と、思われる物）だ。この世界での名称が“バッセ”とか言う事に驚いたが、もし腹が減らないのなら今後は食事の機会がほとんど無いだろうと思い、大して気にしなかった。

ユリアとの雑談から、魔物の事、魔族の事、魔人戦争の事、二十年前にリグレイス王が魔族復活・人類滅亡の阻止をした事、その直後に大幅な国家革新が起こった事を知った。

魔物とは、二十二年ほど前から現れるようになった凶暴な人工生命体の総称。野生の肉食動物と違い、人間以外をほぼ攻撃しない。それ以外はほとんど不明。

魔族とは、魔法の力を体内に取り込み、長い寿命、優れた知能と身体能力、魔法を操る才能、強大な魔力を得た人間の事。500年とちょっと前に、魔族化の技術が完成したらしい。

魔人戦争とは、約500年前に魔族の力を恐れた人間たちが魔族を攻撃した結果、引き起こされた大戦の事。結果は人間側の勝利に終わり、魔族は滅ぼされ、魔族になる方法も失われてしまったという。この時に光属性と闇属性を持つ人間が死滅し、技術も大きく後退した。

そして今から20年前に滅びたはずの魔族が現れ、邪神を降臨させて人間を滅ぼし、魔族の王国を作ろうとした。が、現王リグレイス・ガリア・エルレインが阻止した。

その直後に大幅な国家革新が起き、この国は大幅に改良された。現国王と“人間ではない者”を名乗る人間の姿をした“誰か”が中心となったそうだが、誰かは不明。しかもその直後に消えてしまっただけらしい。

まったく、ところどころ曖昧な所もあったが、よくこれだけ話せたものだ。色々と興味深い事もあるから、また今度王立図書館に行つて詳しく調べてみるか。

「じゃあ今日はこれで」

「ああ、またな」

駆け足で去って行くユリアの姿が見えなくなった後、ふと空を見上げる。深い青の空、赤橙の雲、燃えるような夕日があった。

夕日は雲を染め、雲は空に模様を作り、空は全てを包み込んでいく。それはとても幻想的で美しく、あまりの美しさに言葉が出なかった。

「夕焼け……か」

そう呟いたのは日が沈み、闇が辺りを支配した頃だった。当然夕焼けはとくに消え去っている。どうやら時間も忘れて見入ってしまったようだ。

寮に戻る道の途中、ぼんやりとした頭で無意識に先ほど見た夕焼けを思い出す。そして過去を振り返り、思った。

夕焼けがこれほど美しかった事は無かった、と。

異世界七日目〱情報収集〱（後書き）

1か月以上放置してすみません。

これからはもうちょっと頑張ろうと思います。

つきましては、2週間ほどかけて全話を書きなおし、気合を入れ直そうかと思っています。（描写が少ない等の指摘を受けた為）

その為に、おかしく感じている所があればご報告をお願いします。

そんなことはしなくて良いから、さっさと次話を更新しろという物も可です。

異世界八日目～二重決闘～（前書き）

遅くなりました。

異世界八日目〜二重決闘〜

男子寮

早朝。

窓から差し込む朝日、小鳥のさえずり、ひんやりとした朝の空気……な訳は無い。今は夏だ。

朝日は猛暑の宣告であり、目覚ましは響く虫の声、早朝だと言うのに生温かい空気。これは間違いなく今日が暑くなることを意味する。まだ薄暗いからマシだが、今日はきつそうだ。俺以外は。

「……さて」

無意味に呟いて寝台から降りると、この世界に一本しか無いであろう緑色の木刀が目に入る。

昨日帰って来た時、自称寮の管理人さんの女性から受け取った。王宮から送られてきたらしい。親切な国王様だ。

少し早起きし過ぎたし、木刀もあるし。暇つぶしにアレでもやるか。

木刀を掴んで外へと向かう。アレをするには部屋は少し狭い。廊下を進み、階段を降り、寮から出る。

寮の前には少しスペースがある。前、と言っても魔法学校の校舎との間なのだが。少なくとも10m四方以上はある。ここなら良い

か。

「すう……はあ」

深呼吸をし、木刀を正眼に構える。そして軽く素振り。

木刀は空気を切り裂き、ヒュツと音を立てた。

これは元の世界に居た頃の日課で、筋トレとして一日千回素振りしていた。今はもうそんな必要は無いが、体の調整の為にしてみようと思ったのだ。

数回振る。いずれも特に違和感なく振り抜く事が出来た。太刀筋に変化は特にならない、腕は鈍っていないようだ。

……次は本気でやってみよう。

右足を前に出し、右手は左腰に近付け、左手は木刀を覆うように添える。抜き打ちの構え、とでも言うべきか。

抜き打ちとは突然に物事を始める事を言うが、語源は抜刀術であり、刀を鞘に収めた状態から刀を抜いて攻撃する事。つまり“抜き”と“打つ”が合わさって出来たものだ。

「すう、はあ……」

もう一度深呼吸をし、心を落ち着け、目を閉じる。

抜き打ちは反撃の構えだ。奇襲への対抗策として如何に素早く抜き、打つ事が出来るかが生死を分ける。故に心を落ちつけ、感覚を研ぎ澄まし、0.1秒でも早く危険を察知する事が肝要だ。

ザアア……

どこに生えていたのか知らないが、木が風に揺れる音がする。

「……」

まだ…… まだだ…… まだ振るには早い。と、俺の感覚が告げている。

「……」

“何か”を前方から感じる。

何だ、これは…… 敵意？ 悪意？

今…… 少し…… 大きくなった。

「……」

“何か”が近付いてくる。ゆっくりと…… だが、確実に。一歩、また一歩と踏みしめるようにゆっくりと……。

「……」

もう少し…… もう少しだ……。

あともう少し……。

……。

……。

…… 今だ！

目を開き、右腕に力を込め、腰をひねり、地面を蹴って、全身全霊を懸けた一撃を繰り出す。

「ハアッ！」

グオッ！ カコーン！ ガスッ！ ガキッ！

早く振り過ぎたせいか、木刀は妙な音を立てながら“何か”をかつ飛ばした。“何か”は硬い物だったらしく、良い音を立てて吹っ飛んでいき、どこかにぶつかった。

「ふう……」

とりあえず一息つく。

一瞬だけ見えたが、あの“何か”の正体は小石だったと思う。しかも、かつ飛ばした速度は音速超えたかもしれない。

小石が飛んでいった方を見ると、木に穴があいている。

その向こう側を見ると、岩にぶつかって粉々になった小石だったもの（砕け散り、砂と化している）があった。岩にもヒビ入っているし。

「これは流石に……」

身体強化もやり過ぎだ、アホ神よ。

リングを5000回以上握り潰した時に分かっていたが、これ程とは……。これからは全力を出すのは控えよう。下手したら何気無い動作で一国が壊滅しそうだ。地割れとかで。

そんな事を思っていると、どこからか視線を感じたので、視線の方向を探る。が、その瞬間にガサガサと草木をかき分けるような音がして、視線は消えた。

誰かが俺を監視しているのか？ だとしたら王族貴族の類だが…
…ガサガサと音を立てながら逃げる程アホな監視はいないだろう。
ここはただの一般人がチラ見していただけたらと思うておこう。少な
くとも面倒事には巻き込まれそうにないし。

「もうこんな時間か」

気付けば、太陽は朝日と言うには少し高い所まで上がっている。
感覚的にいけば午前8時くらいか。

もうそろそろ登校しないと…。

昼過ぎの運動場

「こうしてこうして……こうか」

今は本日最後の授業である、魔法の授業（実技練習）中。今日は
制御に重点を置いて練習している。理由は、魔法の暴走は危険度が
高いから。ヘタすりゃ死ねるくらいには。

俺は両手に直径5cmほどの火の玉を乗せて、それを操ることで
制御練習をしている。

大きくしたり、小さくしたり、飛ばしてみたり、回してみたり。
まさに自由自在。

「面白いな、これ」

自分の思い通りに動きまわる二つの火の玉。これほど面白い物は無いだろう。

「結構簡単だな……次は三個だ」

両手に火の玉を乗せながら、目を閉じて三個目の火の玉を思い浮かべる。

「……よし」

すると、目の前に三個目の火の玉が現れて、

「あ」

弾けて消えた。

どうやら体の一部とリンクさせると制御しやすいらしく、右手と一個目、左手と二個目を意識で繋ぐと制御しやすかった。

魔法はイメージから作られるので、より鮮明かつ具体的なイメージが、より強力な魔法を発動する。魔法にも「ただイメージするよりも、何かを元にした方が鮮明になる」という現象が適用される。よって、魔法のイメージを手の動きや感覚と結び付けると、より優れた効果を発揮する。

例えば、手に力を込めれば“魔力を込める”をイメージし易くなるし、空に弧を描けば具体的な軌道を思い浮かべやすくなる。

これを魔法と結び付けると、右手に力を込めると一個目の火の玉は激しく燃え盛り、左手を振れば二個目の火の玉が飛んで行く、という風になる。

無論、火の勢いはより繊細に調節できるし、射出はより正確に軌道に沿って飛ばす事が出来る。

しかし、三個目はどこともリンクせずに生み出されたので制御もしづらく、数秒しか持たずに消えてしまったという訳だ。

「……思っていたより難しいな」

魔法は何でも出来るとは思っていなかったし、欠点もユリアから聞いていたが、実際に使ってみるとその重大さが良く分かった。

その欠点とは……魔法には詠唱・集中が必要である事。

追記、才能も修練も必要。

この欠点がどれだけすごいか考えてみた結果、次の事が分かった（こんな技術が戦争に使われない事はまず無いので、実戦を基準に考えている）

魔法は基本的に詠唱が必要だ。無詠唱でも発動する物もあるが、それらは総じて効果が薄い。さっきの火の玉も無詠唱だったが、あの程度では相手に致命傷は与えられない。後から魔力を込めて強化しようにも、魔法の維持は自身の魔力、集中力を多量に必要とするし、技術も必要だ。そして何より一瞬の差が生死を分ける戦場で、ラグが出来るこの方法は使うと死亡率が跳ね上がる。そこで詠唱をしてイメージをより鮮明にし、強力な魔法を発動しようとする。

後から強化する事との違いは、集中は詠唱の間だけで済む事と、扱いが比較的簡単な事ぐらい。しかも詠唱は何か特別な意味を持つようで、詠唱無しで発動すると物凄く弱くなる。だから詠唱は必要しかし、詠唱中は詠唱に集中しなければならぬので無防備になる。

次に集中。さっきも言ったが詠唱には集中が必要だ。そして制御にも集中が必要だ。しかし、敵の目の前で集中して、無防備でいる暇は無い。していれば斬られて即死防。万一死亡は免れたとしても、攻撃を受ければ集中が途中で切れる。すると、魔法の暴走が起こる可能性もある。しかも集中無しに魔法は発動できない。

一言でまとめるなら「魔法を使おうとすると無防備になる」

やろうと思えばスゲー魔法を無詠唱でほぼ完璧に使いこなす人もいるらしいのだが、そんなのはほんの一握りだろう。賢者とか大魔法使いとか呼ばれるような、な。

「うおっ、失敗した」

魔法について真剣に考えている時だった。後方からの何故か嫌な予感のする声に反応して振り向いた瞬間、

眼前に氷槍が。

とっさの判断で膝を折り、上体を後ろに反らせて回避する。氷槍は頭のあった地点を通過し、彼方へと飛び去った。

「うおわっ」

ついでに間抜けな声も出た。

体を起こし、氷槍の飛来してきた方向を睨みつけると、反省の色の見えない目をした14歳ほどの少年がいた。その目は裁きを下す断罪者の目であり、反省するどころか当然の事をしたと言っている

ようにも見えた。

何故か妙にム力つくな……。

「そのガキ」

「こっちに来い、ブチ殺す」
「そう言おうとした時、

ゴオオオ~~~~ン

授業終了の鐘が鳴った。

「もう終わりか」

授業終了の鐘が鳴れば。教室に戻らなければならない。あのガキ、もしかしてこのタイミングを狙って……いや、考え過ぎか。さっさと戻ろう。

——
放課後
——

担任教師の話も終わり、各自解散となったおよそ午後二時。
魔法学校の終わりは早い。教える事が少ないのか、生徒への配慮なのか、はたまた教師陣の怠慢なのか。どうでも良いが、自由時間は多かった。

俺はその時間を利用して、窓の外を眺めながら考え事をしていた。
内容はついさっきの魔法の事と——

「おい」

誰かの声に反応して、視線を窓の外から声の主に移す。
声の主は19歳くらいの無駄に着飾った男＋その取り巻きと思しき少年多数。

あーこっち見てる。俺に用か。

「何か」

「僕と決闘しろ」

「断る」

無論即答。何が悲しくて決闘などせにやなんのだ。

しかも一人称が僕？ 何こいつ、イイとこの坊っちゃんか？

「たかが平民が、断る事は許さない」

うわぁ……物凄く迷惑な奴。しかも貴族っぽいし。

「……とりあえず、決闘の理由を聞いておこう」

「お前が罪人だからだ」

「罪人？」

「そうだ」

本当に罪人だったとしたら、兵隊かなんかが来るはずだ。しかし、来たのは見る限りちよつと武術をかじった程度のなんかだし。これは意味不明すぎる。

「……罪状は？」

「お前の……お前の罪は……！」

なんか興奮していらっしやる。よっぽどヤバい事をしてしまったらしい。何気ない行動が法に触れたのだろうか？ この国の法律を調べておけば良かった。

「ユリア様を汚した罪だ！」

「ユリア……“様”？」

ユリア様って……あのユリア・ウォイセル・エルレインか？ こいつが貴族ならば、その呼び方の納得だな。王女である事を知っているはずだし。

で、俺が何したと？ 汚したと言われても心当たりが無い。

「こいつから聞いたぞ……お前がユリア様と並んで歩いている所を見たってな！ お前のような奴がユリア様と一緒にいると、ユリア様が汚れるんだよ！」

“こいつ”と言って指差したのは、ついさっきの魔法の授業中に氷槍を飛ばしてきたクソガキだった。

で、勝手に話している坊っちゃんの話からすると、昨日ユリアと二人で町を歩いていたのを見られたらしい。昨日の視線はそういうことか。

「なんでお前みたいな奴がユリア様と仲良くしているんだ！ 僕だってユリア様と話したい！ 並んで歩きたい！ 手を繋ぎたい！ なのに、なんでお前だけ……ズルいぞ！ ズルいぞ！！ ズルいぞ！！！！」

何かおかしくなっている。ぶっ壊れたならそれでいいけど。ちな

みに手は繋いでいない。

あ、取り巻きが“落ち着いて下さい！”とか言って落ち着かせている。取り巻きに面倒見られているようじゃ、大した奴じゃ無いな。で、なんか知らんけどユリアと一緒にいた事が羨ましいらしい。へえ。

「はあ……はあ……だから……貴様に罰を与えてやろうとしたんだ……なのに……小石も……水も……ナイフも……魔法も……何で全部よけるんだよおッ！」

ついさっき考えていたもう一つの事が分かった。

早朝飛んできた小石も、教室に入ってからずっと感じていた敵意も、廊下で起きた水流も、武術の時間に飛んできたナイフ四本も、ついさっきの氷槍も……全部こいつがけしかけた物だって事が。

その理由が妬みか。

良く分かんが、なんかムカつくからこいつは――

「だから……正面から叩き潰してやる！ 僕と決闘しろおッ！」
「良いだろう……来い」

立ち上がり、訓練場の決戦のバトルフィールドもどきに向かう。

――死刑だ。

――決戦の（以下略）――

さっきの屑貴族^{クズ}と対峙している。無論、決闘をするためだ。周囲には人だかりが出来ている。確かに良い見世物かもしれんな。目の前で人間が肉塊になるのは。

「言っておくが……殺すぞ」

「うるさい！ お前なんか地獄に堕ちろ！」

俺の手には太めで重い（2500gほど）木剣がぶら下がっている。屑貴族の手には練習用の木製槍が握られている。両方とも武器庫っぽい倉庫から引つ張り出してきた物だ（何故か屑貴族が倉庫のカギを持っていた）。

しっかしこの屑貴族、槍を構えながら睨みつけて来るんだが……構えがなっていない、隙だらけだ。これは料理し放題だな。どうやって解体しようか。いや、どうやってバラしたら面白いだろうか。

「行くぞ」

そんな事を考えながら、一步目を踏み出そうとした時。

「待った！」

どこからか制止がかかった。

聞き覚えの無い女の声、誰だ？

声のした方を向くと、人だかりの最前列に、赤髪の少女と一緒にいるユリアを見つけた。赤髪の方は見覚えが無いな。

誰だろうかと思っていると、ユリアと一緒に赤髪の少女がこっちに向かってきた。俺に用か。

「あなたがゼロね？」

「ああ」

「あなたに決闘を申し込むわ」

「断る。ユリア、こいつは何だ？」

「私の友人の——」

「親友よ」

「どっちでも良い」

「良くないわよ！」

「で、誰だ」

「クレスティア・ヴォルク・ディアレクト。私はティアって呼んでいるけど」

「ディアレクト？ 王立図書館の司書と同じだな」

「パトリシアさんとティアは親子なのよ」

「そうか。で、決闘の理由は何だ？ 受ける気は無いが」

「受けなさいよ！」

「断る」

「どうして断るのよ」

「面倒臭い。それに——」

「こらあああ！ 僕を無視するなああああ！！」

不快な叫び声。屑貴族の声だ。今から決闘するって時に邪魔が入って、蚊帳の外じゃ叫びたくもなるわな。死ねばいいのに。

「——あの屑貴族を片付けるのに忙しい」

「ふん、じゃあ……」

クレスなんとか……クレスで良いか。

クレスの顔に邪笑が浮かぶ。すごく“良い笑顔”だ。

「アレを片付けるのに忙しく無くなれば、いいのね」

「どうするつもりだ？」

「黙らせるのよ」

「しっかり殺せよ」

そう言うのと、クレスはユリアを見る。ユリアは首を横に振った。

「それは出来ないわね」

今ので「殺して良い?」「駄目よ」の会話を済ませたのか。さすが親友。

「なら決闘は受けないが」

「いいわよ。受けてくれないなら襲い掛かるまでだから」

「……良い神経しているな」

「どうもありがとう。木剣借りて良いかしら?」

「構わんが、重いぞ?」

クレスに木剣を渡すと、軽々と片手で持ち上げた。

「ん、まあまあね」

そう言うってクレスは、屑貴族に向かって歩き出した。

「下がるぞ」

「ええ」

俺はユリアと共に観戦に回る事に。

「という訳で、私が相手をするわ」

「ふざけるなあ！ お前なんか用は無い！」

「あら、強敵を前にして怖気付いたのかしら」

「何だとお！ そこまで言うなら相手になってやる！」

何かそんな感じで、決闘は屑貴族^{バーサス}VSクラスになった。あの屑貴族、激しく単純なヤツだ。

「あいつ、強いのか？」

顔を前に向けたままユリアに問う。

「ティアは強いわよ」

「そうか」

「決闘受けるの？」

「いや」

「じゃあ、どうしてそんなこと聞くの？」

「あいつに渡した木剣。アレは魔法学校^{マジック}にある片手用の木剣の中で一番重いやつだ。女がホイホイ持てるような物じゃない」

「ティアは結構力あるから」

「日々の修練の賜物か？」

「たぶんそうね」

お、二人とも構えた。始まるな。

「いくわよ」

「来いい！」

始まった。

先に仕掛けたのは屑貴族。槍で胸を狙った突きを繰り出す、隙だらけ。

クレスに受け流され、顔面に木剣を受けて倒れた。気絶したようだ。

終わった。

実力に差があり過ぎる。

「早い、というより無残だな」

「まあ、相手がティアだからね」

「さて、帰るか」

「ティアとの決闘は？」

「誰がすると言った？」

「しないの？」

「無論だ。俺は逃げ……」

「逃がさないわ」

肩を掴まれると同時に、背後からクレスの声。背中に闘気と殺気をビンビンに感じる。さて、どうやって逃げようか……言葉遊びでもするか。

「でも逃げる」

「でも駄目よ」

「全力で逃げる」

「全力で駄目よ」

「それでも戦う」

「それでも駄目よ」

かかったな。仕掛けるのが早いかと思っただが、そうでもなかった

らしい。

「そうか、なら仕方ない。帰るか」

「どうしてそうなるのよ」

「さっき“戦う”って言ったら、お前は“駄目だ”と言っただろう」
「あ……」

こいつ……気付いていないとか……戦う事に集中し過ぎだ。

「引つかかった事くらい気付け。じゃあな」

そう言って歩き出した瞬間、背後から強烈な殺気を感じ、しゃがむ。

頭上で何かが高速で通り抜けたような音がした。

「あら、残念」

殺気が消えたので立ち上がって振り向くと、“良い笑顔”のクレスが立っていた。

こいつ……本気か。

「……決闘の理由を聞いていなかったな」

「ユリアの為よ」

「意味がわからん」

「あなたがどれ程の人間か、私が見極めるの」

「何故に？」

「将来ユリアの部下になると聞いたわ。だから親友の私が、ユリアの為に将来の部下を見てあげようって訳」

「興味無いな。帰る」

「じゃ、後ろからバツサリいくわね」

どうしても決闘しなければならぬらしい。面倒な。どうにかして逃げよう……そうだ。

「そこまで言うなら仕方ない、少し待っている」
「どこに行くのよ」

「武器庫。俺に素手で戦えというのなら帰る」
「私も行くわ、逃げそうだし」

おや、バレた。これは困ったな、あー困った困った。

「それに、武器も持ち替えたいし」

……こうなったら受けて立ってやる。

「そうか。一番得意な物にしろよ」

「あら、良いのかしら？ 本気出しちゃうわよ？」

逃げられないなら、正面から叩き潰すまでだ。全力で来て貰わないと困る。

「そうしてくれ。でないと面白くない」

「良く言うわ、逃げようとしていた癖に」

「面倒事は出来る限り回避したいんだよ」

「……私が本気出さない方が楽じゃないの？」

「どうせ俺が勝つし、あの時は本気じゃ無かった、とか言い出されるのも面倒だ」

「そう……なら遠慮無く行くわ」

「後悔しないように頑張れ」

「何で他人事なのよ、相手はあなたでしょ」

「事実、お前の頑張りに関係なく勝つのは俺だからな」

「その言葉、後悔させてあげるわ!」

やっぱり、他人の神経を逆撫でするのは楽しいな。特に、怒らせるのが。

「お前はからかっていて楽しいな」

「……!」

クレスは黙ってしまった。面白かったのに。

仕方が無いので武器庫つばい倉庫に向かって歩き出すと、クレスが付いてきた。どうやら本気を出してくれるらしい。楽しみだ。

——数分後——

武器庫つばい倉庫から帰って来て、クレスと対峙している（両者の間8mほど）。

俺の右手には適当な木剣。普通の一般的な長さの片手剣。

対するクレスが持っているのは……大剣サイズの木剣。略して大木剣。

あんな物振り回せるのか? 1mはあるし、重さも相当なものだろう。さっきの木剣よりも、もっと女がホイホイ持てる物じゃない。あれがアイツの本気か。

「行くわよ」

「ああ」

適当な返事で決闘開始。

ルールは簡単。相手を殺さない事。
以上。

右手に木剣をぶら下げたまま様子をうかがう。向こうもデカい木剣を担いだまま動かない。向こうも様子見らしい。

……何秒持つか試してみよう。いーち、にーい、さーん……。

——三分後——

……178……179……180、もう三分か。相変わらず動き無し。既に野次馬どもがさっさと始めると騒ぎ出している。うっせえ。

そんな事を思っていると、クレスが何かブツブツ言い始めた。何言ってるんだろ、野次馬どもがうるさくて聞こえん。

しかし、この野次馬どもは何人いるんだ？ 百はいるな、鬱陶しい……おっと、今は決闘中だった。相手に隙を見せては駄目だ。

そう思って振り向いた先には、どアップのクレスの姿。加速に遠心力を加えた薙ぎ払いが右から迫る。

「ハアッ！」

「うおっ」

驚いたが、とりあえず木剣の腹で防ぎ、大きく飛び退いて距離を取る。

しかし、一瞬で距離を詰められ、再び薙ぎ払いが迫る。一撃目の返して振るため、今度は左からだ。

それを木剣に沿わせて上にずらし、同時に体勢を低くして右へ流す。

大剣は振り切れば正面ががら空きなる。

そう思い、反撃に転じるため木剣を握りなおした。

その瞬間、上方から木製の刃が迫る。

おかしい、人間にしては振りが早すぎる。

そう思いつつ木剣で受ける。

思っていたより強烈な一撃だったが、無理矢理押し返して後退させ、その隙に一気に距離をとる。

追撃は無く、十分に距離をとる事が出来た。

「どうしたの？ その程度？」

「お前こそ、その程度か」

とりあえず言い返したものの、どう考えてもさっきの動きは異常だ。人間にしては早過ぎるし、力も強いところじゃない。正直、さっきの攻撃で木剣が折れてもおかしくなかった。何か仕掛けがあるはず……。

「次は、あなたの番よ」

「そうか、なら今度はこっちから行かせてもらおう」

待っていても仕方ない。仕掛けてみるか。リーチを利用した迎撃をかわしてから懐に入り、斬りつける。よし、これにしよう。

大地を蹴り、駆け出す。距離はすぐに縮まる。

あと一歩でこっちの射程に入ろうと言う時に、左から薙ぎ払いが迫る。

大剣のリーチを利用した迎撃。予想通りの行動。

それを上に弾いて懐に飛び込み、袈裟懸けに斬りつける。

これは入った！

そう思ったのも束の間。放った斬撃は受け止められ、押し返された上に反撃の刃が左下から襲い掛かる。

木剣を盾にして防ごうと、力を込めた。が、受けた刃が軽過ぎたせいで体勢を崩す。

この隙にもう一撃来る……はずだった。

しかし、ドサツという音はしたが、新たな斬撃は来なかった。それもそのはず、ドサツと言う音はクレスが倒れた音だったのだ。

「ティア！」

倒れた親友に駆け寄るユリア。倒れたクレスは少し笑って言った。

「時間切れ……私の……負け………よ」

言っている事の意味が分からない。

俺は勝った……のか？

異世界八日目〜二重決闘〜（後書き）

1日で書き上げましたので、変な表現があればご報告願います。
次回の目標は10月2日です。その頃は中間考査2週間前です。
怖
い
で
す。

異世界九日目／最後に残るは一つの事実／（前書き）

題名なげえ……。

異世界九日目、最後に残るは一つの事実、

「やつほ」

「またお前か」

昨日の決闘は、クレスが勝手に倒れて終了。

ユリアの指示に従って保健室に運び込んだが、外傷も異常も見当たらなかった。

ユリアと一緒に日が暮れるまで見ていたが、目を覚ます事は無かった。

もう遅いから帰れ、と保健室の先生さんに言われ、とりあえず寮に戻って寝た。

……で、今に至る。

目の前には自称神、辺りは真っ白。つまり、また魂を抜いて連れて来られた訳だ。

「……今度は何の用だ」

「あれ？ 何か聞きたい事があるんじゃないの？」

何故こいつは、俺が聞きたい事があると知っているのだろうか？

答えは神だから、終了。

深く考えたら負けだ。

「確かにあるが、昨日の事だ。なんで昨日じゃなくて今日なんだ？」

「それはね、これを探してたら朝になっていたからだよ」

そう言って差し出されたのは……数枚の紙。書類か？
それは良いとして、確実に突っ込むべき所が一つある。

「これは何だ……の前に、この空間のどこに探す場所があるのか聞いておこう」

「全体だよ？」

「意味がわからん」

「そのまんまの意味だよ」

神様という立場上（自称だが）、俺には言えない事があるらしい。例えばこの空間がどんな風に出てくるか、とか。説明をしない口実にしか聞こえないが。

つまり……これ以上は聞いても無駄だ。

「まあいい。で、これは？」

「紙」

アホが、誰がそんな事聞くか。見れば分かる。

「素材じゃない、内容だ」

「今、君がいる世界の設計図だよ」

「設計図？」

「そ、設計図」

確かに書類の一枚目には「魔法世界設計資料」と書かれている。題名的には、設計図と言うより参考資料の方が正しいかもしれない。い。

……しかし、汚い字だ。読める自分が信じられないぐらいに。ここに活字があるとは思えないから手書きなのだろうが、汚すぎる。これは（自称）神の威厳も地に落ちるぞ。

「今、何か失礼なこと考えたでしょ」
「気のせいだ」

いつかコイツが、神は読心術が使える、とか言っていた気がする。
心理学というよりは神の力とか言うヤツで。胡散臭過ぎるが。
むしろ、その神の力とやらで字を美しく書け、と言いたい。
まあ置いといて。

「で、質問の答えは？」
「そう焦りなさんな、まあそれ見てみ？」

そう促されて一枚目をめくる。そこには「魔法の概念」と書かれていた。やっぱり汚い字で。

要約すると、

- ・世界のありとあらゆる物は“マリス”から出来ている。
 - ・“マリス”は見る事も、触れる事も出来ない。
 - ・“マリス”は“精神エネルギー”に強く反応する。
 - ・上記の結果として起きる事象を“魔法”と呼ぶ。
- と、まあそんな感じ。

マリス……これは……。

「そこに書いてある通り……」
「待て」
「折角説明しているのに止めないでよ」

待ったをかけられたのが不快らしく、唇をとがらせている。見ていてなんかムカつく。

俺だって早く済ませたい。無駄に時間をかけるのは好きじゃない。

「“マリス”って何だ」

「世界を構成する物だけど？」

「いや、そこじゃない」

「魔法の源だけど？」

「いや、そこでもない」

「不可視なエネルギーだけど？」

「俺が言いたいのはそういう事じゃない」

「じゃあ何なのさ！」

「名前だ」

「ふふ、カッコいいでしょ？」

胸を張って自慢げに言う所を見ると、コイツが考えた結果か。でもな……

「“悪意”が？」

マリス
悪意から出来ている世界なんて嫌だ。

「悪意？」

「“マリス”は英語で“悪意”を意味する」

「そんな人間の勝手な理解なんか知らないよ！」

「ほざけ！ 世界を構成する物質に“悪意”なんて付けるから問題が発生するんだろうが！」

「ここでは人間の言葉なんか関係ないよ！」

「んな事はどうでもいい！ 今すぐ改名しろ！」

「どうでも良くなんか無いよ！」

「どうでも良いわ！」

「そもそもこれは……」

「やかましい！ お前が……」

——三時間後（体感時間）——

「分かったよ……改名すればいいんでしょ？」

「やっと分かったか、このアホ神が」

かれこれ大体三時間ぐらいの口論を終え、改名決定。少し熱くなつてしまったな。

それにしても流石（自称）神。三時間も口論したにもかかわらず、息切れしないんだな。俺もだけど。

「で、どんな名前にすればいいのさ？」

「マイナスなイメージを持たなければ何でもいい。それこそファンタジーの王道らしく“マナ”でもいい」

「じゃあそうしようと」

「少しは考えろよ」

「面倒臭い」

「あつそ」

そんなこんなで、世界を構成する物質の名前は“マナ”に決定。ありきたり過ぎるが、突っ込みが面倒臭いので放置。

「……で、何の話してたんだっけ？」

三時間も口論してたら忘れるよな。俺は覚えているけど。

「何故に腹が減らないのか、と聞いたはずだが」

「ああ、そう言えばそんな気が」
「しなくても良いから答えろ」

コイツの言葉をいちいち真面目に聞いていたら、時間がいくらあっても足りない。よって、途中で遮る。

「説明するよ、マリ……じゃなかった、マナはありとあらゆるモノになりえるんだ」

「書いてあったな」

「で、人間はマナを呼吸のように取り込んだり、吐き出したりを常時しているんだよ」

「へえ」

「で、君はマナの出入り口が普通より大きいんだ」

「お前が弄ったからか？」

「そうだよ。という訳で、空腹にはならないの」

「理解不能」

「ええー！？」

何故に不思議そうな顔をしているんだコイツは。今の説明で分かるか。

「どこが分からなかったのさ？」

「マナは何にでもなつて、何でもマナから出来ている。人間はマナを取り込んだり、吐き出したりしている。マナの出入り口が普通より大きいという事は、俺はより多くのマナを取り込み、吐き出す事が出来る。と、ここまででは分かった。問題はその次だ。マナを多く取り込んだら腹が減らない。その理由が分からん」

「君の体を動かすエネルギーをマナで補っている。とえばいいのかな？」

「……つまり？」

「食べなくてもエネルギーを自動で確保できるんだよ」

まとめると、

人間は食べる事によって外からエネルギーを得る。しかし俺の場合は、取り込んだマナがエネルギーになっている。だから食べなくても良い。空腹は食物を求める信号。食べなくても良いなら空腹にはならない、と。

「じゃあ、普通の人間もマナを取り込んでいるのに、俺以外は腹が減るんだ？」

「言ったでしょ、君はマナの出入り口が普通より大きいって」

「俺が特別だと」

「そゆこと」

とりあえず答えを出すならば、コイツのせい、の一言で片が付く。身体強化だか人体改造だか知らんが、ここまでくればチートと言っても過言ではない。

「ついでに言うと、睡眠もいらないし、呼吸もいらないよ」

前言撤回、チートじゃ済まない。俺は人体のありとあらゆる制約を受けないらしい。

輪廻転生を始めた時点で人間を辞めたつもりだったが、ここまで人間離れる事になるうとは思ひもなかった。どちらかと言うとプラスのはずなのだが、諸手をあげて喜ぶ気にはなれなかった。

「はあ……本格的に人間じゃなくなってきたな、俺」

「もつと喜んでもらえと思ったのにな」

「正直、人型の“何か”と言うよりは“化物”になった気分だ」

「そう言わずにさ」。ほら、君の力が世界を救うと信じて！」

「どここのファンタジーだ」

「どこでも良いんじゃない？」

「そうだな」

もう考える事自体がアホらしい。そもそもアホ神の作ったファンタジー世界だ。チートでもバグでも化物でも、もはや何でもアリなのだろう。

はあ……と、再びため息をつく。

「それにしても、君が怒鳴る姿なんて久しぶりに見たよ」

「少々イライラしていたからな」

「環境の急激な変化で、ストレスが溜まっていたのかもしれないね」

「そうかもな」

変なのに変な理由で喧嘩売られるし、決闘挑んできた奴はいきなり倒れるし。昨日のあいつらが気になって仕方ない。

あいつらは何だったのだろうか……、と考えていると、

「じゃ、早く慣れてもらわないとね」

考え事はよそでやれ、とでも言いたげな言葉と共に、

「うおっ」

突き飛ばされて意識が飛んだ。

目を開ければ異世界。いや、もはや俺もこの世界の一人なのだろうか。

そんな事を思いつつ体を起こすと、枕元に紙の束……つまり書類を発見。1枚目には汚い字でしっかり「魔法世界設計資料」と書かれていた。

そういえば持ったままだったな。一緒に転送されたのか。

ふと窓に目を向ける。そこには朝日にしては高く昇った太陽があった。予想現在時刻、午前8時ちよつと過ぎ。

「あのアホ神……」

授業が始まるまで、後どの位あるだろうか？

ゴオオオ~~~~ン

急げば間に合うかもしれない……。

そんな僅かな希望をも粉碎するように、授業開始の鐘が鳴る。つまり遅刻決定。

「わざとやりやがったな……」

もういい、開き直ってやる。遅刻が決定したなら、急ぐ必要もない。

そう思っではみたものの、特に支度する物も無く、ただ歩き出す

以外に選択肢は無かった。

——五時限目——

「本来魔法という物は……」

「はあ……」

ぼんやりと窓の外を見ながら、ため息を一発。
あのアホのせいで余計にストレスが溜まった。

簡単に説明すると、登校時に自称寮の管理人さんにゆっくり歩いている所を見られ、「もう遅刻しているからといって、少しも急がないのはどうかと思いますよ」と説教をくらい、教室に入れば嬉しそうな顔をした中年数学教師が「おやおや、こんな時間に登校とは君も偉くなったモンだねえ?」とか鬱陶しく話し掛けてくるし、問題は全部解かされたし、教室全体から冷たいような生温かいような可哀想な物を見るような良く分からない視線を向けられるし。遅刻者には制裁が加えられるらしく、その後の授業でも教師陣から集中攻撃を受けた。

俺が一体何をしたって言うんだ……。

ちなみに今は魔法の授業中。にもかかわらず、こんな事を考えている余裕があるのは室内授業だからだ。

「……には意味があり……」

集中のいる実技と違い、知識を詰め込むだけの作業。勝手に教科書を読み、記憶すれば済む。

今日は魔法陣だか魔法文字だかよく分からないが、言葉ではなく、文字や図形によって魔法を発動させる方法を聞いている。

「……文字の組み合わせで……」

内容は、

意思には力が宿り（言霊と同じような概念らしい）、それを表すモノ（言葉・文字・図）にも力が宿るらしい。

意思を言葉にすれば詠唱となり、魔法的な（魔法をより強くする、発動を助けるといった）力が宿る。

しかし、文字と図は言葉ほどの力を持たなかったので、文字に特別性を持たせるために魔法文字が開発され、それでも少し弱かったので図と併用されて、魔法陣が出来た、と。

……で、今は魔法文字と魔法陣の説明中。ミミズと三角定規が融合進化したような文字が1、2、3……34個並んでいる。

これが魔法文字か、意味不明過ぎる。この世界の人間に失礼かもしれないが、センスを疑ってしまう。

「……ここをこうして……」

理解に苦しむ俺をよそに、サクサクと授業を進める魔法教師。人の話を聞かない奴は知らん、と言っているようだ。

さつきから教卓の上で何かしているが……小さな魔法陣を組み立てているのか？

「……魔法発動」

そう魔法教師が言った瞬間、教卓の上に小さな火が現れた。どう

やら魔法陣であつていたらしい。

流石魔法、見ていだけでファンタジーな気分になる。これは使ってみたい。

ちなみに魔法陣を使った魔法の利点は、安定した結果を出せる点、遠隔操作や時限式で魔法を発動できる点、構成次第で繰り返し使える点、□が使えなくても使える点など。最後はどんな状況か想像つかんが。

欠点は、準備に時間がかかる物が多い点、途中で変更ができない点、線一本書くだけで破壊される点、そして何より面倒臭い点。魔法陣の破壊は、特別な物で描く事によって防げるらしいけど、良く分かん。

自分の中で簡単にまとまった所で、

ゴオオオ~~~~ン

授業終了の鐘が鳴る。

「今日はここまでです」

「起立、礼」

教師の授業終了の合図で、起立、礼の号令がかかる。

教師の背中を見送り、俺はため息をついた。

——放課後——

さて……この後どうしようか。魔法の練習をするもよし、さつき

の魔法陣を試してみるも良し、王立図書館で読書するも良し。うむ、迷うな。

教室の隅の長机に腰掛けて窓の外を眺めながら、午後の時間を何に使おうか、と思案していると、近づいてくる気配を感じた。

この気配は確か、ユリアの友人の赤髪か。名前は……ク……クレ

……

「クレスなんとか」

「なんとかって何よ」

うる覚えの名前を呼べば、即座に突っ込みが返ってくる。振り向けば、そこには突っ込みを入れた赤髪の少女、クレス……（ダメだ、思い出せない）が、少しの怒気を放ちながら立っていた。

「クレスの先が思い出せないから、クレスなんとか、と表現したままで」

「そんな説明はいらないわよ！ 私の名はクレスティア・ヴォルク・ディアレクト！ よく覚えておきなさい！」

クレスティア・ヴォルク・ディアレクト、ね。今度はしっかり覚えてた。

「まあそんな事はどうでも良い」

「良くないわよ！」

名前なんか本当にどうでも良いのだが、それは置いて。

「……何をしている」

「見て分らないかしら？」

クレスティアは、椅子を引っ張り出して俺の隣に座った。

隣に座ったという事は、何か話があるようだが、俺はこいつに聞きたい事がある。他人に合わせるのは性に合わないので、先にこちらから切り出させてもらう。

「ところで、お前に聞きたい事が二つある」

「なにかしら？」

「まず一つ目。昨日のアレは何だ」

「アレ？」

「決闘の途中で急に倒れただろうが」

質問その一、昨日から続くイライラの要因の一つ。決闘が良く分からんまま終わった事。

「ああ、あれはね……」

急に真剣な顔になるクレスティアに、反射的にほんの少し身構える。

「魔法の反動よ」

「魔法の反動？」

こいつ、いつの間に魔法なんか使ったんだ？ まさか、野次馬に気を取られていたあの一瞬か？ だとすれば、あの時なんか言っていたのは詠唱か……不覚。

こちらの世界の戦い方を、早いこと身に付けなければならぬな。

「そうよ。私が使ったのは、身体能力を強化する魔法。それも最高

のヤツ。異常なまでに身体能力を向上させるんだけど……持続時間は短いし、効果が切れたら疲労で動けなくなるのよ」

ベラベラと解説ありがとさん。つまり、倒れたのは魔法が切れて、疲れて動けなくなったのか。それなら外傷も異常もあるはず無いな。

「そんなもん使ったのか」

しかし、実用的じゃ無さ過ぎるだろう。効果は三分どころか一分も続かないみたいだし、効果が切れたら動けなくなるし。一対一だったからこそ少し押されたが、集団戦には不向き極まりない。

「あなたが全力で来いって言ったんでしょ？」

「確かに言っただけ」

だからと言って、普通そんなものは使わない。少なくとも俺なら使わない。

まあこれで異常な速さと力の事と、いきなり倒れた理由が分かった。

「で、あなた、何者？」

「……は？」

突然の問いに、緊張感の欠片も無い声が出てしまう。

「あなたは、異常なまでに強化された私と対等か、それ以上に強いわ。私の攻撃を防ぎ切り、反撃もした。魔法も小細工も使っているようには見えなかったし、私の攻撃がぬるかったとは思えない。でもあなたは私に勝った」

確かに、あそこまで異常に強化する魔法を使って負けたら、相手が普通の人間だとは思えないだろう。事実、普通じゃないけど。

「もう一度聞いわ。あなたは何者なの？」

でもな……正直に言つと、神とか異世界とか芋づる式に話す事になりそうだ。それは面倒臭いから、適当に誤魔化すか……。

「……」

クレスティアは俺の目を凝視している。その真剣な眼差しから、回答によっては殺す、と聞こえた気がした。

これは回答次第では、死亡フラグが立つ。どう答えたものか……。

「……」

クレスティアは、じつと俺の目を覗き込み、瞳の奥の真実を探っているようだ。視線が突き刺さって痛い。

こういう時は、相手が予想もしない答えを返すのが一番だ。驚いている間にあやふやにしまえばこっちの物。

問題はその答えだが……何か良い答えは無いだろうか？ 異世界人であることも転生者であることもバレず、今までの全てに説明がつき、最も面倒臭くない答えがベストだが、そんなものある訳……あった。

「俺は……」

口を開いた瞬間、クレスティアが緊張したのが分かった。正体不

明の黒髪が、自ら正体を白状するのだ。無理もない。

そんなクレスティアから窓の外へと視線を移し、明後日の方向を見つめ、出来る限り憂いを帯びた目をして、

「……記憶喪失なんだ」

嘘を吐いた。

これなら全部“知らない”で片付けられる。自分で言うのもなんだが、俺は天才かも知れない。

「え……えっ……と……」

「別に気にする事じゃない」

クレスティアが返答に困っているが、答える前に答えられなくなる。こいつが気にしているかは別として。

変な方向に飛んでも困るし、何より面倒だ。これでもう何も聞くまい。

「ところで、聞きたい事がもう一つ残っているんだが、いいか？」

返答を遮った所で、会話を一気に方向転換させる。嘘だと知られば、不信感三倍増だし。

「ええ、いいわよ」

方向転換成功。

「昨日、俺の代わりにお前が倒したあいつの事、何か知らないか？」

質問その二、ユリア“様”にご執心の屑貴族の事。

「少しなら知っているけれど……どうしてそんな事聞くのかしら？」
「別に。ただ、少し気になるだけだ」
「ふん……まあ良いわ、教えてあげる。アレは中級貴族の一人息子で、ユリアに異常な恋心を抱いているの」
「やはりか」

あの屑貴族、頭のどこかが逝ってたもんな。

「何でも“ユリア様を愛でる会”の会長らしいわ。どんな会か知らないけど」

つまり、ユリアファンクラブの頭か。

「私たちと同じ第三学年で、成績はそこそこ。性格、容姿、実力は昨日見たとおり、性格は自己中心、容姿は下の中程度、実力は中の下程度。総合評価は、ほぼ最低ね」

「酷い言いようだな、事実だが」
「いいでしょ。事実なんだから」

やはりこいつは良い神経をしている。

「しかし、よく知っているな」
「よくユリアに寄って来るから、追いついていただけよ」
「そうか」

流石ファンクラブの頭。その程度ではめげないのだろう。死ねばいいけど。

「はあ……」

クレスティアはため息をつき、

「あなたが何者が聞きに来たけど、なんだか拍子抜けだわ。記憶喪失じゃ、どうしようもないじゃない。しかも平然としてるし、気にするなとか言うし。気を使って損したわ」

独り言を言い始めた。

こいつの用事はそれだったか。もう終わったし、嘘だけど。

「……あなたは余裕みたいね」
「は？」

いきなりの意味不明な発言に、つい疑問符を返してしまう。

「進級試験も間近だから、焦っているかな、とか思っていたんだけど」

……進級試験？

「そんな事、聞いていないが」
「あら？ 知らなかったの？」

知らなかったとも！

「いつだ……」
「三日後よ」

三日後……

「どうしたの？」

内容は主に魔法行使。

今の所、基本的かつ簡単な物しか使えない。
そして、タイムリミット残された時間は二日とちょっと。

……固まるしか、無かった。

「じゃあ私はこれで」

クレスティアは立ち上がり、

「まあ、頑張つてね」

とだけ言つて、去つて行つた。

俺は数分間、一人だけの教室で放心していた。

“進級試験まで時間が無い”という事実だけが、いつまでも俺のそばにいたのだった。

異世界九日目〜最後に残るは一つの事実〜（後書き）

遅れまして、申し訳ないです。

最近、文章がうまく纏まらなくて困っています。

次話更新は10月24日まで期待できません。

定期テストのせいです。

悪しからず。

異世界九日目、腕輪を外すと爆発する？（前書き）

超鈍足更新で申し訳ありません。

異世界九日目　腕輪を外すと爆発する？

王立図書館

「……次」

クレスティアが去った後、俺は放心状態から戻った。

進級試験は三日後だが、内容不明ではどうしようもない。何から始めたものか、と思いあぐねながら教室の隅で窓の外を眺めていたのだが、“あるもの”を見たせいで王立図書館へと足を運び、今に至る。

「……次」

持っている本を閉じ、既に読み終えた本の上に積む。そして、まだ読んでいない本を手に取り、開く。

今読んでいるのは魔法に関する多量の本。何故そんな本を読んでいるのか、それは“あるもの”を見たからだ。

“あるもの”……それは、元の世界ではあり得ない現象だった。民間伝承としては存在したが、物理的に不可能な現象であり、想像上の物とされてきた。が、この世界では魔法として行使されているらしい。

「……次」

それは“鎌かまいたち融”と呼ばれ、イタチの妖怪とされていた。つむじ風に乗って現れ、鎌のような両手で人を斬りつける。鋭い傷を受ける

が痛みは無く、出血もしない。という妖怪。

転生者が言うのもなんだが、非現実的な話だ。傷を受ければ痛みは伴うだろうに。いや、神経が麻痺するような毒を持っていれば可能かもしれない。斬った後に薬を塗っているから痛まないという説もあるが。

この現象は（いつだったかは忘れたが）昔、旋風の中心に出来る真空または非常な低圧により皮膚や肉が裂かれる現象と説明され、一見科学的であつたために一般に広く浸透し、ゲームや漫画などで風の刃が攻撃手段として用いられた為に、ほとんどの人間が実際に起こり得る現象として捉えていた時代があつたが、既に物理的に無理だという事が判明している。

まあそれは置いといて、風と共に切り傷を負う事を、一般的に力マイタチと言う。

「……次」

旋風程度では、人間の皮膚が裂ける程の気圧差が生じることは無い。それどころか、真空でも皮膚が裂ける事は無い。現象としては、風で飛んできた鋭利な石か葉で傷付いただけ、で済まされている。

……にもかかわらず、緑髪の少年（名称不明）が薪を両断していた。無論、手で触れる事無く。

そういえばどこかの小説で、“空気を凝縮すると高圧により水蒸気が凍る”という原理で、風の魔法で氷の刃を作り出している、みたいな設定を見かけた事をここにきてから思い出したが、読んだ本のどれにもそんな原理は書かれていなかった。

それどころか、風なんだから切れるに決まってるんだろ？ 常識だぜ、とでも言いたげに、原理はほとんど書かれていなかった。わずかに書かれていた原理も“風を操って刃状にする”とかで、なぜそうなるのかは書かれていなかった。

「……ふう」

本を閉じ、一息つく。

結局どの本にも明確な原理は書かれておらず、納得できる答えを得る事は出来なかった。著者たちは原理を説明しなかったのか、出来なかったのか、はたまた知った上で書かなかったのか……

全く、どういう原理で風から刃を生み出せるのか分からない。仮定としては“空気を凝縮して氷の刃を作り出す”が最も合理的なのだが……この世界で俺の“合理的”が通用するとは思えない。何せ魔法が存在している世界だ。いや、そもそも魔法を合理的に説明しようと考えるのが間違っているのかもしれない。

「あら、黒髪君じゃない。なにしてるの？」

「読書」

突然の自分への問いに反射的に答えて振り向くと、そこには緑髪の妙に若々しい女性がいた。

「パトリシア・ディアレクト……だったか」

その名はパトリシア・ディアレクト。胸が偽物で無ければ女性。クレステシアの母。子の存在を考えると、30代は確実。身長は目測で163センチ前後。邪魔だから適当に切ったような緑髪。冗談

を好みそうな緑の目。王立図書館の司書。理由は不明だが白衣を着ている。ユリアが昔から世話になっているらしい。

「パティって呼んでね」

「パー子」

「誰よそれ。怒るわよ」

言葉の割には怒気の類を感じない。意味を持たないやりとりを楽しんでいるようだ。

とりあえず、「冗談を“好みそう”は“好む”に訂正しておく。

「さあな。で、何か用か？」

「いえ、別に。進級試験に向けて頑張ってるのかな、と思って声を掛けただけよ」

同じような台詞をクレスティアも言っていたような気がする。

「親子揃って同じような事を言うな」

「親子……ああ。ユリアちゃんから聞いたのね」

「そうだ」

「クレスティアと仲良くしてあげてね」

「と、言われてもな……」

決闘を申し込んで来るような奴と、どう仲良くしろと言うのか。

「じゃないと、近いうちに決闘を申し込まれるわよ」

決闘を申し込むような奴だと言う事は知っているらしい。

「既に申し込まれた」

「あら、早いわね。いつ？」

「昨日だ」

「無事な所を見ると、勝ったのね」

まるで、負けた奴の大半がボロ雑巾のようになったような言い方だな。アレを喰らったら、ボロくない雑巾みたいに倒れるだろうが。一撃で死ねるような威力だったし。

「勝ったが……あんたは自分の子供の教育をちゃんとしたのか？」

あんな魔法をホイホイ使わせるな」

「もしかして、爆力翔速の事かしら？」

あの身体強化魔法は、爆力翔速と言うらしい。そのまんまだな、どうでも良いが。

「どんな名前かは知らんが、あんな攻撃を受けたら、骨折どころか内臓破裂で死ぬぞ」

「良いじゃない、決闘なんだし」

確かに、死ぬ覚悟で戦うから決闘なのだろう。だが、

「ただの決闘なら良いが、国王が集めた魔法学校の生徒を殺させるな」

魔法学校の生徒は150人もいない。貴重かは知らないが、少ない人材を殺すのはどうかと思う。

「大丈夫よ、殺さない程度に加減するように言ってあるから」

「俺は殺されかけたんだが」

「大丈夫だと思ったんじゃないかしら？ 実際、大丈夫だったみた

いだし」

大丈夫だったが、後？分効果が持続していたら負けたかもしれない。

「……もし大丈夫じゃなかったら？」

「その時はその時よ」

笑って済ませるパトリシアに、こいつは駄目だ、と思ったのは言うまでも無い。

「別に良いじゃない。進級試験前に怪我一つしなかったんだから。怪我したとしても、心配はいらなさそうだけど」

「……どういう意味だ？」

「それはアレよ。学費はあなた持ちじゃないんでしょ？」

進級試験は、一定以上の成績の者を進級させる試験。言いかえれば、一定以上の成績を収めなければ進級できない。もし進級できなければ、余計に長く魔法学校に通い続けなければならない。そうすると（いくらかは知らないが）学費が余計にかかる。それは一般家庭では大きな負担となる……はず。しかし俺の場合、魔法学校の学費はユリア（王宮）から出ているから、焦らなくても大丈夫だと、進級試験の合否がどちらであろうと心配はいらないと……

「そうだが……だからこそ、なんとしても落ちる訳にはいかない」

「あら、どうして？」

「一方的に誰かの世話にはなりたくない」

「ふふっ、殊勝な心がけね」

「そんな大層なモンじゃない」

ただ単に嫌なだけだ。

「ふうん……まあ良いけど。何か知りたい事があったら、遠慮無く私に聞きなさい。気が向いたら答えてあげるから」

ならばまず、いつなら気が向くのか聞きたい。冗談で言ったのだろうか。

まあそれは良いとして、答えてくれると言うのなら、聞かないという選択肢は無い。むしろ聞くのは礼儀だ。と誰かが言っていたような気がしないでもない。

「なら、進級試験の形式が知りたい」

「そんなことで良いの？」

「聞ける回数に制限があるかの様な言い草だな」

「無いわよ」

「だろうな」

「でも、私は忙しいから、聞ける時間に制限はあるけどね」

「……そうは見えないが」

「あら、バレちゃった？」

「アホでも分かる」

「手厳しいわね」

「普通だ」

本当に忙しければ、こんな所で俺と雑談をしている時間など無いだろうに。

王立図書館司書って閑職だったのか。どう考えても公職なのにな。

「で、進級試験の形式が知りたい、だったかしら？」

「そうだ」

「言語、自然、数学は筆記試験。魔法は実技試験よ。武術も実技試験だけど、進級には影響しないわ」

言語、自然、数学の筆記試験はいい。問題は魔法か。後で自主練習だな。

「そうか。もう一つ良いか？」

「駄目よ、と言ったら？」

「それでも聞く」

「なら仕方ないわね。で、質問は？」

「魔法と数学の関係が知りたい」

前から思っていた事なのだが、魔法学校で数学を教えている理由が分からない。言語は生活の基礎知識として、自然は魔法の行使による結果（例えば、密室で火をつけると窒息する）とかも教えている。だが、数学と魔法の繋がりが良く分からない。日常生活にも数学の知識は特に必要無さそうだし。

「うーん……じゃ、こっち来て」

そう言うなり、王立図書館の奥に向かって歩き出す。俺も椅子から立ち上がり、その後を追う。

そうして着いた先は……本棚にはぎっしりと、机上にはどっさりと、床には足の踏み場も無いぐらいに書物が溢れ返っている場所。つまり書庫。

「ちょっと待っててね」

パトリシアは器用に本を踏まないように奥へと進み、

「確かこの辺に……」

一番奥の棚から何かの本を探し始めた。俺はその様子を入口で呆然と眺めていた。

本棚に本が1冊、2冊、3冊……60×7×8か。机の上と床にある分を足すと、さらに+25×20+15+16+14+8+5+……実に4000冊を超える書物がこの部屋に押し込められている。片付けろよ。

「あ、あつた」

「おい」

「なにかしら？」

「この書物の整理はあんたの仕事だろう」

「そうよ」

「だったら、なぜそんなに暇そうにしている」

「仕事しないから暇なのよ」

断言しやがった。

「……もういい」

王立図書館の司書って公職だよな？ 仕事しなくて良いのか？
むしろそれ以前に人選ミスだ。

「それよりコレ。さっきの質問の答えが載っているはずよ」

そう言って差し出されたのは古びた本。恐らく百年単位で昔の物なのだろう。表紙は所々剥けているし、ずいぶん黄ばんでいる。

「何年前の本だ？」

「500年ほどかしら」

「そうか」

500年前……ユリアから聞いた話が正しければ、魔人戦争の起きた頃だ。それよりちょっと前という事は、少なくとも今より技術が発達していた時代だろう。

そう思いながら本を開くと、読めない文字がぎっしりと書き込まれていた。

「何だこれは」

「古代文字よ」

「読めない本をどうしろと？」

「そう言わずに読み進めれば分かるわ」

読めないのに読み進めるとはこれ如何に……。

パトリシアの言葉に矛盾を感じながら、ページをめくれ、と言う事だろうと理解して、パラパラとめくって流し読みをする。すると、今までの文字とは違う記号の羅列……つまり何かの数式を見つけた。数式の書かれたページには挿絵があり、人のような物、それを覆う膜のような物、何かの方向を示す二本の線が描かれていた。

二本の線の一本目は人に向かって伸び、膜のような物の前で止まっている。二本目の線は、一本目の線の先端から逆方向に伸びている。

ここから察するに、この膜は魔法障壁の仲間で、反射の能力を持っているように思える。と言う事は、この数式はベクトルの計算式か。

「これは？」

「たぶん昔研究されていた反射魔法の理論と計算式よ。完成しなかったただけね。勿論それが今使える人はいないわ。読めないし」

魔法と数式……思うだけで発動するような小規模の魔法もあれば、詠唱を必要とするような魔法もあるように、数式の力を借りなければ完成しない魔法もあったという事か。

「どう？ 分かったかしら？」

「つまり、魔法の発展に数学が使える、と」

「そういう事よ」

そうか、なら数学が授業と試験に組み込まれているのも納得だ。

「ちなみにその本の著者は、“万物の根源は数である”とか言っていたらしいわよ」

「ピタゴラスか。そいつは」

「随分と愉快そうな名前の人ね」

「偉人の名前を愉快そうとか言っな。あと、これは返す」

古びた本を差し出すと、パトリシアは首を横に振った。

「返さなくて良いのか？」

「そうじゃないわ。ただ……」

「ただ？」

「片付けるのが面倒臭いから、あそこの棚に入れておいて」

真顔で言い切りやがった。やはり人選ミスだ。

「本の管理は司書の仕事だろう」

「誰が決めたのよ」

「誰が決めたんだ？」

「現国王よ」

そこは自分で答える所なのか？

「分かっているならさっさとやれ」

「仕方ないわね……」

そう言っただけの手から古びた本を取り、

「全く、何で私が……」

何やらぶつぶつ言いながら、古びた本を片付けて戻ってきた。

「で、聞きたい事はそれだけかしら」

「今のところはな」

「もう帰るのかしら？」

聞きたい事は聞き終わったし、読みたい本は読んだ。もう帰ろうか。

「そうだな」

「そう。じゃあ、さっき読んでいた本は片付けてから帰ってね。出っぱなしになっている本を、片付けるのは私なんだから」

そう言っただけでパトリシアが指差した先には、俺の読んだ本が20冊以上積み上げられていた。

「面倒臭いな、放って帰るか」

「それでも良いけど、今度来たら殺すわよ」

その声には宣言通り、冗談とは思えない殺気が含まれていた。

「なら仕方ないな」

「あ、そうそう」

本の山に向かおうとした瞬間に聞こえた声で、背筋に尋常じゃないほどの嫌な予感が走る。

「アレを片付けたら、書庫の整理を手伝ってね」

「何故俺が」

「質問に答えてあげた事、忘れたのかしら」

「有料だと聞いた覚えは無いが」

「無料だと言った覚えは無いわよ」

確かに言っていない。

「それに、世の中タダの物なんて無いのよ」

「だとしても、あの情報の対価が4000冊以上の書物の整理というのは、高すぎだろう」

「情報の価値というのは、提供する側が決めるものよ」

「だとしても――」

「うるさいわね。断ったら出入り禁止にするわよ」

これ以上は何を言っても無駄だろう。これから王立図書館は利用するつもりだし、ここは素直に従っている方が得策だろうな。

「……もはや何も言っちゃい」

しかしこの司書、ものすごく不機嫌気味に思えるのは気のせいだろうか？

—— だいたい三時間後 ——

太陽の七割が地平線に沈み、窓から差す光が消滅しそうになった頃、

「もうそろそろ良いかしら。お疲れ様」

その言葉によつて、俺は世間一般では重労働と言つてであろう労働から解放された。

一人で2864冊の本を読み、それらを分類し、書架に納める作業を重労働だと言わずしてなんと言うか。あまり疲れていないが。

「あらかた片付いたな」

「そうね」

「俺は帰るぞ」

「溜まった頃に、また手伝いに来てくれると嬉しいわ」

「仕事しろ」

溜まる事が前提なのかよ……何故こんなのが司書をやっているのだろうか？

「またいつでも来なさい。暇だったら相手してあげるわ」

「……あんたが忙しい事を祈るばかりだ」

二度とこんな七面倒臭い作業に付き合わされない事を願いながら王立図書館を出ると、日は既に完全に沈んでいた。街は闇に覆われ、人々は自らの住居に閉じこもっていた。

この世界に電球が存在するはずもなく、屋内では燭台、屋外ではランタンによって視界を確保しているらしい（俺は照明器具無しでも、昼間とほとんど同じように見えるが）。お陰で人気ひとけが一切無い夜にわざわざ外出する奴はいないのだろう。

前も見ずに歩いたが、特に問題無く魔法学校に到着した。その時間わずか四十二秒。王立図書館と魔法学校が、隣り合って建っているからこその時間なのだが。

この時間なら外には誰もいないだろうと思い、魔法の練習をしようと運動場へと向かうと、やはり運動場には誰もいなかった。誰か居た所で困りはしないが。

「すう……はあ」

深呼吸をして呼吸を整え、火を想像する。赤く、熱く、揺らめく火を。

完全に火を想像すると、目の前の空間が少し歪み、火炎球が現れた。

今回は体とリンクさせず、完全に独立した魔法を使う練習だ。理由は簡単、多数の魔法を同時に操作できないと不便だと思ったからだ。

一対一で戦う場合、魔法の同時操作の限界が二つだと、行動パターンが読まれる可能性がある。

一対多数で戦う場合、二つだけの魔法で相手をするのは、少し無理がある。

だから火炎球三個を同時に制御する所から始めようと思った訳だが――

火炎球は無残に消滅した。どうやらまだまだ時間がかかるらしい。

――体感時間で六時間後――

何とか同時に火炎球を五個まで制御できるようになった。が、

「むう……」

こんな声が出るくらい、神経が疲れた。

「……もう、良いか」

いい加減疲れたので、火炎球を消して少し休憩しよう。

そう思って伸びをすると、右手首の黒い腕輪が視界に入った。

そう言えばこの腕輪……アイツは俺の魔力を抑える物だとか言っていたな。だったら、外して魔法を使ったらどうなるんだ？

気になった事は即刻調べる。それが俺。よってこの場合、取るべき行動は――

腕輪を外し、右手を前に構え、火を想像する。

これがいけなかった。

危険を感じた時にはもう遅い。風景は大きく歪み、その中心には発光する球体が現れて、徐々に大きくなり――轟音と暴風と灼熱をまき散らした。

俺は、反射的に両手を目の前で組んで防御の姿勢を取ったが、そんなわずかな抵抗もむなしく、そのまま紙きれのように吹き飛ばされ、炭化して死ぬ……ハズだった。

震天動地の轟音は、確かに王都全体に鳴り響いた。しかし、いつまで経っても暴風にも灼熱にも襲われる事は無かった。妙だと思い、いつの間にか瞑っていた目を恐る恐る開いてみると、

「……これは」

眼前には小規模のクレーターが出来ていた。直径約50mは確実に、地面は真っ黒に焼け焦げている。ここで爆発が起きたのは確かだろう。

これだけでも十分びつくりな光景なのだが、さらにびつくりな事に、俺と爆心地の間に何か障害物が存在したような形跡があった。その謎の障害物のおかげで、俺は無傷だったと思われる。

とりあえず大爆発した事は確かだが、何故俺が無傷だったのかが気になる。魔法を発動する時に、俺の正面には何も無かったはずだが……。

不可解な現象に頭を悩ませていると、人の近付いて来る気配を感じた。

どうせさっきの轟音で目を覚まただけだろうが、見付かると後々厄介だ。と言うより、なんとなく見付かりたくない。どこか身を隠せそうな所は……あった。校舎の屋根の上だけだ。

迷う理由が無いのでさっさと屋根に飛び乗って爆心地を観察していると、さっきの気配が来た。誰だか知らないが、危うく見付かる所だった。

クレーターを見て驚き、何か叫び始めたが、全く何も聞こえない。不思議に思ったが、答えはすぐに分かった。あんな轟音を間近で聞いたのだ、鼓膜が大破したに違いない。

一人、また一人と人が増えていき、皆一様に驚いているようだ。何やら叫んでいる者もいるようだ、何も聞こえないので気にならない。

……さて、随分と静かな夜になった。このまま夜風に辺りながら、満天の星空を見つめて過ごすとするか。

そうしていつしか深い眠りに落ちて行った俺は、風刃の原理が結局分からず仕舞いである事を忘れていた。

異世界九日目〱腕輪を外すと爆発する？〱（後書き）

たった7000字程度なのに、大変遅くなりまして申し訳ありません。

最近、上手く文が連結しないんです。

今後も這うような速度での更新となります。

しかし、打ち切る予定はありませんので！

異世界十日目、校舎使用不可（前書き）

久しぶりに更新。みんな喜んでくれると嬉しいなあ。

異世界十日目 校舎使用不可

「つごふお」

ゆったりゆらゆらと睡眠の快樂に身を任せていたのも束の間、突如鳩尾みそおちに鋭い圧力がかかり、苦痛が鳩尾から全身に広がった。ついでにうめき声が出てしまった。

記憶の糸は、魔法学校の屋根の上に乗ったところで途切れている。屋根の上に人が来るとは考えにくい。よってこの圧力は、恐らく人為的な物ではない。

隕石でも落ちてきたのだろうか。と、あまりに確率の低い事象を考えながら目を開いた。

「……何をする」

最初に見えたのは、ニヤニヤしている金髪ロン毛アホ面な自称神の顔。そこから視線を下げると、あお向けの俺の上にはアホ神が馬乗りになり、鳩尾には拳が突き刺さっていた。

確かに圧力の正体は人為的じゃなかった。神為的とも言つべきか。

俺の目が開いた事で鳩尾の圧力は消えたが、アホ面の神は俺の上から降りようとはしない。引きずり降ろそうにも、両足で両腕を押さえつけられているため腕が使えない。動くのは足と首だけだ。

目を覚ますと目の前に美女（だと思う）がいた……というシチュエーションを好む輩がいるかも知れないが、この状況は喜べないな。

「何をする、じゃないでしょ」

「じゃあ何だ？」

「ゴメンナサイ、かな？」

「……安眠を妨害しておいて、謝罪を要求するとはどういっ了見た？」

「心当たりが無い、とは言わせないよ？」

「残念だがなをふっ！」

再び神の拳が鳩尾に突き立てられた。殴られる覚えは無いのだが。

しかしこの鳩尾突き、かなり苦しい。口から臓物ぶちまけそうだ。これが神の力か。

「心当たり、思い出した？」

「……そう見えるのか？」

「じゃあもう一発」

「無駄だと思うがっふお！」

アホ神は俺の言葉を無視し、またしても鳩尾に拳を突き立てる。ニヤついたままの顔面を見る限り、半分は楽しんでしているな……反撃するか。

「いい加減にしろ」

「うわっ」

両足首を首に引っ掛け、後頭部から地面にダイブさせる。きつと悶えるほど痛いだろうが、反撃なので悶えてもらわないと困る。

「おっっ」

威敵の無い声が聞こえたが放つといて、体を半回転させて上を取る。さらに、ちょうどいい位置で遊んでいた足をわきに挟んで、背骨も折れよと逆エビ固めに移行。

「いだだだ……と言つても思つたか！　おりゃあ！」
「うおごっ！」

逆エビ固めを掛けている状態から怪力で足を伸ばされ、今度は俺が地面に顔面からダイブする羽目になった。

最初に着地したのは額。痛かったが、鼻よりはマシだ。

「まあまあ、落ち着きなよ。暴力はいけないよ〜？」

振り返ると、額をさすっている間に神は既に復活し、やはりニヤニヤしていた。

脳髓ぶちまけて死んでいれば良かったのに。

「暴力じゃない、正当防衛だ」
「そ、じゃあ……」

“暴力はいけない”と、アホな事を抜かした神は正座し、

「お話、しよ？」

再びアホな事を抜かした。

正当防衛だと言ってしまった以上、相手に害意及びそれに準ずる意志が無くなれば、これ以上攻撃は出来ない。先制攻撃を受けて反撃出来ないのは、やりきれないが仕方ない。

「……で、結局何なんだ」

正座して向かい合い、単刀直入に切り出す。

「腕輪、外すなって言ったでしょ？」

「いや、聞いていないが」

“着けておけ”とは聞いたが“外すな”とは聞いていない。

「おりよう？ 言って無かった？」

「ああ、聞いていない」

「あー……うん、ゴメン。言って無い事で殴っちゃった。許して
ちょ？」

片目を瞑り、ペロリと舌を出すアホ神。誰が許すか。

「なんだ、死にたいのか」

「えっ！？ ダメなの！？」

「“これは行ける……！” とも思っていたのか？」

「え……っと、じゃあ……」

正座、両足は平行、背筋をビシッと伸ばし、キリッとした表情で、

「許せ」

抜かしやがった。断る。

「そうか、そんなに死にたいのか」

「じゃあ次は……」

「もういい。話を進める」

これ以上は時間が無駄だ。アホと戯れるのは同じアホだけでいい。

「じゃあ話を進めるよ。腕輪、外したね？」

「ああ」

「大爆発したね？」

「ああ」

「爆死しそうだったね？」

「ああ」

「うさ耳、好き？」

「興味無い」

コイツはいきなり何を言い出すのやら、それが何か関係ある――

「あり？ 生返事じゃなかったんだ」

――訳無いな。

全くコイツは……何やら重要な話だと思って真剣に聞いていれば、時間場所目的問わずふざけやがる。しかも、いつの間にか足を崩して半ばくつろいでいる。

こんな奴の話を正座なんかしながら聴けるか、と思ってあぐらをかいた。

「本題に戻れ」

「はいはい、爆死しなくなければ今後腕輪を外さないように。分かった？」

「分かん」

「なんで！？ 十人いれば千人が分かったって言うよ？ 頭おかし

「いんじゃないの？」

十人か千人か知らんが、俺から見ればそいつらがおかしい。人数に関してはノータッチだ。

「お前の話はいつも理由が抜けている、と何度言ったら分かる」

「一番面倒臭いんだもん」

「一番重要な部分だろうが」

「うるさいなあ、神様の言う事には黙って“はい”って言えば良いんだよ」

こんな奴が神じゃなかったら、そうしている所なのだが。

「黙って“はい”と言うのは無理だろう」

「それこそ黙って“はい”って言うところだよ？」

「はいはい」

「“はい”は一回！」

「さっさと説明しろ。アホ」

「……分かったよ。説明すりゃいいんでしょ！」

最初からそう言っているのに、何故か逆ギレしながら説明を始めた。

アホ神説明中……

長くなったので簡潔にまとめると、

腕輪が抑えていた膨大な魔力が暴走したせいで大爆発した。爆死したくなければ、というか、したくても外すな、以上。

らしい。

「大きな力は、一歩間違えると身を滅ぼすんだよ？ 爆死以外にも凍死圧死水死壊死墜落死狂死焼死震死その他諸々危険がいっぱいなんだよ？」

どこか違う死が一つ混じっているが……それよりも気になる事がある。

「ところで震死とは、どんな死だ？」

「え？ 地震で死ぬに決まってるでしょ？」

やはり勘違いしていたか、このアホは。

「違う、雷にうたれて死ぬ事だ」

「何言ってるのさ、地震に決まってるじゃない。バカだなあ」

こんなアホにバカ扱いされるとは……この上ない屈辱だ。

「バカはどっちだ。震死を“地震で死ぬ”とか言う奴の方がバカだ」
「“震”死なんだから地震でしょ。それを雷がどうか言う君の方がバカだね」

まだ言うか……

「そこまで言うなら辞書持ってこい」

「はいコレ」
「何だこれは」

差し出されたのは分厚い本。辞書と言うには問題無い。だが、表紙に“かみじろし神印の究極辞書！ 未来予知、宇宙の法則、新世界の作り方など何でもござれ！”と書かれていた。

かみじろし神印という事は、コイツが編集した辞書だろう。

「見て分かんない？」
「当てになりそうにない、という事だけは分かった」
「これのどこがそう見えるのさ」
「少なくとも表紙は」
「フッフッフ……見た目だけで判断しちゃいけないよ？」

そうしたいのは山々なのだが、編集者がお前じゃあな……

「どうせ“ドラキュラ”の説明が“人の血を吸う魔物”としか書かれていなかったりするんだろう？」

「あら、正解」

「……やっぱり、広辞苑持ってこい」
「なんでさ？」

「説明が必要か……良いか、よく聞け。“ドラキュラ”は映画“吸血鬼ドラキュラ”の主人公である伯爵の名前で、吸血鬼の俗称じゃない。吸血鬼はヴァンパイアだ。お前の辞書は終わっている」

「へー、博学だね」
「お前もハクガクだな。さっさと広辞苑持ってこい」

ただしコイツの場合は“薄学”だが。

「仕方ないなあ、はい」

差し出された物は、今度こそまともな辞書。広辞苑第六版。

「古いな」

「大丈夫、“震死”くらい載ってるでしょ」

「そうだな。震死、震死……」

何故か俺が辞書を引いているが、気にしないでおう。

震死は……これか。

「あつた〜？」

「あつたぞ」

「どれどれ……」

しん・し【震死】

雷にうたれて死ぬこと。

「……マジですか」

「分かったか、バカ」

「バカ言うな」

「黙れバカ」

「うう……」

「さてバカ、本題に戻るぞ」

「本題？」

「腕輪を外すと死ぬから外すな、だろう？」

「あ、そうだった」

……忘れていたのか。バカの上に鳥頭か、救いが無いな。なぜなら救う神がバカで鳥頭だからな。

「って言う訳だから、死にたくても外さないでね」

どういう訳か知らんが、突っ込めば時間が無駄になるという事は知っている。

「そう簡単に死にはしないんだろう？」

「確かに君の体は弄ったけど、それでも即死ぬほど強い力なの！だから外すな！」

「……と、言われてもな」

例え何度死んでも、輪廻転生で復活出来るから何も困る事は――

「“どうせ転生できるから困らん”とか思ってるでしょ」

「よく分かったな」

読まれた。顔に出ていたのだろうか。

ここ4000年ほど“何考えているか分からない”と言われる事は多々あったんだが、何故コイツは俺の考えている事が……神の力か。うん。

まあそんな事はどうでも良い。問題は次の発言だった。

「ダメだからね」

何を言っているのか分からなかった。

“ダメだからね”と言ったのは聞こえた。何かを禁止、否定する言葉だという事も分かった。だが、何が“ダメ”なのか分からなかった。

「…………何が？」

だから、いつもの冷静さは吹っ飛んで、少々間抜けな面をしてしまったのかも知れない。

「ぶわっははははは！」

神が、吹き出した。

――数分後――

「そろそろ落ち着け」

かれこれ数分。このアホ神は俺の顔を見て“ぶわっははははは、あっはははははははは、あはは、その顔……あははははは、あひっ、あっはあは、ははははははは、いっひひひひひひひ、ひひひひひひひ、ひあーっはひひはははは、ひーっ、ひーっ、腹が、あはははひは、いたっ、痛いひひひひひ（以下略）”と言った具合に腹を抱えて笑い転げて、

「はひーっ、はひーっ、ちょっと待って、ひひは」

……今に至っても笑い続けている。

「コイツは……」

自分の顔を見てここまで笑われたら、流石にイライラも限界が近い。そろそろ堪忍袋の緒が……

「さっきの顔……くっ、くく、くひひはは！」
「……」

プチ……プチプチプチプチプチプチプツツ！

なんかいっぱい切れました。

「死にさせやコラアア！！」

気が付けば、神の腹を容赦どころか理性も無く蹴り飛ばしていた。

——さらに数分後——

「腹は大丈夫か？ 二重に」

「なんとか大丈夫。二重に」

腹を抱えて話す神。その顔はもはや笑っていないが、腐ってもアホでも神だ、心配無用だろう。

「話を戻すが、何が“ダメ”なんだ？」

「随分戻ったね」

「十分は戻っただろうな」

「まあ、そんな事は置いとして」

この話を始めたのはコイツで、十分も間が空いたのもコイツのせいだが、突っ込まない。時間が無駄だ。

「君に死んでもらう訳にはいかないんだ」

「何故に？」

「死んでから転生するまでのデイレイ、覚えてるよね？」

「二・三年だったな」

なんでも、別の肉体に魂を馴染ませるには時間がかかるらしい。
詳しい事は知らんが。

「で、例の勢力が世界を破滅させるまでの猶予は、限界まで多く見積もって三年、少なくて一月。しかもその体は特別製で、もう一休用意するのに一年はかかる……もう分かったよね？」

「転生する頃には世界は終わった後……か」

「そゆこと」

それで、死んでもらっては困ると……全く、面倒な。

「人の為とか世界の為とか、そういうのは嫌いなんだがな……」

「そう言わずに頑張つてよ。イイ事教えてあげるからさ」

「イイ事？」

「魔法と数学の関係だよ。聞きたいでしょ？」

「うむ、興味深い」

釣られた気がするが、気にしない。どうせなら餌はおいしく頂いておこう。

「ちょっと待ってね……」

何やらセーブデータのロード中のような事を言いながら、どこからともなく障子と電気スタンドを取りだし、障子を立てて、その向こう側に隠すように電気スタンドを置いた。

影絵でもするのか、と考えていると、追加で台と“何か”を取りだして、電気スタンドと同じように、台と“何か”を障子の向こう側に置いた。

「おまたせ。始めるよ?」

「ああ」

確認に適当な返事を返すと、神は障子の向こう側に手を伸ばした。電気スタンドを点けたのだろう。障子に台の影と、長方形の影が映し出された。

「これな〜んだ?」

そう言つて長方形の影を指差した。

「分かる訳無いだろう」

「良いから答えて」

黒い長方形が何か、見ただけで分かると思つていいのか?

「……箱か?」

「じゃあ、こつすればどうかな?」

神が黒い長方形の置き方を変えると、長方形は黒い輪になった。

「なるほど、筒か」

「正解だよ」

そう言いながら見せられたのは、トイレットペーパーの芯だった。もつと他にも何かあつただろうに……ラップの芯とか、ちくわとか

が限界だろうけど。

「……で、これが魔法と数学の関係の何を示しているんだ？」

影遊びだけで終了、なんて事は無いと思うが。

「見方の問題だよ」

「見方？」

「例えば純水。無色透明で、触っても掴めない物。でも見方を変えれば、目に見えないHとOからなる物質でしょ？」

「確かにそうだが……それは科学の範囲だろう」

「科学と数学は切っても切れない関係でしょ」

「そうだな、それで？」

「君は最初に見た影を箱だと思ったけど、見る角度を変えると輪に見えたように、一つの視点からじゃ見えないモノなんて溶解するほどあるんだよね。だからいろんな角度から物事を見ると、より正しい姿を知ることが出来る。そして正しい姿を知っているほど、イメージは鮮明になる。イメージが鮮明なほど、魔法は強力になる。魔法はイメージが命だからね」

溶解するほどというのは、腐るほどの間違いか、単なるボケか……どちらにしろ、突っ込まないに限る。

「鮮明なイメージの為の別視点、か」

「そだね。それに、君が見た古い本に書かれていた反射魔法は、あまりにも曖昧なイメージしか持てなかったせいで完成しなかったんだ」

あの時、見られていたらしい。覗きとは良い趣味だ。

「数式は書いてあったが？」

「あれもまだ研究段階だったんだよ」

「そうか」

「満足した？」

「ああ満足だ。だが……」

「だが？」

「覗きとは感心しないな」

プライバシーの侵害、とかいう罪になるらしいし。

「覗きとは失礼な。れっきとした職務だよ」

「覗きがか？」

「だから覗きじゃないって！」

「だったら何なんだ」

「世界に存在する生命体の監視と管理！ アレだよアレ、確か……」

天光炯炯邪けいけいにして生かさず、とか言うでしょ？」

天網恢恢疎かいかいにして漏らさず、だ」

「そうそれ」

“天網恢恢疎にして漏らさず”とは、天の悪を捕らえる網は大きく目も粗いが逃がしはしない、という意味なのだが、“天光炯炯邪にして生かさず”って何だ。天の光は眩く輝き邪よこしまだが生かしはしない……意味分からね。

「何が“そうそれ”だ、アホが」

「あー！ アホって言ったなー！ 神をも恐れぬ背徳者め、成敗してくれる！」

「お前への侮辱は背徳にならん」
「なんでさー！」

道德の範囲に信仰が含まれていない……と言っても、面白くないな。

「尊敬に値しないからだ」

「どこが？」

「どこが尊敬できるんだ？」

「全部に決まってるよ。全能神たるこの私が尊敬に値しない訳無いでしょ？　むしろどこに“アホ”なんて言われる要素があるのか分かんない」

大した自信だ、アホのくせに。“バカ”と呼ばれる要素は自分で作ったようだがな。

「そこだろう」

「どこよ？」

「自分の欠点が分かっていない」

「欠点なんか無いもんね」

「“震死”も“天網恢恢疎にして漏らさず”も知らん奴が全能神だと？　冗談にしては笑えんな」

「本気だからね。笑えなくて当然だよ」

こんな奴が神様だから、世界が荒廃したり破滅したりするんだろ
うな。全くもって笑えない。

ネコミミメイドでもガチホモでも何でもいいから、もう少し頭の
シッカリした奴が神であって欲しかった。

この願い、天届く事あたわず。

「だからアホなんだろう」

「アホってゆーな！」

いい加減に、このアホの戯言に付き合つのも飽きた。挑発して現実世界に戻させよう。

「黙れバカアホゴミボケ（知性の）絞りカス」

「そこまで言うか!？」

「うるさい、脳内ラフレシア畑」

「……もう許さん、後悔するがいい!」

そう言うなり拳を構え、突進してくる神。その速きこと、まさに神速。速過ぎて青っぽく光った気がするが、ドップラー効果だろうか？

「遂に実力行使か、やはりあふおっ!」

神速の神拳を受けた俺は、意識もろとも吹っ飛ばされた……と思う。意識が飛んだから吹っ飛ばされたかは分らないが、どうせ思いつきりやられたに決まっている。

——現実世界——

「朝……か？」

目覚め、最初に見たものは曇天^{どんてん}だった。そのため今が朝なのか昼なのか、はたまた夜なのか分からない。

何故起き抜けに空模様が視認できるかというと、ここが魔法学校の校舎の上（屋根）であるからだ。

下方が何やら騒がしかったので、吹きつける風を感じながら、何

事かと考えたが、原因はすぐに分かった。いや、思い出した、の方が適切だろう。眼下に広がる魔法学校の土地を見渡すと、昨日の爆心地に大勢の人が老若男女問わず集まっていた。

「アリのようだな」

さて、人がアリのようでもゴミのようでもどうでも良い、ここから降りるのが先だ。幸い、人は全員爆心地に集まっている。逆側に降りれば見つかりはしないだろう。

という訳で逆側に移動し、誰もいない事を確認してから飛び降りる。

「着地成功」

特に問題無く着地。一階建てでも屋根の上から飛び降りれば、足が痛むなりなんなりしても良いはずだ。二階建てだから足の一本くらはいは折れるはずなんだが……例え猫でも無傷では済まないだろうに。

……まあいい、爆心地に行って傍観者と化すか。張本人だけど。

——歩くこと数分——

爆心地に到着。野次馬どもはクレーターを数歩下がったあたりから見ていた。

……にしても、野次馬多いな。全校生が野次馬化しているのか、これは。

ここまで騒ぎになるとは、やれやれ、面倒な事にならなければ良
いが、と行く末を案じていると、やたら長い青髪と乱雑に切られた
赤髪の二人組を見つけた。

「何の騒ぎだ、これは」

すつとぼけて話しかける。あたかも知らないかのように。

「あ、ゼロ。おはよう」

話題を振ったにもかかわらず、目にくまが出来ているにもかかわ
らず、挨拶が先か。流石姫様、完璧だな。それに比べてもう一人は

……

「あなた、今まで何してたのよ」

挨拶は無しか。俺もだが。

「寝てた」

「寝てたあ？」

「そうだが」

「アレ、聞こえなかったの？」

「アレ？」

どうせ爆音の事だろうけど、知らないふり知らないふり。

「爆音よ。私は聞いた瞬間に目が覚めたわ」

俺は聞いた瞬間に鼓膜が大破した。いつの間にか完治してるけど。

「私も。その後は怖くて眠れなかったわ」

それで目にくまが……俺のせいだ、許せユリア。

「なのに、よく今まで悠々と寝ていられたわね。よく眠れたかしら？」

「ああ、よく眠れた」

ユリアには悪いが。

「……」

返す言葉も無い、か。

「で、何なんだ？ この騒ぎは」

「その爆音の原因が起こった場所みたいよ」

「そうか」

そりゃクレーターがあつて、辺りの土が焦げていたら誰だってそう思うだろうな。騒ぎの張本人だから全部知ってるけど。

「コレ、どこの誰の仕業なのかしらね」

「意外と身近な奴かもな」

今お前と話している奴とか。俺だけど。

「例えば？」

「ユリアとか」

「私、火属性の魔法は使えないから」

「いくらユリアが優秀でも、流石に無理よ」

「クレスティア、お前とか」

「こんな魔法が普通に使えてたら、魔法学校なんかとつくに卒業しているわよ。同じ理由で全生徒は疑われていないわ」

なるほど、俺も疑われていないのか。

つか、爆発が起きた時は寝ていた、という弁解はしないんだな。

「そう言うぜロだったりして」

ユリアが笑いながら核心を突いた。ユリア、恐るべし。

幸い、顔は引きつらずに済んだ。が、クレスティアに疑われたらしく、疑念のこもった視線が向けられる。痛い。

「……そう言えばあなた、魔法の実力は？」

「教師に褒められる程度には」

「怪しい……」

「そう言われても、俺がわざわざここで爆発を起こす理由が無い」

「……確かにそうね」

納得したらしい。“理由が無い”とは言ったが、“俺じゃない”とは言っていないのにな。

「一体誰が、何の為にこんな事をしたのかしら？」

「誰だか知らないけれど、さっさとつ捕まらないかしらね。父上も大変だし」

「私のお父様もね」

とつ捕まる？ まさかとは思っが……

「軍を使つて犯人搜索でもしてるのか？」

「そうよ」

「今は居ないけれど、夜が明けるまではここにも兵士が居たらしいわ」

軍を使っているという事は……ヘタすりや罪に問われるな。国家反逆罪とか。死ぬなと言われたばかりだし、面倒臭そうだし、捕まる訳にはいかないな。

「ゼロ、難しい顔してどうしたの？」

この場合、この国に対して敵意を持つていても思われるのだろうか。甘い汁を貪りながら、安住したいとは思っているが。

いや、疑いの目を向けられていないのなら、堂々としていれば問題は無いが。

「ゼロ？」

「ん？ ああ」

しまった！ 怪しまれ――

「頭でも痛いのか？」

――てないか。

「いや、こんな爆発を起こせるのはどんな奴だろうか、と思ったただけだ」

鏡を見れば分かるだろうがな。

「そうね、私も会ってみたいわ」

ユリア、お前の目の前に居るぞ？

「目的は何なのかしらね？」

目的も理由も無かったりして。事故だし。

……そろそろ、話題を変えるか。

「そう言えば、今日は授業しなくていいのか？」

「アレが見えないの？」

「アレ？」

そう言つてクレステイアの指差した本日二回目のアレとは、魔法学校の校舎だった。窓硝子の半数が割れ、もう半数は溶解しており、壁には焦げ跡が付いていた。本人ながらびっくりの惨状だ。

「これは酷いな」

「で、校舎は使えないから自習だつて」

「そうか……」

ここまで被害が出るとはな……正直、予想外だった。
今後、腕輪を外して魔法を使わないようにしよう……

異世界十日目〱校舎使用不可〱（後書き）

1ヶ月以上放置して申し訳無いです。

期末テストが終わったので更新したのですが、点数が……アレでした。

当面の問題は冬休みの宿題と課題テスト……

……

ええい！ そんな事考えていられるか！

まだまだ続く！ 次回も期待されたし！ ただし更新は不定期！

読んで下さっている皆様に感謝！

以上！！

異世界十日目〱神と厄災の火炎〱（前書き）

あけましておめでとう更新〱

……嘘です、ごめんなさい。単に遅れただけです。

異世界十日目〱神と厄災の火炎〱

「ヴォルケニスの聖なる炎！」

俺の目に映る物。

曇天、大地、木々、そして赤髪の少女……と、迫る紅蓮の炎。

つまり、赤髪の少女が放った紅蓮の炎が、目前に迫っている。

俺がこの死の恐怖に飲み込まれるまで、残り時間は1秒も無いだろう。

さて、何故こんな状況になっているのか、少し現実逃避気味にア
おもいだナムネーシスしてみよう。

……ところで、“ヴォルケニス”って何だ？ 気になるな。

――少々現実逃避気味に想起開始――

「そつか……」

時刻は感覚的に午前八時頃。
場所は魔法学校の運動場。

「自習、か」

魔法の自習が出来る場所に移動しようと、ユリアとクレスティアに背を向けた時だった。

「待ちなさい」

特に呼び止められる理由はないはずだが、クレスティアに呼び止められた。

「何か」

「どこ行くのよ」

「どこでも」

「何しに？」

「自習」

「なら、一緒にしましょう？」

「断る。じゃあな」

申し出をしっかりと拒絶し、再び背を向け、歩き出した。

断った理由は特に無い。強いて言うなら、一人の方が気楽だから断った。

……断ったはずなんだが。

「おい」

後方の人影に話しかける。

「なに？」

「付いて来るな」

「私の行く方にあなたが居るだけよ」

「……そうか」

こんな事を言う奴に限って付いて来る。実際、何度か進行方向を変えてみたが、ピッタリとくっ付いて来た。

ついでに言うなら、こんな奴には何を言っても無駄だ。追い払う方法があるとすれば武力行使か実力行使だな。同じ意味だけど。

仕方がないので実（武）力行使。具体的に言えば、予告ナシに火炎球を投げつける。無論、結果的に焼死体になろうが知った事ではない。

火炎球を一つ作り、振り向きざまに投げつける。しかし、横に跳んで避けられてしまった。

……なかなか良い反射神経をお持ちのようだ。

「いきなり何するのよ!」

危ないだの不意打ちは卑怯だのと吠えているが、立ち去る様子は無いので無視して二発目を投げつける。しかし、同じように避けられてしまった。

「そっちがその気なら……こっちからも行かせてもらっわよ!」

一体どの気なのかは分からないが、反撃してくるらしい。

「焦がせ!」

詠唱と言うには短過ぎる言葉と共に、火炎球が飛来する。それを横に跳んで避け、お返しにと火炎球を送り付ける。やはり避けられ、再び火炎球が飛来する。

無論当たる訳も無く、避けて火炎球を撃ち返す。

向こうも同じように避けては撃ち返し、俺も避けては撃ち返した。

「死んでも知らないわよ！」

「自分の心配をするんだな」

避けては撃ち返し、また避けては撃ち返す。十回ほど繰り返したあたりで、なんとなく火炎球を二発撃ち返した。

今思えば、これが悪かったのかも知れない。

両方ともまっすぐ撃ったので、難なく避けられ反撃が来る。

二発撃てば、反撃も当然二発返って来る。

どこまで行けるのか気になったので、今度は三発撃ち返した。

返ってきた火炎球は、負けまいと三発。

この時点で確実に、泥沼に足を突っ込んでいた。

三発返ってきたので、今度は四発撃ち返す。次は五発、その次は六発と、この抗争は激化の一途をたどった。

撃たれては避けて撃ち返し、が繰り返される度に火炎球は増え、

「揺らめく炎、滅びの力……」

向こうも途中から詠唱魔法を使い始めた。もはや火炎球で無い物まで飛んで来る。

詠唱を妨害するなり詠唱中に止めを刺すなりすれば、勝つのは簡単だっただろう。しかし、興味本位で詠唱が終わるまで待った。

「我が意思に応え、紅蓮の矢となり燃やし尽くせ！」

炎の矢が無数に飛来……いや、襲来してきた時、興奮が頂点に達したと思う。

「消し炭になれ！」

熱くなっていたせいか、反撃の火炎球は二十発を超えていた。後に、よくそんなに撃てたものだ、と自分に感心したのはまた別の話。

泥沼に踏み込んだら引き抜けば良かったのに、これで頭から突っ込んでしまった。

恐らくアイツも本気を出したのだろう。

「天光集いて生まれし劫火の片鱗、今この地に再臨せん。それはこの世の全てを焼き払い、悪しき存在に滅びを与え、善き存在に祝福を与えり。それは正邪を分かち、滅びと祝福を与える聖なる神判なり。炎の神が断罪の力もて、我が前に立ち塞がりし愚かなる者に、裁きを下さん！」

——現実逃避終了——

……で、今に至る。

気付けば、全世界が紅い。

見渡す限り視界が紅一色なのは、頭から出た血が目に入った訳じやなくて、俺が紅蓮の炎に包まれているから。

俺が紅蓮の炎に包まれているのは、頭から油をかぶって火を付けた訳じゃなくて、クレスティアに焼かれているから。

で、こんな事になったのは俺の責任でもクレスティアの責任でもどっちでも良くて、もしかしたらもしかしてゲームオーバーかもしれない訳で。

よくよく考えたら生き残る要素が無い訳で。

……ああ、数え切れないほど何度も死ぬと、死ぬ直前まで冷静だな。

俺は静かに目を閉じた。

これで、この世界ともお別れか。

俺が死んだら、この世界は滅びるんだったな。俺には関係無いけど。

魔法、もつと知りたかったな。

アホ神に何を言われるだろうか。

次の転生先はどこだろうか。

文明はあるだろうか。

人類はいるだろうか。

猿の惑星とかだったら嫌だな。

死の世界とか……は流石に無いか。

とにかく、この世界ともお別れだ。もう二度とこの大地を踏む事は……

「えぶっ！」

後頭部と背中痛みが走る。どうやら後ろに倒れたらしい。とりあえず目を開けると、

「……死ななかったのか」

曇天が見えた。

「ゼロ！」

ユリアが心配そうな顔で駆け寄って来るのが見えた。やはり死んではないようだ。

つか、居たのかユリア。

上体を起こして辺りを見渡すと、ついさっきまでと同じ風景が目に映った。違う所があるとすれば、俺の周りの地面が焼け焦げているだけだ。

次に自分の体が気になったが、外傷も無ければ特に痛む所も無い。無傷と言っても過言ではないほどだ。

しかし、何故助かったんだ……？

不可解な事実を不審に思っているうちに、ユリアとクレスティアが駆け寄ってきた。

「ゼロ、大丈夫？」

「ああ、全く問題無い」

ユリアに手を差し伸べられたが、大丈夫だと目で訴え、自力で立ち上がる。

問題無いと言っても、ユリアは心配そうな表情のままだった。

それに比べて……

「あなた、何で生きているのよ」
「知るか」

全く心配していない上に、死んだ方が良かった、とでも言いた気だな。コイツは。

「何故かしら……気になるわね」

確かに気になるな、うん。
気になると言えば……

「1つ、聞きたい事がある」
「なに？」
「なにかしら？」

人間、性格の差は話し方に出るものである。

まあ置いといて。

「ヴォルケニスって、何だ？」

一瞬、クレスティアが固まった。

ユリアは俺が異世界人だと知っているので固らなかつたが。

「そんな事も知らないの？」
「ヴォルケニスっていうのは、神話に出てくる神様の名前よ」

嘲るような目で見る者と、親切に教える者。
人間、性格の差は対応にも出るものである。

「神話か……詳しく聞かせてくれないか？」

「長くなるわよ？」

「長いから話すのが疲れる、と言うのなら簡潔に話してくれれば良い」

「そう言う訳じゃないわ」

単なる気遣いか。

「俺は長くなっても構わない」

「じゃあ話すわよ。」

かつて、世界は混沌で満たされ、全ては無であつた。天も地も、空間すら存在せず、世界には混沌しか無かつた。いつしか混沌は形を作り、一つの存在を生み出した」

混沌が何かは知らないが、混沌しか無かつたのに形を作るとはおかしな話だ。粘土を放置していたら勝手に人形ひとがたができた、と言うようなものだ。

この神話、一気に胡散臭くなつたな。

そんな俺の思いも知らず、ユリアは話し続ける。

「その最初の存在こそが、主神レガリシオンである」

その“レガリシオン”と言うのは、あの金髪アホ面の事か？

「主神は何も無い世界が退屈だったので、両手の小指を切り落とし、右手の小指から光の神レイディシンを、左手の小指から闇の神ディゼロイドを生み出した。そして、彼らと混沌で色々なモノを作つて楽しく遊んだ」

“ 退屈だったの ” と “ 遊んだ ” の部分があのアホを彷彿^{ほうふつ}とさせるな。

「その後、一通り遊び尽くして退屈になった主神は、新たな世界を作る事にした。

主神は混沌で箱を作り、その中に光の神と闇の神が作り出したモノ……天、地、日、月、時間、生命などを詰めて、不安定だが新たな世界が出来た。

それがこの世界、ヴェルヘリウムである」

この世界を作ったという事は……主神 “ レガリシオン ” の正体は、やはりあのアホだな。

“ 混沌 ” で作った物を詰めたという事は、この世界の全ては “ 混沌 ” とやらで出来ている。つまり、混沌 “ マナ ” か。

つか、この世界は “ ヴェルヘリウム ” って名前なのか。名前、付いてたんだな。

「その後、主神はヴェルヘリウムのありとあらゆるモノを二つに分け、その片方を光の神に、もう片方を闇の神に管理させた。

しかし、世界は何の進展も無く、主神を退屈させた。

原因は双方が正反対であったが故に、完全に不干渉だった事だと気付いた主神は、光の神の力と闇の神の力を混ぜ、それを属性という概念で四つに分けた。

その結果、炎の神ヴォルケニス、水の神ウォルセイク、風の神ラフェイグル、地の神フォルグラナが生み出された」

ここでようやく “ ヴォルケニス ” が出てきたか。つまり、 “ ヴォルケニスの聖なる炎 ” というのは、神の炎か。俺からしてみれば、厄災以外の何でもないが。

「そして、彼らを箱に入れ、仲良く遊ぶように命じた。

結果、世界は安定し、生命が進化を遂げ、人間が生まれた。

人間は進化の果てに、知能を手に入れた。

そして、知能を手に入れた人間は、神に代わって世界を治めた」

あー、あるある。こういう“人間は神に選ばれた生命体である”みたいな思想。

こんな思想が存在するから環境問題を引き起こすんだ。森林伐採、水質汚濁、大気汚染、乱獲その他諸々。で、俺の元居た世界は滅びましたと。

しかも“主神が小指を切り落とし”って、神様は人間と同じ形ですか。人間と神が同じ形をしているとか思ってるから“神に選ばれた”とかほざけるんだよ。大樹や山岳を拜んでいる奴らの方がよっぽどマシだ。

「神は地上を人間に任せ、混沌の地、天上世界ディステナイアから、人々を見守っている。

……と、だいたいこんな感じかしらね」

最後に神様は天上に退場か。しかも見守っているのは“この世界”じゃなくて“人々”だと？ 思い上がるのもいい加減にしゃがれクソ共が！

「……ゼロ？」

そもそも勝手に社会を形成して、勝手に宗教作り上げて、勝手に自然を蹂躪して。それでも天罰が落ちないのは、テーマーらが信じてるような神様は存在しねえって事なんだよ！ とつとと気付きやがれ！ たかがサルの方が抜けたような生命体の分際で何が神に……

「どうしたの？ 怖い顔して」
「いや、どうもしないが」

いつの間にか思考が逸れた。確か……神話を聞いていたんだっ
か。

「ねえ、もう終わった？」

振り向けば、いつの間にか蚊帳の外に置かれていたクレステイア
が、眠たげな顔で佇んでいた。

「なんだ、まだ居たのか」

「何よ、その言い方」

「別に」

ちなみにこの“別に”は、“別にお前が居なくても話が進むから、
居なくても問題無いのだが”の略である。

「で、終わったの？」

「ええ、終わったわ」

ユリアの答えを聞くと、クレステイアは“ん”とも“ぬ”とも聞
こえる変な声を、のど以外のどこからか出しながら伸びをした。

“よくそんな声が出るな”と“そんなに暇だったのか”の両方で
驚くばかりだ。

「そう、じゃあ本題に戻るけど」

「本題？ 何かあったか？」

「時間を逆行すれば分かるんじゃない？」

「ティア……そんな事出来たら誰も苦労しないわ」

ユリアがガツクリとうなだれながら、クレスティアの肩に手を置いて言った。

「ユリア……冗談に真面目に突っ込むのはやめて」

クレスティアも、ユリアと同じようにガツクリとうなだれながら、ユリアの肩に手を置いて言った。

「あら、冗談だったの？」

「そうよ」

「そう、私はてっきり本気で言っているのかと思ったわ」

「流石にそんな事を本気で言う訳無いでしょ」

「でもティアだし」

「何よそれ、どういう意味よ」

やめるクレスティア。そんな事を言くと、思い出たくない過去を引合いに出されるぞ。

「主神の名前を槍の一種だと思っていた人だし、と言う意味だけだ」

「……何だこれは。」

過去の勘違い話を持ち出された時、最近の事ほど嫌な話になるものなんだが……昔の事ほど嫌な話とは珍しいな。世界観的に。

「随分昔の話じゃない！」

俺は随分昔の話じゃない事を祈る。

「だけど、事実でしょ？」

俺は事実ではない事も祈る。

「そうだけど、そもそもユリアにそんな事を言う資格があるの？」

「……何が言いたいのかしら？」

ユリア、お前は何故クレスティアに反撃の余地を与えるんだ？
過去を引っ張り出されるのは目に見えているだろうに。

それは良いとして、次はユリアの思い出したくない過去が暴露されるのか。

「不老不死の薬が作れるって信じている人に、そんな資格なんて無いって言ってるのよ！」

……これまた物凄いのが出てきたな。しかも現在進行形か。
そしてクレスティア、何故かお前の方が負けている感が拭えないぞ。

「そんな事言っと、完成しても分けてあげないわよ？」

「無理だって言ってるでしょうが！」

半分は遊びなのだろうが……もう駄目だ、これ以上は見るにも聞くにも堪えん。さすが異世界。ここ1000年の常識が覆されそうだ。

しかも、周囲の視線を多量に集めている。当人らは気付いていないようだが。

この二人を止める理由も無いし、見守ってやる理由も無い。そう

思つて、どこか別の場所へ行こうとした時、

「どこに行くのよ」

クレスティアに肩を掴まれた。またお前か。

「どこでも」

「何しに？」

「なにも」

ただ、なんとなくこの空間に居たくないだけだ。

「行かせないわ」

「何故に」

「まだ、どうしてあなたが燃え尽きなかったのか分かっていないもの」

燃やし尽くす気だったのか。

「俺がその答えを知っていると思うか？」

「少なくとも、あなた以外で知っている人は居ないでしょう」
「だらうな」

と言つても、あのアホ神なら何か知つてそうだがな。いや、アイツは人じゃなくて神か。

……ん？ 神？ 何か引つかかるな。

「でしょう？ さあ、答えてもらつたわよ」

……ああ、そうか。この黒い断熱服が熱を防いだのか。アイツも

たまにはまともな物を作るじゃないか、見直したぞ。――涅槃寂靜（ねはんじやくじやう）
「――？分の――」ヨクト「10の・24乗」ぐらいは。

しかし、露出している顔と手先まで無傷なのは何故……いや、もう神の力でいいか。考えても無駄だ。

「ちょっと、早く答えなさいよ」

「神の御加護じゃないか？」

嘘は言っていない。実際に、アホな神のお陰で助かっている。たぶん。

「まさか、本当に祝福を……」

祝福？……ああ、あの実戦には不向き極まりない胡散臭くて長ったらしい詠唱で、祝福がどうとか言っていたな。

確か、“天の光が集って生まれた焼き尽くす炎の一部が、今ここに再び降り現れる。それはこの世界の全てを焼き払い、悪人に死を与え、善人に神の恵みを与えた。それは善と悪を分け、死と神の恵みを与える神聖なる神の裁きである。炎の神様、あなたの罪を断つ力をもって、私の目の前に立ち塞がる愚か者に、裁きを下してください”とか言っていたか。

つまり、俺は神の裁きで善とされたから、燃え尽きずに立っていると解釈した訳か。あり得ないだろうが。

理由は簡単。俺の善悪は置いといて、仮に炎が悪だけを焼くのであれば、何の罪も無いはずの地面が焼け焦げたりしないだろう。この時点で、さっきの炎に善悪の区別が無い事が分かる。あれは単なる灼熱の炎だったんだろう、地面に罪があるとは考えられないし。

所詮炎は炎、気体がイオン化してプラズマを発生させているだけの、ただの高温だ。“聖なる神の力”なんぞ宿る訳が無い。

そういえば、元の世界にも炎に“聖なる神の力”が宿る、みたいな思想があつたな。

例を挙げれば魔女狩り。炎には浄化の作用があると信じられていたために、魔女狩りでは多く火刑が用いられた。

が、焼かれて死ぬ前に窒息するか、ショック死する事が多かった。炎、意味無いな。窒息しなくても焼け死ぬけど。

ちなみに、火刑で死ななかった奴はいない。つまり、火刑にされたのは真正銘本物の魔女ばかりだった、という事になるのだが……あり得ないな。

まったく、人間の思想とは恐ろしいもんだ。

「本当に、神の御加護なの？」

「多分な」

コイツは“聖なる神判”とやらで、俺は善人だ、という判決が下されたと思っているようだが、あえて放置。面倒臭いし。

「じゃあ……もう一度燃やしてみようかしら。神の御加護があるんでしょ？」

そう言つてクレスティアは右手を俺に向けた。どうやらまた燃やされるらしい。

「お前、死ぬか？」

きつと無駄だろうが、コイツに付き合うのも面倒だ。二度と立ち上がれないよう逆に焼き尽くしてやるう、と喧嘩を売り返した瞬間、

ぐぎゅるるる……

どこからか、妙な音が聞こえた。

「二人とも止め……あれ？」

何の音かと音源を探していると、ユリアが再戦を止めようと間に割って入って来た。が、時少し遅し。俺の戦意はいつの間にか行方不明だ。

結局、音源らしき物は何も見つからなかったので、正面に視線を戻すと、何故かクレスティアが顔を真っ赤にして俯いていた。

……なるほど、音源はコイツの腹か。

曇天なので良く分からないが、もうじきお昼時なのだろう。

「さて、では良いお昼を」

クレスティアのせいで何とも言えない空間になったので、エスケープする事に。

「ゼロはお昼食べないの？」

「やりたい事があるんでな」

何も無いけど。

「そう、じゃあさようなら」

「ああ、じゃあな」

早くこの空間から逃げ出したい。

そんな思いに身を任せ、俺は全力で駆け出した。行き先も決めず
に。

異世界十日目〜神と厄災の火炎〜（後書き）

今回のタイトルは「異世界神話」の予定だったのですが、なんとなく急遽変更。

さて、最近一週間に一度更新をするってのが全然守れていない気がしますね。

冬休みの宿題がもっさり残っていたり、成績が悪くて生きるのが辛かったりするのは置いといて。

もっと頑張りたいなあ。

異世界十日目〱子の次は親〱（前書き）

戦闘描写あり、残酷描写なし。
上手く書けていると良いなあ。

異世界十日目く子の次は親く

ユリアとクレスティアから逃げるように駆け出した後、何もする予定が無い事に気付き、寮の前で立ち止まった。

寮に戻ってする事は無いし、魔法学校にも用は無い。昼になったが食事の必要も無い。とりあえず街に出て、それから考えよう。

そう結論を出し、魔法学校の門に向かって歩き出す。

今日はこれ以上面倒事が起きないよう、神に祈りろうかと思ったが、どうせアイツに祈ったところで、恩恵を得る事は出来ないだろう。そう思っ^て祈るのはやめた。

そのせいか、また面倒事が降りかかる事となる。

「待て」

記憶に無い声と共に、兵士っぽい誰かが二人現れた。槍を持ち、顔も見えない兜と動き辛そうな鎧に身を包んでいる。そのせいで、年齢も性別も分からない。そして、その胸にはどこかで見たような紋章が刻まれている。

あの紋章は確か……いつぞやの小隊長ユリにも付いていたような気がする。と言う事は、こいつらは国王の差し金か。

「ゼロ、だな？」

「そうだが」

「あなたを拘束します」

甲冑曰く、俺は拘束されるらしい。

……俺、何かしたか？ いや、爆発したけど。
何にせよ、素直に拘束される気はサラサラ無い。

「遊び相手なら他を当たれ」

「そうはいかん」

「大人しくしていれば危害は加えません。投降しなさい」

甲冑が投降を促す。

なんだか、上から目線な気がするな。

「危害は加えない、か」

「そうだ」

……少々、赤髪クレステイアの少女のせいで、イライラカリカリしていたのかも知れない。いや、実際にイラカリしていた。

無視すれば良かったのに、

「知るか、死なないうちに消えろ」

わざわざ挑発してしまった。後悔はしない。しても仕方ない。

「……今なら、発言の撤回を認めよう」

「出来れば穏便に済ませたいので、もう一度言います。投降しなさい」

穏便に済ませたい、ね。だったら何故槍を持っているのか、本当に穏便に済ます気があるのか、と3年ほど問い詰めたところであ

る。

「二度も言わせるな。消すぞ」

「そうか、ならば仕方ない」

「実力行使です」

甲冑の二人が槍を構え、じりじりと距離を詰める。その距離5mほど。

あの槍……柄は木製か。膝を入れれば折れるな。よし、こいつらの自信と一緒にへし折ろう。

「勝てる気では、哀れ過ぎて掛ける言葉も無いな」

思っていたよりイライラも大きかったらしく、挑発が勝手に口から飛んで行く。

そして、片方は限界らしく、

「うおおおお！」

「あつ、ダメです！」

相方の制止も聞かず、アホみたいに突っ込んできた。かかったな、愚か者が。

心臓に向けて鋭い突きが繰り出されるが、遅い。

刃の側面に右手の平を当てて軌道を逸らし、左手で柄を掴み、右膝を入れて槍をへし折る。

「しまっ……」

槍を折られたと分かっているにも勢いを殺せず、止まらずに向かって来る甲冑の胸に、右腕を叩き付ける。

甲冑は成す術も無く吹っ飛び、門に激突して動かなくなった。

あーあ、相手が俺じゃなければ、もう少し善戦できただろうに。

「ざまア無いな」

「バケモノ……」

もう一人が呟く。

足元を見れば後ずさりをしていたので、こちらから攻撃しに駆け出した。

「なっ！」

「喰らえ！」

瞬く間に、手を伸ばせば届く距離まで間を詰める。そして大地を蹴って跳び、右手を顔面に突き出した。

……少しばかり、油断していたのだろう。

突き出した右手は、虚空に直線を描いた。

右手が顔面を捕らえる前に、甲冑がしゃがみ込んだのだ。

外したか……

勢いのままに甲冑を飛び越え、着地に体勢を崩した瞬間、

「せいっ！」

背後から斬りつけられ、背中に痛みが走る。

「チツ……」

痛みからして傷は浅く、出血量も多くないし、どこかの筋をやられた訳でもない。だが……不覚だ。傷を負わされるとは。

コイツは殺す、ブチ殺す。

殺意を剥き出しにして睨みつけると、甲冑は怯んで一步後退する。その隙に跳び込み、蹴りを入れ――

「そこまでだ！」

――ようとした時、背後からどこかで聞いた渋い声が響いた。

「誰だ」

「久しぶりだな」

「隊長！」

振り返ると、門の影から声の主が現れた。いつぞやの赤髪で渋くて落ち着いている常識人……と、思われるオッサンだ。

名前は……えーと……

「そこまでって、どういう意味ですか！」

オッサンの名前を思い出そうとしていると、甲冑が声をあげた。

「そのままの意味だ。彼には勝てないからな」

流石オッサン。少しは見る目があるようだ。

「隊長は、私たちが敵わないと分かっているながら、私たちに命令したのですか？」

「……私は、君たちに何と言った？」

オッサンはため息をつき、甲冑に問いかけた。

「隊長は、“黒髪の、ゼロと言う少年を連れて来てくれ、出来るかな？”と言いました」

甲冑が問いに答える。

「それで何故、君は彼と戦っているんだ？」

「彼が抵抗してきたので、仕方なく」

「君は、彼に何と言った？」

「えーと、“あなたを拘束します、大人しくしていれば危害は加えません”と言いました」

「彼は、君に何と言った？」

「“遊び相手なら他を当たれ”です」

「それで？」

「大人しく拘束される気は無かったようなので、実力行使に出ました」

「……私は、彼を“連れて来てくれ”とは言ったが、“拘束しろ”とは言っていない」

「おいオッサン、どういう事だ」

オッサンが問い、甲冑が答える、を長々と繰り返すオッサンと甲冑に痺れを切らし、会話を割り込んだ。

「何と無礼な口のきき方を！　この方が誰か分かって……」
「いや、良い」

「……隊長は、この人と知り合いなのですか？」
「そうだが」

ちよつと待て。

「一度会っただけを知り合いと言うのか？」
「言わないのか？」
「知らん」

どうやらオッサン中では、俺は知り合いらしい。

「で、それがどうかしたか？」
「どうして隊長が罪人と……」
「待て、罪人だと？　俺が何をしたって言うんだ」

爆発を起こしたが。

「罪状は知らない。けど、隊長が連れて来いと」
「おい隊長」

オッサンに“どういう事だ”と、視線で問い詰めると、オッサンは頭に手を当てた。

「……彼は罪人ではない」
「じゃあ、どうして……」
「王が話をしたいそうだ」
「国王様が！？」

甲冑は、俺を罪人だと思って連れて行こうと実力行使に出たが、俺は罪人じゃなくて、国王が話をしたいだけで……

「つまり」

「勘違いだった訳だ。すまないな」

「……背中が痛むんだが」

“勘違いだった、すまない”の一言で全て済まそうとしても、そうはいくか。

「こちらで治療をさせてもらおう」

「それだけか？」

冤罪なら、出来る限り搾り取る。それが、今までの人生経験から弾き出された普通の対応だ。

そして幸運にも、相手は国だ。揺すれば実が落ちる金の生る木だ。全力で搾る以外の選択肢は、存在したとしても選ばない。

「……詳しい話は、王宮に着いてからしよう。来てくれるか？」

「断ったら実力行使か？」

「嫌だが、そうせざるを得ない。仕事なんぞな」

……もう面倒だ。

「分かった、行こう」

「うむ、ならば早速……」

「待て」

「なんだ？」

「アレ」

何故呼び止められたか分からない、という顔をするオッサンに、視線で対象を指し示す。

その対象は……ぐったりとして動かない、胸のへこんだ甲冑だ。

「忘れるところだった、すまん」

忘れるな、部下だろう。

そんな俺の心の突っ込みを背に受けながら、オッサンは甲冑を軽々と持ち上げた。見る限り、人間と鎧で80kgはありそうなんだが……

「怪力だな」

「片手で吹き飛ばしておいて、それを言うか？」

そう言っ、甲冑を担いで歩き出すオッサン。それに続く俺ともう一人の甲冑。

……背後から、重く痛々しい空気が漂ってくるのは何故だ。

——歩くこと、十数分——

そびえ立つ王宮、広がる庭。
相変わらず無駄にでかくて広い。

「これで二度目か……」

一度目はオッサンに、二度目はユリアに連れられてだ。

そう言えばいつか、ここに兵士として勤める話があったな。そう
なると、毎日この風景を見て、いつ見ても無駄にでかくて広いな、
とか思うのか。

「君は戻って良いぞ」

「……失礼します」

王宮に着くと、甲冑は自分の日常へと戻って行った。

「さて、傷の治療だが」

「それはもういい、治った」

背中痛みは全く無い。それどころか、まるで元から何も無かつ
たかのように、斬られた場所に触れても平面な肌以外は何も無かつ
た。

「そうか」

背中傷が勝手に治っていたのは、恐らくアホの施した改造の結
果だ。

そしてオッサン、落ち着き過ぎだ。もう少し驚けよ。

しかし、これで傷を負わされたという理由で搾れなくなった。ま
あ、金は無くても生きて行けるような体だから良いか。

「では、少し待っていてくれ」

そう言つと、オッサンは甲冑を担いだまどこかへ消えた。少ししてから戻つて来たが、その時には甲冑を担いでいなかった。

「どこに置いて来たんだ？」

「医術研究所。さて、こつちだ」

オッサンに連れられて王宮内を少し歩くと、ある小部屋の前で立ち止まった。

「ここだ」

確かここは……ユリアと来た時と同じ場所だな。

オッサンは扉を開けて中に入る。それに続いて中に入り、中に居た人物に声をかける。

「久しぶりだな、国王陛下」

「良く来た、まあ座れ」

以前と同じようなやり取りをし、以前と同じようにリグレイス王の正面に腰掛ける。以前と違う事といえば、三人目が少女から中年男になっただけだ。

目の前には、真剣な眼差しで俺を見つめるリグレイス王。その隣には隊長。オッサン。どうやら真剣な話らしい。

「で」

「うむ」

「何用だ」

率直に茶髪の国王に問う。

「魔法学校爆破事件について、少し話を聞きたくてな」

だよな……まさか、バレたのか？

「そうか、で？」

「君は犯人を知らないか？」

本当に知らないのか、この王様はおおつつつても遠回しな話の方が好きなのか。

「……俺を疑っているんだな」

言うまでも無く後者だ。でなければ、俺が今ここに居る訳が無い。無いんだが……この国王の目は、どう見ても俺を疑っているようには見えない。俺が犯人じゃないと思いつつも、可能性があるから確かめようか、という目だ。

「まあ、そうだ」

「隠す気無しか」

「隠しても仕方なかるう」

だったら、何故あんな遠回しな言い方をしたんだか……

「俺が犯人だという証拠は？」

「魔法学校からの報告によれば、君の魔力量は常人の数十倍、もしくはそれ以上。あの規模の爆発を十分に起こせる」

チツ……余計な事し腐ってくれやがりましたな、魔法学校の教員

ども。

「しかも君は昨日、あの時間に別の場所に居たという証拠も無い」

まあ、そこに居たからな。あつたら俺の偽物がそっくりさんだな。というか、深夜に居た場所の証言を、誰がしてくれるのか。

「そして、魔法陣によるものとも考えにくい」

「何故だ？」

「あの規模の爆発を起こす魔法陣を描くには、相当時間がかかる。昼間には何も無かったようだし、夜中に描けるとも思えない」

確かに。この世界に赤外線スコープが存在すれば、話は別だったかも知れないが。

「君以外にあんな事が出来る人間は、この国に二人いるが……その二人は一昨日からずっと魔導器研究所に籠りっぱなしだ」

一昨日からって……やっぱりアレか、優れた人の感覚は普通の人と違うつて奴。マッドサイエンティストのお仲間さんか？

「最後に、爆発物らしきものは発見されなかった」

あの爆発は魔法による物で、あの条件下で俺以外にそんな魔法が使える奴は居ないと。

正解だ。だが、一番大切な要素が抜け落ちている。それは……

「動機は？」

動機だ。それが無い限りは、どんな奴でも犯人として捕らえる事

は出来ない。

そして、ただの事故であるあの爆発に、動機は全くない。

「それだよ」

「は？」

それって、どれだ。

「動機がいまいち分からない」

「動機も分かっているのに呼んだのか？」

「君が犯人だったら、素直に吐いてもらおうと思ってな」

「違うけどな」

嘘は言っていない。何か目的があって爆発を起こした訳じゃないから、犯人ではない。

張本人であるだけで。

「嘘だろう？」

「はいそうです、と言うと思うか？」

「だろうな」

はは、と声をあげて笑うリグレイス王。

この国王様、取り調べには不真面目過ぎる。何故か、犯人ではない、と半分くらいは信じられているようだし。

「おいリグレイス、もう少し真面目にしたらどうだ？」

リグレイスと言うのは国王の名前で、それを“おい”と軽々しく呼んだ無礼者は……オッサンだった。

「と、言われてもな。全く分からないんだ、どうしろって言うんだよ」

「知るか、考えろ」

リグレイス王も普通に話している。と言うか、砕けた口調に変わっている。

この二人、相当仲が良いな。

「オッサンはこの王様と、どんな関係なんだ？」

それに、オッサンも口調変わり過ぎだろ。仕事中とそれ以外を分けているにしても……あれ？ 今は仕事中じゃないのか？ 国王の護衛って言う仕事中。

まあいいか。

「昔からの友人だ」

「そうか」

「それはそうと、その呼び方、いい加減やめてくれないか？」

「どう呼べと？」

「……レギ、とか」

ヤギの仲間か？

「誰だ？ それは」

「私だが」

「新種の子獣かと思っただぞ」

「お前の場合は子獣だな、レイギルド」

「だったらお前は子獣だな」

一瞬、“レイギルド”が何なのか分からなかったが、答えは考えるまでもなかった。

「オッサン、レイギルドって名前だったのか」

「名乗らなかったか？」

「ああ」

「では、改めて自己紹介だ。私はレイギルド・アレス・ディアレクトだ」

レイギルド・アレス・ディアレクト、ね。

……ん？ ディアレクト？

「オッサン、もしかしてクレステシアの父だ」

やっぱり。

ユリアとクレステシアは父娘揃おやこって友人なのか。母親は知らないが。そう言えば、ユリアの母親を知らないな。どんな人なんだろう、やっぱりユリアそっくりなのだろうか。

「娘は元気か？」

「焼死体を作ろうとするぐらい元気だ」

「そうか、それは良かった」

いや、突っ込めよ。相変わらず落ち着いてんな。

「さてと、俺はそろそろ帰りたいんだが」

「駄目だ。まだ君の疑惑は晴れていない」

疑惑と言っか、大当たりだが。

「可能性だけで拘束されるのはどうかと思うが」

実際に俺がしたんだが。

「確かに。じゃあ君は、誰の仕業だと思う？」

俺……なんてアホみたいに白状する気は微塵も無いので、適当に話を逸らして切り抜ける。

「そもそも、単なる事故だったりしてな」

「事故？」

「そうだ。魔法学校の生徒が無茶をして、魔法が暴走した……とか」

無茶はしていないが、暴走はした。俺も一応魔法学校の生徒だし。魔法が暴走したら、本来以上の力が出たりしそうだし。

「夜中にか？」

「努力している所を見られなくなかったんじゃないか？」

「そんな奴がいるのか？」

「さあな」

世界は広いから、そんな奴が一人ぐらい存在しても良いと思う。

ここはファンタジックな異世界だし、魔法がある時点でもう何でもアリだ。

「他に候補は？」

「他国からの攻撃、とか」

「他は？」

あー面倒臭い。この辺りで適当に打ち切ろう。

「……俺はここに助言をしに来た訳じゃないんだ。後は自分で頑張ってくれ」

「そうか……時間を取らせだな、もう帰っていいぞ」

帰っていいと言うリグレイス王。

意外にアッサリと帰してもら——

「待て」

——えなかった。

オッサンもとい、レイギルドに呼び止められた。

「まだ何か用があるのか？」

「私と手合わせ願いたい」

何を言い出すかと思えば、そんなことか。答えは勿論、決まっている。

「断る」

「だったら——」

「後ろから襲い掛かるのか？」

「良く分かったな」

「……親子でそっくりだな、仕方ない」

逃げてても良いが、面倒事は先に潰すに限る。
親子共々いい加減にしろ、と言いたいが。

「レイギルド、お前も相変わらずだな」

「相変わらず?」

「強い奴を見ると、体が戦いたくなるんだから仕方ない」

要するに戦闘狂か。娘の方もそうなのか? だとしたら……うわ、めんどくさっ。

「で、ここですとは言わないよな」

「そうだな、移動しよう」

いくらなんでも、こんな狭い部屋の中では戦えない。

——移動中——

着いた所は、曇天の下の訓練所。
何故か、誰も居ない。

「誰も居ないな」

「昨日の件で皆出ているからな」

「そうか」

可哀想に、張本人がここに居ると言うのに。

「で、俺は素手か?」

「君ならそれでも十分戦えるようだがな」

「抜かせ」

甲冑を殴り飛ばした事を言っているのだろう。確かに素手でも十分戦えるが、武器はあった方が良い。

「武器庫はこつちだ。武器庫と言っても、あるのは刃を潰した練習用の物ばかりだな」

「そうか」

そう言いながらオッサンレイギルドが開いた扉の先には、剣槍斧弓その他諸々、所狭しと銃砲刀剣類所持等取締法（略して銃刀法）違反物が並んでいた。この世界に銃刀法なんぞあるまいが。

つい最近まではもう二度と見る事はないと思っていたのに、こうして剣やら槍やらが並んでいる光景を目の当たりにするとは。魔法さえ無ければ、ただのタイムスリップだ。

そこら辺から適当に掴んで引っ張り出すと、出てきたのは大剣だった。

振り回す力の心配は無いが、体重もそれ相応に無いと武器の重さに振り回されてしまう。俺の体重が転生前と変わらないなら、振り回すには大きく、重過ぎる。

そう思っ大剣を戻し、また適当に剣を引っ張り出すと、今度は片手半剣が出てきた。いわゆるバスタードソードだ。重さは3Kgほどか。

これは俺に、でかい武器を振り回せ、と神が言っているのか？

「何をそんなに悩んでいるんだ？」

「どうやって手加減してやろうか、なかなかいい案が無くてな」

この状況を勘繰っていると、レイギルドに声をかけられたので、冗談を返しておいた。“そうか”の一言で済まされたが。

もうこれでいいか、と片手半剣で妥協して武器庫から出てくると、レイギルドは右手に長剣を、左手に短剣を握って待っていた。

ちなみに、鎧は着ていない。そんなに自信があるのか。俺もだが。

「決まったか？」

「ああ。オッサンは二刀流か」

「そうだが……その呼び方はやめてくれと言っただろう」

「ところで」

「無視か？ 無視なのか？」

オッサン

レイギルドの呼び方よりも、俺には気になる事があった。レイギルドの向こう側に見える人影。あれはおそらく、いや、間違いなく、

「何故国王がここに居るんだ？」

「なに、面白そうだと思っただけ」

国家元首であった。

「国王が仕事放り出しているのか？ いや、仕事しろ」

「国王にだって、たまには息抜きが必要だろう？」

はは、と笑うリグレイス王。知った事が。

こんなのが国王だったら国民が黙って……いや、街を見る限り圧政悪政ではなかったから、最低限の義務は果たし、無駄な搾取はしていないのだろう。本人は見る限りテキトーな感じなのだが。

「あれで良いのか？ レギ」

「やっとそう呼んでくれたか……」

オッサ……レイギルドに話を振ると、何故かしみじみと追想に耽りだした。“レギ”と言う呼び方に、何か思い出でもあるのか。

それより、過去世界にトリップしている思考を、どうやって呼び戻すかが問題である。

「……よし」

そして俺は一つの方法を導き出した。それは……

「ふっ！」

殺気を放ち、レイギルドの首筋に斬りかかる。

が、右手の片手半剣は、ヒョン、と音を立てて、虚空を一字に切り裂いただけだった。

「不意打ちとは卑怯な」

「知るか」

完全に不意を突いたはずなのに、とっさに屈^{かが}んで避けるとは。流石（どのくらいかは知らんが）隊長だ。

コイツは化物かも知れない。

「せっかく思い出に浸っていたと言っのに……なんとなく本気で行くぞ」

レイギルドの全身に、焼き尽くすような闘気……いや、殺気が漲^{みなぎ}る。

「さあ、構えろ！」

三つの選択肢があれば、知能の低い生命体は遁走を、知能の高い生命体は平和的解決を選択するだろう。両者とも、間違っても“三番”だけは絶対に選択しない。いや、できない。そんな殺気だ。

だが、それは“普通”の話だ。“異端”な存在の俺には関係無い。構えなくとも行くがな！」

レイギルドが叫び、常人では見切れない速さで駆けだす。距離は一秒かからずゼロになるであろう。が、生憎俺は常人じゃない。人であるかすら怪しい。

レイギルドを凝視し、次の手を読む。

右手が左上に向かっている。初撃は長剣の左袈裟斬りか。

拳は腰の高さで、左上に伸びるように刃を胸の前に構える。そこに長剣が打ち付けられ、そのまま鍔迫り合^{つはせ}いとなる。異常に重い一撃だが、問題は無い。折れない限りは。

「わざわざ剣を攻撃するのが本気なのか？」

「そんな事を言っている暇があるのか？」

レイギルドの短剣が右胸に向かって伸びる。

片手半剣の角度を変え、それを根元で受け止める。

わざと目が行きやすい長剣を囷にして、短剣で止めを刺す。それがレイギルドの戦い方が。

そんな事を考えている間に、長剣が片手半剣から離れ、左脇腹わきに向かつて横一文字に振るわれようとしていた。

長剣を受けても避けても、次の瞬間には短剣が飛んで来る。次は長剣、その次は短剣、そのまた次は長剣と、延々と連続攻撃を繰り返されるだろう。

受ける事自体に問題は無い。だが、攻勢に転じる事が出来なければ、勝機は無い。

レイギルドの斬撃を超える速度で剣を引き、角度を変え、振れば問題は無い。だが、そんな事をしようとすれば剣の重さに振り回され、体勢を崩しかねない。そうなれば、その隙に一撃喰らう事は避けられない。避けている間に剣を引ければいいのだが、この速度の斬撃を全て回避しようとすれば、これまた体勢を崩しかねない。剣を引いた状態からなら、いくらでも速い斬撃が繰り返せるのだが、この状態でそうはいかない。

となれば、とる行動は一つ。

「ハッ！」

脚に力を込めて大地を蹴り、宙を舞う。長剣は何も無い空間を薙ぐ。

そして、レイギルドと15mほど離れた位置に着地した。

受けも避けも無理なら、受ける必要も避ける必要も無くせば良い。ならば、射程範囲外に逃げるまでだ。ある意味回避と言えなくもないが。

「……全く、君には驚かされる」

「お前にもな」

正直、ここまで追い詰められるとは思っていなかった。アイツが脚力を強化していなかったら、俺はここで骸となっていたに違いない。

一応、一阿摩羅^{あまら}（涅槃寂靜の十倍）程度は感謝しておいてやるか。

しっかりと相手^{レイギルド}を見据え、対策を練る。

レイギルドの武器は長剣と短剣。戦法は二刀流による接近戦での連続攻撃と囷攻撃。

懐に入れば、また連続攻撃^{あんな}を受け続ける事になる。あれに片手半剣一本で挑むのは、少々無理がある。もつと軽い武器を選んでいたら、こんな状況にはならなかっただろうに。例えば拳銃とか、機関銃とか、擲弾銃とか。

元の世界は良かったなあ。

「赤き力の守護者に抱かれ、その身を焦がし、灰塵と化せ！」

一風変わった懐かしみ方をしていると、レイギルドがこちらに長剣を向け、何やら叫んでいた。

「紅蓮の抱擁を受ける！」

「魔法か！」

詠唱と気付いた時はもう遅く、剣先から炎が放たれていた。既に避けられない距離に迫っているが、避ける必要は無い。こちらには（一応）神の祝福を受けた黒衣があるのだ。

そのまま突っ立っていると、俺は炎に包まれた。予想通り熱は感じない。

炎で何も見えないが、数秒もすれば消える。きっと、レイギルドは魔法が効かなくて驚くな。

そんな事を思う余裕も束の間。炎が視界から消滅する直前に、炎の向こうからレイギルドが突っ込んできた。炎が視界を遮っている間に接近していたのだ。

「もらったア！」

「なにっ！」

脊髄反射で袈裟切りを受け、短剣が来る前に長剣を押し返す。
一瞬怯んだ隙に後ろに飛んで、再び距離をとる。

「……目眩ましも通用しないとは」

炎を目眩ましに使うとは、考えたな。何も直接攻撃だけが魔法じゃない、と言う事が。

それはさておき、どうやって倒そうか。防御に関しては問題無い。だが、攻撃出来なければ勝てない。問題はあの二刀流だ。どちらか片方を殺せばいいのだが、叩き落とすにしても、折るにしても、この剣じゃどうしても隙が……ああ、そうか。

「全くもって、驚くばかりだっ！」

レイギルドが大地を蹴り、俺を射程範囲に捉えるために距離を縮める。

やがて俺を射程範囲に捉え、斬撃を繰り出す。
それを片手半剣で受け続ける。

無駄の無い動きで高速の連続攻撃を仕掛けるレイギルドに、斬り

合いで勝つ事は出来ない。

斬り合いでは。

俺は斬撃を受けながら少しずつ後退し、右足を下げ、

「ハアッ！」

「おぐう！」

気合一閃。左足を軸に、レイギルドの腹を蹴り飛ばした。

別に剣を持っているからと言って、蹴りを入れてはいけない理由はない。振れないなら盾で十分。四肢と言う短剣よりも軽い武器があるのだ。

だが……

「……やり過ぎたか」

だからと言って、10m以上も飛ぶような蹴りは、控えるべきかも知れない。

ほぼ手加減抜ききの蹴りを受けたレイギルドは、壁にぶつかるまで飛んで転がり続けた。そして、今は白目を剥いて倒れている。少し心配になって駆け寄ると、レイギルドが目を覚ました。

「大丈夫……か？」

「こいつはこの程度では死なんさ」

いつの間にか、リグレイス王がそばにいた。

「いや、正直危なかった。身体強化をしていなかったら、死んでいたかもな」

はは、と笑うレイギルド。そこはもっと、こう“酷い目にあつた……”とか言つべきではないのか。

「身体強化？ いつの間に……」

「本気で行くぞ、と言つただろ？ あれが詠唱だ」

「短い」

「二十年以上も使っているからな。どんな魔法も慣れればそうなるさ」

「そうなのか」

だとしても、短すぎやしないか。最早詠唱とは言えないな。

「勉強になったか？」

「ああ」

何故か、レイギルドが勝ち誇つた顔をしているように見えた。

「勉強と言えば、明日は進級試験だったな」

「そうだな」

リグレイス王が、思い出したように言った。

王様……さつきから空気だぞ。

「こいつの相手をしている場合か？」

一体、どこのだいつの所為でこんな事になっているのか。
元を正せば自業自得、自縄自縛、因果応報なのだが。

「そうだな、帰るか」

とりあえず、さっさと帰ろう。

「いつかまた戦^やろう」

「試験、頑張^つてな」

「ああ、じゃあな」

適当に別れを告げ、歩き出す。レイギルドの言葉は無視だ。やっ
てられるか。

ああ、何か色々と疲れた。帰って寝るか。
進級試験は……なるようになる。

異世界十日目ゝ子の次は親ゝ（後書き）

戦闘描写、いと難し。

何故他の皆はあんなに上手く書けるのか、と不思議でならない。
そこで、活動報告にて描写を募集中。

ちなみに、次は遅くなりそうです。

理由は休み明けがテストだから。
やってられるかコンチクショ！。

追記、“三番”は“たたかう”です。

異世界十一日目〜進級試験・前編〜（前書き）

さて、遅くなりましてRainです。

一ヶ月以上も放置してすみませんでした。

今回はクレスティア視点です。どうぞ、お楽しみください。

異世界十一日目　進級試験・前編

静かな朝だった。

青い空に雲は無く、風も時折吹く程度。

誰もが沈黙に身をゆだね、張り詰めた空気が辺りを支配している中、足音だけが廊下に響いていた。

この時を迎えるのは、これで三度目か。

今日は魔法学校の生徒が最も気合を入れる日……

……そう、進級試験だ。

魔法学校は国が優秀な人材、つまり魔導師を集める為に運営している。生徒は優秀な人材として、職を求めて入学する。国に雇ってもらえれば、貧困に苦しむ事はまず無い。それに、魔導師である事は一種の社会的身分だ。だからこそ、生徒は自分の優秀さの証明に尽力する。そして、それが最も顕著になるのが今日。進級試験である。

魔法学校の生徒は全員、気合を入れ過ぎて殺気立っている。自分の未来が賭かっているのだから、当然と言えば当然である。

だと言つのに……

「ふぁ……」

私の隣からは呑気なあくびが聞こえてくる。緊張感など微塵もありはしない。

「ユリア……」

隣に目を向ける。

髪は蒼穹そうきゅうより青く、瞳は滄海そうかいより深い。

端正で可愛らしい顔立ちには、どこか幼さが残っている。

肌は雪のように白く、透きとおっている。

華奢な体つきだが、まっすぐに折れない強さが感じられる。

……すごく、人間離れしている。良い意味で。

「ん……なに？」

そんな幼馴染は、眠たげに目を擦っている。

その仕草はどことなく子供っぽくて、とても……かわいい！

「今日が何の日か知ってる？」

あまりジロジロと見られていい気分になるとは思えないので、このあたりで話を進めよう。

「何って、進級試験でしょ？」

「分かっているなら、もう少し気合を入れたらどうかしら」

「気合を入れなくても大丈夫よ。いつも通りにしていれば」

この緊張感を台無しにしている幼馴染は、能天気でも楽天家でも樂觀主義でもない。王女という地位に居るから焦る必要が無いのもない。ただ単に、今まで“いつも通り”で進級試験を超えてきただけだ。

武術は平均前後だが、言語も数学も自然も魔法も最高級。皆が口をそろえて天才だと褒めそやす。そんな人間だが、実際は違う。

好奇心旺盛で、昔から何にでも興味を示していた。それが今でも続き、分からない物事は分かるまで考える癖が付いている。天才と呼ばれる実力も、一部の例外を除く全てが本人の努力による結果なのだ。

その一部の例外は常人の十倍もの魔力量だが、いくら魔力量が多くても制御出来なければ意味が無い。しかし、ユリアは日夜（それはとても楽しそうに）修練に励み、制御能力を身に付けた。もはや努力する才能と呼んでも差し支えない。天才の称号は、努力の上に成り立っているのである。

それに比べて私は、剣術以外に特に秀でた才能は無い。両親に“魔法が使えるなら入れ”と言われて入ったが、言語も数学も自然も魔法も平均程度。今までなんとか落ちなかったが、それはユリアの協力があったからだ。もしユリアの協力が無ければ、一度目で合格出来なかっただろう。

「はあ……」

余裕な幼馴染とは違い、あまりに無能な自分に涙が出そうだ。

「随分幸せそうだな」

「どこをどう見たらそう見えるのかしらね……って！」

突然背後から掛けられた声に反応し、一歩前に跳んで反転、戦闘態勢を取る。

……が、

「あら、ゼロ。おはよう」

幼馴染は普通に挨拶していた。もう少し警戒心を持ってても良いと思う。

見れば、黒目黒髪黒服の青年が冷めた視線をこちらに向けていた。

「……ひどく嫌われたものだ」

「いきなり現れるからよ」

「そうか」

ゼロはそう言うなり、視線をユリアに移した。

突然音も無く背後に現れたかと思えば、特にこれという事も無く、淡々とした調子でユリアと話します。

「さっきの幸せそうって、どういう意味？」

「ため息を吐くと幸せが逃げる、と言えば分かるか？」

「言葉自体は分かるわ。でも、だったらどうして幸せなの？ 幸せが逃げただけ不幸になると思うのだけれど」

「つまりそれだけ、逃げるだけの幸せは持っているという事になるだろう。それに、本当に不幸な奴にため息を吐く余裕は無いだろうしな」

「……なるほどね」

「……一体何なのだろう、この男は。」

素性も分からない上に、考えが読めない。ユリアに近づいて何をしようと言うのだろうか。

感情が無く、思考の読めない目。

その瞳の奥には、ドロドロとした物が渦巻いているように見える。黒い服で包まれた全身のどこからも生気が感じられないが、死んでいるようには見えない。

記憶喪失のため、出身地及びその他不明。嘘臭いが。
身体強化をした私に勝つ異常な身体能力。
黒い髪と目、なのに火の魔法を使う。

不審な点は挙げればキリが無い。“正体不明”とは、この男の為にある言葉ではないだろうか。

ユリアは命の恩人だと言うが、こんな得体の知れない奴をユリアの身辺に置いておく訳にはいかない。ユリアに危害を加える可能性もあるのだ。もしそうなら排除する。親友に刃を向けさせてなるものか。

……しかし、剣術では三日前に惨敗し、魔法でも昨日負けた。あれは負けとは言わないかも知れないが、私は“ヴォルケニスの聖なる炎”以上の攻撃手段を持ち合わせていない。それを受けて無傷だったとあれば、今の私に勝ち目は無い。しかも、頭ほどの火炎球を一度に二十発以上放てることから、魔力量はユリア以上。制御もそれなりにしっかりしている。私一人でどうこうできる相手ではない。正面から行くのなら、父上のような……

「そう言えば昨日、お前の父親に手合わせを申し込まれた」

不意に視線がこちらに向けられる。

つまり我が父、レイギルドと戦ったという事……まさかとは思うが。

背筋を撫でる嫌な予感を見せず、恐る恐る聞き返す。

「……それで？」

「流石隊長、強かった」

私は胸を撫で下ろすと同時に、心の中で父上に詫びた。

父上は私の剣の師だ。父上の強さは知っている。並みの人間なら十人が束になつて掛かるうとも、父上には勝てない。いくらこの男が強くとも、あの化物じみた強さを誇る父上に勝てるはずが無いのだ。全く何を考えている、父上を過小評価するつもりか。

そう考えていた時だった。

「危うく負ける所だった」

驚きのあまり、言葉が出ない。

自分の耳を疑ったが、風の音が正常と教えてくれた。

次にその言葉を疑ったが、嘘を吐いている様には見えなかった。

「……え？」

父上が負けた所を見た事が無かった。だから、父上は誰にも負けない。

信じていたそれは、やっと絞り出した声と共に音を立てて崩れ去った。

あまりの衝撃に呆然とするが、少し冷静になって考える。

父上は魔法をあまり使わない。なら、純粹に剣技で勝負したのだろうか。コイツが魔法を使ったかは定かではないが、父上は魔導師が相手だからと言って負ける事は無い。むしろ魔法の対処法は身に付けているはずなので、苦戦こそすれ魔導師にも負けはしない。そして、父上から勝負を挑んだと言う事は、不意打ち及びそれに準ず

る奇策の類は無い。と、言う事は……本当に“強さ”で父上が負けたのだ。

「……あり得ない」

父上が負けた。

それが事実だと認めたくないが為に、否定の言葉が漏れた。

勝てない理由ならある。

まず“勘”で攻撃を見切られ、背後からの不意打ちをもかわされる。

次に“守り”に隙が無く、軽く去^いなされる。

最後に“攻め”られれば、牽制で生まれた隙を連撃で突き破られる。反撃の余地は無い。

当たらない、効かない、防げない。勝てる要素が見つからない。

さらに、経験の差もある。“十年以上も経験の差があれば、奇策を用いない限り勝てない”と言うのが常識だ。父上は二十年以上も剣を振り続けていると言う。対するゼロは見る限り18歳前後だから、十年以上剣を振っているとは思えない。ならば奇策を用いた事になるが、それは前段階であり得ないとなっている。

なのに、父を破ったと言うのか。

「そんなバカな……」

「ティア、そろそろ行きましょう」

やはり、全てゼロの嘘かも知れない。

疑心のままに辺りを見渡すが、ゼロはどこにもいなかった。

「……ティア？」

「ユリア、あいつは？」

「あいつ？」

「ゼロよ」

「彼なら向こうに……」

ユリアの指が方向を示すと同時に、私は駆け出した。

「待って！」

しかし、ユリアに右腕を掴まれ、引き止められる。

「放して！ あいつに聞かなきゃならない事があるんだから！」

「もうすぐ一時間目が始まるわよ！？」

「そんなのどーでも良いわ！」

腕を振り解こうとするが、なかなか放してくれない。

「良くないわよ！」

「なんで!？」

「だって、今日は“進級試験”じゃない！」

「それがどうし……今、なんて？」

一瞬、何か引つかかる単語が聞こえた。

「し・ん・きゅ・う・し・け・ん！」

しんきゅうしけん、進級試験……その言葉が頭の中をぐるりと――

周し、まだ分からねえかともう一周し始めた所で、私はようやく状況を理解した。

そしてユリアと視線を合わせ、うんと頷き、

「急がないと一時間目に遅れるわ!」

「それは私の台詞だったんだけどっ!」

同時に駆け出した。

淑女たるもの、何時如何なる時も慌ててはなりません。廊下を走るなんて以ての外です——誰からか聞いた言葉を思い出しながらも、今はそんな事を言っている場合ではないと走り続ける。

私たちは髪を振り乱し、力の限り地を蹴って、二つの暴風となつて吹き荒れる。走る道筋以外は何も目に映らない。目指すは教室、出来るだけ早く、だ。

目的地である教室の扉……試験会場まで後少し。この角を抜ければ!

廊下を走り抜け、階段を駆け上がり、遂にここまでやって来た。呼吸も苦しく、脚も限界に近いが、今立ち止まる訳にはいかない。それどころか、今なら限界を超えられる気がする。

まだ鐘は鳴っていない、後は扉を開くだけ。それで私(たち)の勝ちだ!

最後の一步。渾身の力を振り絞り、脚に集中させて踏み出す。希望の扉を開こうと、取っ手を掴むべく手を伸ばす。

私の心が、魂が！ 未来を掴めと雄叫びを上げる！！

今正に扉を開く為に、右手が取っ手にかかろうとしている。
まだだ、まだ鐘は鳴っていない。間に合う、早く、一瞬の間も惜しい。

間に合え——！

「はぁ……はぁ……」

扉は開いた。鐘は鳴っていない。教室内の全視線の的だが、そんな物は気にならない。

「はぁ……間に、合った……」

……勝った。

私は勝った！ 勝ったのだ！ 時間と言う闇から、未来を勝ち取ったのだ！！

勝利の余韻に浸りながら、邪魔な前髪を掻き上げ、教室を見渡す。

嗚呼、世界がこんなにも輝いていたなん——

思考が停止する。

数秒の後に回復し、もう一度視界を確認する。

窓、床、天井、壁、机、椅子、生徒たち。そしてアレは……

「はあ……はあ……ティア、置いて、行かないでよ……」

少し遅れてユリアが到着する。

息を切らしながら文句を言っているが、生憎今は相手にしてられない。

あなたたち
「貴方達」

試験を迎えるこの空間で、私たち以外の生徒は全員が着席している。

しかし、立っているのは三人。私とユリアと、

……教師だ。

「廊下を走るとは、あまり感心しませんね」

……最悪だ。

今日が進級試験なら、教師も早めに来るだろうと分かっていたはずだ。

だったら、教室に入る前は足音を消し、身だしなみを整えてから入るべきだった。

「淑女たるもの、何時如何なる時も慌ててはなりません。廊下を走るなんて以ての外……そう教えたはずですが？」

そして、この教師に捕まると長くて面倒臭い、と生徒の中では密かに恐れられているのである。説教を受けるには、相当な覚悟が必要だ。

ああ、これは死んだかも……

ゴオオオ~~~~ン

日が暮れるまで説教を受ける覚悟を決めたその時、授業開始の鐘が鳴った。

「……仕方ありません、説教は後です。早く席に着きなさい」

こうして、無事に試験に間に合った二人だった。

——数十分後——

一時間目は数学。よりによって数学。私が一番嫌いな数学。

……ダメだ、分からない。

残り時間は後少し。しかし、どうしても解けない問題が三つほどある。ああ、これはユリアに教えて貰ったつけ、とか思い出しても解法が思い出せない。

そもそも数学なんぞ誰が考えたんだ、と八つ当たりしたくなる今日この頃。幼馴染は既に解き終えたようで、ゆっくりと見直しをしていた。

落ち着け、まだ終わってはいない。深呼吸だ、すう……はあ……よし。問題を見る、ユリアに教えて貰ったじゃないか。解けない訳が無い。この図形の角度は……やっぱり分からない。

あーでもないこーでもないと試行錯誤していると、不意に閃いた。その瞬間、

ゴオオオ~~~~ン

「そこまで」

時間切れ、と鐘が鳴った。

そうか！ この角度とこの角度は同じだからここにこれを入れて、ここに線を足して新しく出来た角度にこれを入れてこうすれば……行ける！

……と、完全に解けると確信した瞬間に、だ。時間とは無情で非情で薄情なものである。

「ティア、どうだった？」

一体どれだけ放心していたか分からない。気が付くと、ユリアが隣に居た。

「まあまあ、と言った所かしら。ユリアは勿論」

「全部解けたわ」

「でしようね。はあ……」

全く、最後の最後であんな思いをしたとも知らず、眩しい笑顔を振りまきながら、全部解けたと言うのはやめてほしい。幼馴染じやなかったら殺しているかも知れない。

「どうしたの？ ティア、少し变よ」

「うっん、大丈夫よ。どこも变じゃないわ」

どこも变じゃない。

そう思うが、もし変なゼロの所為だろう。試験前にあんな事を言って、私の心を乱した……と言うのは、言いがかりかも知れないが、事実だ。もし試験に落ちたら、あいつの所為だ。

「なら良いけど……無理はしないでね」

「……ありがとう、ユリア」

ユリアの優しさに触れると、心が洗われるようだ。

さつき出来なかったからなんだ、次は頑張ればいいじゃないか、そんな気持ちになる。いや、次こそは出来る、と理由も無い自信が沸いてくるほどだ。

「で、次は？」

「魔法よ、外に出ましょう」

季節は夏。

日が昇って暑くなる前で良かったと思いながら、ユリアの手を取って外へ向かった。

——数十分後——

二時間目は魔法の試験。

私たち第三学年の試験は魔法陣を描き、起動する事。

魔法陣は詠唱を使わず、図形と文字によって魔法を行使する方法だ。

基本的に魔法陣と言えば、円の中に正三角形、正方形、五芒星、

六芒星、七芒星などを描き込み、図形の外側や図形の隙間に文字を書き込んで作られる。

また、魔法陣に使用される文字は日常的に使われている文字とは違い、魔法文字と呼ばれる三十四個の文字で、個に意味を持つ。また、それらの組み合わせで文章を作るので、魔法陣の解読は困難だ。困難なのは描くのも同じ。一つ間違えば機能しないどころか、詠唱と同じように暴走する（思わぬ結果となる）可能性もある。

円は魔力を蓄える。もし円が歪んでいたら魔力は流出し、魔法陣は起動しない。

内に描かれた図は、書き込まれた文字の均衡を保つ。もし内に描かれた図が歪んでいれば、予定した機能が狂ってしまう。
文字は効果を決定する。誤字脱字があるものなら、何が起こるか分からない。

……つまり、何が言いたいのかというと、

「面倒臭い」

大空の下でガリガリと大地を削って線を引きながら、誰にでも無く呟いた。

幅大人三人分の円の中にもう一つ円を描き、その中に六芒星を描く。さらにその中と外に文字と書き込む作業。

図形の歪みは最小限に止めなければならぬし、魔法文字の組み合わせは一文字の誤りも許されない。

数学はちょっとダメだったから、ここで取り戻さないと……

高成績を狙えば、必然的に複雑な図形を描く事になる。複雑な図

形を描けば、それだけ神経を使う。その神経と使う作業を、かれこれ二十分以上続けているのだ。面倒臭いと言いたくもなる。

全く、誰が魔法陣なんか考えたのやら……

そんな事を考えながらも、ようやく最後の文字を書き終える。問題が無ければ、ここに魔力を流し込んで完成だ。

最初に、二つの円を見るが、大きな歪みは無い。

次に、六芒星を見るが、これも大きな歪みは無い。

最後に、書き込んだ文字を見る。誤字脱字は無いし、文章も成り立っている。

これで特に問題は無いだろう。

「出来ました！」

図が完成したら教師を呼び、魔法陣を見せる。

教師が魔法陣の完成度を見るのだ。

「彼の地より来たりし神の炎、この地に降り立ちて破壊をもたらさん……か。軸となる文字は火だな、他には……」

教師が文字を読み上げる。はつきり言って、さつさとして欲しい。神経を使う作業の後に、ただ待つだけの時間は苦痛だ。

「よし、起動してくれ」

「分かりました」

形式的な返事をしてから魔法陣に触れ、魔力を流し込む。

実はこの魔力を流し込む作業、神経を使う作業の後に精神力を消

耗するので、倒れそうなほどきついのである。実際にぶつ倒れた人は少なくないと言う。何せ、魔法陣の完成度だけでなく、その効果も評価されるのだ。高成績を狙って限界まで魔力を振り絞れば、倒れても仕方ないと言える。

「下がって下さい」

教師を下がらせ、自分も下がって魔法陣の方向を向き、構える。少々目眩がするが、倒れるほどではない。ここで魔法陣を起動させさえすれば終わりなのだ。何としても成功させなければ。

教師の視線を背に受けながら、あらかじめ指定しておいた魔法陣を起動させる言葉を口にする。

「……燃える！」

刹那、魔法陣は赤く発光し、紅い炎を吹き上げる。

……成功だ。

全身の力が抜けてへたり込みそうになるが、なんとか踏ん張ってこらえる。

試験は終わった。もうここに用は無い。校舎に戻って休もう。

「多少粗いが、合格だ」

教師の言葉は耳に入らない。ゆらゆらとした足取りで校舎を目指す。

「……これも血なのかな」

背後から不意に、そんな声が聞こえた気がした。

異世界十一日目〜進級試験・後編〜（前書き）

今回はちょっとグロいです。

異世界十一日目　進級試験・後編

進級試験は筆記試験と実技試験に分かれる。

筆記試験では用紙が配られ、そこに回答を記入する。配られるのは問題の書かれた解答用紙と白紙が一枚ずつ。白紙は自由に使うて良いそうだ。恐らく思考を纏める為に使われるのだろう。そんな事より、大量の紙をどこで生産しているのか気になるが。

ちなみに、生徒が使うのは羽ペンだ。間違えた時は斜線なり二重線なりを引いて、正しい答えを記入するのだろうか。

実技試験は運動場で行われる。第一学年は基礎を、第二学年は詠唱魔法を、第三学年は魔法陣を、第四学年は総合力を見るという。

今は進級試験の三時間目。

科目は数学。

教室には静寂。

机上には全問回答済みの試験用紙。

……暇だ。

他の生徒たちが必死に問題とにらめっこしている中、一人時間を持て余していた。

どうやら演算能力も向上しているようで、中三程度の数学の問題三十問を十分かからず解き終えてしまい、時間が余ってしまったのだ。

する事が無くなった俺は、ぼんやりと窓の外を眺めている。窓の向こうには魔法実技試験中の生徒が見えるのだ。みんなで魔法をぶ

っ放して、随分と楽しそうだ。是非とも混ぜて欲しい。

とつとと終了の鐘が鳴ればいいのに……

一時間目は言語、二時間目は自然、そして現在である三時間目は数学。つまり、次は魔法だ。退屈な筆記試験と違って、実技試験はさぞ楽しかりう。本当に時間の流れが一定なのか疑わしくなるほどに、四時間目が待ち遠しい。このファンタジックな異世界に、時間の流れが一定だという保証は無いが。

そんな事を考えているのは俺だけだろう。ふと教室に視線を戻せば、血眼で問題を解く生徒以外に何も無い。頭を抱える者、首を捻る者、泣きそうになっている者など……俺以外は誰も余裕が無いように、全員の目が血走ってギラついていた。まるで、命を賭けているかのように。

そのうち、別の生命体へと進化しそうだ……

進化するなら見てみたい、そう思いながら再び視線を窓の外へ向ける。見れば、外の生徒たちも心なしか殺気立っているようだった。

ゴオオオ~~~~ン

早く終われば良いと思っていることがばれたら、こいつら全員に跡形も無く消滅させられそうだな……と考えていると、遂に終了の鐘が鳴る。

「そこまで」

教師が終了を宣言し、回答用紙を回収して回る。その間も私語は

一切無く、全員が石のように固まっている。

「次は魔法だ。遅れず集まるように」

そう言い残し、教師は教室から出て行った。

その直後、

「最後の問題分かんねー！」「全然分からなかった！」「数学もダメだった……」「残るは魔法だけか」「どうだった？」「結構解けたな。お前は？」「ダメだった！」「くっそー！」「魔法にかけるしかない」「もう少し勉強していれば……」「後少しだったのに……」「もう少し時間があれば……」「うわあああああ！」「もうダメだ……」

教室が音を取り戻した。

泣き、喚き、嘆き、叫ぶ……その音は様々だったが、全てに負の感情が含まれていた。平然としているのは、自分に自信を持っている数人だけだ。

……地獄のようだな。阿鼻叫喚が実にしっくりくる。

耳障りな声を背に、教室を後にした。

待ちに待った四時間目はすぐそこだ。他の奴らに付き合っている暇は無い。

——数十分後——

「次」

「はい」

教師に呼ばれ、一人の生徒が駆けて行き、一人の生徒が戻って来る。

生徒は一か所に固まって待機している。

少し離れた所に生徒と教師の二人組が見えるほか、広い運動場には特に何も無い。あるとすれば魔法陣の残骸ぐらいだが、それもほぼ足跡にかき消されていた。

「暑い……」

誰かがそう呟いた。

季節は夏。雲一つ無い青空の下、さんさん 燦燦と陽が降り注ぐ。そろそろ南中ともなれば、暑いのは当然だ。

「暇だ……」

生徒の半数が暑さにやられて活力を失っている中、俺はそう呟いた。死んだ魚のような目をしている奴が多数いるが、俺には関係ない。

第一学年の魔法実技試験は基礎……つまり、魔力の制御だ。教師曰く“初心者には暴走の危険が付きまとうので、まずは制御からです”だそうだ。

で、暴走の危険があるから試験も慎重に一人ずつ行われ、その結果として順番待ちが起こる。待っている間は何もする事が無いし、第一学年の試験は見ていて退屈だった。

一人ずつ魔法を使い、慎重に変化を加える。何と言つか、凄く……地味だ。

「ふあ……」

何もせず、ただ二十何人もの地味な作業を見続けていれば、眠くなくともあくびが出る。手先から水をチョロチョロと出したり、指先に火を灯したり、木の葉を風で巻き上げたり、砂を固めて石にしたりと、地味にもほどがある。

……いや、元の世界の感覚で言えば“うわ、なにこの超常現象！うっそ！マジあり得ねーし！”とか叫んでみたくなるものばかりだが、俺の感覚は既に異世界に順応したようだ。

残り十人前後……か。

そして、俺の順番は最後だった。転入生だからだろうか。

まあ、最初でも最後でも暇な時間は同じだろうか。

「次」

「はい」

また一人、生徒が教師に呼ばれて駆けて行き、代わりに一人が戻って来る。確かに進んではいるのだが、遅いと思わずにはいられない。

「はあ……」

待つ者は緊張で固まり、終えた者は不安に震える。ほぼ全員がそんな中、溜息を吐いて空を見上げた。緊張感をブチ壊すようだが、緊張感を持てと言われても無理だ。理由は……色々あるが、筆記試験が簡単過ぎたからだろうか。

一番驚いたのは自然だ。最後の問題が“同じ大きさの鉄の球と木の球を、同じ高さから落としたらどちらが早く落ちるか”だった。言うまでも無いが“同時に落ちる”が正解だ。二択の様に見えて、実は答えは三番というこのウザい問題に、引かかる奴がいるのだろうか。いるんだろうな。

どこまでも青い空を眺めつつそんな事を思っていると、一羽の鳥を見つけた。

別に鳥が飛んでいても何ら不思議ではない、むしろ普通だ。翼は一对だし、頭も一つだ。おかしい所は何も無い。

「えらくでかい鳥だな」

……大きさを除けば、だが。

遠くを飛んでいるので良く分らないが、かなり大きい。その大きさは、近くに居た鳥と比べれば一目瞭然。ワシとかタカとかそんなレベルじゃない、聖獣とか幻獣の領域だ。怪鳥とでも言うべきか。流石異世界。

「アレは……」

俺の眩きに反応したのか、数人が空を見上げていた。無論、空を舞う怪鳥を見ているのだろう。

怪鳥はこちらへ向かっているようで、徐々にその影が大きくなってゆく。そして、遂に魔法学校の上空にたどり着き、旋回を始めた。

この世界はあのアホが作ったのだ。進級試験なんて日に、何も起こらないとは思っていなかった。魔法の暴発でも起こりそうだとは思っていたが……

「……魔物だ！ 魔物が襲って来たぞー！」

「みんな逃げろー！」

「うわあああああ！」

「いやああああああ！」

「死にたくない！ 死にたくないー！」

「誰か助けてー！」

……まさか、こんな事になろうとは。

魔法が使えると言っても、第一学年だ。戦力には程遠いのだろう。魔物の恐怖に、生徒の誰もが悲鳴をあげて逃げ惑う。もはや試験どころではない。

「神様の悪戯、にしてはやり過ぎだな」

旋回する怪鳥から目を離さず、誰にでも無く呟いた。右翼から左翼までおよそ10m。魔物と言うには十分すぎる大きさだ。

次第に人が集まって来る。それは野次馬ではなく、魔法学校の教師だった。魔物を討伐しに来たのだろう。よく見れば、上級生たちも混ざっている。魔物討伐で評価向上でも狙っているのか。

「さて……」

そろそろ逃げるか、戦闘に巻き込まれると面倒だ。

討伐部隊は集まりつつあるし、騒ぎを聞いて軍も来るだろう。と、トンスラを決め込んで怪鳥に背を向けたその瞬間、

「キュルウウウアッ！」

天を斬り裂くような音が響き渡る。それは怪鳥の鳴き声で、攻撃開始の合図だった。

振り返ると、怪鳥は狙いを定め、一直線に急降下を始めている。その狙いは――

「……最悪だ」

――見る限り、俺だった。

何で俺なんだろう。こういうファンタジックな異世界だったら普通、通常、当然、必然的に女子供が狙われると思うんだが。そして足で掴まれて“助けてー！”とか言いながらどこかに連れて行かれそうになるも、良い感じで正義の味方に助けられて“ありがとうございませ、おかげで助かりました”みたいに完結するはずなんだが…… もういい、とりあえずコイツをブチ殺せば解決なんだ。焼き焼きして焼き鳥にでもしてやろう。

思考を切り替え、右手に意識を集中し、炎を生み出す。
馬鹿正直に正面から飛来する怪鳥に狙いを付け、腕を伸ばし、叫ぶ。

「燃え尽きろ！」

声と同時に、うねる炎が急速に接近する怪鳥に向かって放たれる。距離は目測で100mと少々。恐らく届く。急降下中に方向転換が出来ると思えない。

これは当たった…… そう確信した直後、炎が右翼に命中し、怪鳥は炎に包まれる。

「キュラアッ！」

その声は悲鳴だったのだろうか。
燃える怪鳥の姿は、さながら不死鳥のようだ。死んだだろうが、
翼が燃えれば、鳥は死んだも同然だ。

「終了つと……ん？」

魔物と言う物を、少しばかり侮っていた。

このまま落ちて燃えて尽きるだろう……そう思っていたのだが、
そのまま俺に向かって突っ込んで来ている。燃えて落ちるところか、
余計に元気になっているようにさえ見えた。

それに、燃え方も尋常じゃない。燃やされていると言うより、自
ら燃えているような……

「キュルウウウアアッ！」

その声にも、活力が溢れていた。

「……まさか、不死鳥ホンモだったとは」

ここで速度の話をするが、鳥類の急降下は時速200kmを超える。
100mなど二秒前後だ。

……つまりどう言う事かと言うと、燃えながら墜落して死体と化
しているはずだった怪鳥改め不死鳥は、急降下から翼を広げて水平
飛行に移行し、その時に生み出した風で辺りの人々を蹴散らして、
獲物を燃える足で掴んで飛び上がった。

「全く……」

で、その獲物が俺である。

風で人々が吹き飛ばされるのを見て“ああ、人が塵のようだ”とか思ったり、燃えているのを見て“もっと良く見てみたい”とか思ったりしている間に掴まれてしまったのだ。間抜け過ぎて自己嫌悪に陥りそうになる。

しかし、どう見ても自分から発火しているとは思えないこの生命体を見れば、良い物が見れたと思う。

「たすけてー」

現実とは冬の足先より冷たい物で、“正義の味方”なんて生命体が助けに来てくれる訳も無い。が、とりあえず、これは言わなければならぬ気がした。棒読みだが。

“（自称）神”が存在しても“正義の味方”が存在しない現実に生きている以上、自分の為に何かするのはいつだって自分だ。

現状を確認する。上には上昇を続ける不死鳥、下には遠くなる王都。軽く見積もっても、高度2000mは超えている。落ちたら確実に死ぬ……と思う。

普通の人間なら既に死んでいるだろう。まず、燃える足で掴まれている時点で焼死だ。次に、高山病で運が悪ければ死ぬ。その前に酸欠で死ぬかもしれないが。

しかし、俺は断熱服のおかげで熱くないし、呼吸はしなくても問題無いので高山病にも酸欠にもならない。少しはあのアホに感謝するべきだろうか。

「まずは……」

掴まれたままじゃ何もできない。拘束から逃れなければ。

「ふんっ！」

「キュアッ!？」

燃える左足を左手で掴み、右手で手刀を叩き込む。右手は足の指にめり込み、深々と突き刺さる。そこから赤黒い液体が噴き出すが、気にせず左手を同じ場所に突き刺し、左右に広げてそのまま関節を引き千切る。

「キョアアア! キュウウアッ!! キュオウアアッ!!!」

「へえ、痛みは感じるのか……おっと！」

いきなり放されて落ちそうになるが、近くにあった右足首を掴んで落下を回避。

振り落とそうと不規則な動きで揺さぶられるが、そう易々と振り落とされるほど貧弱な握力じゃない。アホのおかげで。

このままぶら下がっていても仕方ない。どうして上に登ろうか、と風に揺られながら考える。

上には燃えている腹。下には遠い大地。掴めそうなものは、今掴んでいる健全な右足と、指が一本千切れて血が噴き出し、骨が剥き出しになり、筋が飛び出ている左足ぐらいか。

焼いて食ったらうまいだろうか……

雑念が浮かんだ所で、上下する炎の塊……翼が目に入る。

アレを掴めば上に登れるが、登ったところで確実にどうなるという保証は無い。それに、掴むには少し遠い。アレを掴むには今掴んでいる右足を放し、横に跳ばなければならぬ。

失敗したらたぶん死ぬ。だが、普通に降ろしてくれるとは思えな

い。

一か八か、やるしかないか。

「何事も確実に、が信条だったんだが……」

たまには運任せも悪くない。

そう思いつつも、羽ばたきの法則を分析する。確かに運任せも悪くないが、確率は最高まで引き上げる主義だ。

不死鳥は上昇気流に乗って上昇を続けている。いくら鳥類の脳が小さいと言っても、無闇にバサバサと羽ばたくほど無能じゃない。むしろ、空の事は熟知している。その原理を理解していなくとも、体が知っているのだ。

無闇にバサバサと羽ばたいてくれたら楽なんだが……

十回羽ばたいたところで、結果をまとめる。

羽ばたきは一分間に一回か二回。

間隔は三十四秒に一度。誤差は十分の一秒。

案外正確だな……分かりやすくして良いが。

翼までの距離は2m少々。

翼が下がっている時間は約一秒。

反動を付けて飛んだ時の速度は……アホな改造を施されているからどんな速度で飛ぶか分からない。

「改造も、こんな時ばかりは迷惑だ」

ここで自身の移動速度が分かれば、確実に成功へ繋がると思うんだが……最後の要素が不明とは。“データが無いなら、勘でカバーする!”などと熱血精神論全開で命を賭けると言うのか、あのアホは。

文句を言ってもどうにもならないので、覚悟を決めて右翼に体を向け、睨みつける。

瞬間、不死鳥が羽ばたいた。

三十四……三十三……三十二……

カウントダウン、スタート。

音も光も意識の外に追い出し、精神を集中する。

二十一……二十……十九……

暗闇と静寂の中、淡々と数え続ける。

わずかな誤差が死を招く。二度目は無い。

十……九……八……

終了に合うよう計算し、体を前後させ、反動をつける。

六……五……四……

何も考えず、心の中で時を刻む。

三……二……一……

「……ゼロ」

手を放す。

体が前に振れた瞬間だった。

耳は音を取り戻す。聞こえたのは、風を切る音。

目は光を取り戻す。見えたのは真っ赤に燃える炎の壁。

後少し……

浮遊感から逃れようと右腕を伸ばす。

そして、その腕は翼に……

ズブシュッ！

「あ」

……突き刺さった。

右腕はそのまま向こう側の皮膚もぶち破り、赤い液体を撒き散らして貫通した。生きた血肉はヌメヌメブヨブヨと、何とも生々しい。どうやら速く伸ばし過ぎたようだ。

遂に右翼にたどり着いたが、問題はこれからだった。

翼が振り上げられ、刺さっている右腕がズルズルと一気に肘まで抜けてしまう。

ここまで来て落ちられるか、と手を搔くと、硬い棒状の物に引かかる。反射的に掴み、落下を回避する。恐らく骨だろう。

しかし、まだ終わりではない。

「キョアアアアア！」

不死鳥は痛みに狂い叫び、我を忘れて暴れだす。そのせいでガクリと高度が下がる。

落下しながら上下左右に揺られるも、掴んだ右手は放さない。

このままだと墜落する……！

そう思った直後、不死鳥は体勢を立て直し、再び風に乗る。落ちれば死ぬと分かっていたのか、ただの勘か。どちらにせよ、墜落死は免れた。

少し落ち着いたところで足を翼にふちにつけ、体を端に寄せ、両脚で翼を挟む。そのまま右手を放し、翼の付け根へと移動する。

「なんとかなるもんだな」

翼に足をかけながら一息吐いて前を見ると、炎の塊がすぐそこまで迫っていた。

「うおっ！」

頭を下げて何とか避ける。

よく見れば、それは不死鳥のクチバシだった。それは槍のように鋭く、奥で光る目には殺意が滾^{たぎ}っている。

当たったら死ぬ……

二撃目、三撃目と攻撃が続くが、拳を打ち付けて軌道を変え、体

を左右に逸らして避ける。

当たりはしないが、このままじゃ埒^{らち}が明かない。しかし、攻めようにも足場が不安定な上に風も強い。ならば……

四撃目を避けた後、両手を構えて次に備える。

勢いは衰えず、炎の突きが繰り出される。狙いは胸。そのまま十分に引き付けて……

「取った！」

両手で挟み、受け止める。

そして翼を蹴り、脚を不死鳥の首に絡ませて後頭部に移動し、張り付きながら脚で首を絞める。

「グ……ギョルオウウアアッ！」

息苦しいのか、不死鳥が鳴く。

このまま首を折る事も頭を砕く事も出来るが、そんな事をすれば墜落死確定だ。そこで、脚の力を抜いて不死鳥に命令する。

「降ろせ。さもなくば殺す」

「キョルウウアアアッ！」

しかし、不死鳥は好機とばかりに首を振り、俺を落とそうと首を振るだけだった。

もしかしたら言葉が通じるかも知れないと思ったが、そんな事は無かったらしい。万一理解していたとしても、乗ってはいくれないよのだが。

「もういい、この鳥頭が……」

大人しく降ろしてくれないのなら、これ以上生かしておく意味は無い。

無言で右腕を振り上げ、後頭部に突き立てる。

その右腕は頭蓋骨を貫き、赤い液体を撒き散らした。

「ギユウエエアアアッ！」

「うるさい黙れ」

腕を乱雑に右へ薙ぎ、頭をさらに破壊する。

不死鳥は脳髓をブチ撒けながら痙攣した後、ぐったりと動かなかった。

「鳥頭、意外と詰まってるんだな」

穴の開いた後頭部を見ながら呟く。

だくだくと液体を垂れ流しながらも、今だ死に切らずに脈を打つそれは、人間と同等以上の量があった。もつともあるのは量だけで、それこそ中身は空だったようだが。

突如、浮遊感に包まれ、景色が回転する。

不死鳥を殺したなら、後はただ落ちるのみ、だ。

「空が青い……」

徐々に落下速度が増してゆく中、ふと思う。

“溺れる者はわらをも掴む”と言っが、落ちてる者はどうすれば良いのだろうか。

……ああ、神に祈れば良いのか。これがホントの“困った時の神頼み”だな。

「ここまで来て神頼みとは……」

自嘲気味に呟くも、事態は一向に好転しない。ただ落ちながら、死を待つのみ。

下が水でも100mを超えれば硬度はコンクリート並み。砂でも同様。叩き付けられれば全身の骨が折れ、内臓が破裂し、体液をブチ撒けて肉片と化すだけ。パラシュートでもあれば助かったかも知れないが、生憎この世界にそんな物は無い。

全く助かる気がしないな……

死を覚悟しても何も悔まず、何も思い出さない。心の海に死の風が吹いても、波一つ立ちはしない。その海は……凍っているから。

そつと目を閉じる。

思考は白く、視界は黒い。

ただ空を裂く音だけが耳を支配していたが、遂にはそれも聞こえなくなった。

異世界？日目／夢と意志と世界／

気付けば、視界は一面霧がかかったようにぼんやりと白かった。
意識はあるが、思考が上手く纏らない。

「……」

微かに声^{かす}が聞こえる。

誰が何と言っているかは分からないが、確かに人の声だ。
しかし、全く聞き取れない。一体何と言っているのだろうか。

「……」

少しずつ声が大きくなる。ゆっくりと近づいて来るようだ。
もう少して何と言っているか分かりそうだ。

「……て」

ようやく一音だけ聞こえた。
瞬間、

「エルボー ドロップ！」

「こはあっ！」

どこかで聞いたクソムカつく声が響くと同時に、鳩尾に硬い何か
が突き刺さる。

その衝撃に目を見開くが、景色は変わらず白い。しかし、先ほど
とは違って晴れた白だ。

……夢、か。

衝撃で目を見開いた事で、夢を見ていたのだと理解する。

夢を見るのはいつ以来か。随分久しぶりな気がするが、追想の前にする事がある。

「やっと起きたぐっつ！」

ふう、と一息吐いて、仰向けの俺の上に覆いかぶさっている“それ”を蹴りあげた。

蹴りあげたそれは腹を抱えてのたうち回り、恨めしげな視線を俺に向けた。

「……いきなり、何するのさ」

「それは俺の台詞だ」

“それ”はこの白い空間から、神である事は分かる。いきなりエルボードロップをしても、神は神だ。信じ難い事に。

「そりゃ、耳元で“お兄ちゃん、起きて。早く起きないとエルボードロップしちゃうぞ”ってしっかり予告したにもかかわらず、君が全然起きないから実行したまでだよ？」

例え胡坐をかき、薄笑いを浮かべながら、こんな台詞を口にしたとしても、だ。

いくつか突っ込む所はあるが、とりあえず死ねば良いと思い、殺意を込めて睨みつける。

「そんなに睨まないでよ。厚意でやったんだからさ」

「厚意？」

「そ、厚意だよ。イノセントだよ」

このイノセントは、“厚意でやったんだから怒られる事は無いよね”と言う意味を込めて使われているのだろうか。それとも……いや、深く考えたら負けか。と言うか、考える余地が無い。

「ほう……寝てる相手に向かって、エルボードロップを喰らわせるのが厚意と言うのか」

「違うよ、“エルボードロップ”じゃないよ」

「だったら何だ」

自分の声に、多少の怒気が含まれているのが分かる。しかし、神はいつものふざけた笑みを崩さない。

回答次第では少々手荒な真似をする事になるのだが、今回はまともな……

「エルボー ドロップ”だよ！」

……手荒では済まさん。殺す。最早何も聞くまい。

立ち上がり、拳を握りしめ、満面の笑みで答えやがってくれたアホに接近する。

「ちょっ！ 落ち着こうよ！」

「落ち着いているが」

落ち着いて殺そうとしているだけで。

「今正に暴力に訴えようとしてるよね!？」
“暴力”じゃない。“殺害”だ」

暴力じゃないから大丈夫。

「余計にダメだから！話をしようよっ！」
「話す事など無い」
「じゃあ、聞くだけで良いから！」
「遺言なら聞いてやるが、弁明は聞かんぞ」

と言うか、何を言っても遺言になる……もとい、する。

「何でも良いからちゃんと聞いて！そもそも私の行為に悪意は無く、君の為にやった事なんだよ！君が三日たっても起きないから、強制的に目覚めさせてあげただけなんだよ！むしろ感謝して欲しいぐらいなんだからね！」

「それが遺言か、少し長いな」
「状況説明ぐらい聞こうよっ!？」
「安心しろ、聞いていた。死人を無理やりエルボードロップで叩き起こすのが厚意で、それに感謝しろ、と」

何故エルボードロップに礼がいるのか。ふざけるにも程がある。

「だから違っつて！」
「何が」
「君は死んでないんだよ！」
「……は？」
「生きてるんだよ！」

一瞬、耳を疑った。当然だ。

高度3000mからの自由落下。その速度は、時速150kmを優に超える。そんな速度で地面に叩きつけられれば、普通に考えて無事で済むはずが無い。ブラックベリーの茂みにでも落ちれば助かったかも知れないが、下は見渡す限りの草原だった。むしろ“岩に激突して即死した”と言われた方が信じられる。

なのに、目の前のアホが常識にも“死んでいない”だの“生きている”だのたまいやがるもんだから、抜けた声が出てしまった。

「……頭に蛆^{ウジ}が湧いているのか」

「失礼な！ ウジなんかいないよ！」

「ならアレか。脳が蕩^{とろ}けているか、融けきった後……いや、お前の頭の中は空だったな」

「蕩けてないし、融けきってもいない！ ましてや、空なんかじゃないよ！」

「嘘だ」

「本当だってば！」

と、言われても、信じるには無理があり過ぎる。

「そこまで言うなら……」

「良かった、信じてくれ——」

「その頭を力チ割って、中を確かめてやろう」

「——なかった！」

「当然だ」

このアホは、俺が生きていると信じ込ませてどうしようと言っただろう。

何か考えがあるのだろうか。それとも、何も考えていないのか。どちらにしろ、良い結果が待っていた例が^{ためし}無い。だから、どんなに魅力的で奇跡的で信じたい話でも、とにかく否定から入る。

コイツの性格を考えれば、最後の最後に“実は嘘なんだよ〜ん。あーっはっは！ 引つかかった引つかかった！ あんな状況で助かる訳無いじゃん。バツカじゃないの？”とか言い出したとしても、何ら不思議ではない。

「だぁぁー！ 話が進まない！」
「うるさい」

思考を巡らせていると、神が吠えた。それが耳に付き、不快感が募る。

「うるさい、じゃないよ！ 何で信じてくれないのさ！」
「今まで信じてロクな結果にならなかったからだが」

“今回は本当だから！”などと叫んでいるが、無視する。
今まで何度か似た台詞を聞いたが、まともな話だった記憶が無い。

こんな台詞は何度目だろうか……そう考えて記憶を^{さかのぼ}ると、ある行動パターンを思い出した。

それは、コイツの口調である。

コイツは享樂的な性格から、“クソ”を多用したり、語尾に無理矢理“ぜ”を付けて話したり、と口調を変える事がある。

だからコイツと話す時は、口調は気にせず意味だけ理解するようになっていたのだが、そのせいで口調の変化に気付くのが遅れてしまった。

普段なら、“ああ、またか”で済ませていただろう。しかし、今回は口調を変えたのではなく、口調が“戻った”のだ。素に。そして、コイツの口調が素に戻る時は、大体真剣な話がある時だった。

と言う事は……生きているのか？

「君が信じてくれないと、話が進まないよ！」

「うるさい、叫ぶな。そんなに信じて欲しいなら、何故助かったか言ってみろ」

死の確信が揺らいたので、とりあえず聞いてみると、神は一瞬驚いたような顔をしてから、話し始めた。

「考えられる要因は、君がでかい鳥にしがみ付いて放さなかったの
で、空気抵抗で速度がいくらか落ちた。とか」

「例え50km落ちたとしても確実に死ぬし、実際にそこまで変わらないだろう」

「理由は一つじゃないよ。次に、その鳥が下敷きになって、衝撃を
わずかに緩和した。とか」

「それもそう変わらんだろう」

「残念、まだあるよ。下半身が全ての衝撃を吸収し、脳と心臓が無
事だったから」

「だからどうした。普通に死ぬぞ」

「確かに“普通”なら即死の方が現実的だよ」

“普通”なら……その言葉を聞いた瞬間、生きているのだと確信
した。

「でも、君は普通じゃないよね」

「……再生か」

そもそも、前提条件が間違っているのに、生存確率など出るものか。

俺は今や、人体のありとあらゆる制約を受けないのである。寝ない食わない盛らない、と三大欲求を見事に無視しているし、息もしなくて良い。筋力も体力も化物だし、再生能力まで付いている。不死と言っても過言ではないだろう。老化は避けられないかも知れないが。

「現状は？」

「えーと、下半身が粉碎骨折で、上半身は複合骨折。さっき言った通り心臓と脳は無事だけど、それ以外の内臓は破裂。端的に言うなら、胸から下はボロボロだね。でも、千切れてはいないよ」

惨状と言えば惨状なのだろうが、普通なら原形を留めてすらいないだろう。予想通り、俺の体の強度は上がっているようだ。

「……それで、今は？」

「なんか回収されて安置されてる」

「で、落ちてから三日たっていると」

「そ、三日。君がすごい高いところから落下して、それから三日」

……上空3000mから落下して、三日。

今だ生死の境を彷徨っていてもおかしくない。なのに、三日間気を失っていただけで済んだ。流石に無傷とはいかないが、命に別状は無い。ここまで来ると、今後人間を名乗れない。

「さて、聞きたい事が二つある」

とりあえず、コイツに強制的に転送される前に、聞ける事は聞いておこう。

「なに？」

「まず、誰が“お兄ちゃん”なんだ？」

「君」

「死ね」

「いや、喜ぶと思ったんだけどね」

年上に“お兄ちゃん”などと呼ばれたら、どんな気分になるだろうか。しかも、相手は神だ。何百何千ではなく、何億何兆を超える年月を生きているのだ。そんな奴から“お兄ちゃん”と呼ばれて、誰が喜ぶものか。馬鹿にされているとしか思えない、吐き気がする。

湧き上がる殺神衝動さつじんを抑え、話を進める。

ここで時間を浪費すれば、疑問を抱えたまま生活しなくてはならないのだ。胃の中をムカデが這いずり回るような知識欲の悪影響は、もうゴメンだ。

「……次に、何が悲しくてエルボードロップで叩き起こされねばならん。生きているなら叩き起こす必要は無いだろう」

「死んだと思っただまほつといったら、ホントに死んじゃうかもしれないでしょ？」

「再生機能があるなら、死にはしないと思うが」

「言ってなかったっけ？ この世界のコンセプト」

世界のコンセプト……世界の指針だろうか。何を指すのか分からないが。

「そんなモノがあるのか」

「あるとも。何のために世界を複数作っているのさ、全部同じじゃ退屈でしょ？」

この“退屈”の部分に、コイツの全ての行動基準が詰まっている。

「君の元居た世界なら“実力主義”だね。個人の保有する能力が、全ての基準になる世界。能力の高い者が低い者を蹂躪する、弱肉強食の世界。だからどんなに頑張っても、ダメな子はダメな子。生まれながらに“才能”とか“潜在能力”とかで、行く末の決まっている世界」

何と言うか……この説明だけ聞けば、凄く悲惨な世界に思える。事実、人類滅亡が間近に迫っているが。

「努力すれば何とかなるんじゃないのか？」

「それは無いね。本当にダメな奴は、努力する能力も無いからね。確かに、誰でもやればできるよ。でもね、それはやればの話。やれない奴もいるからね。例えそいつらがどんなに強く願ったとしても、ダメなものはダメなまま、何にも変わりはないんだよ。神に祈れば何とかなるなんて、あり得ないよ」

この台詞があれば“神による救済”を謳う宗教が全滅するぞ。

もっとも、あの滅びゆく世界に、まだ宗教の概念があればの……いや、あるか。苦境にこそ人は神に祈るものだ。まあ、それもこの台詞で消えるだろうが。

「でも、この世界は違う。この世界のコンセプトは“願いの叶う世界”なんだ。だけど、流石に誰でもと言う訳にはいかない。だから強い願いに……“意志”に力が宿るようにしたんだ。そして、その

力が“魔法”なんだよ。だから魔法の使える人間は、何かしら強い“意志”を持っているはずだよ。勿論、君も」

「俺が？」

「そう。私は体内にマリ……マナを多量に取り込めるようにして、生命活動を補助したり、身体能力を底上げしたりしただけ。魔法の才能は与えていないよ。ま、そのせいで魔力量が凄い事になっちゃった訳だけど」

強い意志を持っている……そう言われても、思い当たる節が無い。しかし、コイツがそう言うならそうなのだろう。分からないなら、考えるだけ時間の無駄だ。

とりあえず、叩き起こされた理由は分かった。あの世界で俺が死んだと思い続けていたら、本当に死ぬ可能性が……あれ？

「おい」

「なに？ まだあるの？」

「エルボードロップの件だが、叩き起こされた理由が再び不明になった」

「なんで？」

「俺が死んだと思っているのは“認識”であって、“意志”じゃないよな？」

「……あ。うん、あははがっ！」

無理矢理笑って誤魔化そうとする神の顔面に、蹴りを送りつける。

全く、余計な事をしてくれたものだ。あの時叩き起こされなければ、夢の続きが見られただろう。もう少しで何か分かりそうだったのに、先が気になって仕方が無い。

「どうしたのさ？ そんなに怖い顔して」

「……別に」

「隠しても無駄だよ？ 夢の続きが気になってるんだよね」

「分かっているなら聞くな。誰のせいだと思っている」

「最近は見ないんじゃないかなかったっけ？」

自覚が無いのか、神は台詞の後半を無視した。そして俺も、突っ込むのが面倒臭いので無視する。こうして、意思の疎通が円滑になっ
て行くのだろう。

「知るか」

「ねえねえ、どんな夢だったの？」

神は鬱陶しいほど執拗に食い付いて来る。

何故面白くも無い夢の話をしなければならぬのか。そう思いつつも、こういう場合は話すまで話が次に進まない事を知っている
ので、仕方なく口を開く。

「誰かが何か言っていた」

ただし、必要最小限で。

「なにそれ？ 全く何も分からないって事？」

「ああそうだ、全く何も分からなかった。お前のせいだな」

「人のせいにしちゃダメだよ？」

「人か？」

「ま、神だけどさ……あ」

嫌な予感が、体中を駆け巡った。

この状況から推測するに、強制的に転移させられるのだろう。

「ま、そう言う訳だから」

俺の肩に手を置き、そう言った。

どう言う訳か説明して貰いたい所だが、まともな返事は期待できない。よって、無視。

「頑張つてね」

一体何を頑張れと言うのか。

まだ聞きたい事は残っているが、体が言う事を聞かない。だんだんとまぶたと頭が重くなり、遂には視界も思考も真っ黒に塗り潰された。

現実世界

目を覚ますと、見知らぬ部屋の寝台に横たわっていた。

寝台の他には何も無く、暗闇と静寂が満ちていた。窓からは月明かりが差し込んでいる。

一言で片付ければ、夜だ。

何故夜なんだ……

夜だからと言って、視界に支障は無い。と言うか、問題はそこじゃない。

この世界には白熱電球も蛍光灯も無い。あるとすれば、ロウソクが限界だろう。つまり、日が昇れば目覚め、日が沈めば眠るのが普

通となっている。そして、今は夜。ここがどこだか聞きたくても、誰も起きていない。

あのアホが……

まだ聞きたい事があつたと言うのに、ベラベラと聞いてもいない事を言うだけ言つて、こんな時間に強制転移とは、相変わらず随分と良い神経をしていやがる。

アイツはいつもそうだ。俺の意見を無視して話を進め、肝心な事はぐらかし、面倒臭くなつたら強制的に打ち切る。だが、何かしら意味あり気な言葉を残す。それはきつと知っていなければならぬ事で、俺の助けになる事も多々あつた。

“願いの叶う世界”とは何なのか、それが何を意味するのか、その先に何があるのか、俺には分からない。
そして、気になる言葉はもう一つ。

——強い“意志”を持っているはずだよ。勿論、君も——

「俺の意志……か」

意志が力を持つ世界。

強い意志がマナと反応し、魔法と言う力になる世界。
強く何かを思い、祈り、願う事で力が得られる世界。

そんな世界で、俺は魔法が使える。魔法には“強い意志”が必要だから、確かに俺は“強い意志”を持っている事になる。

なら、その“意志”とは何だ——？

“意志”とは、行動の基準になるものだ。

人間の行動基準としては、愛情、友情、怒り、憎しみ、劣等感、責任感、欲望、好奇心などが挙げられる。

では、俺が魔法を使った時に、それらの感情を抱いていたかと問えば、答えは否だ。

……分らない。

恐らく、理解する必要は無い。アイツの言葉は回りくどくて、その瞬間には理解できないが、未来において何らかの形で理解する。もしくは、ずっと心に引かかって、目的の方向へ誘導する。大切なのは忘れない事だ。

「ふう……」

不要だろうが、深呼吸で脳に酸素を送り、目を閉じる。

起きている人はいないし、自分が今どんな状況に置かれているのか知らない以上、無闇に動き回るのは得策ではない。朝になれば、誰か来るなり探すなりすれば良い。それに、何よりあの夢が気になっていた。

百年以上前から、ずっと夢を見なかった。なのに、何故今ごろになつて夢を見たのか。それに、夢は記憶の欠片を繋げたものだ。ならば、俺はあの声を知っている。だが、思い出せない。

思い出せないのは、きっと、思い出す必要が無いからなのだろう。それは忘れるほど些細な事だからか、思い出したくない事なのか……

考えても無駄だ、と思考を放棄するが、思考は治まらずに渦を巻き始める。

夢の声は誰なのか、願いの叶う世界とは何を指すのか、俺の意志は何なのか……

とめどなく溢れる疑問が沈静化する頃には、眠りの闇へと落ちていた。

異世界十五日目〈依頼とその準備〉（前書き）

今回、人が死にます。

異世界十五日目く依頼とその準備く

意識を取り戻すと、まぶたの裏に光を感じた。

目を開けば既に朝。二度目見る天井を眺めつつ、息を吐いた。

いつの間にか眠りに落ち、結局夢は見ず、気が付けば朝だ。もしかしたら、何か分かる——いや、思い出すかも知れない、と少しばかり期待していたのだが。

まあ、同じ夢を見る確率は期待できる数値ではないし、分からないならそれで良い。夢は記憶から出来ている。それはつまり、過去でしかない。今や異世界に居る上に、元の世界も滅亡寸前だ。帰る予定も無い場所の記憶などいるか。

それに、今更夢を見たのは何らかの影響を受けているからかと思っただが、どうやら違うらしい。今はそれが分かっただけで十分だ。

……夢よりも、現実を見なければならぬいな。

目に映るのは、寝台しか無い部屋の風景。寝る以外に用途の無い部屋だ。個人の所有する物件の一室とは、とても思えない。燭台の一つも無いのだ。

特に変わった所は無く、扉と窓が一つずつあるだけ。牢獄でもなければ、客間でもない。一体何の為に俺がここに居るのか、さっぱり見当が付かない。

窓の外を見れば、日が高く昇っている。もうそろそろ昼前だろうか。なら、誰か来ても良い……いや、探しに行くか。

体を起こし、寝台から降りようとした瞬間、コンコンと誰かが扉を叩いた。

タイミング良過ぎだろ……と思いつつ、返事はせずに扉と、その向こうを見つめる。現れたのは、

「何だ、起きていたのか。返事くらいしたらどうだ」

「オッサンか」

赤髪で、筋肉質で、背が高くて、恰幅が良いオッサン。もとい、レイギルドだった。

「レギと呼んでくれと言ったはずなんだがな」

「ここは？」

「兵舎の一室だ。と言つか、人の話を聞け」

レイギルドは部屋に入り、寝台の隣で立ち止まった。

このオッサン……レイギルドが居ると言う事は、ここはエルレインなのだろう。で、少なくとも面倒事に巻き込まれるような予感はない。誰かに回収されたと言っから、モルモットにされたり、戦闘兵器扱いされたりするかと思ったんだが。

「君が魔物に連れて行かれたと言っから……」

この後、少々無駄の多い説明が続いた。

簡潔にまとめると、レイギルドに回収されて、ここに安置。そして、それが四日前。

以上。

「……何なんだその顔は」

「少々長かったな、もう少し無駄を省いて説明できないのか？　と言っ顔をしてるんだろっな」

「全くその通りだ。少しは感謝出来ないのか？ 私が行かなかったら、今頃君は魔物が野犬の餌だぞ」

「そんなに荒れているのか」

「だから人の話と聞けと」

寝台から降りて立ち上がり、レイギルドの横を通り過ぎて、今日の予定を考えながら扉に手を掛けた。これ以上聞きたい事も無ければ、戯言を交わすつもりも無い。

「どこに行くんだ？」

「どこでも」

「なら、国王に会いに行つてくれ。君が目覚ましたら、そう伝えるよう言われていたんでな」

「そうか」

「今はそうだな……謁見の間に居るだろう」

そのまま扉を開くと、見知らぬ廊下が左にだけ伸びていた。どうやらここは、一番端の部屋らしい。

「ああ、そうだ」

「まだ何かあるのか？」

「娘をよろしく頼む」

娘と言えば、クレスティアか。だが、何故よろしく頼まれるのか分からない。それほど親しい訳でも無いし、これから深く関わるつもりも無い。

いきなり決闘を申し込まれるし、話しかければ臨戦態勢を取るほど嫌われているようだし。何より敵意を含んだ視線を向ける相手に、よろしくしてやる義理は無い。

「気が向いたらな」

適当にレイギルドに返し、部屋を出た。そして、迷うことなく歩き出す。廊下が一方にしか続いていないのだから、迷う要素が無い。

さて、国王が俺に用ありのようだが……何故だか面倒事の予感がある。

少し歩くと、この建物——兵舎の出口にたどり着く。出てみれば、そこは王宮の片隅だった。やはり、国家の最重要人物の近くに、兵を置くのが普通なのだろうか。

そんな事を考えつつ、謁見の間へと歩き続けた。

——数分後——

他より一回り大きい扉を足で開けて謁見の間に入ると、そこには赤い絨毯の敷かれた無駄に広い空間が広がっており、その奥には玉座に鎮座する国王の姿があった。

「相変わらず無駄に広いな」

「そう言うな、何かしら物事には意味があるものだよ。私は知らないが」

「……突っ込まんぞ」

「それは残念だ」

腕を組み、左足に重心を置いて、笑みを浮かべる国王と向き合う。この姿勢に意味は無い。ただの癖だ。一国の王に対する態度としては、無礼千万かも知れないが。

しかし、国王は笑って無視しているので、別に問題は無いだろう。

「で、何の用だ」

「話は二つ。伝えておくべき事と、頼みたい事が……何だその顔は」
「きつと面倒事だろうと思って、あからさまに嫌な顔をしている。
ああ、話は続けてくれて構わん」

基本的に話し合いなどの場では、流れを掴んだ者が勝つ。その流れを掴むために、表情や口調を駆使して、相手の感情を操作する。
……と言うのは建前で、単純におちよくるのが楽しいだけだった
りするのだが。

「……まずは一つ目。進級試験合格おめでとう」

「魔法の試験を受けた覚えが無いが」

「魔物に向かって魔法を使っただろう。あれで合格だ。発動速度、威力共に申し分無いし、今までの授業の成績からも、問題無いと判断された。ちなみに、筆記試験は満点だそうだ」

確かに、ある程度は安定して使える。しかし、もっと難しい物だ
と思っただけに、正直拍子抜けである。まあ、使えるのなら問題無いが。

「一つ聞くんが、魔法学校で飛び級は出来るのか？」

それよりも、無駄に通い続ける方が問題である。

魔法が目的で魔法学校に入学したのだ。魔法を扱う事に問題が
無くなれば、用は無い。それに、今のこの世界から魔法以外に学ぶ
事は無いだろう。

時間は無限にあるが、無駄に使う気にはなれない。無為に過ごす
時間は、何故か焦燥を感じさせるのだ。

「出来るかは分らんが、話は通しておこう」

国王は、そう即答した。まるで分かっていたかのように。

「……で、ここからが本題だ」

「前置きだったのか」

「入学試験を受けた時の事を覚えているか？」

入学試験。

謎の球体を渡されて、触れた瞬間爆発して、何故か合格で。

……何だろう、何か嫌な予感がするが。

「あの魔導器の弁償を請求されている」

「俺のせいなのか」

「仕方ないだろう、君以外に非が無いのだから。高いぞ？ 具体的には、金貨十枚だ」

この世界では、銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚だ。見事に百進法で分かりやすい。

ユリアからの話によれば、農民の年収が金貨一枚前後。つまり、金貨一枚あれば、一年年遊んで暮らせる。

以前回った市場の価格から察して、銅貨一枚百円程度。金貨は銅貨の一万倍だから、一枚百万円、十枚で一千万円だ。もっとも、異世界と言う事で、多少のズレはあるのだろうか。

「働いて返せとでも言うのか？」

「その通りだ。普通に働いていたら、何年かかるか分らんのだが……ここで二つ目の話だ。良い仕事がある、請ける気は無いか？」

どうやって踏み倒してやろうか、と試行錯誤していると、国王が仕事を回してきた。全く、弱みに付け込まれている気がしてならない。

ならないが……報酬によっては請ける。そもそも、金の絡んだ問題は面倒が多い。だったら、さつさと片付けるのが良策だ。目処が立たないなら、踏み倒すに限るが。

「内容による」

「ここから東に二日ほど行った所に、小さな村がある。そこへ行つて帰って来るまでの間、護衛を頼みたい。期間はどれだけ長く見積もっても、十日もかからないだろう。報酬は金貨十枚だ」

「請けた……と言いたい所だが、ただの遠出の護衛じゃないんだろう？」

「ははは、バレたか」

バレたか、ではない。

十日で金貨十枚とは、流石王族。農民をなめてやがる……のはどうでも良い。

しかし、そこまで異常な報酬を用意しなくとも、護衛程度いくらかでも用意できそうなものだ。と言う事は、それだけ危険が伴う仕事に決まっている。

「実は、最近その村の近辺に魔物が出没していてな、それを討伐しに行くのだ」

「聞いておくが、護衛の対象は誰だ？」

「大体の見当は付いているのだろうか？」

「いや、全く」

国王が護衛を付けるような要人で、かつ魔物を狩りに行けるような人物を、俺は知らない。

まず、要人だとすれば、国王並びに要職の方々だろうか。しかし、そんな人間に魔物を狩っている暇があるとは思えない。そんな暇があるなら仕事をしろ。

次に、魔物を狩りに行くのであれば討伐隊か。しかし、その中に護衛の必要な人物が居るとは思えない。居たら足手纏いだ。

つまり、要職に就いている訳ではないが、国王が気に掛ける程の社会的地位を持っていて、かつ魔物を狩りに行けるくらい暇で、護衛が必要なほど腕が立たない人物、となる。

……ダメだ、余計に分からん。

「なら、後でのお楽しみだな。で、請けるか？」

「……ああ」

今や、どんな命の危険に晒さらされたとしても、恐らく大丈夫な体だ。それに、仕事は護衛。どこのどいつが不正を働きに遠出しようが、ヤバイブツの密輸をしようが、護衛なら雇われただけだ。少なくとも、法的な危険性は無いと言える。それが、国王からの依頼とものればなおさらだ。

だったら、この農民をなめ腐ったような、異常な報酬の依頼を断る理由はない。しっかりがっぽり稼がせて貰うまでだ。

……と言っても、結局回収されるのだろうか。

「で、いつからだ？」

「明日の朝、日が昇る頃に東門に集合だ。分からなければ、今日見に行くの良い」

「随分と急だな」

「君の目覚めが遅過ぎるだけだ。よつと」

そうは言うが、普通なら目覚めない。それとも、この世界ではそ

れが普通なのだろうか。

そんな事を考えていると、国王は玉座を降りて、俺の目の前に立っていた。見れば、その手に何か持っている。

「これを渡しておこう。地図と準備費用だ」
「……多いな」

差し出されたのは、紙の筒と、黄金に輝く硬貨が一枚入った袋だった。紙は年代物なのか、それとも使用頻度が高いせいかな。少々黄ばんでおり、所々に裂け目があった。

しかし、準備費用が農民の年収とは……やはり農民をなめている。

「余ったら、好きに使って良いぞ」

「どうやっても余りそうなんだが……まあいい。話は終わりか？」

「そうだな。最後に言っておくが、目的は生還だ。頼んだぞ」

「生きていれば、良いんだな」

例え、四肢が千切れていたとしても。

例を挙げるなら、足などが壊死毒に侵された場合。徐々に侵食が進む中、放置しておけば全身が侵される。その場合、患部を切除すれば侵食は防げる。

もつとも、局部症状に止まるのが殆どだが。

「……出来る限り、健康な状態で頼む」
「善処する」

額に手を当てている国王に、適当な返事をして背を向ける。どこかの誰かさんの四肢切断シーンとかを、想像してしまったのだろうか。

ちなみに“善処する”は、何もしないと同義だ。

「ああ、最後にもう一つ」

立ち去ろうとする俺を、国王が呼びとめた。

「レイギルドの娘もよろしくな」

「何故親でもないのによろしくと？」

「後で分かる」

「そうか、善処する」

自分の娘ではなく、何故レイギルドの娘が出て来るのか分からなかったが、友人の娘だから心配なのだろうと結論付けて、そのまま謁見の間を後にした。

別に、関わらなければどうと言う事は無いのだ。

……そう、関わらなければ、の話だ。

——数分後——

俺の右腕は赤く染められ、足下には胸に穴の空いた死体が転がっている。

何故こんな事になっているのか。少し時間を遡る……前に、一つだけ言っておこう。俺は悪くない。万が一悪かったとしても、その罪を背負う気は無い。

少し前、謁見の間を後にした俺は、そのまま王宮を出て、明日の依頼（の報酬）の為に、準備を整えようと街へ出ていたのだ。

やる事は色々あったが、まずは東門に行こうと思い、適当な一般人に東門の場所を聞いて、指された方向に向かった。その先に細い路地があつたので足を進め、その光景を目にして、溜息を吐いた。

右には壁、左にも壁。その幅、1mと少し。上には空が、下には大地が。

そして目の前には、三下臭の漂うゴロツキ四人と、それに囲まれている、少女と言うにはギリギリの年齢の少女。
どう考えても、少女が襲われているのだろう。

何と言うか、“少女が襲われている”という状況が嫌だった。道徳的に一対複数が卑怯とか、女の子を襲うなんて許されない行為だとか、絵的に美しくないとか、そんな理由じゃない。何故かその状況に既視感を覚えて、何故かそれが、不快感と殺意を掻き立てるからだった。

「とつとと消えやがれ、クズ共が……」

こんな台詞が無意識に口から乱射……つまり、狙いも無く飛び出すほどに。

で、その不快感と殺意を向けられたのは、目の前のゴロツキどもなのだが、向こうからしてみれば、いきなり現れたどこの誰とも知れない奴に、暴言を浴びせられたのだから、

「ああん！？ テメエなにもんだ！」

「ガキの出る幕じゃねえんだよ！」

「命が惜しけりや尻尾巻いて逃げやがれ！」

……と、喧嘩腰になるのも分かる。しかし、正直やめて欲しかった。

遂にはその一人が、拳を振り上げて殴りかかって来たのだが、俺はそれに左手首を当てて左へ逸らし、その腕を掴んで引きよせて、右の拳をその胸に叩き込み、返り討ちにした。

——で、今に至る。

殺意を掻き立てられてはいたが、本気で殺すつもりは無かった。

理由は簡単、死体の処理が面倒臭いのである。

しかし、俺の拳は相手の胸を貫いてしまった。力を入れ過ぎてしまったのだろう。その証拠に、死体の腕は激しく圧迫されて、痛々しく変形していた。

「さて……」

「ヒッ」

一步、残りのクズ共に歩み寄る。

背後に何らかの組織があった場合、報復を受ける可能性もあるし、殺人者として法の裁きを求められる可能性もある。それに、理由は分からないが、俺はこの手の輩が大嫌いだ。

ならば、こんな所を見られた以上、生かしておく訳にはいかない。

「に、逃げる！」

誰かの声を合図に反転、ゴロツキ共は我先にと駆け出した。
しかし、恐らく逃げられない。

「逃がすか！」

さっき一人殺したから、残るは三人。

足に力を込めて大地を蹴ると、距離はあっと言う間にゼロになり、一人目に追いつく。

その首に手刀を打ち込むと、ゴキリ、と骨の折れる音がして、動かなくなった。

まず一人。生きていたとしても、半身不随だろう。ならば、後で殺せば良い。

大地を蹴って追走を再開。難なく二人目を射程範囲に捉え、その頭に拳を叩きつける。

拳は頭蓋を砕き、その中身を叩き潰した。

これで二人。脳が死ねば動けまい。

三人目とは視線を先に向けると、足がもつれたのか、顔面からすっ転んでいた。

立ち上がろうと、非効率的にもがいている所に足払いを掛け、背骨もろとも心臓を踏み潰す。

命乞いが醜かったが、三人とも無事処理終了だ。

「さて、最後は」

ゴロツキを全員殺して終わり、ではない。目撃者はもう一人居る。三人目の絶命を確認し、背後を振り返る。しかし、既にその目撃

者——少女の姿は無かった。どこか逃げたのだろう。逃げたのがゴロツキからか、それとも俺からは分からないが。

もはや追う事は出来ない。ここから出れば、人混みに紛れているだろう。こんな姿では、人前には出られない。出来れば、この路地で処理しておきたかったのだが。

俺は返り血を浴びて、全身血塗れだった。手先からは血が滴っているし、服には肉片が付着している。どう考えても、街中で血を浴びているのはおかしい。何とかしなければ、殺人者だと即刻バレるならばまず、この格好をどうにかなければ。

一人目と二人目の絶命も確認し終え、考える。

しかし、何とかしようにも方法が無い。服を脱ぎ捨てる訳にはいかないし、血を洗う水も無い。手から水が出れば良いのに……アホか俺は。

そう思った所で、ふと気付く。魔法で水が出るんじゃないか、と物は試しと手の平を見つめ、水よ出ると念じる。すると、手の平からダバダバと大量の水が溢れ出した。

駄目で元々だったのだが、こんなに便利で良いのか異世界。

そう思いつつも、便利ならOK異世界、と頭から水をかぶり、血を洗い流す。綺麗サッパリと流し終わった頃には、辺りはびっしょりと水浸しだった。

あの後、民家の屋根に跳び上がり、直射日光を浴びて濡れた体を乾かしてから、東門を訪れて場所を確認した。

ちなみに、死体は放置しておいた。この世界には指紋検出薬も、警察犬もないだろう。現行犯でない限り、そうそう簡単に特定されるとは思えない。

……あの少女が気がかりだが。

この世界で黒髪は珍しいと言う。少女が証言すれば、確実にお縄だ。しかし、明日の準備もある。最悪、国王との繋がりを引っ張り出せば良いだろう。権力は武器だ。

そう思い、街を歩く。今度は出来る限り、裏通りを避けて。

さて、片道たった二日とは言え、しっかりと準備をしておいて損は無い。ただし、怠ると損をする可能性はある。所謂、いわゆる備え有れば憂い無し、と言う奴だ。

用意したい物は点火器具と布、後は刃物だろうか。水と食料は言うまでも無い。

点火器具は光と熱を確保でき、布は断熱効果と、止血に使える。最後に、ナイフは手や爪、歯の代わりに物を壊したり、様々な道具を作ったりできる。

刃物は短剣があれば十分だが、護身用としても普通の剣を持っておくべきか。しかし、点火器具は、魔法で火が出せるので不要。布は、断熱は服が完全にしているし、止血もほぼ必要無いので、俺には不要だ。“俺には”だが。しかし、護衛対象の手当てに使うなら、必要性はある。

最後に、食料は良いとして、水は多量に用意しておいた方が良さだろう。季節は夏、熱中症にかかる可能性もある。これも、俺は関係無いだろうが。

しかし、こうして考えてみると、俺がいかに死なないかを実感する。

生命維持に必要な酸素、水、食料が不要で、外傷、体温の心配が無い。“3・3・3の法則”を、見事に完全無視だ。ここまで来ると、逆に死ぬ方が難しい。

体が機能不全を起こせば、即刻死ぬだろうが。

……と、無駄な考察は置いて。

欲しいのは刃物と布。それと、水と食料を非常用に少し。俺ではなく、護衛対象でも無く、金貨十枚の為に。

後は、背囊はいのうも欲しい。

まずはどれから求めるか……

辺りを見回すと、剣を描いた看板を掛けている店が目についた。

近付いてみると、看板には簡潔に、“ピースの武器屋”とだけ書かれていた。

名前には突っ込まず、店内を覗く。そこには、短剣から大剣、槍、斧、弓と、武器になりそうな物なら何でも置いてあった。

「兄ちゃん、探しもんかい？」

店内をじろじろと見ていると、店の方から声がかかる。

そちらに目をやると、一人の男が立っていた。店主——ピース、だろうか。

「ピースの武器屋にようこそ、武器の事なら何でもござれだ。ウチに並んでない武器は無いよ！」

「そうか」

そんな物は、うたい文句でしかない、と意気揚々と話す男の言葉を聞き流し、店内に足を踏み入れる。

どうも、俺は人に合わせるという行為が苦手だ。

「しかし、美少女二人組の次は、黒髪か。今日は凄い日だなー」

客引きを終えた男は、そんな呟きを残して店の中へと戻って行った。

店先で立ち止まっている人に声を掛けるが、中の案内や説明はしない。何とも、中途半端な印象を受ける。もつとも、商人としては“掴みどころが無い”という長所になりえるのだが。

店内では、鋭く鍛えられた刃が、張り合つようにきらめいていた。右も左も武器だらけ、見渡す限り武器だ。武器屋であるから、当然だが。

その中で、一振りの剣を手取る。特に理由は無い。強いて言うなら、そこにあつたから、だろうか。

ふと背後から視線を感じるが、どうせ黒髪が珍しいからだろつ、と気にせず、その剣を鞘から抜き、眺める。

重くもなければ軽くもない、長くもなければ短くもない。特別な素材でもなく、変わった加工もされておらず、装飾の無い普通の剣。名称を付けるなら“鋼の剣”止まりだろう。

「これで良いか」

しかし、剣など所詮“刃付き鉄の棒”だ。ある程度長さや強度があつて、申し訳程度でも刃が付いていて、保存状態が良ければそれで十分。日本刀でもない限り、切れ味を求めるのは無駄だ。鍛冶職

人に殴られそうな評価だが。

この剣は、それを全て満たしていた。長過ぎず短すぎず、簡単に折れそうには見えないし、錆どころか、鏡と見紛うほど磨かれている。

そう、刃に俺の黒い瞳と、背後の視線の主が映るまでに。

「なるほど、お前らか」

首を前方に固定したまま、背後に声をかける。刃に映ったのは、赤と青の少女が二人。クレスティアとユリアだった。クレスティアは相変わらず、敵意を含んだ視線を向けていたようだ。

「こんなところで会うなんて、奇遇ね。何をしているの？」

「明日の準備」

「明日何かあるの？」

「仕事で遠出する」

「これまた奇遇ね。私たちも、明日出かけるのよ」

「そうか」

ユリアは積極的に話しかけて来るのだが、クレスティアは黙ったままだ。よろしくとあの二人は言うが、どうしろと言うのか。

「ゼロは何を買うの？」

「これにしようかと思っている」

そう言って、持っている剣を指しつつ、他に必要な物は無いか、と店内を物色する。

「それだけ？」

「後は短剣を一つ。お前は？」

「私はそんなに力無いから、細身の剣を」

使わないかも知れないけど、とユリアは続ける。

曰く、剣よりも魔法の方が慣れている、だそうだ。魔法学校の生徒なのだから、当然なのだろうが。

「ある程度振れるようにはなれ、ってよく言われるのだけれど。でも、腕利きの護衛が付くらしいから、大丈夫だと思うわ」

「明日か？」

「うん」

「良かったな」

ユリアの話を、他人事だと適当な相槌を打って、聞き流していた。他人との他愛無い話、と言うのは苦手だ。

剣は決まったので、短剣の品定めに入るが、これも丈夫で刃が付いていればどれでも良いので、すぐに決まった。

「これをくれ」

短剣と剣の二つを持って、店の奥でぐったりと台に伏していた、さっきの男に声をかける。

すると、何故か男は急に活気を取り戻し、目を輝かせて起き上がった。

「おうおう兄ちゃん、あの二人の知り合いかい？　羨ましいねえ。今度紹介してくんない？」

「綺麗な花には毒がある、と言ってな」

「……悪かった。銀貨三十枚だ」

面倒臭いので少々脅かすと、男は急に真剣顔つきになった。女絡

みで苦労した経験を持っているのだろうか。

無言で憐憫の情をかけつつ、袋の中から金貨を取りだす。

「釣りは銀貨七十枚だな」

差し出された七十枚の銀貨を受け取り、袋に詰めて店を出る。背後から“兄ちゃんも頑張れよ……”と、憐れむような声が聞こえたが、それは無視しておいた。

店先には、ユリアとクレステシアが立っていた。どうやら俺を待っていたらしく、俺の姿を見つけて寄って来る。

もっとも、それはユリアだけで、クレステシアはどこか不機嫌そうにしていたが。恐らく、俺を待つと言いだしたユリアに付き合っているのだろう。

「ゼロはこの後、どうするの？」

「布と保存食、後は……それらの入れ物も買うつもりだ」

「なら、案内しましょうか？」

その言葉に甘え、俺は案内してもらった事にした。

しかし、銀貨三十枚とは。

値段の高さに驚きつつも、それが普通なのだろう、と納得して、その他の準備の為に街を歩く。

そして、その先でも人件費の高さを、実感する事となるのであった。

その間、クレステシアは終始不機嫌な顔のままだった。

嫌ならさっさと帰れば良いのに、と思って促してみると、“嫌よ”とだけ返って来た。

一体、何を考えているのやら。

異世界十五日目〜依頼とその準備〜（後書き）

今回、ルビとその入力の一（）なども含め、9500文字ポツキリ。後500足して一ま〜ん！ という気にはなれなかった。気力不足です、ハイ。

さて、話は変わりますが、週刊ユニークユーザーが1000人を超え、

総合PVは240000、総合ユニークは30000を超えました。さらに総合評価も590点、お気に入りも234件。平均評価は文章、ストーリー共に5。

何と言うか……後でガツカリしても知りませんよ？

更新遅くて、文才も根気も無い。けどどこまで来たら、ダメダメながらも頑張っていきたいと思います。差し当たっては……春休みの課題から。

異世界十六日目〜前途多々々々難〜（前書き）

遅くなりました。申し訳無いです。

ちなみに推敲無しなので、二日後には（改）が付くでしょう。

追記、 2011.05.21 0:45

酷い物を見つけたので、さっそく（改）が付きました。
句読点、改行、描写抜けと……笑うしかない。

まだありそうなので、よろしければ指摘お願いします。

2011.05.21 15:26

誤字エ……

異世界十六日目　前途多々々々難

また、夢を見ていた。

以前と同じく、視界は霧のように不透明な白。
そしてどこからか、誰かの声が聞こえる。

「……て」

何度も、何度も繰り返す。

しかし、その声もまた霧のようで、明確には聞き取れない。

「お………て」

右も無ければ左も無い。

前も無ければ後ろも無い。

自分と、それ以外の区別もつかない。

そんな世界で、進む事も出来ず、戻る事も出来ず。

「お……い、……て」

ただ、その声に耳を傾けていた――

一体、あの声は誰の声で、何を言っているのか。続けてではないにせよ、何故同じ夢を見たのか。そして、その先に何かあるのか。疑問は絶えない。むしろ、増えるばかりだ。しかし、それを考える前に、目の前のコイツに問うべきだろう。

「今度は何の用だ」

「いや、ただちよっと……ね」

夢の途中、徐々に明確になりつつあった声。そのまま行けば、誰が、何を言っているのか分かっただろう。しかし、“神様”は相当空気の読めない奴らしく、それは見果てぬ夢となった。

理由は触覚が肩に触れる存在を感知し、意識を夢から引きずり出しただけ。

「空気読め」

「何が？　って言うか、何その言い方。私が空気読めないみたいじゃないのさ」

「みたい、じゃなくて読めないんだろう」

「いや、私に出来ない事なんて存在しないもんね。なんたって私は——」

目を開くと、そこには金髪で長髪の、抜けた笑みを浮かべた奴が居て。

「——神様だからね！」

神と名乗るソイツの右手が、俺の肩に触れていた。

「なら死ね」

「なんでそうなるのさ！」

「二度も夢を中断させたのは、お前の意図なんだろう」

「あーもー分かったよ！　どうせ私は空気読めないよ！　悪かったね！」

「うるさい、喚くな」

逆ギレを斬り捨てて、息を漏らす。

もし邪魔されなければと、無駄だと分かっている、考えずには
いられなかった。

何が、誰が、何故——そんな言葉ばかりが頭の中を駆け巡る。疑問は増えたが、増えただけ。糸は余計に絡まって、解くどころか自分さえ縛りかねない。

「そんなに恐い顔して、どうしたのさ？」

「改めて問うが、今回は何の用だ」

だから、空気読めない奴の言葉と共に、無視する事にした。もとより、七割方無視であるが。

「無視!？」

「当然。さつさと話せ」

「それは人権侵害じゃないの？」

「人か？」

「いや、神だけど」

「なら良いだろう。話せ」

「いやいや、君の態度は人としてどうかと思うよ？」

「人か？」

「いや、千年超えた時点で違っただろうけどさ」

「なら良いだろう。話せ」

「でもさー……」

神はグダグダとしつこく、そして大変鬱陶しく無駄な口論を展開する。本題に入ったのは、それに痺れを切らせて顔面に蹴りを入れてからだった。

「今回は、君の制限を一つ外そうと思ってね」

纏めると、こうだ。

神は俺に強大な力を与えたが、いきなりは扱えないだろうと言う事で、制限が掛けられているらしい。

しかし、魔法も扱えるようになり、異世界に慣れてきた所で、それを一つ外す。そうして徐々に、体に、心に馴染ませる。と言う事らしい。

真剣な話であるハズなのに、終始神は笑みを崩さずにいた。

俺の力は“世界を滅ぼす勢力”とやらに対抗する為にある。ならば、俺の力はそれと同等以上だろう。下手をすれば、逆に俺が世界を滅ぼす可能性もある。

ふざけているのかと言いたい所だが、“世界を滅ぼす勢力”に一人で立ち向かえと言っている時点で、正気とは思えないので止めておく。ついでに時間も無駄だ。

「なんか色々影響出ると思うけど、そう言う事で」

神はニタリと笑い、俺の肩に触れた。その瞬間に体の力が抜け、意識が遠のいてゆく。

影響って何だ。

それを言葉にする間も無く、意識はそこで途切れた。

「……なるほどな」

男子寮の自室で目を覚ますなり、誰にでもなく呟いた。いつもと変わらない部屋。しかし、色だけはその限りでは無かった。

目を覚ますと、そこにはいい加減に見慣れた部屋の風景。そこは確かに魔法学校の男子寮なのだが、視界の左半分は色を失ったように灰色だった。

不審に思つて目を擦り、もう一度見ても変わらない。

左目を閉じるとフルカラー。右目を閉じるとモノクローム。色覚異常の可能性もあるが、視界ははつきりしている。その中でも、物体の境界線だけはハッキリと黒く見えた。

ここまで揃えば、“影響”であろう事は想像に難くない。何故左目だけなのかは、深く考えない。無駄だ。

そもそも、今日は仕事があるのだ。いつまでも自室でモタモタしてはいられない。

「誰だ！」

寝台から降りて伸びをして首を捻ると、視界を誰かが過よぎった。

反射的に身構え、叫ぶ。しかし、それは答えず、身構えたまま動かない。

黒い髪に、黒い服。まるで影のように真つ黒な男。その姿は十分特徴的だが、身構える恐怖は別に二つある。

一つは、気配を一切感じない事。この男は死んでいるのかと思うほど、生物特有の“存在する感覚”が感じられない。

気配を完全に消すなど、数年やそこから出来る事ではない。つま

りこの男は、何十年と磨き上げた技によって気配を消していると言う事。つまり、それほどの手練てだれだと言う事だ。構えにも隙が無い。もう一つは、右目の色がおかしい事。この男の右目は、一般的に白目と呼ばれる部分が黒く、黒目と呼ばれる部分が白い。それはそういう構造なのか、病気か。良く分からないが、だからこそ生理的に受け付けない。

どちらも動かないまま、隙をうかがって睨み合う。

相手が鏡像であると気付いたのは、その数分後であった。

空を見上げれば、太陽が半分ほど顔を出していた。

左手に紐を握られて、左肩から後ろにぶら下がっている頭陀ずだ袋は、口から剣の柄どころか鏢つばも飛び出させていて、最高にハイな様子だった。

ちなみに、値段も最高にハイだった。

「はあ……」

それに比べて、今の気分は溜息が出るほどローである。

場所は東門前。時刻は日の出直後。護衛対象が遅れている訳ではないし、何か憂鬱になる出来事があった訳でも……あったが、そのせいではない。

「あ、ゼロ。おはよう」

東門の前に停まっている馬車に近寄ると、その隣に一人佇む人に声をかけられた。

いつもと違って活動的な服装だったが、腰まで伸びる青い髪を見れば、遠目でも特定可能だろう。風に靡く^{なび}それは女性的な美しさを醸し出していたが、そんな事はどうでも良かった。

俺の護衛対象は、国王が気に掛ける程の社会的地位を持っていて、かつ魔物を狩りに行けるくらい暇で、護衛が必要なほど腕が立たない人物。

「王女で、夏休み中の学生で、子供……」

なるほど、と合点が行くと同時に、途轍もない不安に襲われていた。理由は二つ。

一つ、魔物を狩りに行くと言うが、見るからに非力な四肢、荒事に適性の無さそうな面構え、威圧感の無い雰囲気、と不安要素満載である事。

別にこれは良い。だからこそ護衛として俺が居るのである。不安の割にも満たない。問題は二つ目だ。

二つ、この王女様が“一人”佇んでいる事。

これがどういう事か。頭の悪い人でも分かると思うが、あえて言おう。護衛は俺一人であると。

この世界の人がどうやって時間を計っているかは知らないが、規則正しい生活習慣が身に付いているだろう。何せこんな時代だ、徹夜も無いだろう。さらに、護衛対象の身分（特権階級の最高峰に位置する王女様）を抜きにしても、仕事なのだから待たせるなど論外だ。逆に、不満を買わぬよう早々に来て、媚を売って心付け^{チップ}を狙うなら分かる。それがあるかは別として。

日は既に顔を出している。しかし、この東門には俺と王女様が二人だけ。集合時間が来ているのに二人だけと言う事は、二人旅と言

う事だ。

「はあ……」

「相変わらず暗いわねー」

吐き出した不安に返ってきたのは、俺のでも王女様の声でもない三人目の、最近聞き慣れてきた声だった。その声に振り向くと、視線は赤髪の少女を捉えた。昨日一日ほとんど黙っていた彼女だ。

赤髪の少女は、髪と同じく赤い瞳で、睨みつけるようにしてこちらを向いている。最初に会った時はもつと余裕のある表情だった気がするが、昨日と言い今日と言い、どこか不機嫌そうだ。

それが敵意である事は想像に難くないし、それ以外に考えられない。

ここに居ると言う事は、この王女様と共に旅をすると言う事か。二人が三人になったところで、大差無からうが。

もう関わらないつもりだったのだが、これも何かの縁だろうか。だとしたら、何の縁なのか教えて頂きたいものだ。

「はあ……」

「今日は溜息が多いわね。何か憂鬱な事でもあったの？」

依然として重く肩に掛る不安に、また溜息を吐いた。それを見たユリアが心配そうに尋ねてきたが、その問いには答えない。

間抜けにも鏡像相手に隙を探していたなど、言える訳がない。思いつくだけでも死にそうだ。

「と言うか、どうしたのよ。その目」

「病気だ。それより、ここで何をしている」

沈黙する俺にクレスティアも問い、それを一言で済ませて話題をすり替える。

こいつの問いはもつともだ。何せ、左目を中心に顔面の半分を包帯で覆っているのだから。

あれが鏡像だったのだから、あの変色した右目は俺の左目だった訳で。それを隠す為に包帯を巻いて左目を覆っているのだ。包帯は高かったのだが、そんな事は言っていられない。どう見たってこれは、化物と形容するに足るものだ。隠さなければ、無用の面倒事が起きるだろう。

「何って、人を待っているのだけれど」

「そう言えば、どこに行くんだ？」

「ここから二日ほど東に行った所の小さな村に、魔物を狩りに行くの」

「王女様が、か？」

「荒事の経験もしておいた方が良くと、お父様に言われて。今待っているのはその護衛よ。そろそろ来るはずなのだけれど」

「遅いと」

だからこそ話題をすり替えようと、無理矢理に逸らしたのだが……ここまで簡単に逸れるとは思わなかった。上手く行き過ぎて、何か嫌な予感がするほどだ。

しかし、この王女様は他人に流されやすいタイプではなからうか。為政者としては致命的な欠点だ。この国の行く末が心配である。

それよりも、俺が護衛だと気付いていない事の方が気にかかるが……黙っておこう。面白そうだし。

「少し前から待っているのだけれど、なかなか来ないの」

「全く、護衛の癖に依頼主を待たせるなんて、良い根性してるわよね」

「そうだな」

ユリアが不安そうな表情をする隣で、クレスティアは不快感にまかせて怒りを滾^{たぎ}らせている。この二人は、こうも性格が違うのにとうして友人として隣に居るのか、かなり疑問だ。意見の食い違いも多いだろう。

「何かあったのかしら……」

「何も無いと思うわよ？　もし何かあったとしたら、それで護衛が務まるのか心配だわ」

「そう？　だと良いのだけれど……」

「そうね。待たされている身としては納得いかないけれど」

他人を心配する者と、現状に愚痴をこぼす者。見ていてビククリするくらい対照的だが、互いに譲歩しているように見える。なるほど、上手く折り合いを付けているのか。

「遅れてノコノコ出てきたら、ボコボコにしてやろうかしら」

「出来ると良いな」

「出来るわよ。見縊^{みくび}らないで欲しいわね」

「と、言われてもな」

見縊る以前に、この世界の普通を良く知らない俺としては、見縊りよりも無かった。それでも、ボコボコにはされない自信があった。そもそもこいつには一度勝っている。

そして何より、日が完全に出る前にここに来ているのだから、待たせているとは思わなかった。

俺の表情が気に食わなかったのか、クレスティアは視線を明後日の方向へと逸らした。ユリアはその隣で、心配そうな面持ちで立ち尽くしている。

その二人を前方に置いて無為に時間を進めっていると、ふとクレスティアが口を開いた。

「聞き忘れてたけど、あなたはここで何をしているの？」
「立っている」

ぴし、と何かが罫割れる音が聞こえた気がした。
ユリアは、クレスティアが顔を引き攣らせたのを感じ取ったのか、一歩後退していた。

「……もう一度聞いわ。ここで何をしているの」
「立っている」

嘲るように、先ほどと変わらぬ調子で答えると、クレスティアの目つきが変わった。

惜しげもなく敵意を剥き出しにし、俺を睨み付ける。俺はそれを黙殺し、いつもと変わらぬ視線を返した。

反応は特に無く、互いに動かず膠着状態じょうちやうとなった。

身じるぎ一つでもすれば襲い掛かって来そうだったが、俺の意識は自然とクレスティアから逸れた。一方的に睨み合いを展開している友人の傍らで、繰り返し止めようと手を出しては、届く前に気圧されて手を引っ込めるユリアが面白かったからだ。オロオロとした様子がさらにおかしい。

無論、襲い掛かられればいつでも剣を抜ける。その為に、袋がハインなのだ。

片や怒気を撒き散らし、片や心ここにあらずで膠着状態となつてから十数秒。先に折れたのはクレスティアだった。

「はぁ……質問を変えるわ。何故ここに居るの？」

クレスティアは息を吐くと、肩の力と共に敵意も抜いて、身の構えを解いた。

実際には構えていなかったが、臨戦態勢ではなくなった。少なくとも、飛び掛かつては来ないだろう。

「王様から金貨十枚で護衛を頼まれた。今日、日の出に東門前で待ち合わせ。期間は十日以内でその他不明。何か質問は？」

「……あんたが護衛だったのね。どうして黙っていたのか、とりあえず聞いておこうかしら」

「知っているものと」

面白そうだったから、と答えるべきか迷ったが、再度クレスティアの目に敵意が満ちるのを見た瞬間にはすつ惚とほけていた。これは生きる知恵だ。

ちなみに、“話を逸らす”も生きる知恵に含まれる。

「そう、なら次に……」

「それは良いが、まだ出発しなくて良いのか？ 見れば、日も顔を出して久しいようだ」

「……それもそうね」

「じゃ、じゃあ行きましようか」

無理矢理話を逸らして打ち切ると、それまでオロオロしていた王女様が、この機を逃すまい、と便乗した。どうにも、険悪な雰囲気には耐えられないようだ。

クレスティアは、ユリアに追い立てられるようにして馬車に乗り込んだ。その前に怒気の籠った一瞥をくれたが、黙殺しておいた。ユリアはクレスティアに続いて馬車に乗り込もうとして、あつと声を上げる。その声に反応して、クレスティアがひょっこりと馬車から顔を覗かせた。

「どうしたの？」

「え、と。御者は誰がするのかな……って」
「何言ってるのよ。そんなの、決まってるじゃない」

そう言うなり、クレスティアは俺に視線を向けた。ユリアはその視線を辿り、やはり俺の顔を見て止まる。

「俺にやれと」

「出来ないの？」

「ああ」

クレスティアが如何にも挑発的な視線と口調で問いかけるが、生憎とそんな安っぽい挑発に乗ってやるほど、俺は感情的ではなかったらしい。

結論から言うと、出来ない事になっていた方が良さそうだった。

15000年も生きていれば、御者の経験だってある。下手ではない。少なくとも、商売に出来るほどには自信があった。しかし、それは元の世界での話である。

ここが異世界である以上、どこに問題が潜んでいるか、皆目見当も付かなかった。崖を避けようとして崖に突っ込むと言う、最悪の場合も考えられる。もっとも、馬が止まるだろうが。

「全く、役に立たないわね。それじゃあ、私がするしかないじゃない」

「悪いな」

「悪いと思っっているようには見えないけれど」

「お前が目の病気を患っていたとはな」

「あんたと一緒にしないで欲しいわね！」

そう言えばそんな設定もあったか、と左目に意識を向ける。何気無く開いた左目は、やはり灰色しか写さない——はずだった。

一瞬、我が目を疑った。二重の意味で。

左目は色覚障害を抱えていて色を認識できない以前に、包帯で覆っているのだから、何も見えなくて当然だった。

しかし、その当然は覆され、赤と青の物体を認識している上に、馬車の外郭を線として捉えている。しかし、この包帯は光を通すほど目が粗くはないし、赤と青の模様が付いている訳でもない。

この状況を表現するなら “透視能力” と言うのが最も適切だろう。それこそファンタジーの領域だが、ここはファンタジック異世界なので問題無い。

「私は御者をしなくて良いの？」

「ユリアになんか任せられないわよ」

「私の扱い酷いよ！？」

俺の視線は、戯れる二人の少女に固定されていた。左目で見ると、彼女たちの体は赤と青の色を持っていたからだ。

透視能力までは良い。どんな能力があろうと、分かっているなら困らない。だが、何故ユリアは赤く、クレスティアは青く見えるのだろうか。それが分からないから、余計に気になっていた。

その光景はサーモグラフィーに似ていたが、あの二人のそこまで体温差があるとも思えなかった。ただし、ユリアが症状に高熱を含む病を患っていたり、クレスティアが極度の低体温症だったりする可能性は考えないものとする。

ならば、俺の目は何を見ているのだろうか。可視光線でない事は確かなのだが。

「さっきからキョロキョロと、何か探し物？」

「いや、何でもない」

「ならさっさと乗って、出発するわよ」

他に何か色を持ったものは無いだろうか、と辺りを見回していたが、特にこれといった物は見つからないまま、少女二人に急かされて馬車に乗り込んだ。

「広いな」

馬車の中は広がった。奥には荷物がたつぷりと、具体的には空間の四分の一を占拠するくらいはあったが、それでも二人分には広かった。少なくとも、大の男が後二人は余裕で入る。

「でしょう？ だから、もう少し来るのかな、と思っていたのだけれど」

「実際はたったの三人だった訳だ」

多分だが、確実にこれを用意したのは国王様だろう。立った三人の旅路に、これ程の馬車が必要なのだろうか。

無論、親バカである事は想像に難くない。

「グダグダ言っていないで、早く腰を落ち着けなさいよ！ すっ転ん

でも知らないわよ！」

クレスティアの怒声を背に受けながら、この国は変わった人間が多いと思いつつ、奥にハイな頭陀袋を放り込んで適当に腰を下ろす。すると、何を思ったのか、ユリアは俺の隣に腰を下ろした。

「何をしている」

「……座ってる？」

「何故そこに座っているのか、と聞いているのだが」

前述の通り、馬車の中はかなり広い。中で寝転べるほどに。どこでも良いのなら俺の隣である必要は無いし、俺の隣が良い理由は見当たらなかった。

「誰かが近くに居ると、安心できるからうわひゃっ！」

ユリアの後頭部が馬車に触れると同時に、ゴツと鈍い音が響く。地味に痛そうだった。

ユリアが言い切ると同時に、馬車が動き出したのだ。クレスティアが“すっ転んでも知らない”と言ったのは、ユリアに向けてだったのだろう。そして王女様は、その言葉の通りにすっ転んで後頭部を打っていた。

こうなると分かっていたなら、もう少しやりようはあっただろう。わざとやった可能性もあるが。

後頭部を抱えてのた打ち回っている生物を観察していると、偶然目が合った。若干、涙目だったのは気にしないでおこう。

「うっ……」

ユリアはすぐに目を逸らし、背を向けて蹲^{うすくま}る。どうやら恥をかい
たと思っているらしく、耳が赤くなっていた。

注意不足と言つか何と言つか、戦闘で即死しそうだった。

「……前途多難だな」

待ち合わせてから馬車が出るまで、物凄く時間を無駄にしたよう
に思う。しかし、これ以上はもう何も無いだろう。後は平穩無事に
続くだけ――

「止まれ」

――ではないらしい。

聞き慣れない男の一声で、馬車は前進を止めて、その場に停止し
た。

また何か問題が起きたのかと思い、クレスティアに尋ねる。

「どうした？」

「検閲よ。何かあったのかしらね」

「引つかかるような物を乗せてないだろうな」

「無いわよ、そんな物。それよりさっさと降りて。そこで丸くなっ
てるそれも、降ろさないと。ほら、さっさと降りる」

クレスティアは御者台から降りて中へと踏み入ると、相も変わら
ず蹲ったままのユリアの首根っこを引っ掴み、馬車から降りた。

その背中を見送って腰を上げ、馬車から顔を出すと、数多^{あまた}の視線
が俺へと注がれた。視線の主は皆金属の鎧を纏い、帯剣し、槍を手

にしている。一言で片付けるなら兵隊だ。

ざっと十数人は居ただろうか。その全員が、俺を見た瞬間に警戒したのが分かった。

「その貴様！ 大人しくしろ！」

「地面に伏せて、手を頭の後ろで組め！」

地に足を着けるや否や、兵士たちに取り囲まれ、携えていた槍を突き付けられる。なるほど、この国では初見の挨拶に槍を用いるのか。

槍で威嚇し、相手の射程距離に入らないよう距離を取っている所を見れば、実戦経験に乏しくはなさそうだった。素人と熟練者のどちらかと言えば、熟練者寄りだ。

護衛としてこの場に居るのに、その対象に手を出されては困る、と同行者二人の姿を探すと、苦も無く発見できた。俺とは違って刃は向けられてはいないが、俺と同じく兵隊に囲まれていた。保護観察に近い立ち位置だ。そもそも、あの二人は俺のように抵抗する意思が無いからなのだろうが。

クレスティアが“引っかったのはあんたね”と、視線を送っていたのは無視しよう。

「一応、理由は聞いておこうか」

ここまで状況が揃えば、俺が何かしらの問題を抱えているのは明白だ。何かした覚えは……多すぎて思い出すのが面倒臭い。

「話なら、貴様を拘束した後で嫌と言うほど聞かせてやる」

ふっと笑みを浮かべて見せる兵士からは、数の利を恃^{たの}んでか、ど

うにも慢心を捨て切れしていないのが手に取るように分かった。集団心理と言つヤツだ。

しかし、それは命取り以外の何でもない。俺は例え全世界が相手でも、屈服する気はサラサラ無いのだ。

「出来ると良いな」

「何だと……！」

挑発を受けた最前列の兵士が激情に駆られ、一步前へと踏み出した。

そのまま飛び掛かって来るかと思いきや、思い直したように踏み止まり、元の位置へと後退する。それを見た周りの者たちも、徐々に落ち着きを取り戻していった。

やはり、安い挑発に乗るような奴らではなかったか。

「構わん、相手は一人だ！ 全員で一氣に押さえて、ふん縛っちまえ！」

見直したのも束の間。誰かの煽りで、兵士たちは闘気を盛り返し、再び槍を握り締めた。ジリ、とにじり寄る足音が耳に響く。

人は凶器を手にすると、攻撃的になると言う。彼らもまた、数の有利も相俟^{あいま}つてか、負けを想定していないようだった。おそらく、誰も傷付かず、容易に勝てると思っているのだろう。

さて、この場合どうするべきか。ちなみに、大人しく捕まると言う選択肢は無い。

では逃げるか。この数を相手に逃げ切る自信はあるが、それだと今後の行動に支障が出るだろう。

ならば、答えは一つ。向かって来る者を全て叩き潰し、無理矢理

にでも交渉の場を作るしか無い。後は和平なり賄賂なり、いくらでもやりようは有る。最悪、脅迫でも構わない。

一度深く息を吸い、呼吸を整えて、兵士の動きを警戒する。

俺は先手を取れない。どんな理由であれ、相手は兵士。国家権力なのだ。

対する俺には、後ろ盾も権力も全く無い。だが、問答無用に襲われたのであれば、正当防衛を主張できる。そこから対話に繋げなければならぬ。ならば後の先を取り、最初の槍の軌道を読んで回避し、隙の生じたそこから反撃に転じるべきだ。

それを思うと、背後が馬車なのは有難かった。警戒が180度で済み、神経の擦り減りを押さえられるのだ。

彼らは既に、俺を射程距離に捉えている。いつ槍が飛んで来ても良いように一層警戒を強め、相手の出方を窺^{うかが}うも、どちらも動かぬまま時のみが流れる。

兵士は、相手が一人だと慢心しているのか。それとも、一人を相手に手を出さずにいる事に、焦燥を覚えているのか。

どちらにせよ、勝機はある。動かないなら、フェイントを仕掛けるのも手――

「待て」

足を踏み出す素振りを見せて、攻撃を誘おうとした瞬間、男の声が響き渡った。

何事かと思うと、兵士は構えを解いて左右に分かれ、俺の正面に道を開ける。すると、その奥から一人の男が姿を現した。

長身と茶髪、後は他人を見下した目が、身体的特徴として挙げら

れる。年齢は20代前半だろうか。老いているようには見えない。

しかし、そんな事はどうでも良かった。

「ふふん、その貴様。この私に会えた事を光栄に思うが良い!」

男は俺の前に立ち、こちらに人差し指を向けて何か言ったが、後ろを見る事さえ忘れていた。

「私こそかの偉大な……」

絶句。

それが俺の心情を的確に表していると思う。

「……であるからして……」

男が着用していた鎧は、ただの鎧ではない。実用性に欠ける鎧だった。

縁は金、表面は銀。その他所々に宝石が嵌め込まれていると言う、無駄と悪趣味が頂を奪い合って、一言では片付けられない風貌だ。いや、成金趣味、と言えば良いか。

隅から隅までピッカピカのツカテカ。低俗な表現だが、的を射ていると自負している。

何と言つか、戦意を喪失させる鎧だ。もしそれが狙いなら称賛に値するが、コストと合わないだろう。やはり成金趣味か。

勿論帯剣しているが、飾りと言って構わないだろう。一度戦闘ともなれば、必ずどこか破損しそうなほどに細かい装飾が、柄から先まで施されている。しかも細い。

ちなみに、剣をぶら下げているのは左なので、右利きだと分かる。

やっぱり異世界でも右利きが多いのだろうか。

「……地に這い蹲^{つくば}って噛みしめるが良い」

「……で？」

「さあ、這い蹲れ愚民！」

成金が延々とくつちゃべっていたのを聞き流し、切れた所に合いの手を入れると、良く分からない言葉が飛び出した。どう言う意味なのだろう。

胸を張って這い蹲れと言われても、俺にそんな趣味は無い。どちらかと言うと、這い蹲らせる方が合っている。

「どうした？ 早く虫けらの如く地に伏して見せる」

「意味が分からん」

「む、反抗するか。愚民の分際で生意気な奴め」

成金は困ったように、眉間に皺を刻んで見せる。何かの芸だろうか。物凄くつまらないのだが。

とりあえず、この成金に合わせていたら話が進みそうになかったので、無理矢理話を進める事にした。

急いでいる訳ではないが、時間は無駄にするものではない。尽きずとも、取り戻せはしないのだから。

「とりあえず、お前が頭と言う事で良いのか？」

「お前とは失礼な。さっきも言った通り私はかの……」

「……この私をお前呼ばわりした上に、話を聞かぬとは最近の愚民はなつとらんな。しかし、私は紳士なのでその程度は笑って許す。流石私だ、紳士の鏡！」

なるほど、この世界では他人を見下し、自己の優越を主張するのが紳士と言うのか。

それは良いとして。

「貴様の物怖じしないその根性に免じて、何でも聞くが良い。はあーっはっは！」

腰に手を当てて天を仰ぎ、高笑いするその姿は、何とも不快極まりなかった。

人の話を聞かない上に、言っている事が繋がっていないとは……頭足りない子なのだろうか。

流石異世界。文化のレベルが違うな。

「さつきから拘束の理由を聞いているのだが」
「おや、そうだった……そうだったか？ いや、まあいい。聞かれたからには答えてやろう。何故なら私は紳士！」

右手を開いて顔面に添え、満面の笑みを浮かべた横顔が痛々しい。しかし、当人は自己陶醉で幸せそうだった。黙っていてやるのが優しさか。

こいつの下で働いている兵士が、気の毒でならない。周りからも溜息が漏れている。

「……で？」

「貴様には殺人の容疑が掛っている。目撃者の証言から、黒髪で黒衣を纏った奴が犯人だとされている」

やっと進展した話に、俺は人知れず眉をひそめた。心当たりは無いが、当たりそうな気がするのだ。

さらに、黒髪で黒服が犯人と来ている。この世界では黒髪が珍しいので、俺と特定される最大の要素なのだ。まさか、見られていたとは。

「無実を証明する方法は？」

「目撃者の情報では、犯人は水の魔法を使うそうだ」

心の内を外には出さず、しれっと無関係を装った。うるたえれば、その時点で怪しまれるものだ。

そしてそれが通用したらしく、成金は別段怪しむ様子も無く話を続けた。

しかし、水の魔法を使った事が、無実を証明する方法とどう繋がると言うのだろう。考えても分からない。当然だ。ここは異世界なのだから。

しかし、この成金の物言いから察するに、この世界では“常識”のような。ならば、この世界の人間に聞くしかない。

「……流石は騎士様。俺のような愚民とは違って、崇高な物言いをなされる」

「そうだろうそうだろう。いくら愚民と言えど、私がいかに高潔であるかは理解出来るのだな。当然だが。しかしまあ、愚民なら仕方あるまい。貴様のような愚民にも分かるように言つとだな、火の魔法を使って見せれば解放してやる、と言ったのだ。どうだ？ 理解出来たか？ 言うまでも無く理解出来たよなあ？ 何故なら美しく気高いこの私の説明を受けて、理解できないはずが無いのだから！」

こういう奴は持ち上げれば簡単だ、と聞いてみた結果、見事にペラペラと話してくれました。つつけば機密でも漏らしそうな奴だ。呆れて溜息が出る。

「最初からそう命令すれば良かっただろうよ。騎士様」

「……ふむ、愚民。先ほどから気になつてはいたが、貴様は口の利き方を知らんのか？ 別に私は、お前を犯人として捕縛しても構わんだぞ？」

成金の言葉に、俺はもう付き合い切れなかった。

成金が言う犯人は、俺で間違いないだろう。しかし、俺はそれを認めるつもりは無い。

さらに、無駄に装飾の施された鎧の通り、中身も下種な人種だと感じていたのだ。一挙手一投足が鼻に付く。これ以上は時間の無駄だった。

ならば形は問わず、早々に片付けるに限る。

「そうすれば捜査は終了。お役目御苦労と有難い労いの言葉を国王陛下から賜つて、自分は役目を果たしたと愚かな幻想に浸りながら、酒を呷あおつて良い気分」

成金を低劣と切り捨てた俺は、固定観念も手伝つて、ただただ成金を貶めた。こういう輩は自身の尊大さを信じてやまない分、自尊心を傷付けられると脆い。

何より俺は、他人に力を誇示し、従わせようとする奴が嫌いだった。

「新たな犠牲が出て、酒に酔つて気付かない。無実の人間を牢にぶち込み、正義と思い込んで得意顔……と言つた所か。ふふ、愚かなものだ」

「この私が愚か……だと？ 貴様、平民の分際で私を愚弄するか」

そついう成金は、ヒクヒクと成金のこめかみを引き攣らせていた。

ここまで来れば、後一步だ。

「愚弄、だったら良いがな」

「……もう許さん！ 騎士の誇りに懸けて、この場で斬り捨ててくれる！」

成金は剣を抜き翳^{かさ}し、振り下ろして見せた。もし剣が手元にあれば、隙だらけの斬り放題で、現時点で勝利していただろう。

いや、殴り掛かっても良かったのだが、それでは挑発した意味が無い。最低でも“正当防衛”として張り倒すのだ。

それにしても、あれは素人の動きだ。戦う前から結果が分かる。騎士の心得として帯剣していても、無駄ではないだろうか。

もし相手を油断させる為の演技だとしたら、見事と言う他無いが。

「己の愚かさをその身に刻み、未来永劫後悔し続け、地獄の底で無残に果てる！」

成金は下げていた剣を、“刻み”でこちらに突き付け、“続け”で右へと運び、“果てろ”で天高く掲げて見せる。そしてそこから繰り出されたのは、あまりに大振り過ぎる斬り下ろし。それも美しいまでに、完全に垂直な唐竹だった。

大袈裟な予備動作とて、上手く使えば気迫で圧倒出来る。しかし、何の目的も無ければただの隙でしかない。

剣が天を仰いだ瞬間、右足で地を蹴って接近。眼前に白刃が迫る。左足を地に着け、それを軸に左へ90度回転。半身となり、剣の軌道——斬線、と言うべきか——から身体を外す。

最後に、その反動で右足を押し出し、腹部を狙った。

「うごっはあ！」

「へぶっ！」

右足は見事に成金の腹部を捉え、鎧もろとも吹き飛ばす。輝く鎧は歪み、成金は目を回して伸びてしまった。

……ちなみに悲鳴が一人分多かったのは、兵士の誰かが成金を体で受け止めたからだ。忠義な奴も居たものだ。

しかし、こんな挑発に乗るような奴が、何故人の上に立っているのだろうか。選考基準は一体どうなっているのだろうか。

人の上に立つ者は、常に冷静であるべきだと思うのだが。

「動くな！」

ふと気付けば、周囲を囲む兵士たちにまでも闘志が戻っており、槍の穂先を突き付けられていた。あの（自称）騎士様を蹴り飛ばした所為か。

だとすれば、兵隊は愚かしいまでに上司を立てる輩で構成されている事になる。立场上仕方なく、と言うのが本音だろうか。

さて、さっきの蹴りで踏み込んだせいで、背後まで取られて完全に囲まれてしまった。切り抜けるのは不可能ではないだろうが、それはそれで面倒臭い。

なにか、方法は……と考えていると、ふと成金の言葉を思い出した。

「燃えろ」

天に向けた掌に、たられば程度の思いを籠めると、応えるように

火が灯った。しかし、兵士に変化は見られない。

「俺は関係無い。通して貰うぞ」

改めて真意を告げるも、やはり兵士は動かない。それどころか、だからどうした、と言わんばかりに、槍を握る手に力が入っているようにさえ見える。

“火の魔法を使って見せれば解放してやる”と成金が言った以上、こうすれば解放してもらえると踏んだのだが、騙されたか。

「……貴様、騎士に暴行を働いておいて、タダで済むと思っているのか？」

俺の危惧は、結局杞憂に終わった。ふたを開けてみれば、何の事は無い。やはり立場と建前の問題だった。

「そもそも、先に剣を抜いたのはアレだ。さらに、俺は丸腰。何もしなければ斬り捨てられていたと思うが。それとも何か？ 騎士に斬り掛られたとしても、抵抗は許されず、大人しく斬り殺されねばならんのか？ いくら騎士と言えど、何の罪も無い人を斬ってお咎め無しとはいかんだろう。それを思えば、骨の数本で済んだ事に感謝しても良いと思うがな」

声は荒げず、冷静に言葉を紡ぐ。ジワリ、と追い詰めるように。

「それでもやると言うなら、相手になろう。ただし、民衆の支持は得られんだろうがな」

「くっ……」

兵士は流石に不味いと悟ったのか——或いは最初から分かったのか——槍を立て、構えを解く。その苦々しい顔を見ると、いくらかスツとした。

「……分かった。手間を取らせたな」

「いえいえ、お仕事ご苦労様です」

薄っぺらい笑みを浮かべて勞うと、表情が一層苦々しくなった。それを見て楽しんでるのだから、我ながら悪趣味だ。他人の不幸は蜜の味、だったか。

「ゼロ！」

踵を返して馬車に乗り込もうとすると、背後から誰かに呼ばれる。振り返ると、ユリアが心配そうな顔でパタパタと駆け寄って来ていた。

クレスティアもユリアを追って、ゆっくりとこちらへ来ている。

「大丈夫だった!？」

やはり、何か心配しているようだが……何がどう心配なのだろう。特にこれと言って、心配されるような事は何も無いはずなのだが。

「……何がだ？」

「怪我とかしてないかなって……」

「する要素がどこにあった」

「え？ でもさっき、斬り掛られて……」

遅れて着いたクレスティアはユリアの肩に手を置き、呆れたように息を吐いて、やれやれと頭を振った。

その気持ちも、分からなくはない。あの無駄が九割を占める剣撃に、当たる可能性があるだろうか。

もっとも、ユリアなら当たりそうだが。

「あんなのに当たるのは、ユリアぐらいよ」

「そうだな、お前なら当たるな」

「……何で、こんなに私の扱いが酷いの？ 私、何かした？」

「大丈夫、何もしてないわよ。ただ……」

「ただ？」

「ユリアだから仕方ないわ」

「何それ！？」

二人しばらく戯れていたが、しばらくして、クレスティアが尻を叩く形で、二人は馬車に乗り込んだ。仲の良い事だ。

それにしても、ユリアは実戦経験が無いのではないだろうか。いや、あれを危険と判断するくらいだ。確実に無い。

「ちょっとあなた、早く乗りなさいよ」

「一つ聞くが」

「何よ」

「あいつ、実戦未経験者だな？」

「そうよ」

……前途多難にもほどがある。

「良いからさっさと乗りなさい。置いて行くわよ」

「ああ」

募る不安を振り払って馬車に乗り込むと、適当な場所に腰を下ろ

した。なるべく、先の事は考えないようにして。

「……で、何故お前は俺の隣に座るんだ？」

「誰かが近くに居ると安心できるから、と言ったはずなのだけれど」

ふと気付けば、いつの間にやらユリアが隣に座っていた。

いつもの俺ならここで拒絶するなり、遠ざかるなりしただろうが、
と言う訳か、そうしなかった。

俺は他人が近くに居ると、落ち着けない性質のはずなのだが……

「……もしかして、嫌だった？」

「好きにしろ」

ユリアから目を逸らし、明後日の方向を見つめる。

馬車の入口から見える空は青い。天気だけは味方だったか。

そんな事を思う内に、馬車はゆっくりと前進を始めた。その直後、
何かを打ち付けるような音と、誰かの呻き声が聞こえたのは、気の
せいと言う事にしておこう。

「うう……」

……前途多々々々難過ぎる。

異世界十六日目〈前途多々々々難〉（後書き）

〈異世界舞台裏〉

ゼロ（以下ゼ）「入るぞ」

ユリア（以下ユ）「きゃ」

クレスティア（以下ク）「うわ」

ゼ「台詞が棒読みだ、大根共が」

ユ「そんな事言われても」

ク「あらかじめ更衣室に入ると言われているのに、そう驚ける物でも無いわ」

ゼ「黙れ大根、努力不足だ。それより、下着姿で読者サービスくらいしろ」

ユ「ゼロってそんなキャラクターだったかしら？」

ゼ「台本に書いてある通り言っているに過ぎん」

ク「と言つか何なのよ、このコーナー」

ユ「とあるなろうユーザーの影響を受けて、作者が作ったんだって」

ゼ「誰とは言わずとも、見る所を見れば即分かるがな」

ク「そうじゃなくて、何をするのよ」

ユ「タイトル通りだと思うのだけれど」

ゼ「それでも分からんのなら、台本を見る」

ク「確かに台詞は書いてあるけど、これって……」

ゼ「作者の懺悔代弁コーナーだ」

ク「うわ……迷惑」

ユ「それ台本に無い台詞だけど……」

ク「いいのよ、こんなの気にしないで」

ゼ「確かに“イエーイ！”とは言えんな。台本が無茶苦茶だ」

ク「作者頭足りてないのかしら」

ユ「そんなこと言っちゃダメ！」

ク「何か問題でもあるの？」

ユ「出番減らされちゃうよ？」

ゼ「作者にそんな器用な真似が出来るとは思えんが」

ク「確かに。それより、さっさとやる事やって終わっちゃいまいしょう」

ユ「その前に、この台本がほぼ白紙なのが気になるのだけれど……」

ゼ「手抜きだな」

ク「手抜きね」

——更新速度について——

ゼ「遅くなつてすみませんでしたー」

ユ「台詞が棒読み……」

ゼ「黙っていれば分かんものを」

ク「性格的に無理なんじゃない？」

ゼ「そういう設定だしな」

ク「確かに」

ユ「実はそんなキャラじゃない、と聞こえるのだけれど……」

ゼ「気のせいだ」

ク「にしても、初期に比べて文字数増えたわね」

ユ「今や1万前後を目安に書いているらしいわ」

ゼ「文体も変わったしな」

ク「描写なんか最初は手抜きも良い所だったのに」

ユ「今はこれだけ書くのだから」

ク「上達した、と言えなくもないわね」

ゼ「何を言っている。これくらい出来て当然だ」

ク「随分と辛口ね」

ゼ「これは作者自身の意見だ。初期を見直して頭を抱えている所を見る限り、嘘ではないようだが」

ユ「ガンバツテルノネー」

ク「モジスウモフエタンダシ、オソクナツテモシカタナイワネー」

ゼ「お前ら、台本の台詞がそんなに嫌か」

ク「仕方ないじゃない。言い訳がましく聞こえるんだから」

ゼ「それには同意する」

ユ「それに、この台本ほぼ白紙……」

ゼ「気にするな、手抜きだ、日常茶飯事だ」

——描写について——

ユ「駄文で申し訳ありません!」

ク「何も全力で謝らなくても」

ゼ「どうせ分からのだから、適当で良いだろうに」

ユ「いや、でも……」

ク「ま、そういう設定……」

ユ「適当だったら突っ込まれるかなあって」

ク「そつち!？」

ゼ「俺の悪影響を受けているな」

ク「自覚あるなら自重しなさいよ!」

ゼ「そういう設定だから仕方ない」

ク「もうどうでも良いわ……」

ユ「ティア、まだ描写について何も言っただけから、まだ倒れちゃ

ダメよ」

ゼ「描写の話題が終わったら倒れていても気にしない、と聞こえるな」

ク「ユリア、酷い……」

ユ「え？ いや、ちがつ、そんなんじゃない……」

ゼ「……ここまで簡単だと、逆につまらんな」

ユ「人を貶めておいて、その言い草は無いんじゃない……？」

ゼ「気にするな」

ク「仲が良いのは良いけど、この調子だと、いつまで経っても終わらないわよ」

ゼ「作者は緊迫した雰囲気を書けない。以上。もう終わりで良いな」

ユ「それだけ！？」

ゼ「考察でも入れると？」

ユ「何かフォローしてあげないと、作者死んじゃうわよ？」

ゼ「豆腐以下の強度だな」

ク「ついでに言うと、水以下の粘り強さね」

ユ「きつと二人とも、本編で酷い目に遭わされてしまっわ」

ゼ「それは無いな」

ク「無いわね」

ユ「……この先は白紙なのだけれど、どう繋げたら良いのかしら？」

ゼ「無いも同然の台本に疑問を抱くな」

——最後に——

ゼ「アクセスが凄いな」

ク「暇な人間も居るものね」

ゼ「評価も双方5だとは、にわかには信じ難いな」

ク「もつと評価者数が増えたら落ちるわよ。2とかに」

ゼ「増えると思うか？」

ク「微妙ね……」

ユ「二人とも、それは言い過ぎじゃないかしら……」

ゼ「そうか？」

ク「妥当としか思えないのだけれど」

ゼ「むしろ“言い得て妙”の域だと思うが」

ユ「そうじゃなくて、作品の人气が下がる気が……」

ゼ「それは作者の腕次第だろう」

ク「意識だと“期待できない”になるわね」

ゼ「正に“言い得て妙”だな」

ユ「読者の皆様、これからも異世界混沌救世記をお願いします！」

ク「どうしたのよいきなり。そんなに営業スマイル振り撒いて」

ユ「もう良いからさっさと終わらせよう」と

ゼ「賢明な判断だな」

ク「じゃあ私もお願いしますーっ」と

ゼ「俺からもよろしく頼む……これで良いか」

ユ「棒読み過ぎる……」

ク「じゃ、私はこれで帰るわね」

ユ「お疲れ様、ティア」

ク「ん、じゃあね」

ゼ「ついでに俺も」

ユ「ゼロもお疲れ様」

ゼ「お前も早く帰ると良い」

ユ「ありがとう。でも、私はまだ残って練習したいから。台詞もまだ覚えてないし」

ゼ「……次回、あると良いな」

ユ「……そうね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1256/>

異世界混沌救世記

2011年6月27日16時27分発行